SF 727

永劫 下

グレッグ・ベア

SF ヘ 2 3

ハヤカワ文庫

定価 560

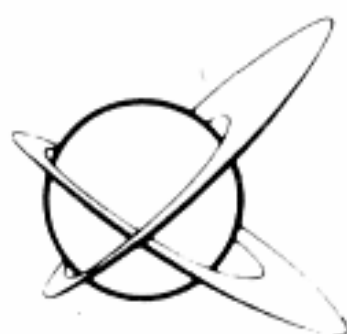
カバー・加藤直之

ハヤカワ文庫〈SF727〉

永 劫〔下〕

グレッグ・ベア
酒井昭伸訳

早川書房

ハヤカワ文庫 SF
<SF727>

永　劫
〔下〕

グレッグ・ベア
酒井昭伸訳

早川書房
2244

登場人物

パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス　アメリカ人の天才物理学者。
ギャリー・ラニアー　〈ストーン〉調査隊民間人総責任者。
ジュディス・ホフマン　ジェット推進研究所の所長／ISCCOM委員長。
ローレンス・ハイネマン　〈ストーン〉民間人チーム総責任者。
ラノア・キャロルスン　〈ストーン〉科学者チーム総責任者。物理学者。
オリヴァー・ゲアハルト准将　〈ストーン〉内部守備隊指揮官。
バートラム・D・カークナー大佐　〈ストーン〉外部防衛隊指揮官。
ハインリヒ・ベレンソン大佐　〈ストーン〉ドイツ守備隊指揮官。
ジョーゼフ・リムスカヤ　ロシア系アメリカ人の数学者／物理学者。
カレン・ファーリー　中国人の理論物理学者。
ルパート・タカハシ　日系アメリカ人の物理学者。
パーヴェル・ミルスキー大佐　ソ連軍宇宙強襲機兵大隊長。のちに中将。
ヴィクトル・ガラベジャン少佐　ミルスキーの副官。

セルゲイ・アレクセイヴィッチ・プレトネフ中佐　ソ連軍重輸送船団指揮官。
I・ソスニツキー少将　ソ連軍宇宙強襲機兵の三人の将軍のひとり。
I・S・ポゴージン中佐　同隊員。
アンネンコフスキー少佐　同隊員。
ロドジェンスキー伍長　同隊員。
ヴェルゴルスキー大佐　同政治将校。
ベロジェルスキー少佐　同政治将校。
ヤズィコフ少佐　同政治将校。
プリチーキン　〈ストーン〉のソ連科学者の責任者。

オルミイ　アクシス・シティのエージェント。
シュリー・ラーム・キクラ　アクシス・シティの代理士。
コンラッド・コジェノフスキー　〈道〉の創造者。
イリン・タウル・イングル　無限へクサモン・ネクサスの大主教。
ティーズ・ヴァン・ハンファイス　無限へクサモン・ネクサスの大統領。
ヒューレイン・ラーム・セイジャ　無限へクサモン・ネクサス議会の議長。
オリガンド・トラー　大統領の首席補佐官。
イェイツ　ゲート開放師。
ライ・オイユ　大ゲート開放師。

プレシアント・オイユ上院議員　大ゲート開放師の娘。
ローゼン・ガードナー有体下院議員　コジェノフスキー派新ネイダー正教徒の指導者。
フラント　ネクサスの友好種族。
タルシット　ネクサスの友好種族。
ジャルト　ネクサスに敵対する種族。

永劫
〔下〕

34

オルミイが光の網につつまれて三度めの瞑想をおえるころ、パトリシアはそれに、かすかな不快感を覚えるようになった。どのようなものであるかは知らないが、どうやらこれには、常習性があるらしい。

〈ストーン〉をあとにしてから、少なくとも三日はたっていた。もしかすると、五日になるかもしれない。その間ずっと、オルミイとフラントは丁重な態度を崩さず、雄弁ではないにせよ、彼女の質問には誠実に答えてくれているようだった。ほとんどの時間を、彼女は気ままに眠り、ポールの夢を見て過ごした。そして、ジャンプスーツの胸ポケットにずっといれっぱなしになっているポールからの最後の手紙に、さわってばかりいた。一度、彼女は悲鳴をあげてとびおきたことがある。フラントがカウチの上でびくりとするのが見えた。オルミイはカウチから半分ほどずりおち、なにごとかという目で彼女を見つめた。

「ごめんなさい」申しわけなさそうに、ふたりを交互に見ながら、彼女はいった。

「気にすることはありません」とオルミイ。「わたしたちで力になれればいいのですがね。じっ

さい、なれなくはないのですが、しかし……」
オルミイはいいよどんだ。数分後、鼓動がふつうにもどったころには、パトリシアはもう、なぜ悲鳴をあげたのか思いだせなくなっていた。そこで彼女は、力になれなくはないとはどういう意味か、ときいた。
「タルシットです」とオルミイは答えた。「タルシットには、記憶を鈍らせることなく、優先順位に応じて整理しなおし、すっきりさせる働きがあるのです。そして、潜在意識が特定の障害となる記憶に接触することを妨げます。タルシットを受けたあとは、意識的に思いだそうとしないかぎり、そのような記憶が表面に出てくることはありません」
「まあ」とパトリシア。「で、わたしがそのタルシットとやらにかかっていけないわけでもあるの？」
オルミイはほほえみ、かぶりをふって、「あなたは純粋体ですからね」といった。「われわれの学者に調査の機会を与えずに、あなたをわれわれの文化に引きこみでもしたら、しかられてしまいますよ」
「まるでわたしが、標本のようないいかたね」とパトリシア。
フラントがふたたび、あの歯ぎしりを増幅したような音をたてた。オルミイはじろりとフラントをにらむと、カウチからすべりおりて、「もちろん、そのとおりです」といった。「ところで、なにか食べたいものはありますか？」
「おなかはへってないわ」カウチにごろりと横になりながら、パトリシア。「不安だし、退屈だし、悪夢は見るけれどね」

フラントが、またたかない大きな茶色の目で、彼女を見おろした。ついで、片手をさしのべ、ほっそりとした四本の指を広げてから、また握り、「おねがいです」と、調律の狂った蒸気オルガンのような声でいった。「このままでは、わたしは力になれません」
「フラントはいつでも、だれかの力になりたがるんですよ」とオルミイが説明した。「力になれないと、フラントは苦痛を感じるんです。わたしのフラントに、あなたは大きな試練を与えているようだ」
「あなたのフラント？　彼はあなたのものなの？」
「フラントに性別はありません。フラントはわたしのものではありませんよ。この任務についたとき、わたしたちは職務上の姻戚関係を結びました。むしろ社会的な共生関係のようなものです。わたしはフラントの、フラントはわたしの思考を共有します」
パトリシアはフラントにほほえみかけ、「わたしならだいじょうぶよ」といった。
「うそです」とフラント。
「よくわかったわね」パトリシアはためらいがちに、フラントの腕にふれた。その皮膚はなめらかで暖かかったが、弾力性はなかった。彼女は指を引っこめて、「こわくはないわ。あなたたちのどちらもね」といった。「わたしに薬を盛ったの？」
「とんでもない！」大きくかぶりをふって、オルミイ。「あなたに干渉してはいけないことになっていますから」
「でも、それにしてはへんね。これが現実という感じはまったくないのに、少しもこわくないのよ」

「きっと、それでいいんですよ」フラントが心配そうにいった。「あなたが目覚めるときまで、わたしたちは夢なのです」

それからあとは、だれも口をきかないまま、数時間が過ぎた。窓に向かって横たわったパトリシアは、通路がもとの様相をとりもどしていることに気がついた。いまではその表面は、高密度に集中したフリーウェイのような線条でおおわれている。飛行艇がプラズマチューブの周囲をひとまわりしおえると――一回転するのにかかる時間は、十五分から二十分というところか――それがなんであるかはわからないが、床全体がその線条でおおわれていることがわかった。動いているものはなにもなさそうだが、二十キロ以上も離れているのだから、断言はできない。

飛行艇の螺旋運動は、ともすれば催眠状態をもたらす。意識的にはそれと気づかぬまま、数分間も新しい現象を見ているうちに、パトリシアははっと気がついた。〈通路〉の床の上の緊密に寄り集まった線条の上に、無数の光がうごめいている。〝フリーウェイ〟の上に、赤と強烈な白に輝くビーズの群れが、数珠つなぎにつながっているのだ。無数の線条の上には、光の槍が弧を描いて伸びだし、低く飛ぶ円盤の縁を照らしだしている。床の横断面方向には、約十キロの間隔で、少なくとも高さ二、三キロはありそうな壁が立ちはだかり、その交通の流れを断ち切っている。

「アクシス・シティが近づいてきたんです」とオルミイがいった。

「あれはいったい、なに？」パトリシアが指さしてたずねた。

「ドメスティック・ゲート間の交通網ですよ」とオルミイ。

「ゲートというのは？」

「あなたがたが、第一、第二サーキットで発見して、井戸と呼んでいたものです。〈道〉の――〈通路〉の、外の空間に通じています」

パトリシアは眉をひそめた。「人々が井戸を通って、〈通路〉に出入りしているというの？」

「そうです」とオルミイ。「アクシス・シティは、ゲートの向こう十億キロの範囲まで、人々が出ていくことを認めています」

「でも、井戸は――ゲートは――わたしたちの宇宙に、現在の宇宙に通じているはずがないわ」

「そのとおりです。ですが、おねがいですから、到着するまで質問は控えてください。情報を与えすぎては、あなたの純粋性がそこなわれてしまうので」

「ごめんなさい」パトリシアはうわべだけはすまなさそうにいった。

「ただし、これを見のがしてはいけませんよ。あなたのカウチの上の壁を、よく見ていてください」

パトリシアはなめらかな白い壁面を見つめた。オルミイが数回、カチカチという音をたてたてなにかすると、その表面が波紋のように揺らめいた。波紋は広がって大きな長方形となり、その状態で固定した。長方形は黒くなり、ついで色とりどりの雪で満たされた。彼女の目がその雪に吸いつけられるとともに、長方形の枠がぼやけ、彼女の意識から消えた。

まるで、飛行艇の助けを借りず、じかに〈通路〉を飛んでいるような感じだった。あたりをぐるりととりまいて、輝き、明滅する光が、複雑な経路を通って床の上を動いている。前方には、特異線を中心に、プラズマチューブの端から端まで広がる黒い円盤。その円盤から向こうは、プラズマチューブの色は白ではなく、鮮やかなオーシャン・ブルーだ。

「アクシス・シティはあの障壁の向こうです」そばで、オルミイの声がいった。「すぐに通行許可がおりて、通れますよ」
声のほうに顔を向けると、幻影は消え失せた。
「いけません、いけません」とオルミイ。「よく見ていてください」その声と表情は、小さな子供のように熱っぽく、誇らしげだった。彼女はふたたび、雪ふる長方形に向きなおった。
障壁は視界全体に広がっていた。それはくすんだ灰茶色をしていて、その表面を、赤い色のパルスが走りぬけていた。特異線と交差する部分では、障壁は灼熱の溶岩のように輝いていた。
声が彼女にはわからないことばを話しはじめ、オルミイが同じことばで応えた。それからオルミイは、「通行を認められました」とパトリシアに説明した。「さあ、よく見ていてください」
まっすぐ前方で、障壁の一面が泡のようにぐぐっとせりだし、赤い脈動となって分解した。飛行艇はそのなかにすべりこんだ。
水中にとびこんだようだ、というのが、パトリシアの第一印象だった。プラズマチューブはあらゆる方向に膨れあがり、何キロにも広がって、さっき障壁の向こうに見えた、鮮やかなオーシャン・ブルーに輝いている。〈通路〉の床はいまもまわりじゅうに見えていたが、ぐっと遠くなり、プラズマの新しい色に染まっている。
前方には、ふたつの大きな立方体が、特異線のほのじろい線にそって連なっていた。こちらから見える立方体の面には、どれにも水平な亀裂が走っている。手前の立方体の前面には、きらめくスポークのならぶ、巨大な半球型の窪みがあり、特異線はそこを貫き通っていた。窪みの中心には赤い穴があって、特異線はそのなかに呑みこまれているようだ。

ふたつの立方体の向こうには、その数倍も大きな円筒がひとつあり、特異線を中心にして自転していた。その曲面は、何千という光点でびっしりおおわれている。だが、円筒のこちら側の面はおおむね暗く、五列のビーコンの列が発光しているだけだ。

円筒の向こうには、湾曲した四枚の風車の羽のようなものが、外に向かって伸びていた。半径十キロはありそうだ。羽の先端はプラズマチューブに接しているらしく、各羽の先端の周囲では、プラズマチューブが青白色に輝いている。その羽におおい隠されて、円筒の向こうにあるものは見えない。

「これがわたしの住むシティです」うしろでオルミイがいった。パトリシアはふりかえり、目をしばたたいて彼を見つめた。「最初のふたつの立方体は、航法およびエネルギー・ステーションで、完全自動で動いています。あの自転している円筒は、アクシス・ネイダー。この位置からは見えませんが、あの向こうには中央シティ、アクシス・ソロー、それにアクシス・ユークリッドがあります」

「わたしたちはどこにいくの？」

「アクシス・ネイダーのドックにはいります」

「その都市は、どのくらい大きいの？」

「それは広さについてですか、人口についてですか？」

「両方よ」

「アクシス・ネイダーは、〈道〉と水平方向に、四十キロにわたって伸びています。人口は約九千万――うち、有体者は二千万で、あとの七千万はシティ・メモリーに記録されている人格で

す」

「ふうん」パトリシアはスクリーンに向きなおり、黙ったまま、そこに映しだされる光景を見つめた。飛行艇は前進してふたつの立方体を通りこし、自転する円筒の暗い面に近づいていった。

「あなたの時代だったら、アクシス・シティを共同墓地（ネクロポリス）、つまり死者の街と呼んでいたでしょうね」とオルミイがつづけた。「しかし、わたしたちにとって、その定義はそれほど正確なものではありません。たとえば、このわたしにしても、ネクサスへの義務をはたすために、二度死んでいます」

「するとあなたは、蘇生させられたの？」

「造りなおされたのですよ」とオルミイは答えた。

背筋が総毛だつのを感じながらも、彼女はスクリーンから目が放せなかった。

到着すると、オルミイは大主教から、ただちにセル・オリガンド・トラーのもとへ出頭するようにと命じられた。トラーというのは、ヘクサモン・ネクサスの大統領、ティーズ・ヴァン・ハンファイスの首席補佐官を務める人物である。先鋭的なゲッシェルでありながら、完全に人間そのものの外見をとっている。その外見は、持って生まれた姿とはすっかりさまがわりしていたが――きわめて強力なリーダーシップを表わす顔に設定されているのだ――人間の姿をとっていること自体、異常なほどの保守主義者であることを物語っていた。大統領もふくめ、急進的なゲッシェルは、人類本来の姿とは似ても似つかない、新形態（ネオ・モルフ）をとっていることが多い。

オルミイが報告しようとしていることに、大統領は最大級の関心を持つだろう、と大主教は判

断した。だが、大統領本人は、さしせまったジャルトの攻勢に備え、対策を協議するため、長期の会議に没頭していて、手が放せない。そこで大主教は、トラーのもとへいくようにといったわけである。トラーは一種の、非公式な大統領の政務代行者なのだ。

トラーの存在は、ネイダー教徒はもとより、ヴァン・ハンファイス直属のスタッフにとってさえも、おもしろいものではなかった。なにしろ、食えない人物なのだ。オルミイも一度、大統領補佐官に会ったことがある。とても好きにはなれなかったが、その有能さには舌をまいたものだった。

トラーは、中央シティの専門職用区画でも、もっとも条件のいい一画にオフィスをかまえていた。シティ核部にあるネクサス議事堂からは、軸と平行に数分移動し、シャフトを数秒昇るだけでたどりつける位置である。オルミイはまず、パトリシアの居室の手配をすませてから、自分の代理士に会うのもあとまわしにして、トラーのオフィスに赴いた。

トラーは小さな四角いオフィスを、もっとも単純で融通のきく、ゲッシェル好みのスタイルで装飾していた。プラチナとスチールを基調にした、質実剛健な装飾で、全体的に、容赦なく、断固とした印象があった。

大統領補佐官は、オルミイが携えてきた知らせを聞いて、いやな顔をした。

「きみをひとりで送りだしたとき、大主教はこうなることを予想できなかったのか？」とトラーは図話（グラフィック・スピーチ）でいった。ふたりのあいだで、つぎつぎにシンボルが閃いた。シンボルを投影（ピクト）しているのは、それぞれの首にはめられているイメージ投影首環（ピクター）だ。これは、図話シンボルを作りだし、ピクトする装置で、何世紀も前、〈冠毛〉やアクシス・シティで開発されたものだった。

「大主教の情報はきわめて限定されていました」とオルミイは答えた。「彼が知っていたのは、〈冠毛〉にふたたび何者かが住みついているということだけだったのです」
トラーは不快感を表わすため、蛇のような生き物が何匹も蠢くイメージを投射した。「これはただならぬ知らせだぞ、セル・オルミイ。これをもたらしたのがきみでなければ、とうてい信じられないところだ……しかも、その者たちのひとりを連れてきた、といったな?」
「名前は、パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス」
「本物の……祖先なのか?」
オルミイはうなずいた。
「なぜその女を連れてきた? 証拠とするためか?」
「残してくるわけにはいかなかったのです。彼女はもう少しで、第六空洞機構の調整法を発見するところでしたので」
トラーは両の眉をつりあげ、オレンジの輪を四つ投射した。驚きのシンボルだ。「その女は、何者だ?」
「若い数学者です。彼女の上司たちからも、高く評価されています」
「それで、〈冠毛〉で見た状況を矯正する措置は、なにも講じなかったのか?」
「あそこはいま、きわめて不安定な状況にあります。もうしばらくは、組織としてまとまることはないでしょう。それに、まず大統領とネクサスに相談したほうがいいと思いまして」
「大統領には知らせるが、われわれ自身、現在大問題をかかえていることは、きみも承知のはずだ。いま開かれている会議は……アクシス・シティの行末を決定するといっても過言ではない。

それに、ネイダー教徒のあいだにも、かなりの不安や思惑がうごめいている――とくに、コジェノフスキー派のあいだでな。もし彼らがこのことを知れば……」ピクトされた蛇のような生き物が、毒々しい橙色に輝いた。「ともかく、その女を隔離したまえ。〈冠毛〉の情報を伝えるのは、直属の上司だけにとどめるように」
「すでに隔離してあります。それにもちろん、わたしは指示されたとおりに職務をはたします。ただし、彼女にも代理士をつけてやる必要があります」
「そうせずにすむのなら、なしですませるべきだ」トラーは疑惑と不安に満ちた目でオルミイを見つめた。
「しかし、法でそう定められています。法的な立場のはっきりしない、シティのすべての非市民は、ただちに代理士をつけられなければなりません」
「このわたしに、シティ法の引用は無用だ」とトラー。「代理士はわたしが見つけて――」
「もうこちらで割りあててきました」オルミイが補佐官をさえぎっていった。
トラーの顔に、強い不快感が浮かんだ。「だれだ？」
「セル・シュリー・ラーム・キクラです」
「その女性とは面識がない」そういいおわらないうちに、トラーの手にはキクラの完全ファイルが出現し、宙にピクトされて解釈されるのを待っていた。トラーは内蔵ロジックに切り替え、すばやくファイルを走査したが、とくにけちをつけられる要素は見つからなかった。「どうやら問題はないらしい。彼女にはヘクサモンの秘密をもらさぬよう誓ってもらわなければならん」
「すでに宣誓ずみです」

「われわれはただでさえ、政治的混乱をかかえこんでいる。きみがしたことは、アクシス・シティの爆弾の導火線に火をつけたも同然だ。もちろん、職務の名のもとに」
「すぐに大統領に報告なさいますか？」自分の仕事にもどる許可をもとめて、横棒のシンボルをピクトしながら、オルミイがたずねた。
「できるかぎり早く報告しよう」とトラー。「もちろんきみには、完全な報告を用意しておいてもらう」
「もうできています。いますぐ転送できますが」
トラーがうなずくと、オルミイは首環に触れた。報告の高速転送は、三秒とかからずに完了した。トラーは受領したしるしに、自分の首環に触れた。

シュリー・ラーム・キクラは、中央シティの外層部、社会的にも職業的にも中流クラスの、若い独身の有体者に割りあてられている、三百万戸のこぢんまりとしたユニットのひとつに住んでいた。見かけよりも、彼女の部屋はせまい。じっさいに広いかどうかは、彼女にとってそれほど重要なことではないが、オルミイにはそれが問題らしく、彼はアクシス・ネイダーのもっと原始的で広い部屋に住んでいる。もっとも、彼女がオルミイに魅かれるのは、そういう広さを好む、彼の年齢のゆえだった。それに、その超然とした態度や、ときどきほんとうにやりがいのある仕事を持ってくることも魅力のひとつだった。
「これはいままで引きうけたなかで、最大の大仕事ね」と、シュリー・ラーム・キクラは図話でオルミイに話しかけた。

「きみ以上の適任者は考えつかなかった」とオルミイは答えた。ふたりは、彼女の部屋の中央スペースで、やわらかい照明につつまれて、宙に浮かびながらたがいを見つめあっていた。まわりにピクトされた球には、さまざまな模様が投影されている。いずれも目を引く、心なごむ模様ばかりだ。ふたりはちょうど愛を交わしおえたところだった。いつものとおり、増感装置は使わない。使った装置は、せいぜい部屋の牽引フィールドくらいのものだ。

オルミイがまわりの球を指さし、目顔で語りかけた。

「簡素に？」ラーム・キクラが問いかえす。

「簡素に」オルミイはうなずいた。彼女はふたりのまわりを除いて明かりを暗くし、室内装飾から球を消した。

ふたりがはじめて出会ったのは、オルミイが子供を作る許可を申請したときのことだった。申請したのは、自分とだれだかわからない人間とのあいだにできる子供がどんな人格の持ち主になるのか、興味があったからである。それがいまから三十年前のこと——当時、ラーム・キクラは代理士としての仕事をはじめたばかりで、オルミイにその手続きを教えたのが、たまたま彼女だったのだ。オルミイほど有力な有体者なら、子作りの許可は簡単におりる。だが、オルミイは正式な申請をするところまでは実行しなかった。そのときラーム・キクラは、たぶんこの人は、実践よりも理論のほうに興味があるんだわ、と思ったものだ。

それがきっかけで、ふたりの関係はつぎの段階に発展した。ラーム・キクラはオルミイのあとを——エレガントに、しかし執拗に——追いまわしたのだ。オルミイもそれを黙認し、とうとう中央シティの森林地帯、ゼロGウォルドの人目に触れない一画で、彼はラーム・キクラの誘惑に

陥ちてしまったのだった。
　その仕事の性質上、オルミイはいちど出かけたら何年も帰ってこないことがあり、はたから見ると、ふたりの関係はついたり離れたりの、気まぐれなものと映った。だがじっさいには、ラーム・キクラはそれ以来、永久ではないにしろ、ずっとオルミイとの契約を維持していた。いくら十年以上関係を結ぶことが再流行しているとはいえ、三十年とはめずらしい。
　オルミイがもどってくると、彼女は必ず、なんとかして仕事をぬけだし、彼に会いにいく。おたがい、相手に圧力をかけることは、絶対にしない。ふたりの関係は気楽なものなのだ。といって、決して安逸をもとめるだけのものでもなかった。たがいに、おおいに興味を持っていたからである。ふたりは純粋に、相手の仕事の話を楽しみ、未来にはどんな仕事がくるのだろうと想像しあった。結局のところ、彼らは有体者であり、有益な仕事についている。それも、相当の特権をもたらす仕事だ。アクシス・シティ九千万の市民のうち、有体者であるとシティ・メモリーに記録された影体(ゴースト)であるとを問わず、重要な仕事についている者は千五百万人しかいない。そのなかでも、活動時間の十分の一以上を仕事に捧げている者は、わずかに三百万だけである。
「いまから、今度の仕事を楽しんでいるようだな」とオルミイがいった。
「つむじまがりはわたしの性格。あなたが関係しているのが公になっていることのなかで、これはいちばん奇妙な仕事だわ……もしかすると、記念碑的な仕事になるんじゃないかしら」
「たしかに、とてつもなく重要な仕事になるかもしれない」オルミイは声に出して、陰鬱にいった。
「もう図話はつかわないの？」

「ああ、この件はゆっくりと考えて、ゆっくりと話しあおう」
「いいわ。あなたはわたしにその人の代理士になれという。その人はどの程度保護してあげなくてはならないの？」
「想像はつくだろう」とオルミイ。「彼女はここのことをなにひとつ知らない。社会的・心理学的に、一から適応しなおさなくてはならないんだ。彼女は保護を必要としている。彼女の存在が明らかにされれば――大統領や大主教がどう望もうと、これは避けられないことだろう――一大センセーションが起こるぞ」
「やけにあっさりいうのね」ラーム・キクラは、ワインを持ってくるように命じた。三つの静電制御の液体球が、光の球のなかにただよってきた。彼女はオルミイにストローをわたし、いっしょにワインを飲んだ。「地球は、見た？」
オルミイはうなずいた。「〈冠毛〉に着いて二日め、フラントといっしょに侵入孔にいった。遠隔カメラで見るのとこの目で見るのとでは、おおちがいだったよ」
「時代遅れのオルミイ」ほほえみながら、ラーム・キクラ。「でも、わたしも同じことをしたかもしれないわね。それで、〈大破滅〉は見たの？」
「見た」闇を見つめながら、オルミイはいった。三つにわけた髪のわけめの微毛を、二本の指でなでつけて、「はじめは遠隔カメラだけで見ていた。侵入孔で戦闘がはじまって、とても通れる状態ではなかったからね。しかし、戦闘がおわってからは、艇を宇宙に出して、じかに見てきた」
ラーム・キクラが彼の手に触れた。「どんな気持ちだった？」

「叫びだしたくなったことはあるかい？」

彼女はオルミイがどれだけ真剣なのかさぐろうとして、しげしげと彼を見つめた。「ないわ」

「ともかく、ぼくは叫びだしたくなったんだ。以来、あれのことを考えると、そのたびに同じ気持ちになる。帰ってくる途中、二、三回、タルシットにかかって、その気持ちを抑えこもうとしてみた。ところが、タルシットでも完全には治せない。この世界の出発点が……くすぶり、泥にまみれ、死にかけている世界が、あのときはたしかに感じられたんだ」オルミイはパトリシアの苦しみぶりを話した。ラーム・キクラは、不快そうに顔をそむけた。

「われわれには、彼女がしたような形で苦悩を発散することはできない」とオルミイはいった。

「どのみち、もうわれわれには、ああいう激情はない。きっとあれも、われわれが失ってしまったもののひとつなんだろう」

「苦悩はなにも生みださないわ。それは単に、事態の変化を受けいれるうえでの、非効率を表わすものでしかない」

「ネイダー正教徒のなかには、まだそんな能力を持った者がいる。彼らは苦悩を高貴な感情と思っているんだ。ときどきわたしは、彼らがうらやましくなるよ」

「あなたは組織的に設計されて生まれたのよ。以前はそういう能力を持っていたはずだわ。それがどんなものだったか、知っていたんでしょう。それならなぜ、それを捨ててしまったの？」

「適応するためだよ」

「順応したかったの？」

「より高次の動機ではあったが、そうだ」

ラーム・キクラはぶるっと身震いした。「わたしたちのお客には、わたしたちみんな、ひどく変わって見えるでしょうね」
「それは彼女の特権さ」とオルミイはいった。

35

嵐は、一連の空気の急激な上昇・下降とともにはじまった。円形の雲の小塊がたがいにこすれあって、分厚くねじくれた雲の塊を形成し、それが第一空洞じゅうに広がった。ゼロ度道路を通って、空洞のまったただなかに出ていた西側の科学者たちは、ざっと計測をすませてからトラックのなかに逃げもどった。巨大でほっそりとしたつむじ風が、はげしく土砂を巻きあげたかと思うと、たちまち崩れて、分厚い粉塵のカーテンを形作る。粉塵の雲は、渦巻きながら伸び広がり、海峡を洗う大波のように、極から極への揺りかえしをくりかえす。連絡孔のカメラはその現象を記録していたが、それを制御する方法はまったくなかった。はたしてこの嵐は、第一空洞の天候システムに組みこまれたものなのか、それともこの空洞には、天候制御システムがないのか。なんといっても、ここは〈ストーン〉のなかで、人が定住するにはもっとも不向きな場所である。天候制御システムなど、不要と考えられたのかもしれない。
〈ストーン〉に人がふたたび住みついてから、このような激しい嵐が起こったのははじめてだった。谷の床を覆っていた塵の雲は、やがてゆっくりと、厚さ数キロの濃密で透明な層となってお

ちついた。塵の上では、水蒸気の雲がますますどす黒さを増しつつあった。
嵐のはじまりをつげる最初の突風が吹いてから六時間後、一七〇〇時には、塵の層をつきぬけて雨が降り、地上に巨大な泥まじりの雨粒を降らした。第一コンパウンドでは、突然の変化に驚き、かつ怯えた人々が、建物のなかに閉じこもっていた。
ホフマンは、こぶしをかみ、眉をひそめながら、泥の飛びちる窓から外を見つめていた。プラズマチューブの光がさえぎられたのは歓迎すべきことではある。これは人が〈ストーン〉にきてはじめて経験する、もっとも夜に近い状態なのだ。それを思うと、ホフマンはなんとなく、くつろいだ、満ちたりた気持ちになった。
雷鳴が天を駆けぬけるなか、技師や海兵隊員たちは、風雨をおして、建物の補強棒の固定にとりくんでいた。
いっぽう、第二コンパウンド中央のソ連軍司令棟では、嵐も暗闇も無視されていた。政治と指揮系統に関する議論はたえまなくつづき、睡眠時間にまでずれこんでいたのである。議論はもっぱら、ベロジェルスキーとヤズィコフが前面に出て、ヴェルゴルスキーは黒幕を気どっていた。
ミルスキーは軍事組織をこのまま維持し、いかなる形であれ、自分の権力を削ったり、（ここを彼は強調したのだが）下位の将校たちと分かちあったりすることはできないと主張した。
それに対してベロジェルスキーは、真のソビエト体制を確立し、中央党委員会を組織して、書記長――これにはヴェルゴルスキーの名が出された――および、最高会議を通じて政務を執行する首相を立て、その指導にしたがうべきだといって譲らなかった。
つい昨日、ミルスキーと第一空洞指揮官のポゴージンは、第四空洞ではじまったソ連軍コンパ

ウンドの建設を視察してきたところだった。豊かな森から木材を伐採することについても、西側との合意がなっていた。が、工具にはプレミアムがついている。いまはもう、あらゆるものにプレミアムがついていた。

第二空洞の取り扱いに関する交渉では、ソ連側が居住地と見なしている都市に住むことについて、NATOの考古学者たちから史跡をだいなしにする恐れがあるとの抗議があり、荒れぎみの議論となった。ミルスキーはホフマンに向かって、ぶっきらぼうに、〈ポテト〉はもはや記念碑ではない、避難所なのだといったものだった。

その交渉で、ミルスキーはもうくたくたになっていた。おまけに、第三空洞での長時間にわたる教育で——それも、睡眠時間を削ってそれにあてることが多いものだから——疲れはさらにたまっていた。そこへもってきて、このありさまだ。

「最終的な政治体制を決定するまえに、まず同胞に住む場所を与えることが先決だ」とミルスキーはいった。「いまのところ、われわれが使えるのは、急造のテント小屋と、このコンパウンドだけだ。それにホフマンは——」

「あのすべためが」ベロジェルスキーが吐き捨てるように、「あの女は、うすらばかのラニアーよりまだ始末におえない」

ヴェルゴルスキーが、ベロジェルスキーの肩をぽんとたたいた。すると、このまくしたてることしか知らない少佐が、おとなしく席にすわった。政治将校のあいだでヴェルゴルスキーの立場が強くなってきたことは、ミルスキーには意外ではなかった。といって、歓迎すべきことでもない。ベロジェルスキーならどうとでもあしらえるが、ヴェルゴルスキーの狡猾さと、余裕に満ち

た権威あふれる声色は——ヤズィコフの法律に精通した剃刀のような頭脳とともに——やっかいな障害となりそうだ。

なんとかヴェルゴルスキーとヤズィコフを〝転向〟させて、ふたりの才能をこちらの利になる方向へそそぎこむことはできないものか。

有利なのは、こちらが図書館の教育を受けつづけていることだ。より正確にいうなら、〝啓発〟をつづけていることだ。これほど膨大でバラエティに富んだ情報源に接したことは、ミルスキーははじめてだった。ソビエトの図書館は——軍のものであれ、民間のものであれ——情報が厳重に制限されており、どうしても必要であることを証明しないかぎり、見たい本を見ることもできなかったのだ。ただの好奇心で見せてくれといっても、眉をひそめて断わられるのがおちだった。

そもそも彼は、自分の国の地理でさえよく知らない。宇宙飛行の歴史を除き、歴史と名のつくものには、ほとんど興味を持ったこともない。だが、第三空洞の図書館で学んだことは、彼の興味を百八十度変えてしまっていた。

同志たちには、そのことはいっさい明かしていない。すでに英語、ドイツ語、フランス語を話すことができ、いまは日本語と中国語のレッスンにとりかかっているのだが、そのことを黙っているためには、相当の意志力を必要とした。

「それ以前に」と、ヴェルゴルスキーをちらちら見ながら、ベロジェルスキーはつづけた。「つねに最優先に考慮されるべきは、政治的問題だ。われわれは革命もその理念もわすれてはならない。われわれは革命の最後の砦として——」

「わかったわかった」ミルスキーはいらだたしげにいった。「われわれはみな、疲れている。きょうはもう休んで、また明日再開することにしよう」肩ごしに、ガラベジャン、プレトネフ、科学者チームの上級技師であるセルゲイ・プリチーキンたちを見やり、「同志ガラベジャン少佐、この紳士たちをテントに案内してくれたまえ。補強がとばないよう、よく確認してな」

「許された時間は少ないのに、議論を重ねなければならないことはたくさんある」ヴェルゴルスキーがいった。

ミルスキーは彼の凝視を受けとめ、にっと笑うと、「たしかに」と応じた。「だが、人間、疲れれば怒りっぽくなるし、いらだちはよくない考えを生む」

「しかしほかにも……弱さとよくない考えを生むものはある」

「そのとおりだ」とベロジェルスキー。

「明日だ、同志たち」抗議を無視して、ミルスキーはきっぱりといった。「ホフマンとわたりあうには、体調を整えておかねばならん」

政治将校たちは一列になって出ていき、室内にはプリチーキンとプレトネフとミルスキーだけが残された。上級技師と前輸送船団指揮官は、タンク・バッフル板のテーブルをはさんで、ミルスキーと向かいあうようにすわり、彼が口を開くのを待った。ミルスキーは目をこすり、鼻梁をもんでから、いった。「ヴェルゴルスキーとやつの操り人形どもが天下をとったらどんなことになるか、わかるな？」

「道理のわかる連中じゃありませんからね」とプリチーキン。

「だが、部隊の三分の一は、無条件でやつらにつく。そしてもう三分の一は、だれにもつかない

――なにごとにも不満を持つ輩さ。わたしは指揮官だ。そして、それゆえに、不満分子はわたしをきらう。相手がベロジェルスキーだけなら、わたしも案じはしない。不満分子は、政治将校が大きらいだからな。だが、ヴェルゴルスキーはビロードの舌を持っている。ベロジェルスキーがことばの鞭をふるい、ヴェルゴルスキーが懐柔にまわれば――やつは危険な多数派を押さえきれる」

「それではどうするんです、同志将軍?」プレトネフがきいた。

「きみたちはそれぞれ、五名ずつ護衛を連れて歩いてほしい。ガラベジャンかわたしが選んだ、子飼いの兵をつける。それから、AKVで武装した四個分隊に、この建物を警備させてほしい。プリチーキン、あさってまでには、科学者たちを第四空洞に集合させてくれ。ヴェルゴルスキーはインテリを信用すまい。ひと波乱くれば、彼らを放ってはおかないぞ」

ふたりは立ち去り、ミルスキーひとりがあとに残った。彼はため息をつくと、心から思った。この夕べから気をまぎらせてくれるものはないものか――ウォッカひと瓶でもいいし、女でもいい……。

あるいは、もう一時間、図書館でだれにもじゃまされずにすごしてもいい。

まわりは、無知な毒蛇でとり囲まれている。これまでの人生で、これほど自分が覚めていることは、そしてこれほど希望にすがったことは、はじめてだった。

チューブライダーの操縦はオートパイロットにまかせて、四人はキャビンで睡眠をとっていた。ハイネマンはチューブライダーのスピードを、秒速九キロに制限していた。それを越すと、チューブライダーの構造のなにかが、はげしい振動を起こすのだ。

ラニアーは眠ることができず、ベルトを締めてリクライニング・シートに横たわったまま、頭上でやわらかに輝くオレンジの光を見あげていた。ハイネマンは通路を隔てたとなりの席で、規則正しい寝息をたてている。女性たちは、キャロルスンがキャビンのまんなかに引いたカーテンのうしろにいた。キャロルスンは小さくいびきをかいていた。ファーリーのいるあたりからは、なにも聞こえてこない。

ラニアーが性的な欲求で矢もたてもたまらなくなることは、めったになかった。性欲はごく人なみにあったが、不適切な状況においては、彼はいつでもそれを無視し、コントロールすることができたのだ。〈ストーン〉での二年にわたる禁欲生活も、彼にしてみれば、ほかの者たちほどつらいものではなかったにちがいない。その彼が、この平和なひとときに、かつてなく強い性衝動にかられていた。

性的煩悶がないことには、いろいろ利点があるものの、彼はそのため、なんとなく、つねにやましさを覚えていた。自分が冷血人間のような気がするからだ。ところが、いま、それに復讐するかのように、情欲が一気に噴きだしていた。いまの彼には、カーテンの向こうに忍びこみ、ファーリーを抱きしめようとする衝動を抑えこむだけで、せいいっぱいだった。欲情はおかしくもあり、苦しくもあった。まるで、捌け口がほしくてしかたがないのに、どうしていいのかわから

ない、思春期の若者のような気分だ。
頭のなかの精神分析医たちは、超過勤務にいそしんでいた。死は――とフロイト派の分析医がいった――子孫を残したいという欲求を強めるものだ――。
そこで彼は、エレクトしたまま、ただ横たわっていた。まともに考えることもできないが、といってマスターベーションする気にもなれない。マスターベーションという考え自体、ばかげている。最後にしたのは一年以上も前のことだし、それも完全なプライバシーがあってのことだ。ほかの者たちも、同じように感じているのだろうか？　ハイネマンならそんなことはないだろう。これまでラニアーは、ごく上品な、ことばのうえだけのジョークを除き、ハイネマンがセックスがらみのことを口にするのは、いちども聞いたことがない。
では、ファーリーは？
ためしに、彼は片手を伸ばして、体にかけた薄い電気毛布をはぎとりかけた。が、必死の思いで、その手を引きもどした。狂ってる。
永劫とも思える苦悶のはてに、彼はようやく、眠りに落ちた。

十万キロ地点で、V／STOLの前方観測レーダーが、〈通路〉前方に巨大な障害物があることを報告した。ハイネマンは、〈通路〉に面する連絡孔の科学記録を呼びだし、これほどの距離からかつて反響があったかどうかを調べたが、そんな例はなかった。「物理屋さんたちは、特異線ぞいにレーダー・ビームを送りっぱなしにして、反響探知をさぼってたんじゃないのかね」とハイネマン。「こうして目の前に、まんなかに穴のあいたまるい壁があるっていうのに」

〈通路〉全体をふさぐ円形の壁は、床からの高さが二十一キロあり、その中央に直径約八キロの穴があいていた。したがって、特異線とプラズマチューブはさえぎられていない。
「あいつを通過して、あの向こう側になにがあるのか見てみよう」とラニアーがいった。「着地するかどうかは、それから決めればいい」
時速六千キロという低速で、ハイネマンは特異線ぞいにチューブライダーを前進させた。穴が近づいてくると、キャロルスンが苦労しながら、壁の上層部を望遠鏡で観察した。
「壁の最上部は、厚さ一メートルしかないわ。色から判断して、井戸や〈通路〉と同じ材質でできているみたい」
「ということは、物質ではないということね」とファーリー。「パトリシアのいう、空間構造材なんだわ」
ハイネマンは時速数百キロにまでスピードを落とし、穴を通りぬけた。穴の向こう側は、大気がないのか、〈通路〉の床が鮮明に見わたせた。床には、長さ百キロはありそうな溝が無数にえぐれ、黒いしみが点々とあり、かなりの幅で〈通路〉のブロンズ色の地肌が顔をのぞかせていた。
計器は彼らの疑念を裏づけた。
「やっぱり、大気がないわ」とファーリー。「あの壁は、栓なのよ」
壁を通過して二千キロ過ぎてから、ハイネマンは機を減速させた。〈通路〉の容赦のないパースペクティブのなかで、すでに壁は小さな円となっている。「で、どうする?」とハイネマンがきいた。
「バックして、井戸のサーキットを見つける」とラニアー。「計画どおりに行動するんだ。その

チェックがすんだら、また前進する——ぐずぐずしている暇はないぞ。調査は二義的なことなんだから」

「了解」ハイネマンは、チューブライダーに接合したまま、V／STOLを百八十度回転させた。

「つかまっててくれ。全推力で逆進する」

井戸のサーキットは、壁の南側から四百キロのあたりに見つかった。ハイネマンはチューブライダーを減速させ、V／STOLの降下準備にとりかかった。ショックに備え、みんなが非固定の器材をすべて固定しているあいだに、ハイネマンがチューブライダーからV／STOLを切り放す。姿勢制御ジェットの軽いひと押しで、機は特異線から離れた。ハイネマンが機首を、〈通路〉の床に向けた。

〈ストーン〉の空洞では、自転軸から離れるのに推力が必要だったが、ここではV／STOLは、ただちに特異線に押しやられて——見方を変えれば、床に引きつけられて——ゆっくりと加速しながら、降下をはじめた。四キロ降下してから、ハイネマンはロケット・エンジンを短く三回ふかし、機首を北に向けた。「空洞ではこんな着陸のしかたはしないんだがな。〈通路〉ではこうするのがいちばんなんだ。ここでは、螺旋コースをとって大気に突入する必要はない。だから、時間をかけて滑空していくことにする。ギャリー、そっちの操縦ハンドルを握って、この感触をつかんでくれ」

ラニアーはハンドルをとった。ハイネマンが機首をあげようとしているのがわかった。機体にかすかに振動が走るところを見ると、このあたりにはまだ空気の抵抗があるのだろう。機体の外では、かすかなすすり泣きの音がしだいに低音になっていき、それに比例して、音量が大きくな

っていった。ハイネマンはフラップをさげて降下速度を落とし、ゆっくりとV／STOLを右旋回させながら、機首をさげ、エンジン・ナセルの収納部からプロペラをせりださせた。双発のターボプロップのなめらかで美しい轟音が響きわたると、ハイネマンは小さな男の子のように、にっこり笑った。「ご搭乗のみなさま、当機はこれより、飛行機となりまあす。ギャリー、操縦してみるか？」

「喜んで。それではみなさま、シートベルトをご装着ください」

「はいはい」キャロルスンが合いの手をいれる。

「いまの、おもしろかったわ。もういちどやって」とファーリー。

ハイネマンが悪のりして、つづけた。「地形はなめらかなようですが、しばらくようすを見てから、短距離着陸か、垂直着陸か、どちらかに決めたいと思います」

ラニアーはV／STOLをバンクさせ、井戸のひとつのまわりを旋回してから、プロペラの角度をあげて減速し、キューポラの上空五十メートルのところを飛びすぎた。ハイネマンが着陸できそうな場所をにらんで、ぐっと親指をつき立てた。「短距離着陸でいける。下はなめらかな砂地だ」

ラニアーは機首を井戸の溝とキューポラに向け、時速五十キロで、やんわりとV／STOLを〈通路〉に降下させた。それから、プロペラの回転を落として滑空にはいり、機首を起こし、着地すると、溝の縁に近づきながら軸回転して、井戸の外周に接するところでとめた。エンジンの轟音が急速に静まった。

「ブラヴォー！」ハイネマンが歓声をあげた。

「じつにおもしろかった」とラニアー。「飛行機を飛ばすのは六年ぶりだし……こんなふうに飛ばしたのははじめてだ。地面を見ていると、まるでつっこんでいくようでこわかったよ」
「そこの飛行機野郎のおふたりさん」キャロルスンが口をはさんで、「あなたたちが手を貸してくれると、仕事がさっさとかたづくんですけどね」
一行は外に出ると、窪みの周囲をまわりながら、キャロルスンは写真を撮り、ファーリーは計器を読んだ。遠くからでも見えていたことだが、井戸は口が開いていた。浮かぶキューポラから十メートルほど離れたところにはプラットフォームがあり、その上に不規則な赤と黒の格子模様で被われた、球がふたつ載っていた。それぞれの球は直径三メートルほどあり、前後に一対のマニピュレーターがついていた。
四人は窪みの斜面をおりて、プラットフォームを調べた。ハイネマンがプラットフォームの一端についているはしごを登り、格子模様の球の上にかかった足場を歩いていった。「これはスペース・スーツだな。それも、かなり頑丈なやつだ」
「ここにメッセージがあるわ」とファーリーがいって、井戸の口付近にある台座の上の、ブロンズ色の板を指さした。文字はラテン文字のようで、AとGとEらしき文字が見わけられたが、なにが書いてあるのかは、だれにも読めなかった。「これはギリシア語でもないし、キリル語でもないわね」とキャロルスンがいった。「たぶん、〈ストーン〉語だわ。新しいことばよ」彼女はそれを、上下左右から写真におさめた。
「こんなことばは図書館でも見たことがないな」ラニアーがそういいながら、文字盤の向こうに踏みこんだ。そのときである。とたんに、井戸の縁に、糖蜜のような、ねっとりとした抵抗が生

じた。

「警告します」だしぬけに、深く響くいかめしい男の声が、どこからともなく聞こえてきた。「二十一世紀の英語を話す方たちに警告します。適切な環境防護処置をとらずに、この地域のいかなるゲートにもはいろうとしてはなりません。ゲートの入口の向こうには、高重力と腐食性の大気が待っています。それらから身を守るためには、スーツを着用しなければなりません。警告します」

キャロルスンが文字盤にふれ、口笛を吹いて、「見て」といった。文字盤の文字はローマ文字の英語に変わっており、いま声が告げた内容をくりかえしていた。「サービスというわけね」

球のひとつの上部をさわっているうちに、ハイネマンは黒い四角のへこみを見つけた。おそるおそる、それを押してみたが、なにごとも起こらなかった。

「ねえ」ファーリーがだれにいうともなくいった。ラニアーがふりむくと、彼女は当惑して照れ笑いを浮かべながら、片手を顔にあてた。それから、キューポラの下をのぞいて、「ねえ、でも、もしこの井戸の——ゲートの——なかにはいろうと思うなら、いったいどうやって使うの、このスーツ……パッチスカートを？」

「バチスカーフよ」キャロルスンが正した。

「それそれ……名前はともかく、どうやって使うのかしら？」

「その乗り物は、音声指令に反応して動きます」ふたたび、声がいった。「二十一世紀の英語でも指令可能です。ゲート外遊覧のためのしかるべき許可は受けていますか？」

「どんな許可？」ファーリーがたずねた。

「ネクサスの許可です。すべてのゲートはネクサスによってコントロールされています。三十秒以内に許可証をご呈示ください。さもなければ、不正侵入を防ぐため、ここのゲートはすべて閉鎖されます」

四人は顔を見あわせた。そのあいだに、三十秒は過ぎた。「許可のないものと判断します」抑揚なしに、声がいった。「これよりこのゲートは、調査隊が調査して事態を矯正するまで、閉鎖されます」

ラニアーは見えない障壁から引きさがった。井戸中央にある直径二十メートルの入口が、静かに閉じられていき、なめらかなブロンズの突出を形成した。球と台座がゆっくりと沈みはじめると、ハイネマンがわっと叫んでとびおりた。それは窪みの表面の下に沈みこみ、あとかたもなく消滅した。

ファーリーが音楽的な中国語で毒づいた。

「まあ、いいわ」ため息をつきながら、キャロルスン。「どのみち、なかをのぞいている暇はなかったんだもの」

井戸をとりまいて広がるのどかな砂地には、生き物の気配がまったくなかった。空気は乾燥しており、そのうちに鼻と喉が渇いてきた。ふたたびV／STOLに乗りこみ、ハッチを閉め、チューブライダーへもどる準備をはじめたときには、みんなほっとした。

「それにしても、いいなあ、このV／STOLは。ぞくぞくするような飛びっぷりじゃないか」

ハイネマンはそういうと、V／STOLを離陸させ、エンジン・ナセルを前にかたむけて、スピードをあげた。機は着実に上昇していき、やがてプラズマチューブの一キロ以内、大気の最上層

に到達した。「アブラカダブラ」ハイネマンがいって、プロペラをナセルに収納し、尾部ロケットを点火した。
ぐんと急加速して、V／STOLは大気のフィールドとプラズマチューブをつきぬけ、特異線をつつみこむ真空中にとびだした。ハイネマンが姿勢制御ジェットをこだしにふかして、機体をチューブライダーの下にもっていき、搭載コンピューターの指示にしたがって、結合を完了した。
「な？　鮮やかなもんだ」ハイネマンはほれぼれするようにいうと、ヒューッと口笛を鳴らした。

37

「武装解除の協定は、当面見こめんな」ホフマンの先に立って、高架線のプラットフォームの階段をおり、第四空洞のコンパウンドに向かいながら、ゲアハルトがいった。「いまのところ、連中、われわれよりも、身内同士で警戒しあっている始末だ。事態が落ちつくまでは、だれも武器をさしだしたりはせんよ」
「トップに出るのはだれかしら？」
ゲアハルトは肩をすくめて、「わからんね。なにしろみんな、海千山千の手あいだ。できればミルスキーに実権を握ってほしいが」
「彼はこのところ、わたしたちのだれよりも長く、第三空洞にこもってるわ」
「いろいろ追いつかねばならんことが多いんだろうさ。ソ連は兵隊に無制限の教育を与えたがら

ないからな」

「停戦に持ちこんでキャンプを分けることができたのは、幸いだったかもしれないわね」

ゲアハルトがカフェテリアのドアをあけ、ホフマンを先に通した。農業関係の科学者が四人——男がひとり、女が三人だ——図表とスレートを用意して、ホフマンを待っていた。ホフマンは全員と握手をすると、椅子にすわった。ゲアハルトは給仕機から粗末な昼食をとると、となりのテーブルにすわった。ここでの議題は、彼に直接関係のあることではないからだ。

「〝食料自給計画〟」とホフマンは予定表を読みあげた。「〝農耕と生計の道〟。いいわ。わたしたちがしなければならないことを教えてちょうだい」

行動が起こされたのは、司令部での議論から、わずか十八時間後のことだった。第一空洞の嵐は、それよりずっと前におさまっていた。風が急にやみ、雲はもう少し雨を吐きだしたのち、雲散消滅していた。チューブの光がふたたび空洞内を明るく照らし、空気は暖かくなったように感じられた。

ベロジェルスキーは一個小隊を率いて司令部を包囲し、ミルスキー逮捕を命じた。表向きの理由は、ミルスキーが社会主義の大義に殉じる意志が弱いというものだ。じっさいのところは、三人の政治将校全員、中将が弱腰で、いずれホフマンに対し、ソビエトの立場を弱くするような譲歩をしてしまうのではないかと危ぶんだのである。

小隊は迅速に司令部を包囲し、ＡＫＶを二十名の警備兵につきつけた。警備兵たちが抵抗もせずに降伏すると、ベロジェルスキーはみずからミルスキーを逮捕するため、バンガローのドアに

近づいた。三人のいかつい兵がドアを蹴破り、頭と体は戸口から引っこめたまま、小銃をつきだした。
「同志将軍！」ありったけの声をふりしぼって、ベロジェルスキーはどなった。「おまえは部下の信頼を裏切った。新たに再建された最高会議の名のもとに、おまえを逮捕する！」兵たちが戸口から身を躍らせて、なかになだれこむ。眠たげに目をしばたたきながら、プレトネフが寝台から起きあがった。
「ミルスキー将軍なら、ここにはおられんぞ」中佐がねぼけ声でいった。「なにかわたしにしてやれることはあるかね？」

ヴェルゴルスキーは、ミルスキーとの議論のあと、仮眠をとってから、弱まってきた嵐に乗じ、五十名の兵を三台のトラックに分乗させて第一空洞をあとにし、地下鉄九十度線を使って――ソ連人専用にわりあてられている路線だ――第四空洞に移った。
ミルスキー逮捕に向かったベロジェルスキーが万一失敗した場合に備え、ミルスキーの勢力圏から逃れておくためだ。第四空洞に着いてからは、木々の緑を楽しむ余裕も出てきた。とりわけ、開拓部隊の兵士たちが木々を運搬してきて、湖に引きおろす光景は、気分を高揚させてくれるものだった。東方を開拓し、シベリア横断鉄道を建設したときの物語には、子供のころ、胸をはずませたものだ。いま彼は、〈ポテト〉でも同じものを建設することを夢見ていた。一連のソビエト集落を道路網で結び、原野を開墾して農場を開き、小屋を建てていく。結局、あの大惨事は、よりよい社会を開くきっかけだったのかもしれない。より純粋で、腐敗とは無縁の、より厳密に

統制された社会主義社会。それはついにこの小惑星において確立され、やがて、八十年前にレーニンが創始した仕事の総しあげをするため、地球にもどるのだ。
すでに事態は、驚くべきスピードで進行している。〈ストーン〉内に降下したのはほんの九日前なのに、いまでは〈ポテト〉の七つの空洞のうち、もっとも魅力的な領地を入手するまでになった。これは敵陣営の弱さを示す、格好の証拠ではないか。
三人の宇宙強襲機兵（SST）が近づいてきた。先頭の隊員は、いくつか書類をかかえている。第四空洞の開発責任者である彼に、サインをもらいにきたのだろう。
「大佐」先頭の兵士がいうと、書類の下からいきなり拳銃をとりだした。その銃口をこちらに向けて、兵士は制帽のつばをあげた。
「ミルスキー」ヴェルゴルスキーは自制を失わない声でいった。ほかのふたりのSSTは、ポゴージンと科学者のプリチーキンだった。ふたりとも、肩にAKVをかついでいる。ミルスキーはヴェルゴルスキーの腕をとると、銃口を彼の脇腹の、腎臓の近くにつきつけた。「黙っていてもらおう」
「なにをするつもりだ？」小声で鋭く、ヴェルゴルスキーがきく。ミルスキーはさらに強く銃口を押しつけて、
「静かに。おまえのネズミは、いまごろ司令部に穴をあけているころだな」
四人は慎重な足どりで、湖畔に停車しているトラックに歩いていった。ポゴージンがヴェルゴルスキーを無造作にトラックの荷台に押しこめ、防水布を投げかけてから、自分も乗ってくると、大佐の頭でできた防水布のふくらみを、AKVの銃身で軽くこづいた。

ミルスキーは運転席に乗りこみ、黒い砂地をはさんで、森で作業している兵士たちを見やった。ほかにもう一グループ、枝や松かさを利用して、野球の一種であるラプタに興じている者たちがいる。トラックやその乗員にはだれも気づいていないようだ。
「どこにいくんだ、将軍?」荷台からヴェルゴルスキーが、防水布でくぐもった声で問いかけた。
「お静かに、大佐」ポゴージンがいって、ふたたびAKVで頭をこづいた。

38

〈通路〉をえぐる傷だらけの地形は、空気もなく、不毛なままに、五十キロにわたってつづいていた。床への二度めの降下計画は中止された。大気がないとなれば、上昇と下降に大量の燃料を食うからだ。百万キロの折り返し点に到達しても荒れ地がつづいているようなら、計画を中止して引き返すことにしよう、とラニアーは心を決めた。
「どこまでもこんな状態がつづくのかしら?」となりに腰をおろしながら、ファーリーがきいた。
「この先ずっと?」
ラニアーはかぶりをふった。「彼らはパトリシアをどこかに連れていったんだ」
「井戸のことは考えてみた? もしかすると、彼らは〈通路〉を出ていったのかもしれないでしょう。とすると、わたしたちにはあとを追えないわ」
「その可能性は考えた——だが、井戸は使わなかったんじゃないかという気がする」

「また壁だ!」ハイネマンが大声で呼びかけた。
四人はコックピットに集まった。キャロルスンは副パイロットの席にすわっており、ファーリーとラニアーは入口でくっつきあう形になった。押しつけられるファーリーの体に、ラニアーはいやでも感じてしまった。
壁の穴を通りぬけるとき、〈通路〉はめまぐるしい変化を見せた。排水パイプを通るときはこんな感じだろうか、とラニアーは思った。上下左右に広がり、それまで無数の傷に覆われ、紫と茶色と黒をしていた〈通路〉の表面が、だしぬけにくすんだブロンズ色にもどった。前方監視レーダーにも、三十秒ごとに安定した信号がもどってくるようになった。
「みんな、すわっててくれ」ハイネマンがいった。「これからこの子のスピードを落とす。こんどはシートをうしろ向きにしてくれるか。FLRは前に向けたままにしておきたいし、約五分の一Gがかかるから……」
キャロルスンが副パイロット席でベルトをしめ、ラニアーに小鬼のような笑顔を向けた。「後部席へどうぞ、ボス。早い者勝ちよ」
ラニアーとファーリーは、装備ボックスのあいだをすりぬけてうしろへいき、となりあってすわった。ラニアーは深呼吸をして、目を閉じた。もういまにも爆発しそうだった。
「気分でも悪いの?」ファーリーがきいた。
「いや、少しも」ラニアーは安心させるように彼女の手を握り、すぐに引っこめた。
「だいじょうぶ?」
ラニアーは自信なさそうにほほえむと、うなずいた。

「なんだかへんだわ、ギャリー。あなたとはずいぶん長くいっしょにやってきたけれど――」
「あと一時間ほどで折り返し点に着くぞ」コックピットから、ハイネマンがどなった。
「ね、どうしたのよ？」ファーリーがくいさがる。
ラニアーはもうひとつ深呼吸すると、顔を赤らめて、いった。「どうしてもがまんできないんだ、カレン。いかれた話だよ。ぼくは……この二十時間、ずっと立ちっぱなしなんだ。いっこうにおさまらない」
ファーリーはきょとんとした顔で彼を見つめ、それから、わずかに目を見開いた。
「きみがきいたんだぞ」とラニアー。
「だれにでも、そうなるの？」
「ちがう」
「特定のだれかにね」
「そうだ」
「だれ……ときいたら、詮索しすぎかしら？」
ラニアーは指を一本立てて、彼女を指さした。笑いをこらえようとして、その指がふるえた。顔が真っ赤になり、引きつったような音が洩れた。
「それ、おかしいこと？」
「ちが……う……」ようやくのことで笑いを抑えて、彼はいった。「あんまりいかれてるからさ」
「いままで、わたしに興味を持ったことはないの？」

「いや——つまりその、きみは魅力的だし、興味がないことはないが、やっぱり——」
「それなら、もう黙って」すでに減速ははじまっていた。ファーリーはベルトをはずすと、シートや上の荷物入れについている手すりをつたって、ゆっくりとコックピットへ近づいていった。
「待てよ」ラニアーはひきとめようとしたが、体をつかみそこない、ネックレストの上で頭をのけぞるようにして、「カレン！」
　ファーリーはすでに、コックピットの入口にぶらさがっていた。そこで、「壁についたら起こして」と鋭く声をかけると、ガチリと音高くパーティションを閉めた。それから、通路をもどってきて、片膝をラニアーのシートと前のシートのあいだに踏んばった。
「悪かったよ——」ラニアーがいいかけた。
「いいの」ファーリーはそういうと、ジャンプスーツのジッパーを一気に引きさげた。その前面に、

鯢

という漢字を染めぬいたTシャツが現われた。中国が〈ストーン〉につけた名称、〝鯨〟を意味する漢字だ。ファーリーはすばやくジャンプスーツを脱ぎすてると、白のコットンのパンティーをはぎとった。

ラニアーは目をまるくして彼女を見つめていた。

「もっと早くいってくれればよかったのに」と、諭すようにファーリー。「あなたの思考の妨げになるものは、わたしたちの任務の障害でもあるのよ」頭からTシャツをはぎとると、服を全部、うしろのシートのポケットに押しこんだ。

ラニアーもジャンプスーツを脱ぎ、不安そうにコックピットのパーティションを見やった。彼女は、向かいあったシートの、後部側に横たわった。「あなたはいちども、〝交際名簿〟に名前を載せたことがなかったでしょう」ファーリーはそういいながら、彼の手をとって引きよせた。チューブライダーの減速のため、方向感覚がおかしくなっている。「でも、それがシャイだったからでなかったことはたしかね」

ラニアーは、胸をどきどきさせながら、ファーリーの胸にふれた。それから、手の甲でゆっくりと、ヒップから腹にかけてのラインをなではじめた。「これほどだれかが欲しくてたまらなくなったのは、生まれてはじめてだ」

キャロルスンがはしごをつたって、通路のまんなかまでやってきた。ファーリーとラニアーはすでに服を着ており、たがいに向かいあってすわっていた。「あと十分で壁に着くわ」と、無表情な顔で、キャロルスン。それから、ふとファーリーを見つめ、ラニアーに視線を移し、またまじまじとファーリーの顔を見つめた。「このまえの壁と同じ種類のもののようだけど、こんどは前よりも高くて、大気層の上までつきだしてるの。そのぶん、穴がせまいわ。特異線を中心にして、直径百メートルというところかしら。もっとも、前と同じように、テストはしておくべきで

しょうけれど」
「そうね」とファーリー。
「ギャリー――」ラニアーをじっと見すえて、キャロルスンがいいかけた。
「なんだい?」
「いえ、なんでもないわ」彼女はことばをにごし、はしごをつたって、コックピットにもどっていった。
「くそ、気持ちの整理がつかない」ラニアーがつぶやいた。
「どうして? あなたも人間だから?」ファーリーがたずねる。
「ぼくには責任がある」
「〈ストーン〉には、責任のない人間なんていないわ。それに、わたしがあそこにいるあいだは、数えきれない不承知の連続だったもの」
ラニアーは思わずくすっと笑って、「それは〝不祥事〟というんだよ」
「なんでもいいわ。ともかく、気づかなかったとはいわせないわよ」
ラニアーはかぶりをふった。「ほんとうに知らなかったんだ。最後に知るのは、つねにボスと相場が決まってる」
「それはボスが目をつぶっている場合よ。はたしてホフマンが、あんな状態を見過ごしておくかしら」
「わかったよ、たしかにぼくは……わからない。ぼくはすまし屋じゃないが、少し朴念仁かもしれない」

「朴念仁なもんですか、少しも」彼の腕に手を伸ばしながら、ファーリーがいった。「でも、気にしないで。あなたはいままでも、ボスだもの」

39

ヴェルゴルスキーは、見るからにおちつかないようすだった。だらだらと汗を流し、そのにおいが鼻をつく。声もうわずりぎみだ。ミルスキーから見ると、ほとんどかわいそうなくらいだった。

第三空洞図書館の黒い入口が忽然と開くと、ポゴージンとプリチーキンは捕虜の急所をAKVでこづき、歩くようにうながした。ミルスキーも、よりゆっくりとした足どりで、そのあとにつづいた。

「ここで時間を無為につぶしていたのか、おまえは」ヴェルゴルスキーが肩ごしにわめいた。

「きみはここにきたことがないのか？」驚いたふりをして、ミルスキー。「少なくとも、きみは興味を持つと思うがね」

「むだだ」ヴェルゴルスキーはいいはった。「ここはアメリカのプロパガンダでいっぱいに決まっている。なぜわたしの時間を浪費させる？」

ミルスキーはおかしいというより腹がたって、わざと声をあげて笑った。「あわれなやつだ。この恒星船を造った者たちは、きみやわたし以上にアメリカ人とはかけはなれているのだぞ」一

行は、椅子の列と輝く涙滴型機械の前にきて、立ちどまった。
「わたしを殺しても、ベロジェルスキーとヤズィコフが立派にあとを引き継いでくれる」とヴェルゴルスキー。
「きみを殺すつもりはないよ」とミルスキーはいった。「われわれはおたがいを必要としている。ともかく、すわってくれたまえ」
ヴェルゴルスキーは濡れねずみになった犬のように震えながら、その場に立ちつくした。
「わたしを洗脳することなどできんぞ」ヴェルゴルスキーが吠えた。
「椅子はとって食いやしませんよ」ポゴージンがいって、もういちどこづいた。
「たぶんな。だが、教育することはできるかもしれん。すわりたまえ」
ヴェルゴルスキーは、手近の椅子にそろそろと腰をおろし、こわごわと涙滴型機械に面と向かった。「むりやり本を読ませようというのか？　愚行もいいところだ」
ミルスキーはヴェルゴルスキーの椅子のうしろにいき、手を伸ばしてコントロール装置のカバーをあけた。「英語やフランス語やドイツ語をしゃべれるようになりたくはないかね？」
ヴェルゴルスキーは黙っていた。
「いやか？　では、歴史についてなら少しは学んでみたかろう。アメリカからではなく、われわれの子孫の視点から――〈大破滅〉を生き延びたロシア人たちの視点からの歴史だ」
「いらん」汗にまみれ、蒼白な顔をして、ヴェルゴルスキーはいった。涙滴の表面には、ほとんど鼻ばかりの、歪んだ顔が映っていた。
「これこそは、アメリカ人がわれわれから隠そうとしていたものなんだ」とミルスキーはいった。

「われわれが勝ちとろうとしてきた宝を検分することは、きみの務めではないのか？　きみの上官たちにはもうできないのだぞ――死んでしまったのだから。たとえ生きていても、すぐに死んでしまう。これから何年間も、地球全体は厚い雲に覆われるのだ。何百万という人々が餓死し、また凍死する。十年後には、わが祖国の民は一千万と残っていないだろう」
「なにを寝ごとを」袖で顔をぬぐって、ヴェルゴルスキー。
「この恒星船を造ったのは、われわれの子孫だ。これはアメリカのプロパガンダではない。空想めいて聞こえるかもしれんが、事実なのだ、ヴェルゴルスキー。いくらわれわれがいいあいをしたところで、その事実を隠すことはできない。われわれが訓練を受け、ここに赴き、戦い、死んでいったのは、真実を見つけるためではなかったか？　それに背を向けることは、反逆行為に等しい」
「権力の一部を委譲するか？」ミルスキーを見あげて、ヴェルゴルスキーがたずねた。ミルスキーは腹のなかで毒づくと、機械のほうを向いて、
「これはロシア語できみに語りかけてくる」と説明した。「きみの質問にも答えるし、どうやって使えばいいのかも教えてくれる。さあ、なんでもきいてみたまえ」
ヴェルゴルスキーは目をまるくして、いきなり目の前に浮かびあがった図書館のシンボルを見つめた。
「きくんだ」
「なにからはじめればいい？」
「われわれの過去からでもいい。われわれが学校で習った歴史をきいてみるといい」

シンボルがクエスチョン・マークに変化した。
「それなら、まず……」ヴェルゴルスキーはミルスキーを見あげた。
「つづけたまえ。苦痛はない。ただし、くせになるがね」
「ニコライ一世について教えろ」
「それでは無難すぎる」ミルスキーが口をはさんだ。「過去にもどりすぎだ。一九六五年から二〇〇五年にかけての、ソ連軍の基本戦略についてきいてみたまえ」ミルスキーはほほえんで、
「それなら、興味を持ったことがあるだろう？」
「では……それについて教えてくれ」とヴェルゴルスキーはいった。
図書館は、その情報を検索し、呈示できるように整理するあいだ、押し黙っていたが、ややあって色とりどりのユーティリティ・シンボルが、ふいにヴェルゴルスキーの視界のなかに閃いた。
そして、教育ははじまった。
三十分ほどして、ミルスキーはポゴージンとプリチーキンに向きなおり、第四空洞にもどるようにいった。すっかり夢中になっているヴェルゴルスキーに顎をしゃくってみせ、「彼ならもう心配はない。わたしが見張っている」
「わたしたちがあれにかかれるのは、いつになります？」とプリチーキンがきいた。
「いつでも暇があるときにだ、同志。あれはだれにでも開放されているのだから」
ベロジェルスキーはプレトネフの胸ぐらをつかみ、そのごつい体を椅子から持ちあげ、驚くほどの力でふりまわし、うなるようにいった。「それが作り話かどうかくらい、聞けばわかる」

「証明するのは簡単さ」プレトネフは顔をひょいとよけ、とんできたベロジェルスキーのこぶしを襟ひとつでかわして、「そこにいってみればいいんだ。同志プリチーキンとシノヴィエフは、知っているかぎりのことを話してくれたよ。第七空洞にはおわりがない。どこまでもつづいているんだ」

ベロジェルスキーはプレトネフを放し、こぶしを握りしめたまま、ゆっくりとあとずさった。

「修正主義者のたわごとだ。プリチーキンとシノヴィエフはインテリだからな。あんなやつらのことばなど、信じられるか」

ヤズィコフが三人の兵士に合図した。三人は両腕をかかえるようにして、プレトネフを引っ立てた。「きさまは、そのろくでもない命惜しさにわれわれを売って、敗北に導いた」とヤズィコフはいった。「きさまの務めは、あそこで死ぬことだったはずだ。それを、おめおめとアメリカ人に屈服しおって」

「もうおわったんだ」とプレトネフ。「ああするほかに、道はなかった」

「ここを完全に占領することもできたのだぞ!」ヤズィコフがわめいた。「さあ、ミルスキーはどこだ?」

「いったはずだ。将軍は第四空洞にいる」

「うそをつけ。また図書館にいりびたっているんだろう」とベロジェルスキー。

「それなら、図書館にいけばいつでも逮捕できるわけだ」とヤズィコフ。「まず、ガラベジャンとアンネンコフスキーを見つけなければならん。あいつらもミルスキー側だからな。同志プレトネフ、きさまはわたしみずから、第七空洞の向こう端の壁で銃殺してやる。愚鈍さの証拠として、

きさまの血と革命に反逆する脳味噌をぶちまけてやる」それから、いまいましげに両手を宙にはねあげて、「ほかのやつらが見つかるまで、こいつをここに閉じこめておけ」

リムスカヤは、ベロジェルスキーからのメッセージを手にして、コンパウンドを横断していた。階段をのぼって、かつてはラニアーの、いまはホフマンのオフィスになっている部屋に向かい、ドアをノックする。ベリル・ウォリスがドアをあけた。
「ソ連側からのメッセージを持ってきた」リムスカヤは簡潔にいった。顔が蒼ざめており、何日も寝ていないように見える。
「なにか重要なことですか?」
「ベリル、わしにまで露はらいのまねをせんでもいい。ジュディスはいるのか?」
「下で医療班の責任者と打ちあわせをしています。わたしはべつにおせっかいをしてるんじゃなくて、彼女がひどく忙しいから――」
「わかったわかった。だが、社会主義者たちも社会主義者たるために忙しいらしい。それに、トラブルが起こっているふしがある」リムスカヤは両目をこすると、梟のようにまばたきをした。
「では、伝えます。一階の秘書机のところで落ちあうようにいいますから」

リムスカヤはひとつうなると、重い足どりで階段をおりていった。

下におりると、管理者用の会議室からホフマンが出てきて、リムスカヤの手からスレートを受けとり、ざっと目を通した。リムスカヤほどではないにしろ、彼女もまた疲れきった顔をしていた。目の下には紫色のくまができており、頬は睡眠不足でこけていた。

「このベロジェルスキーというのは……どういう立場の人間？　階級は？」
「ザムポリート——つまり政治将校だ」とリムスカヤが答えた。その両手が震えていた。「階級は少佐だ。一、二度、話をしたことがある」
「どんな印象を持った？」
リムスカヤは陰鬱に首をふった。「石頭で、無知で、想像力のかけらもない。問題は、こっちのふたり、ヤズィコフとヴェルゴルスキーだ。こいつらはもっとスマートで、危険だ。このふたりが、ミルスキーは処分したから以後は自分たちと交渉せよというのであれば、すでにもう処分はおわってしまったんだろう」
「それなら、会談の手配をして。向こうの内紛のために話しあいを中止するわけにはいかないわ。それから——なんていう名前だったかしら——そう、シノヴィエフかプリチーキン。どちらかから、事態がどうなっているのか、それがソ連の民間人におよぼす影響はどうなのか、聞きだしてちょうだい」
「それが、見つからないんだ。拘留されたか、それとも処刑されてしまったのかもしれん」
「そこまで事態が進んでいるというの？」
「連中はきわめてロシア的行動をとっているからな」両手を広げて、リムスカヤ。
「いまの打ちあわせは一時間ほどしたらおわるわ。向こうとは一時間半後に会談を持てるよう、段取りをつけて」
「時間は向こうに指定させることだ。それに、しばらく待たせたほうがいい」リムスカヤがいった。

「それはまかせるわ」

ホフマンは、長身で気むずかしい数学者が外に出ていくのを見送ってから、だれもすわっていない秘書机の向こうの、飾り気のない壁を見つめた。アンは昼休みで、カフェテリアにいっている。

「三十秒だけよ」とホフマンはいって、心を空白にした。ひとりで立ったまま、彼女は規則正しく呼吸しながら、デスクの端を指先で軽くたたいて、瞑想時間を測った。三十秒が過ぎると、彼女は目をぎゅっと閉じてから、また開き、ひとつ深呼吸をすると、廊下を通って、会議室のドアのなかに消えた。

40

チューブライダーはゆっくりと、第二の壁を通りぬけた。その向こうの、壁から一キロのあたりには、むきだしのブロンズ色の床の上に、壁と平行に〈通路〉の床をとりまいて、一連の黒っぽい煉瓦色の構造物がならんでいた。ひとつひとつの構造物は、一辺が二百メートルほどの四角い土台の上に載っている。構造物の側面には階段があり、一段一段が少しずつずれていて、螺旋状に歪んだピラミッドを形成している。

「まるでビンゴだな」〈通路〉ののどもとを指さして、ハイネマンがいった。床の上では、無数の光が、数えきれない車線の上を移動している。車線は超過密なフリーウェイ・システムのよう

に、幾重にも積層していた。「われわれは孤独ではなかったたってわけだ」
「わたしたち、どこまできたの？」キャロルスンがきいた。
「誤差二キロで、七十七万キロのあたりだ」とハイネマン。「ギャリー、少し操縦を替わってくれるか？　いくつかテストをしなくちゃならん」
「時速九十から百キロで、ゆっくりいくことにしよう」とラニアーが答えた。
「そのくらいが妥当だろう。何者だか知らんが、あの住人たちとは、あまり会いたくないね」ハイネマンはいうと、かぶりをふりふり、シートからおりた。V／STOLは定速で動いていたため、機内はふたたび無重力になっていた。
「なにを心配しなければならないの？　その——あたりまえの理由以外に」ファーリーがたずねた。
「あたりまえの理由だけでも充分悪いが、正直いって、おれは特異線ぞいに進んでいくことが心配なんだよ」とハイネマンが答えた。「ここまでくれば、下にいる何者かは、人間と似ても似つかないんじゃないかという気がしてね。たぶん、あのほかにも車があるだろう——当局の車がね。それに、ほかにもなにかあるかもしれない。なんであれ、こっちは秒速九から十クリックで動いているんだ。万一なにかにぶつかれば、おおごとになる。それだけで、交通違反に問われるには充分じゃないか？」
「そこまでは考えなかった」パイロット席にすわりながら、ラニアー。
「ようし、じゃ、そいつがしっかり呑みこめたら……」ハイネマンは厳しい目でラニアーをちらりと見やり、ぽんと肩をたたいて、「それでは女性軍、あの光がなんだか、調べるとしよう」

三人は床にならんでいる観測窓の各種機器を交換し、これまで使っていなかった窓に新しいセンサーを設置した。ラニアーは〈通路〉の床を見おろしながら、流れる光の線を魅せられたように見つめた。双眼鏡を使っても、光の点は、車線の黒い地を背景に、明るく光るスポットであることまでしかわからない。

と、なにか大きくて灰色のものに視野をさえぎられ、ラニアーは双眼鏡をおろした。少なくとも、直径五百メートルはありそうな円盤が、ゆっくりと車線の上を浮遊して、南に向かっている。西に二十度から三十度の位置にも、べつの円盤があり、やはり南に向かっている。

「受信可能な無線信号はない」とハイネマンがいった。「輻射されているのは、余剰のマイクロ波と熱、それにわずかなX線とガンマ線だけだ。レーダーには——約二十五万キロ前方に、かなり大きななにかが映っている。表面積は少なくとも十五平方キロ。位置は自転軸の付近——ちょうどまんなかだ」

「こっちの画面にも出てる」メイン・ディスプレイを見ながら、ラニアーがいった。「そのまわりに、いくつも物体が動いている。〈通路〉の壁の付近にもだ」

「あいつがなにかはきかないでくれよ」大型ディスプレイに映った灰色の円盤を見ながら、ハイネマン。目をすがめながら、彼はとほうにくれたようすで、「それから、いつまで干渉されずにここにとどまっていられるかもな」

「少なくとも、こっちは小さいわ」とファーリーがいった。「もしかすると、気づかないかもしれない」

「あの前方にあるばかでかいやつ——なんだか知らないが、あれは気づくだろうさ」とハイネマ

ンが指摘した。「十中八九、あいつも特異線に乗っているようだからな」
壁を通過してから五百キロの地点で、煉瓦色をした、四つの巨大でねじくれたピラミッドが、からみあう車線の上につきだしているのに出くわした。各ピラミッドの配置からして――〈通路〉の横断面にそって、それらは四ヵ所に等間隔にならんでいる――井戸の上に造られているものらしいな、とラニアーは思った。この距離からだと、ピラミッドは、手を伸ばして持った記念切手くらいの大きさに見える――ということは、一辺二キロ、高さ一キロはあるということだ。各ピラミッドからは、幅一キロはある広い車線が北へ伸びだし、目のとどくかぎりどこまでもつづいていた。
「われわれの理解を超えているな」ラニアーがつぶやいた。
ファーリーがラニアーの肩をつかみ、副パイロット席にすべりこんだ。「何年も前から、わたしたちの理解を超えてるんじゃない？」
「ぼくはずっと、〈通路〉はがらんどうだと思っていた――なぜかはわからない。たぶん、こういうものが想像できなかったからだろう」
ハイネマンが浮遊してきて、ふたりのあいだに割りこみ、計器パネルの手すりをつかんで体を固定すると、飛行プランのプログラムにとりかかった。「これから、時速一万クリックまで加速する。特異線上のあの大型物体にできるだけ接近して――つっこんできたと思われてもこまるから、近づいたら、減速はするが――それから逆進して、一目散に逃げもどる。もちろん、おたくの許可がおりたなら、の話だがね」ラニアーに向かって、片方の眉をつりあげて見せた。
ラニアーは危険の程度を推し量ろうとしたが、測る規準がなにもないことに気づいた。

「ここでもどったら、〈ストーン〉で待っているみんなになんといえばいい？」ハイネマンはくいさがった。「ここが重要な場所であることは明らかだ。このままもどってしまったら、おれたちにはあれがなんなのか、おれたちにとってどういう存在であるのか、わからずじまいだぞ」
「あたりまえのことはいわなくてもいいよ、ラリー」とラニアーはいった。「それより、このまま進んでなにごともないのかどうか、その見通しをいってみてくれ」
「そいつはわからんさ」とハイネマン。「だが、おれはもう、この人生でやるだけのことはやっちまった。おまえさんたちはどうだい？」
キャロルスンが笑っていった。「クレージーだわね。クレージーで無鉄砲な、技術屋のパイロット」
ハイネマンが前後に頭をふり、ジャンプスーツの胸ポケットを、両手の親指で誇らしげに持ちあげて見せた。「で、ギャリー？」
「ともかく、なにか成果をあげなければな。――よし、いこう」
ハイネマンはコンピューターに飛行手順を入力しはじめた。チューブライダーが特異線上を加速しはじめると、ふたたびＶ／ＳＴＯＬのキャビンに方向感覚がもどってきた。
加速が終了し、チューブライダーが時速一万キロで進みはじめるのを待って、ハイネマンが夕食を配った。フォイルにくるんだサンドイッチに、球形容器にいれた熱い紅茶だ。四人は黙々と食事をとった。キャロルスンとハイネマンは、コックピットの隔壁のこちら側に、ベルトで体を固定して食べている。Ｖ／ＳＴＯＬの進みは着実で、進んでいることがはっきりわかった。
もういちど、長方形の構造物のサーキットを通りぬけ、数分後、またべつのサーキットを通過

した。四つの構造物のすべてが、四本の太くてまっすぐな車線と、流れる無数の光点で埋めつくされた、からみあった車線とで結ばれている。
ラニアーは副パイロット席をキャロルスンに譲り、ハイネマンが女性ふたりにチューブライダーの操縦を教えこんでいるあいだに、仮眠をとった。断続的に、彼は夢を見た。はじめは、軽飛行機でジャングルや縦横に走る川の上を飛ぶ夢だった。そのうちに、ジャングルが陸上競技場に変化した。やがて彼は、口のなかに紅茶のあと味を覚えながら目を覚まし、シート・ベルトをはずして、起きあがった。ファーリーが観測窓の計器を調整して、データの集計と照合を行なっているスレートから、メモリー・ブロックを交換していた。集めたブロックの山は、〈大破滅〉の前、技師チームが作った予備の万能メーターのひとつを持って、ラニアーに見るようにと、その表示盤を指さした。
「どうした?」ちらつく数字を見おろしながら、ラニアー。
「異常が起きてるわ。無意味な数字ばかり吐きだすの。計器のほとんどがそうよ。ここで得られたデータの半分も解析できたら、ラッキーでしょうね」
「原因は?」
ファーリーはかぶりをふった。「これは想像の域を出ないけれど、わたしに考えつけるのはこれがせいいっぱい。ほかの電子システムは正常に作動しているみたいだから――もしかするとわたしたちは、〈ストーン〉の選択的慣性吸収機構に似た、なんらかの制御フィールドを通過しているんじゃないかしら。ここのフィールドは慣性ではなく、ほかの……たとえば、幾何学的歪み

が各部におよぼす影響とか、斜体のhの変化とか……そういったものを吸収するのかもしれない。でなければ、観測機器がいちどにだめになってしまったのよ。保証期限がきょうまでで――切れたとたんに、ぱあ！　っていうわけ」
「計器に問題はない」副パイロット席から、ハイネマンがどなった。「おれの機械の悪口はいわんでくれ」
「独占意識が強いんだから」ファーリーがわざと驚いてみせた。「品質管理について非難めいたことをいうと、必ず門戸をいうのよ」
「〝門戸〟じゃなくて、〝文句〟だよ」とラニアー。
「いいわよ、なんだって」
「さて、こんどはきみの番だ」ラニアーはハイネマンに、キャビンの後方を親指で指しながら声をかけた。「仮眠してくれ。全員、頭も体もすっきりさせておかないとな」
チューブライダーの横揺れを調整してから、ハイネマンが宙に浮かんでラニアーの前を通りすぎたとき、「待って」とキャロルスンがいった。「あれはなに？」
チューブライダー前方の特異線が、もはや輝く円筒ではなくなっていた。灼熱の鋼鉄のワイヤーのように、それはまずオレンジ、ついで白と、断続的に脈動しながら輝いていた。
「貧乏暇なしか」ハイネマンはいうと、パイロット席のラニアーと交替した。ついで、チューブライダーのクランプを特異線に絞めつけて、ブレーキをかけた。だしぬけに、V／STOLが抵抗を受け、激しく横揺れし、ラニアーとファーリーは放りだされて、荷物入れに張りつけられた。ハイネマンがクランプを放すまで、その状態はつづいた。

「加速している」チューブライダーとＶ／ＳＴＯＬがたてるすさまじい振動音に負けない声で、ハイネマンがどなった。「制御できない」

ラニアーとファーリーの体が、キャビンの後方にすべりだした。シートに手足をぶつけながら、ラニアーはなんとかなにかにつかまろうとした。ファーリーはシートのひとつにしがみつき、必死に体をふり動かしてそこにすべりこもうとしている。

いまや特異線は、プラズマチューブの中心を貫いてどこまでもつづく、赤い線となっていた。ラニアーはシートにすべりこんでベルトを締め、シートにすわろうとするファーリーに手を貸した。計器が荷物入れや隔壁やほかの機器にぶつかりながら、後方へ落下していった。

「バックはできないのか？」轟音のなかで、ラニアーがどなった。

「むりだ」ハイネマンがどなり返した。「クランプを絞めつければ、また振動がはじまる。いまは時速三万キロ、まだ加速中だ」チューブライダーがふたたび横揺れし、ラニアーとファーリーは手をかざして、はねながら襲ってくるメモリー・ブロックのラックやテスト・キット、まきこんだ光ケーブルなどから身を守った。

「四万になった」とハイネマン。それから、ほとんど間を置かず、「五万だ」

そのとき、無線がガガッと鳴り、シューシューという音をたててから、性別不明の、音楽的な声が流れだした。

「――〈道〉法を犯している。貴飛行体は〈道〉法を犯している。抵抗してはならない。抵抗すれば、破壊される。貴飛行体はヘクサモン・ネクサスの管理下にはいった。六分後に、傷より排除する。加速も減速もしてはならない」短いホワイト・ノイズの爆発とともに、メッセージはお

わった。

41

ベロジェルスキーは、会議テーブルについたヤズィコフの背後で、うしろ手を組み、棒を飲んだようにつっ立っていた。ヤズィコフは、テーブルの上に両手を組んですわっている。ホフマンは要求にざっと目を通し、ゲアハルトのためにその内容をかいつまんでスレートに書きだしてやった。ゲアハルトはすばやく読むと、かぶりをふった。

「あなたがたの要求は拒否します」ホフマンはロシア語で平板にいった。彼女もまた、第三空洞の図書館で教育を受けていたのだ。

「この者たちは犯罪者だ」とヤズィコフ。「われわれの同志のひとりを誘拐し、どちらかの都市に隠れた。どこにいるか、見つけることができない」

「それが事実であろうとなかろうと、すでに協定合意事項として、たがいの政権および司法権には介入しないことになっています。その者たちを見つけるのに協力することは、協定違反です」

「やつらはそちらの領地に隠れているのだぞ」ベロジェルスキーがいった。「まさか、おまえたちがかくまっているのではないだろうな」

「たとえそうだとしても、そういう報告は受けていません」とホフマン。「そんなことはまずないでしょうがね」

「そちらが文民政府の樹立を支持していることはわかっているのだ」ヤズィコフがいった。
「そういうものは支持しませんし、反対もしません。それはあなたがたの問題です。こちらがこの席で問題にしたいのは、平和的共存のみ。それ以外のことには関心がありません」
ヤズィコフはすっと立ちあがり、ホフマンに会釈をした。ロシア人たちはカフェテリアを横切り、奥のドアから出ていった。
「あれはどういうこと?」ホフマンがゲアハルトにたずねた。准将はかぶりをふって、にやりと笑った。
「ミルスキーがやつらの親玉を連れさったのさ。不穏な動きを察知して、先手を打ったらしい」
「ミルスキーをどう思う?」
「ガチガチのソビエト軍人かもしれんが、ヤズィコフやベロジェルスキーよりは、ミルスキーと交渉したいね」
「とすると、彼に手を貸す?」
「ミルスキーに? まさか。最初の直感にしたがうべきさ。われわれは手を出さず、事態がひとりでに収まるのを待つんだ。もっとも、ミルスキーはけっして、手を貸してくれなどといってはくるまいがね。われわれとしては、内戦にならないことを祈るしかない。そうなれば、座視してはいられんからな」
ミルスキーとポゴージンは、ヴェルゴルスキーをトラックに乗せ、曲折するサービス道路を通って、第三空洞から外へと連れだした。やがてサービス道路は、二十キロにわたってまっすぐ伸

びる、主要道路に合流した。半月型のゲートをくぐりぬけて進んでいくと、ほどなく道路は、九十度トンネルにはいり、第二空洞に出た。
道すがら、ミルスキーは第二空洞の建物を検分し、とうとう目的にかなったものを選びだした。それは、アメリカ人が〝メガ〟と呼ぶ巨大なシャンデリア型摩天楼のもと、なんのためのものかわからない高さ百メートルの岩石塔の長い列のあいだに、ひっそりと建った建物だった。
建物は四階までしかなく、かつては学校の一種だったらしい。各階に三つずつある部屋には、銀色のガラスで縁どられた漆黒の壁に向かって、連結された椅子の長い列が何列もならんでいた。
最上階の東端の部屋で、ミルスキーは携帯品を広げ、いまではずっと静かに、ずっと陰気になったヴェルゴルスキーといっしょに腰をおろした。ポゴージンはトラックを隠しにいった。
「礼をいうつもりはない」とヴェルゴルスキーはいった。彼はベンチに横になり、暗青色の天井にちりばめられた、金色の星々を見つめた。「父はアフガニスタンで死んだ。父の死のようすについては、なにも知らされなかった……国家機密だといって。いまでもそのようすはわかっていない。だが、あれがすべて、軍事演習だったとは……軍の戦闘能力を試す試験だったとは……信じられないというふうにかぶりをふって、「十年にわたる演習だぞ！　信じていたことが――」こぶしを口にあてて、咳をし、「信じていたことが、すべて口裏を合わせたうそだったとは――」
「すべてではない」とミルスキー。「ほとんどがうそだったが、すべてではない」
「目の鱗を落としてやっても、人は感謝しないものだ」
「だが、断片的には、ずっとわかっていたことではないかね？」ミルスキーが問いかえした。

「腐敗のことも、無能でろくでなしで金のことしか頭にない上官たちのことも……革命の理念を犠牲にすることで、国家はみずからを保持してきたんだ」
「多かれ少なかれ、だれもが堕落した行ないはしていただろう。だが、われわれの最高の運動選手やダンサーを囲い者にするなど……」
「偽善とまじりあった愚かさだ」
「スキャンダルなどない、過ちは犯さないという政府のほうが、どれだけ始末におえないことか！　少なくとも、アメリカ人はスキャンダルにまみれている」
ふたりは二時間ほど話しあった。そのうちに、ポゴージンがもどってきた。彼は眉間に皺をよせて、ふたりが胸の痛むことを話しあうのをじっと聞いていたが、やがていちどだけ、口をはさんだ。「アメリカ人は、自分たちの腐敗に気づいてるんですか？」
ミルスキーはうなずいた。「彼らはつねに気づいていた。少なくとも、新聞が事実をすっぱぬくたびに、気づいたはずだ」
「向こうの新聞は、統制されていないんですか？」
「操作はされている」とミルスキー。「だが、完全に統制されているわけではない。アメリカには何千という歴史家がいて、ひとりひとりが自分なりの歴史観を持っている。彼らの歴史は混沌としているが、意図的な歪曲は必ず発見される」
ポゴージンはヴェルゴルスキーとミルスキーを交互に見つめてから、背を向けて、部屋から出ていった。
「スターリン、フルシチョフ、ブレジネフ、ゴルバチョフ。われわれが彼らについて教えられた

ことは――」ヴェルゴルスキーはかぶりをふって、いいよどんだ。

「われわれの父親が教えられたこととはちがっているんだよ」ミルスキーがあとを受けた。「そして、その父親たちが教えられたことともな」

ふたりはさらにもう一時間話しあった。こんどは軍隊生活についてだった。ミルスキーは、自分がもう少しで政治将校になるところだったことを話した。ヴェルゴルスキーは、自分やほかの政治将校たちが、宇宙強襲機兵とともにインド洋から射ちあげられる直前、速成の訓練を受けたことを打ち明けた。

「結局のところ、われわれふたりの意識は、そうかけ離れてはいないようだな」ミルスキーが魔法瓶の水をついでくれるのを見ながら、ヴェルゴルスキーはいった。ミルスキーはふたたび肩をすくめ、コップをさしだした。ヴェルゴルスキーは語をついで、「政治将校の責任は、きみも知っているはずだ……党に忠誠をつくし、革命へも……」

「どの革命だ?」ミルスキーが静かにたずねた。

ヴェルゴルスキーの顔が赤くなった。「われわれは、いまも革命に忠実であらねばならない。われわれの命は、われわれの精神の健全さは、それにかかっている」

「革命はいま、ここでもはじまっている」とミルスキーはいった。「われわれは過去の重荷から解放されたんだ」

ふたりは長いあいだ、気まずい思いでにらみあっていた。ポゴージンがもどってきて、ふたりが黙りこんでいるのを見ると、かたわらにすわりこみ、片手の人差し指をもう片手の親指と人差し指で握って、おちつかなげに引っぱりはじめた。

「権力の一部は委譲してもらわなければならない」とヴェルゴルスキーがいった。「党を再建しなければ」
「だが、粛正はなしだ」顎の筋肉に力をこめて、ミルスキーが鋭くいった。「もう粛正はたくさんだ。ロシアは、革命と党の名のもとに、人殺したちによって、あまりにも長いあいだ虐げられてきた。もうたくさんだ。それを地球の子孫たちに持って帰るくらいなら、なにもかもここでけりをつけたほうがいい」
ヴェルゴルスキーはポケットを探り、年代物の金時計を引っぱりだした。「いまごろ、ベロジェルスキーとヤズィコフは半狂乱になっているにちがいない。わたしからの連絡がなければ、あのふたりがなにをしでかすかわからんぞ」
「それは連中の立場を弱めるだけだ」とミルスキー。「もうしばらくほうっておけばいい。いずれ、自分で自分の首を絞めるだろう」
ヴェルゴルスキーは狼のような笑みを浮かべ、ミルスキーに指をつきつけた。「ふふん。きみの正体はわかっているぞ。夢想家だ。修正主義的夢想家だ」
「そしてわたしは、きみが権力を分かちあっても安心していられる、唯一の人間だ」とミルスキー。「いずれ、あのふたりがきみの追い落としにかかることは目に見えている。あのふたりを信用するのは、狂犬を信用するのも同じだ」
ヴェルゴルスキーは釈然としない顔をしていた。
「さあ、これでおたがい、理解できたのではないかな」
ヴェルゴルスキーは肩をすくめ、口をむっつりと引き結んだ。

翌日一二〇〇時、ポゴージンがトラックのアンテナを南の連絡孔に向けると、ヤズィコフとベロジェルスキーにあてて、ヴェルゴルスキーはメッセージを送った。
「わが第四空洞の部隊が、第三空洞の図書館でミルスキーとその一味を捕えた。こちらに合流せよ。図書館で軍法会議を開く」

42

彼らはことばもなく、彼方の黒いシールドへと機体を運んでいく、特異線の真っ赤なラインを見つめていた。ラニアーはキャビンのファーリーとキャロルスンに合流して、計器から意味ある反応を読みとろうと努めた。計器には、ときおり意味のあるデータも表示されたが、役にたつほど多くはなかった。
「なにかが特異線の上を近づいてくる——機械だ。大きくて、黒い」ハイネマンがいった。
「高速で近づいてくる……」ラニアーはコックピットにもどった。
輝く赤い線にまたがって、チューブライダーの直径の二倍はある機械が接近してきていた。その断面は円形で、表面が黒光りしている。機械の表面には、明るい紫の線で、正方形や長方形が左右対称に描かれていた。ラニアーが魅せられたように見つめていると、その正方形や長方形が口を開き、鉤爪やさまざまな節のあるアームがせりだしてきた。そうしたところは、まるで深海潜水艇か——異常な五得ナイフだった。「なにをするつもりかな？」

「スピードをこちらに同調させている。まるで――」
キャビンのなかに、さまざまな色彩の光が閃いた。ハイネマンはたじろぎ、身を引いた。ラニアーは目を閉じ、両手をかざした。
「いまのはなに?」うしろからキャロルスンが呼びかけた。ラニアーの目の前で、赤と緑の透明な物体が踊っていた。手で触れようとしたが、それには実体がなかった。
「これはなにかのシンボルだ」とハイネマンがいった。「見えるか、これが」
「見える。なんだかわからないし、どこからきたのかもわからないが」
無線がふたたび、ガリガリと鳴った。「貴飛行体搭乗者身元を明かし、アクシス・シティのシールドに接近してくる理由を説明されたい」
ラニアーはハイネマンからマイクを受けとると、「わたしの名はギャリー・ラニアー」といった。残念ながら、これではなんの手がかりにもならないだろうが。「われわれは探険しているだけだ。もしなにか問題があるのなら――」
「代理士を望むか?」
「それは――なんだ?」
「ただちに代理士を割りあてる。そちらはヘクサモン法廷において適切な権利を有する人間の有体者か?」
「そうだといいなさい」キャロルスンがアドバイスした。
「そうだ」
「いまより貴飛行体は、フローから引き離され、アクシス・ネイダーへ曳航される」

機械が一本のアームをチューブライダーの下にさしこんだ。火花がちって、風防の外が覆い隠された。V／STOLは横揺れし、振動した。機体にガスが吹きかけられたとたん、コックピットの警報音はとまった。ガチガチという音につづいて、ガクンと揺れたかと思うと、機体は宙に放りだされた。

チューブライダーが特異線から切り離され、宙にぶらさがっているのが見える。V／STOLがチューブライダーからとりはずされたのだ。

ハイネマンは、明るい赤の線と、切断されて使いものにならなくなったチューブライダーの尾部をなおもつかんでいる、黒い機械を見あげ、怒りで声をつまらせながらいった。

「あのやろう、機をマウントから切り放しやがった」V／STOLは特異線からどんどん離れていく。もう三十から三十五メートルは離れただろうか。「機内の状態を調べてくる」

ラニアーは副パイロットのシートに残り、ベルトをはめ、呼吸を整えようとした。不時着したときと同じだ。事態はこれ以上悪くならない。もしかすると、好転するかも――。

「空気の漏れる音は聞こえないが、それでも大気中におりたほうが安心だ」キャビンからハイネマンがどなった。

黒い機械はチューブライダーを放りだし、鉤爪を大きく広げて、V／STOLのほうに伸ばしてきた。キャロルスンとファーリーのあいだをすりぬけ、ハイネマンはふたたびコックピットへとんできて、「くそったれ」とののしった。ハイネマンが毒づくところを聞くのは、ラニアーもはじめてだった。

黒い機械の巨体が風防の外いっぱいに広がったと思ったとたん、機体が勢いよく回転しだした。

宙を飛んでコックピットのハッチをすりぬけようとしていたため、ハイネマンはその影響を受けずにすんだ。が、ラニアーはシートごと激しくふりまわされた。エンジンがかかっているのにいきなり鉤爪につかまれたため、機体がはね駒のように回転し、ついで逆回転したのだ。「なにかにつかまれっ。つぎのショックがくる前に!」ラニアーがどなる。ハイネマンがパイロット・シートを片手で引っつかんだ。V/STOLはもういちど、マーシャル・アーツの達人のように鋭く回転し、ハイネマンは自分の体重の重みに体をひねられて、肩を脱臼した。

技師は悲鳴をあげて手を放し、結果的に、機体の回転と逆にまわる形になった。ラニアーはなすすべもなくそのようすを見つめ、回転がとまるのを待った。ようやく回転がとまると、たしかにとまったことを四秒ほど待ってたしかめてから、ラニアーはベルトをはずしてハイネマンの腰をつかみ、そっとキャビンへ押しやった。技師の顔は苦痛に歪んでいた。親友にひどい目にあわされた子供のように、大きく目を見開いていた。

キャロルスンとファーリーはかすり傷を負っていたが、手すりをつかんでいたので、たいしたことはなかった。ただよってきたハイネマンの頭をファーリーがつかみ、ばたつかせている足をキャロルスンが押さえた。その隙に、ラニアーが腕の具合を調べた。

「よせ、ばか!」ハイネマンが吠える。「さわるんじゃない!」

「処置が遅くなればなるほど、痛みがひどくなるぞ」とラニアー。「どこも折れてはいないようだ。くそ、無重力のなかで、どうすれば骨をつげる?」

「これよ、足をこの柱に踏んばって。わたしたちがこの人の体を押さえておくから」とキャロルスン。ハイネマンが大きく目を見開き、身をよじった。短い髪が、ぴんと逆立っている。ラニア

ーは片足をはしごにかけ、もう片足をハイネマンの脇腹に押しつけた。キャロルスンとファーリーが、技師の体を押さえる手にいっそう力をこめた。

「放してくれ」脂汗と涙で顔をべっとり濡らして、ハイネマンが弱々しくいった。

ラニアーは技師の上腕と二の腕をつかみ、引っぱりながらぐいとねじった。ハイネマンがふたたび悲鳴をあげ、白目をむいた。カキン、と小気味よい音がして、腕はもとの場所におさまった。ハイネマンは弱々しく首をのけぞらせ、大きく口をあけた。つかのま、気を失ったが、すぐに意識をとりもどした。

「しばらく許してくれないでしょうね、この人」とキャロルスン。

「肩に冷湿布をあててやってくれ」とラニアーが指示した。それから、側面の窓にふたたび顔を押しつけた。機械はあいかわらず、風防を覆い隠している。

「加速しようとしてはならない」ふたたび、無線の声がいった。「エンジンを始動してはならない。貴飛行体はアクシス・ネイダーに曳航される」

ファーリーがハイネマンに手を貸してシートにすわらせた。ハイネマンは力なく首をのけぞらせ、蒼ざめた顔でキャロルスンを見やった。キャロルスンは二本の指でそのまぶたを押し広げ、目をのぞきこみ、「ショック症状ね」といった。それから、救急パックを開き、あらかじめ針がセットされている注射器をとりだして、怪我していないほうの腕に鎮痛剤を射った。ラニアーはコックピットにすわって、なんでもいいから計器から得られる情報を読みとろうとしていた。しかし、計器からわかるのは、V／STOLが高速で移動しているということだけだった。

オルミイは、有体の警備員に大統領の通行許可シンボルを投影して、フロー観測室にはいった。観測室は天井の高い、卵型の部屋で、情報が部屋じゅうに浮かんでいた。ぼやけて見えるのは、その焦点が、当直のふたりの新形態に向けられているからだ。ふたりのそばへいくと、オルミイの目にも、データがはっきりと読みとれた。データの中心にあるのは、破壊されてただようチューブライダーと、いまはフロー保守装置の制御下にある飛行機だ。「大統領命令により、この事件は治安問題としてわたしが引き継ぐ」オルミイは先任の新形態に図話で語りかけた。
「それは認められません」と新形態は答えた。「これは重大な違反であり、ただちに法廷へ報告されなければなりません。彼らには代理士が割りあてられ――」
「代理士ならすでにつけてある。大統領代理の直接命令は、最優先で受けいれなければならないはずだ」オルミイがいうと、その新形態は――卵型をして、両脇に牽引フィールドをつかむ腕が伸びだし、前面、つまり卵の太いほうの端に、人間の顔がついたタイプだ――まわりに白い環を投射した。強要に対する承諾のシンボルである。だが、オルミイはもう、それだけでは収まらなくなっていた。
「無限ヘクサモン・ネクサス大統領の命令、および大主教権限により、きみをこの職務より解任する」オルミイがいうと、新形態は興奮して抗議し、イメージを赤方偏移させながら、部屋を出ていった。
　オルミイは、それまで新形態がいた場所にすわると、残っている新形態と視線をかわし、「この件は法廷に報告するな」と、きっぱりといった。
「すでに報告はなされています」と、ふたりめの新形態は答えた。オルミイは中央シティのシュ

リー・ラーム・キクラにメッセージを遠隔投射した。様式化された個人紋章が目の前に現われた。「セル・ラーム・キクラは、現在ここにはいないわ。わたしは彼女の部分人格のひとつ。なにかあったの？」

「緊急事態だ。また客が増える。ところが、彼らがヘクサモンの法律を破ったので、大主教権限により、本件を法廷で即刻却下する必要がある」オルミイは権威コードを投射した。

「受けとったわ」と部分人格はいった。それから、本物と寸分変わらない姿をとった部分人格がかぶりをふり、「ほんとうに、オルミイ、あなたは無理難題ばかり持ちこんでくるのね」といって、接触を切った。オルミイはアクシス・ネイダーに通じるべつの回線を開き、パトリシアを居室から検疫格納庫まで連れていくようフラントに依頼し、さらに、そのあいだの通路にはだれも近寄らせないように指示した。多少の疑惑と怒りを呼ぶことになりそうだが、そうせざるをえない。「それから、居住空間がもっと必要になる」とオルミイはいった。フラントはやはり権威コードを受けとると、連絡を切った。

オルミイはつぎに、フロー保守装置と問題の飛行機に、全神経を集中した。「向こうに怪我人は出なかったろうな？」高圧的な紫色を帯びたシンボルをピクトしてたずねる。

「このステーションによる損傷は受けていません」新形態は、あわてて答えた

「この任務がどれだけ秘密性を要求されるものか、きみはわかっているか？」とオルミイ。新形態はもっとも穏やかな緑を表示して同意した。「よし。それなら、保守装置と違反者たちを、検疫格納庫に収容したまえ」

オルミイは観測ステーションからおり、部屋を出ると、アクシス・ネイダーにつづく最高速の

エレベーターに乗った。

「そちらには、何名の人員が乗っている？」声が質問した。

「四人だ」とラニアー。「ひとりは怪我をしている」

「全員、有体者の人間か？」

「みんな人間だ。そちらは？」

「きみたちはいま、違法飛行体を収容するエリアにいる。逃げようとしてはならない。ここは封鎖されている」

機械は鉤爪をはずし、V／STOLから離れていった。ラニアーたちはあたりを見まわした。そこは、広くて整然と片づいた、格納庫のような閉じた場所だった。壁はなめらかな黒と灰色だ。コックピットの風防の前には、銀色のほそいケーブルが巻かれている。V／STOLはそのケーブルで、格納庫の天井の下に吊られた、淡い銀色の円環体から吊りさげられていた。V／STOLのまわりは、三台の巨大な灰色をした作業機械がとりかこんでいて、機体を押している。作業機械は四本の精緻な関節でつながった足で移動しており、その巨体はふたつの半球にわかれていて、ほそく柔軟なフレームで連結されていた。

格納庫内には、人のいる気配がまったくなかった。壁の二ヵ所に、幅四メートルほどの楕円形の入口があいていたが、それだけでは、そこからなにが出迎えに出てくるのか、まったく予想のしようがない。

「そちらの身元を仮確認した人間と、話す気はあるか？」以前と同じく、心地よい音楽的な調子

で、声がきいた。
「だれだ、それは？　つまり、だれが身元を確認してくれたんだ？」
変わって聞こえた声は、だれのものであるか、すぐにわかった。「ギャリー？　わたし、パトリシアよ。四人乗ってるんですって？　だれとだれ？」
「パトリシアだ――とうとう見つけたぞ」とラニアーはいった。「それとも、向こうがこっちを見つけたのかな？」

「だれか追いかけてくるだろうと思ったのよ――いったとおりでしょう。あの人たちは、わたしの友だちだもの」投影されたイメージがもっとはっきり見えはしないかと、パトリシアは前に身を乗りだした。コックピットにいるラニアーの姿が見わけられた。「きっとみんな、不安でしかたないはずだわ」黒いフロー保守装置がV／STOLを放し、上部の収納庫に昇っていくのが見えた。
「彼らはシティ当局と深刻なトラブルを引き起こすところだったんですよ」とオルミイがいった。
「なんとかこの件を明るみに出すまいと工作していますが、保証はできません」
「あの人たちはわたしを捜しにきたのよ」とパトリシアはいいはった。「それでみんなが非難されるいわれはないわ」
「彼らは自転軸のフローに乗ってやってきた。これは厳禁されていることです」
「そうかもしれないけど、どうしてそれがみんなにわかるはずがあるの？」
オルミイはそれには答えず、そのかわりに、「わたしは、やってきたのがだれだか知っていま

す」といった。「あなたのボスのラニアー、科学者のキャロルスン、白人の中国人ファーリー、技師のハイネマンです」

「みんながわかるの？　あなた、わたしたち全員のあとをつけまわしていたの？」

メカニカル・ワーカーが飛行機を押しながら、検疫格納庫へ通じる入口に運んでいった。飛行機が入口を通りぬけると、背後で絞り開き式の扉が閉まり、格納庫の明かりが消えた。

パトリシアは控室から出ると、さしだされたオルミイの手をとった。彼に連れられて、パトリシアは検疫格納庫の気閘にはいった。

シュリー・ラーム・キクラもやってきた。彼女はまだパトリシアと会ったことがなかったが、パトリシアのことは知りつくしていた。ラーム・キクラは、オルミイと図話で簡単な会話を交わした。パトリシアは交わされるイメージ・シンボルと連結していなかったが――どのみち、彼女に理解できるシンボルはまだそんなにないのだ――女性の態度から、要旨は読みとれた。この女性は有体者であり、彼女の代理士なのだ。ラーム・キクラはオルミイの宣誓を受けて、それを予備審査法廷に中継した。

V／STOLのハッチが開いた。ワーカーの一体が多関節の足でV／STOLの数ヤード先にすわりこみ、センサーを最大に伸ばして、乗員たちのおりるようすを記録した。歴史だわ、とパトリシアは思った。わたしたちはみんな、ここでは歴史そのものなんだわ。

まっさきに出てきたのは、ラニアーだった。パトリシアは手をふってやりたいという衝動を抑え、かわりに爪先で立ってうなずきかけた。ラニアーもうなずきかえし、ハッチの横のステップをおりてきた。つぎに、ファーリーが出てきた。キャロルスンはハッチのなかで待っているらし

い。ラニアーがキャビンを指さし、大声でいった。「なかに怪我人がいるんだ。手当てがいる」
　オルミイと女性はふたたび相談してから、女性のほうが銀のイメージ投影首環（ピクター）にふれた。そうしながら、彼女はパトリシアにほほえみかけた。彼女のピクターが、その左肩の上にアメリカの国旗を投射した。わたしはアメリカ人の祖先を持っていて、それを誇りに思うという意味だ。
「どうすればいいの？」キャロルスンが呼びかけた。「ハイネマンはここに置いていくの？」
「あなたの友人たちに、いま医療ワーカーがやってくるといってあげてください」小声で、オルミイ。
「ハイネマンはだいじょうぶ。助けがくるわ」とパトリシア。ラニアーが近づいてこようとしたが、ワーカーにさしとめられた。
「通してあげて！」とパトリシア。「オルミイ、あの人たちがなんの害になるというの？」
「彼らは検疫を受けているんです」胸の高さあたりで、大きくV／STOLをとりまいて輝く赤い線を指さしながら、オルミイがいった。
　パトリシアはラニアーのほうを向いて、片手をあげた。「この人たちは危害を加えたりしないわ、ギャリー。なにもかも、だいじょうぶ。ただ、ちょっと待っていて」
「また会えてうれしいよ」ちょこちょこと動いているワーカーたちを横目で見ながら、ラニアーがいった。「まさかきみが見つかるとは、思ってもいなかった」
　パトリシアはのどの奥のつかえを飲みこむと、オルミイに向きなおり、「みんなといっしょにいさせて」とたのんだ。「わたしたち、助けあわなくちゃ」
　オルミイはほほえんだ。が、それはそうしてもいいという意味ではなかった。オルミイと女性

はふたたび図話をかわし、女性がもういちど首環にふれた。
「いま、決定がなされていますから」とオルミイがいった。
「みんなを犯罪者としてあつかうか、客としてあつかうかの？」
「いいえ、お客となることはまちがいないですわ」女性が完璧な英語でいった。
「もうじき、サンプルをとられることになります」とオルミイ。「それをお友だちにいってあげたほうがいいかもしれない」
「ギャリー」とパトリシアが呼びかけた。「この人たちは、わたしたちの皮膚にとても興味を持ってるの。もうすぐワーカーの一台が——そこの機械よ——あなたたちに近づいて、皮膚のサンプルを採取するわ。痛くはないのよ。それに、キャビンの排泄物タンク——それもほしがっているわ」
「医療班がきた」とオルミイがいった。あとで、この件に関係した者たちすべてと接触し、秘密厳守を誓わせなくてはならないだろう。医療班は、有体市民ふたりと、小型のワーカー一台からなっていた。彼らは検疫格納庫にはいってくると、赤い線に近づいた。その線を通過したとたん、彼らの肩にも、赤い山形の模様が現われた。彼らもまた、検疫対象となったのだ。
ラニアーとキャロルスンとファーリーが、ジャンプスーツの袖をまくり、医療ワーカーがサンプルを採取するのを許した。それがおわると、ワーカーは引きさがり、赤い線に触れた。とたんに、それは美しいライラックの輝きでつつまれた。その輝きが消えると、ワーカーは赤い線の外に出て、停止した。
医療班のふたりは——ふたりとも、通常形態だ——V／STOLのハッチからなかにはいった。

数分後、ハイネマンがふたりに両脇をかかえられて、自分で歩いて出てきた。先頭の通常形態が、オルミイにメッセージをピクトした。
「苦しんではいたが、それほどひどい怪我ではないそうです」オルミイがパトリシアに伝える。
「痛みはとりさったが、治療はしていないといっています」
「わたしと同じように、純粋体だから?」パトリシアがきいた。オルミイはうなずき、彼女をうながして、赤い線へ歩いていった。
ふたりが近づくと、赤い線は消えた。「検疫は終了しました」先頭の医療通常形態がいって、パトリシアにいくつか単純なシンボルをピクトした。パトリシアは礼をいってから、みんなのもとへ駆けより、ラニアー、キャロルスン、ファーリーの順で、ひとりひとりを長いあいだ抱きしめた。ハイネマンは、もっとやさしく抱きしめた。
「そうだいじにしてくれんでもいいよ——体調はすっかりもとどおりだ」とハイネマン。「で、ここはいったい、どこだね?」
「もうすぐ、判決が出ます」まだ肩の上にアメリカの旗をはためかせたまま、シュリー・ラーム・キクラがいった。彼女は両手を広げて、一行のもとへ近づいてきていた。
「彼女は頭に小型の通信装置をつけているの。ここの人はみんなそう」パトリシアは額をさしながら、ラニアーに説明した。「彼女はいま、法廷の判決を聞いているところなのよ」
「本件は、全予備審査法廷の記録から消去され、訴えはとりさげられました」と代理士の女性は告げた。「みなさんはこれから、アクシス・ネイダーのお客です」オルミイと意味ありげな視線を交わして、ラーム・キクラはさらにひとことつけ加えた。「大主教権威により、ね」

43

ヴェルゴルスキーは、第三空洞の図書館入口を示す、黒いパネルの前に立っていた。その彼に向かって、広場の向こうから、ベロジェルスキーとヤズィコフが警戒しながら歩いてくる。チューブの光を浴びて、ふたりの足もとにほとんど影が落ちていない。ふたりのうしろには、SST二個分隊が、ライフルをななめに持ってしたがっていた。

ミルスキーとポゴージンは、打ち捨てられたNATOの監視哨——図書館の上階にせりだした小部屋に待機し、モニターでそのようすを眺めていた。ミルスキーは集音装置のスイッチをもてあそんでいる。ポゴージンが彼を見やり、「いよいよ、賭けのはじまりですね」といった。

「わかっている」

ポゴージンは画面に向きなおった。ミルスキーは政治将校たちにアメリカ製の集音装置を向け、ボリュームをあげた。

「ここから先、兵は必要ない」とヴェルゴルスキーがいった。「すでにミルスキーとポゴージンは、拘禁するため第四空洞に送検してある」

「協力的なようですね」ポゴージンが静かにいった。

ミルスキーはうなずいた。たしかにこれは、賭けだ。この二日のうちに、ヴェルゴルスキーなしでは部下を治めていけないことを、ミルスキーは悟っていた。ミルスキーには政治に携わった

経験もないし、権謀術数にふけって長く生き延びようという意図もない。それに対して、ヴェルゴルスキーはきわめて有能な政治将校だ。もし彼と手を組めなければ、協調はいっさいありえない。そうなれば、政治将校たちを皆殺しにするしかないが、それが可能だとは思えなかった。そうするくらいなら、アメリカに身元を預けるか、都市のなかにまぎれこんで自活したほうがましだ。
「そろそろ、われわれがなにを勝ちとろうとして戦っていたのか、自分の目でたしかめ、その使い方を学ぶべきときだと思う」とヴェルゴルスキーはいった。
「ミルスキーのまねをする気はありません」とベロジェルスキー。「そんな場所には興味もない」
「同志」ヴェルゴルスキーは辛抱強くいった。「知識は力だ。きみはほかの者たちより無知なままでいたいのか？　わたしはずっと図書館にいたが、いまでもヴェルゴルスキーのままだ。いまでも党書記長のままだ」
「そうですね……」とヤズィコフがいった。「わたしは図書館など怖くはありません」
「わたしもです」と、急いでベロジェルスキー。「しかし――」
「それでは、図書館にはいって、ミルスキーがあれだけいれこんでいたものを――あれだけ時間をつぶしていたものを、見ることにする」
ミルスキーはカメラを動かし、その姿が見えなくなるまで三人を追跡した。問題はまだある。祖国の国境のなかだけで人生を送ってきた者が、急に祖国の性質を否定できるものだろうか？　そう。そういう人間には、比較の基準となるものがない。そして、いくら知識をもっていても、

比較する基準がなければ、その知識はないも同然だ。図書館の情報をもってしても、それだけは実験してたしかめるしかない。
その実験がいかに不公正なものであろうとも、ヴェルゴルスキーがどう行動するかによって、ミルスキーはこれから、祖国と祖国が体現するものを判断しようとしていた。
「彼はふたりの武器をとりあげるはずだ」とミルスキーはいった。「わたしが姿を見せたとき、ふたりに武器を持たせておくわけにはいかないからな」
「いまここで、下におりていかれるんですか?」ポゴージンがきいた。
「そうだ」
「そこまでヴェルゴルスキーを信用していらっしゃるんですか?」
「わからん。これは、賭けだ」
「あなただけの賭けじゃないんですよ。わたしたちみんなが、あなたに手を貸してきたんです——プレトネフ、科学者たち、わたし、アンネンコフスキー、そしてガラベジャンが」
ミルスキーは階段口に向かった。階段をおりていく途中、背筋がぞくぞくした。重輸送船から侵入孔にとびだしたときよりも、いまのほうがずっと恐ろしかった。奇妙なことに、子供にもどったような感じがある。それに彼は、疲れていた。あのアメリカ人、ラニアーにとりついていたのと、同じ種類の疲れだった。
ドアをあける。
図書館の床に足を踏みいれた。なかにいたのは、三人の政治将校だけだった。ヴェルゴルスキーはベロジェルスキーに拳銃をつきつけており、ヤズィコフは壁のそばに立ちつくして、仲間で

あったはずの政治将校を陰気な目でにらみつけている。床には小銃がちらばり、手のとどかないところへ蹴りとばされていた。
「こちらへきたまえ、同志将軍」とヴェルゴルスキーがいって、拳銃の狙いをつけたまま、数歩脇にさがり、腰をかがめて一挺のＡＫＶを拾いあげた。ベロジェルスキーはわけがわからず、憎悪の目をミルスキーに注いでいる。ヤズィコフは自分を抑え、無表情を保ったままだ。ミルスキーは閲覧室を横切って、彼らのもとへ歩いていった。
三人から五メートルの距離に近づいたとき、ヴェルゴルスキーがベロジェルスキーに向けていた拳銃をそらし、上にあげ、ぴたりとミルスキーに狙いをつけた。「礼はいわんぞ、同志」と彼はいった。そして、引き金を引いた。
映写機のレンズがふいに歪んだときのように、視野が歪んだ。頭の半分が、ひどく大きくなったような気がした。ミルスキーは膝をつき、前のめりになり、がくんと頭をたらして、倒れこんだ。頬がしたたかに床にぶつかった。それは、頭に起こったなにごとかよりもずっと痛かった。見えるほうの目をしばたたいた。
ヴェルゴルスキーは拳銃をおろし、ベロジェルスキーにわたすと、落ちている小銃のもとへ歩いていき、一挺のＡＫＶを拾いあげ、椅子や閲覧球に狙いをつけ、かたっぱしから乱射しはじめた。涙滴型機械が砕けちり、跳弾が跳ねまわった。広いホールのなかで、反響さえともなっていながら、その音は遠く、貧弱に響いた。
ベロジェルスキーが勝利と喜びの叫びをあげた。が、その声は、形容しがたい、とてつもなく大きな音でさえぎられた。三人の政治将校が痙攣した。ヴェルゴルスキーは武器を落とし、首を

うしろにのけぞらせた。ヤズィコフは両手で耳と口をたたきつけている。ついで、三人はくずおれた。白い噴流がホールの天井全体から噴きだしてきて、渦巻きながら濃い霧を形成した。
三人とともに、霧が自分の体を押しつつむと、ミルスキーは目を閉じ、とうとうじゃまされずに眠れることを、ありがたく受けいれた。

44

長椅子に横たわり、アフリカン・プリントの布地を手にして、無地のクリーム色の天井を見つめながら、表面上はくつろいでいる——ラニアーにわかっているのは、自分がそうしているということまでだった。あとのことはなにもわからない。
彼らの居室は、アクシス・ネイダーと呼ばれる、自転する円筒型施設の外層部に割りあてられていた。通路にそってならぶ、五つの部屋がそれだ。各室には、寝室と浴室、それにリビングルームがひとつずつある。廊下のつきあたりには、共同のダイニング・ルームと、大きな円形のラウンジがあった。アクシス・ネイダーもこれほど外層にくると、遠心力は〈ストーン〉の空洞の床よりもわずかに弱い程度だ。すべての部屋は外界と遮断され、本物の窓はなかったが、居室にもラウンジにも、幻影窓に田園ふうの風景が映しだされているため、広々とした感じがあるのはいなめない。
だれかが、快適でなじみやすい居住環境を作ろうとして、よほど努力をしてくれたのだろう。

さまざまな断片から推定したところ、どうも彼らは重要人物らしい。虜囚であるのか賓客であるのか、当面のところは判断しがたいが。

ラニアーは横を向き、手を伸ばして、長椅子のそばのコーヒーテーブルに載っている雑誌の山からスターンをとり、ぱらぱらとページをめくった。といっても、なかを読んでいるわけではない。彼の目はいまも室内をさまよい、細部を観察していた――ドレッサーの上の、赤と紫の地に金線をかけたガラス工芸の花瓶。いかにも豪華な長椅子の布地。本棚にならんでいる本。そばの黒檀のホルダーに積みあげられたメモリー・ブロック。

すりガラスのコーヒーテーブルの上に雑誌を置こうとしたとき、その雑誌の発行年月日を見ていなかったことに気がついた。二〇〇四年三月四日。一年以上前のやつだ。どこでこれを見つけたんだろう?

それに、室内のさまざまな品物も?

「はいってもいい?」パトリシアの声がした。部屋のドアが透明になって、彼女が通路に立っているのが見えた。そのようすから判断して、向こうからは見えないようだ。

「いいとも」とラニアー。「はいってくれ」

彼女はまだドアの外に立ちつくしている。「ギャリー、いるの?」

どういうことだろう。向こうにはこっちのことばが聞こえないらしい。と、ドアのそばにシンボルが現われ、ちかちかとまたたいた。意思表示の小さな驚異――アイコンと呼ばれる単純なシンボルで構成された意志の伝達手段で、図話、とパトリシアがいっていたやつだ。なにごとも起こらないので、ラニアーがドアに近づくと、性別のない、音楽的なルーム・ボイスがたずねた。

「お客さまです、ラニアーさん。パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスをお通ししますか?」
「ああ、たのむ、いれてくれ」ラニアーがいうと、ドアはふたたび不透明になり、横にスライドして開いた。
「こんにちは」とパトリシアがいった。「三十分したらミーティングですって——格納庫にいた女の人といっしょにね。オルミイは彼女がわたしたちの〝代理士〟だといっていたわ。そのまえに、いろいろあなたと話しあっておこうと思って」
「いい考えだ」とラニアー。「まあ、すわってくれ」
ラニアーはすわり心地のいい革張りの椅子にすわり、パトリシアは長椅子にすわった。パトリシアは膝の上で手をくみ、笑いをこらえているかのように唇をかんで、じっと彼を見つめた。
「いったいなにが起こったんだ?」ラニアーがきいた。
「いうまでもないでしょう? 誘拐されたのよ。たしか〈ストーン〉は、侵攻されていたのだったわね。あのときはわたし、半分おかしくなっていたの。たぶん、半分以上ね。だから、地下鉄に乗って第三空洞にいったのよ。そこでオルミイに見つけられて。彼はフラントといっしょだったわ。フラントというのは、人間じゃないのよ」
「オルミイというのは、何者だい?」
「あなたも会ったでしょう——わたしたちをここへ連れてきて、居室の手配をしてくれた人よ」
「会うには会ったが、何者かはわからない。階級は? 地位は?」
「彼はエージェントの一種なの。彼はネクサスの——つまり、ヘクサモンの中央政府のために働いているのよ。わたしがここに着いてからの何日か、ずっとわたしの教師役を務めてくれたわ。

ね、〈ストーン〉は侵攻されたの？」
「ああ——ソ連軍にね」ラニアーはあのあとのできごとを話して聞かせた。パトリシアは真剣に聞きいった。
「オルミイがわたしを連れだした理由のひとつは、そのためだったんだと思うわ」とパトリシアはいった。「彼はわたしが危ない目にあうかもしれないと思ったそうなの。どうして、とくにわたしを選んだのかはわからないけど、でも……」肩をすくめて、「まあ、いくつか理由を考えつけないわけじゃないけれどね。
　話はちがうけど、わたしはもう、検査を受けたの。あなたたちもいずれ検査されるわ。肉体面、心理面、あらゆるレベルで。それが全部、ほんの数分でおわってしまうのよ。痛くもなんともないの。ここの人たちは、わたしたちの体にすごく興味があるのよ。歴史的な興味の対象としてね」
「だろうな。ともかく、きみがさらわれたと聞いたときには、ぼくも半狂乱になったよ。第十六ステーションからジュディス・ホフマンがきてくれたから——」
「ほんと？　すごい！　ほかにだれか、いっしょにきた？」
「ああ——ぼくらの知らない連中だが」
　パトリシアの笑顔が凍りついた。
「それでホフマンは、ぼくがあそこにいてもあまり役にたたないだろうと判断したんだ。それに彼女は、きみに最後の希望をたくしているらしいし」
「わたしに？」

「ホフマンはぼくに、きみの面倒を見るようにといった。それなのに、核戦争を防ぎきれなかったばかりか、きみまで失ってしまった。ぼくはひどく失敗に弱いたちなんだ、パトリシア」ラニアーは頬と目をこすって、「失敗か。そうだな。地球全体が失われてしまったことも、失敗と呼んでいいかもしれない」

パトリシアは、自分の両手を強く膝ではさみこんで、ささやいた。「失われたわけじゃないわ」

「それで、ホフマンはぼくに、探険に出る許可をくれたというわけさ」

「みんながここにきてくれてうれしいわ――わたしの友人たち、わたしの助力者たちが」いかにもむりをしているようすで、彼女は急に明るい声を出した。

「とすると、ぼくらはほんとうに、ここの客なのかい?」

「ええ、もちろんよ。あなたたちがくることは彼らにも予想外だったけれど――でも、なにかがやってくると聞いたとたん、オルミイはすぐに、それがチューブライダーだと気づいたの。ごく最近、〈通路〉からもどってきたのはオルミイだけなので、当局はすぐ彼に相談したのよ」

「彼らは〈ストーン〉のことを知っているんだろうか――つまり、われわれがしていたことを?」

「ええ、知っていると思うわ――オルミイが報告したはずだから」

「で、彼らはわれわれをどうにかするつもりなのかい? つまり、彼らがまだ〈ストーン〉に興味を持っているとすると……」

「わからない。興味を持っている人もいるみたいだけど。混乱しているし、わたしはこの二日間、

ずっとレッスンを受けていただけだから。これはきわめて政治的な問題だ、とオルミイはいうばかりで」
「彼らはかなり進歩しているんだろう？」
「そうね、でも、わたしたちに理解できないものだらけ、というほどではないわ。たとえば、わたしたちのこの部屋——これは第三空洞のアパートとそんなに変わらないでしょう。ほら、タカハシが見せてくれた部屋と」
ラニアーはタカハシの裏切りのことはだまっていた。いま、そうする必要があるとは思えなかったからだ。
「すべての装飾は幻なの」とパトリシアはいった。「各部屋には、ピクターが——一種のプロジェクターがあるの。それがわたしたちの心に、装飾を触感させ、見せているわけ。家具は基本的な形と機能だけは備えているけれど、それ以外はすべてイメージよ。彼らは長いあいだ、何世紀も前から、このテクノロジーを利用していたの。わたしたちが電力になじんでいるのと同じ感覚でね」
ラニアーは手を伸ばして、スターンをぱらぱらめくり、ついでその下からタイムを引っぱりだした。「この雑誌や、あの花瓶も——」といって、ガラス工芸を指さし、「——どこかにおさめられていた記録が、投影されているだけだというのかい？」
「そのはずよ」
「彼らはいまも、ぼくたちを監視しているのか？」
「いいえ。そういうことは絶対にしないといっていたわ。プライバシーは、ここではとてもだい

じにされているの」
「彼らがきみを連れてきた理由が、わからなくはないといったね」
「ええ……想像の域を出ないけれど。オルミイは、わたしが第六空洞機構の調節方法を発見するかもしれない、と心配になったんじゃないかしら」
「だが、きみを危険から逃れさせたくもあったんだろう」
「トラブルからね」パトリシアは立ちあがり、室内装飾に向かってうなずきかけた。「この部屋の装飾、気にいった？」
「よくできてる」ラニアーは肩をすくめた。「居心地がいいよ」
「彼らはひとりひとりの趣味に合わせた装飾を施すのが得意なの。わたしの部屋も居心地がいいわ。もっとも、うちの家とは似ても似つかないけれど。わたし……」明るさのなかにひそむ影が一瞬表に浮かびあがり、彼女の目に、思いきったような光が浮かんだ。「わたし、なにもかも肯定的に受けいれているわけじゃない。わたしの一部は、ひどく混乱してるわ」
「それは……わかるよ」とラニアー。
「彼らは手を貸してくれるわ」とパトリシアはいった。「彼らは手を貸してくれるはずよ、わたしが家を見つけるために。彼らにはできるのよ。まだ知らないけれど。でも、そうしてくれるはずだわ。ここにきてからの何日かで、そこまではわかったの。〈通路〉はひどくねじくれているのよ」パトリシアは自分の指をからみあわせ、引っぱった。「それじゃ、みんなのところへいきましょう」

オルミイは、そばにシュリー・ラーム・キクラをしたがえて、円形のラウンジのまんなかに立っていた。みんながそろうと、彼は五人のひとりひとりを、丁重にシュリー・ラーム・キクラに紹介し、彼らが〈冠毛〉ではたしていた役割をくわしく語った。オルミイがあまりよく知っているので、ラニアーは心中、舌をまいた。まるで、全員について一件書類でも作ってあるかのようだった。

「そしてこちらはセル・シュリー・ラーム・キクラ、あなたがたの代理士です。チューブライダーによるあなたがたの来訪は、違法きわまりないものでしたので、すでに彼女はあなたがたのためにひと働きしています。情状を酌量して、審理をとりさげるよう手配したのです」

「〝大主教権限によって〟ね」とシュリー・ラーム・キクラはつけ加えた。「わたし程度の代理士が、自力でできるようなことではありませんから」

「彼女は自分を過小評価しているんですよ」とオルミイ。

「ところで、おたがいの名前もわかったことだし、そろそろ腹を割った話しあいをはじめてもいいんじゃないかしら」とラーム・キクラがいった。オルミイは椅子にすわり、腕組みをして、あとをラーム・キクラにまかせた。「最初に申しあげておきましょう。アクシス・シティおよび〈道〉ぞいの社会においては、ほとんどの市民および属民は図話を用いて意志を疎通しあいます」

彼女は首環に手をふれ、ハイネマンを見た。閃光がつぎつぎに彼の目の前に閃いた。

「わたしは個人用図話投影器(ピクタ)を装着しています。二、三日うちに、みなさんにもピクターが支給されるはずです。どうしても図話を憶えなければならない、ということはありませんが、ずいぶ

ん役にたちますよ。二、三日もあれは充分憶えられますしね。ミス・ヴァスケスは、もう図話の初歩的な知識を身につけています」
「まだまだよ」とパトリシア。
「わたしはアメリカ英語を話しますし、何年も前からそうしてきました。祖先を誇りに思っているからです。わたしの祖先は北アメリカ人、よりくわしくはアメリカ合衆国人、さらにくわしくいえば、カリフォルニア人でした。
はじめてお会いしたとき、わたしの肩にUSAの国旗が投影されていたこと、お気づきでしたか？　アメリカ好きはよくそうするんです。あれはわたしたちのプライドを象徴するものなんですよ。〈大破滅〉ののち、しばらく、ソ連やアメリカの遺産を継承するのは恥かしいことだと考えられた時期がありました。あえてそうした者は、迫害を受けたほどです。アメリカ人はソ連人よりもっと迫害されました。南アメリカ人とメキシコ人が、北アメリカの大部分の地域に移住したとき、合衆国市民を名乗る人々は拘留さえされました。当時のネイダー教徒たちは、統合世界政府を樹立しようとしているところだったので、かつての超大国には、憤りしか向けられなかったのです」
「その流れが、変わったのかね？」ハイネマンがきいた。
ラーム・キクラはうなずいた。「わたしたちの文化のほとんどと、わたしたちの法律および政府の基盤になったのは、合衆国です。わたしたちは、みなさんがローマやギリシアに持つのと同じ想いを、アメリカに抱いているのです。アメリカ人に祖先を持つ市民は、そのことを非常に誇りに思っていますから、もしみなさんの存在が公に知れたなら——」

秘密あつかいされているらしいことが気になって、ラニアーはぐっと手を握りしめた。
「——わたしはみなさんのマネージャーを務めなければならなくなるでしょう」ラーム・キクラの笑顔には、ユーモアと誠実さが読みとれた。ラニアーは手の緊張を、少し解いた。
ファーリーがかぶりをふって、きいた。「わたしは中国人よ。除外されるの？」
ラーム・キクラはにっこりと笑って、「とんでもない。ヘクサモンの人口の少なくとも三分の一は、中国人の子孫です。アメリカ人の子孫より、ずっとたくさんいますよ。
つぎに、みなさんの立場についてですが——当面のところ、みなさんの存在はヘクサモンの機密事項としてあつかわれます。状況が変わるまで、今後ヘクサモンの市民と接触することはありません。とはいっても、ヘクサモンのゲストに与えられる権利はすべて認められます。たとえ大統領といえども、みなさんからその権利をとりあげることはできません。そのひとつは、みなさんの利益を守り、みなさんにアドバイスを与える、代理士を得ることです。みなさんのなかで、わたしが代理士を務めることに異議のある方は、ただちにそうおっしゃってください。べつの者が割りあてられてきますから」ラーム・キクラはひとりひとりの顔を見わたした。異議はなかった。彼女もあると思っていなかった。
「みなさんのここでの位置づけは、潜在的属民の純粋体です。つまり、ヘクサモンにサービスを提供できる可能性があり、その見返りに便宜をはかってもらえる可能性もあるが——みなさんには、報酬といったほうがいいかもしれませんね——しばらくのあいだはなにも要求されない、という状態です。純粋体として、みなさんは研究され——いやなら断わることもできます——その研究を通じて得られた知識は、みなさんのために、ヘクサモンの特定の情報バンクに投資される。

ただしその情報は、みなさんが異議を申したてようと、ネクサスやヘクサモンの他の管区でも利用されることになりますが」
「いくつか質問があるんだが」とラニアーがいった。
「どうぞ、おっしゃってください」
「ヘクサモンというのはなんだい？……それに、ネクサスというのは？」
「ヘクサモンは人間市民の総称です。国家と呼んでもいいでしょう。ネクサスはこのシティおよび、〈冠毛〉からポイント2×9以遠、つまり、〈道〉の二十億キロメートル地点以遠の禁断の領域までにおける、〈道〉の主要立法組織です」
「あなたたちはみんな、ストーン人の――〈冠毛〉に住んでいた人々の子孫なの？」キャロルスンがきいた。
「そうです」とラーム・キクラ。
「それで、ここには」と今度はハイネマンが、「どれくらいの人間が住んでいるんだね？　このアクシス・シティはどのくらい大きいんだ？」
ラーム・キクラはほほえみを浮かべ、無地の壁に指示をピクトした。データピラーがどこにも見あたらないところからすると、その機能は、めだたないルーム・ピクターに集約されているのだろう。
ラーム・キクラのとなりに、ひどく実在感のあるアクシス・シティのイメージが、ゆっくりと自転しながら現われた。ハイネマンがすわったまま身を乗りだし、よく見ようと目をすがめた。
「アクシス・シティと〈道〉には、一億の人間が住んでいます。そのうち、シティ外の〈道〉に

ア クシス・シティには九千万人が住んでいます。このうち、シティ・メモリーの記録として存在している者が七千万。そのほとんどは、法で認められた二回の人生を生きぬき、いまは肉体を離れて、シティ・メモリーの環境内に、人格パターンとして存在しているだけです。特別の事情があれば、彼らが新しい肉体を与えられることもありますが、たいていはメモリーのなかだけで満足していたりで、可能なかぎりの治療を施しても救いようのない人格ですが——それらは不活性のまま保存されています」

「人は、死なないの?」とキャロルスンがきいた。

「ここでの死とは、肉体的存在が失われることを指すもので、精神的存在はなくなりません。ひとことでいうなら、死はない、あるいは、あってもごくまれだ、ということです。そのために、わたしたちは全員、補助脳を移植しています」ラーム・キクラは耳のうしろの一点にふれ、そこから指先を鼻梁の上の一点に移動させた。「補助脳はわたしたちの思考を助け、万一事故にあった場合、わたしたちの最新の経験と人格のほとんどを保持していてくれます。補助脳はまず壊れることはありませんから——事故があった場合、わたしたちはまず、犠牲者からそれをとりだします。数日おきに、わたしたちはこの補助脳からシティ・メモリーの予備記録を更新します。そうしておけば、人格は即座に再生できますからね。わたしたちがすることは、犠牲者の最後の更新記録をとりだして、新しい肉体に割りつけるだけです。再生された肉体的存在は、オリジナルと寸分変わりません」

住んでいる者は、一千万。主に貿易商と、五百七十一ある使用可能な井戸の調整員たちです。

さらに質問が出れば受けつけようと、ラーム・キクラは室内を見まわした。だれも質問しない。いま話したことの意味が、まだあまり心に浸透していないのだろう。
「オルミイを例にあげてお話しましょうか？」とラーム・キクラはいった。「オルミイさえよければ……」
オルミイがうなずく。
「その年齢と経歴によって、彼は貴重な存在となっています。彼のオリジナルな肉体は、五世紀前に生まれました。最初の死は、事故によるものでした。が、肉体が完全に破損したわけではなかったので、再生することができました。オルミイはヘクサモンにとって重要な人物であり、また危険な仕事に従事していることもあって、通常は一回のところを、二回再生させられています。いまの体は、特殊作業用に手を加えられたものです。これはポピュラーなタイプで、完全な自給機能を備えています。代謝系も閉じています。腹部には小型の動力源があって、老廃物はすべて内部で再生処理されます。動力源の交換と、保管物質の補給は、年に一回だけでかまいません。水は三カ月に一回飲むだけで充分です」
「あなたは、人間なの？」オルミイに向かって、キャロルスンがきいた。
「人間ですよ」とオルミイ。「たぶん、わたしの性別に興味があるのでしょう？」
「わたしは……そうね、正直いうと」キャロルスンが認めた。ハイネマンが片目をほそめ、もうかたほうの眉毛をつりあげて見せた。
「生まれたときは、完全な男性でした。生殖器官はちゃんと機能します」
「たしかにね」とラーム・キクラ。「でも、持って生まれた性別というのは、自然に生まれた者

でさえ、ずっと変えないでいる必要はないんですよ」
「それは、生まれたとき男でも、ずっと男である必要はないということ？」ファーリーがたずねた。
「あるいは、女性でもね。それどころか、男女である必要さえありません。このごろの新形態の多くは、特定の性を持っていませんから」
「自然に生まれた者、といったが」とハイネマン。「とすると、試験官ベビーのたぐいがいるということかね？」
「これはショックが大きいかもしれませんが――といっても、しかたがないことなのですが――今日、ほとんどの人間は、男女の結びつきで生まれることはないのです。新しい人格は、ひとり以上の親が、シティ・メモリーに記録されている部分人格と、わたしたちが〝神秘性〟と呼ぶ、少なくともひとりの人間――通常、これは親であることが多いのですが――その人間の人格とミックスして創りだします。この若い人格は、シティ・メモリーで教育を受け、ためされたうえ、特定のテストに合格すれば、〝成人〟したものと見なされて、最初の誕生を迎えます。このとき、たいていは青年の姿をとります。その人格が住む肉体的形状をデザインするのは、親、もしくは母体人格を提供した個人です。やがて、こうして生まれた有体市民が二回の人生を使いつくしてしまうと、シティ・メモリーに引退するわけです」
キャロルスンがなにかをいいかけ、途中で考えなおしたが、結局、疑問を口にした。「その肉体のない人々というのは――コンピューターに記録されている人々というのは――人間なの？生きているの？」

「彼らはそう思っています」とラーム・キクラがいった。「彼らには特別の権利があり、また特定の義務もあります。ただし、必然的に、政府における発言権は、有体市民のそれよりも小さくなりますけれど。どうもこの話題は、急を要するものではないようですね……」彼女は自転するシティのイメージを指さして、
「みなさんが滞在されているのは、ここです。当分のあいだ、〈冠毛〉にもどることはできません。このアクシス・シティにいていただくのは、構造、文化、住人といった環境面で、みなさんになじみやすいからです。しばらくは会えませんが、このシティに住んでいるのは、おおむねネイダー正教徒なのです。
　ミス・ヴァスケスがセル・オルミイに語ったところでは、みなさんのなかには、わたしたちの歴史の基礎を知っている方がいるそうですね。とすれば、ネイダー正教徒ができるだけ地球の環境に近い住環境を好むことは理解していただけるでしょう。この管区には、自然美を生かした場所がたくさんあり――公道では、なるべく幻影を少なくしてあります。自転管区はほかにふたつあって――アクシス・ソローと、アクシス・ユークリッドです――中央シティの向こうにあります。アクシス・ソローにもネイダー教徒が住んでいますが、あちらはもっとリベラルです」
「また質問なんだが」とラニアーがいった。「われわれは、いつ〈冠毛〉へもどれるんだろう？」
「わかりません。それはわたしたちに決定できることではありませんので」
「仲間にメッセージを送れるだろうか？」
「だめです」とオルミイがいった。「法律的には、あなたのお仲間は違法な存在なのです」

「しかしこれは、少々異例の事態じゃないだろうか？」ラニアーがくいさがった。「〈冠毛〉が地球のそばにもどってきた以上……」

オルミイははっきり、困ったような顔をした。「たしかに、異例の事態です。そして、きわめて複雑な事態でもある」

パトリシアがラニアーの手にふれ、そっとかぶりをふった。いまはそこまでにしておいて、というように。

「食事を召しあがったら、お部屋の施設の使い方をお教えします。そのあとは、お休みいただいてけっこうです。明朝、モーニング・コールがはいりましたら、またここにお集まりください」

廊下に出ると、パトリシアがラニアーのそばを歩きながら、声をひそめていった。「わたしたちは将棋の駒なの。わたしたちは、警報を鳴らしてしまったのよ」そして、指を唇にあてると、部屋にもどっていった。

45

呉と張は腕をとりあって、地下鉄の駅から図書館前の広場へと歩いていた。ほとんど口はきかないが、ふたりでいることが、明らかに楽しいようだ。何時間か前、ふたりは決めた。いっしょに図書館へいき、計画している者は数多くいるけれど、じっさいには時間がなくてできない、知識の巡礼に出ようと。個人で、あるいはグループで、いままでに図書館を訪れたＮＡＴＯおよび

同盟軍の兵士、それに科学者チームのメンバーは、まだ全部で二十名くらいのものだろう。彼らはみな、畏怖にうたれたようすでもどってくると、図書館がどれだけの価値を秘めたものかを報告した。それで呉は刺激を受け、華凌に許可を願い出たところ、研究範囲が縮小されていたこともあって、中国チームのリーダーは快く許してくれたのだった。

ほどなくふたりは、図書館前の広場に着いた。が、どうもようすがおかしい。ソ連軍の兵士たちが、なんだかうろたえたようすで図書館の外をうろついている。呉と張が広場を横切っていくと、ソ連兵たちはこちらに気づき、いっせいに敷石に身を投げ、小銃をかまえた。呉は本能的に両手をあげた。張が一歩あとずさり、走りだしかけた。

「だめだ、走っちゃ」呉がささやきかける。

「なにをしてるのかしら、ソ連兵？」

「わからない。ともかく、急な動きはしないほうがいい」

張は呉にすりより、同じように高々と手をあげながら、これでいいのかというまなざしを呉に送った。呉はうなずいた。

それから何分間か、ひや汗もので手をあげつづけていると、何人かのソ連兵がたがいににじりより、相談をはじめた。やがて号令がかかり、ふたりのソ連兵が立ちあがって、銃をななめにかまえた。

「もう動いてもいいのかしら？」と張。

「だめだ。まだあぶない」

ふたりのソ連兵が、広場を横切って近づいてきた。数メートルの距離までくると、ふたりは立

ちどまった。「ロシア語がしゃべれるか?」かたほうがロシア語で問いかけた。
「しゃべれるわ」張がロシア語で答えた。「英語のほうがましだけど」
「英語、わたし、ひどい」ソ連兵が、その証拠を見せるつもりか、英語でいった。「きみたちは中国人か?」
「ええ。散歩をしていたところよ」張はロシア語で答えた。
「自分はロドジェンスキー伍長、こっちはフレモフ伍長。じつは、図書館で異常事態が起こったんだ。なにがあったのかは調べようがない。だれもはいってきてはならないと厳命されているからだ。それに、図書館の入口が閉じてしまって、開こうとしない」
「どんな異常事態だか、見当はつく?」できるだけ興味深げに、丁重に見えるように努めながら、張はたずねた。
「いや。銃声が聞こえたと思ったら、あの黒い……壁がしまって、あかなくなったんだ」
「なぜ銃声が?」
「わからない」不安そうな目をフレモフに向けて、ロドジェンスキー。「第四空洞の上官たちとは連絡をとったが、まだやってこない」
「できるだけの手助けはするわ」と張。「それとも、いないほうがいいのなら、帰るけど」
「いや……たぶん、ソ連軍人でないきみたちなら、ドアに近づいてあけようとしてもかまわないだろう。ばかげた話だが、しかし……」ロドジェンスキーは肩をすくめ、そこではっと、ふたりの中国人にまだ仲間たちの銃が向けられていることに気がついた。「武器は持っているか?」肩ごしに、伏せている狙撃兵たちを見やりながら、たずねる。

「いいえ。わたしたちは科学者だから」

ロドジェンスキーは仲間たちに、銃をおろすよう呼びかけた。「われわれはまだ、この場所に慣れていない。だから、どうも落ちつかなくて。とくに、いまはそうだ。われわれの将校たちは、この建物のなかにいる——脱走兵を捜しにはいっていったんだ」そこで、部外者によけいなおしゃべりをしてしまったことに気づいたのだろう、顔をしかめて、「おねがいだ、われわれといっしょにきて、ドアがあくかどうかたしかめてくれ」

張は、いま聞かされたことをざっと呉に話した。図書館の入口まで案内されていくあいだ、呉はずっと興味津々という表情を浮かべていた。ソ連兵たちが途方に暮れたようすでまわりに群がってくる。呉は黒い壁に近より、両手をかかげ、そのなめらかな表面に手のひらを押しあてた。聞いていた話とちがって、入口は開かなかった。呉はあとずさると、手をおろして、いった。

「悪いがね。どうやら——」

そのとき、だしぬけに、壁がたてつづけに低い振動音を発し、もういちどそれをくりかえしたと思うと、声がしゃべりだした。「当建物内において、警察の介入を要する事件発生」その声はロシア語をしゃべっていた。「許可なき者の立ち入りを禁ず。至急、医療および警察当局に通報されたい。許可なき者の立ち入りを禁ず」声はそれから、同じメッセージを英語と中国語でくりかえした。

ソ連兵たちはあとずさり、AKVをさげ、拳銃をだらりとたらした。

「なにかがここで起こったんだわ」張が冷静にロドジェンスキーにいった。「たぶん、わたしたちもこちらの上司に連絡するべきだと思う。そうしたら、まずい？」説得力のある、冷静な表情

を作り、彼女は細いアーモンド型の目でロシア人を見あげた。呉は心の底で拍手を送った。彼女がこの種の危険に対処するところは、彼もはじめて見たのだ。
ロドジェンスキー伍長はちょっと考えてから、頑固にかぶりをふったが、ついで緊張していからせていた肩をがっくり落とし、考えなおしたようすでいった。「ドアが開かなければ、われわれはどうすればいい？」
「開かなかったのは見たでしょう」
「われわれの指導者たちは、このなかにいるんだ――ひとり残らず」
張はじっと相手を見つめつづけた。
「わかった――いいだろう」とうとう、ロドジェンスキーが折れた。「いって、そちらの上司たちを連れてきてくれ」
「ありがとう」張はいうと、呉の腕をとって、広場をもどりだした。
「へんね」当惑顔で首を横にふりながら、張。「こんなおかしな話ってないわ」
「立派だったよ、とても」尊敬のまなざしを向けて、呉がいった。
「ありがとう」張はうれしそうにほほえんだ。

46

パラシュートを埋めおわり、ミルスキー少佐はいま、道路のそばで、かぐわしいにおいをはな

つ丈高い黄色の枯れ草のなかに横たわっていた。両手を目の上にあてがい、トラックか車が通りかかるのを待つ。ヒッチハイクしてポドリップキにもどるのだ。それとも、83という番号だけで呼ばれる、モンゴリアの基地だったか？

そんなことはどうでもいい。陽光は暖かく、ちょっと頭痛がすることを除けば、とてもいい気分だ。かなり大きくコースをはずれて降下したから、基地に着くまでには何時間もかかるかもしれない。夕飯はぬきだな。もっとも、日課の政治的指導も受けずにすむが。二、三時間でもいい、ひとりで考えられる時間が手にはいるなら、要塞とだって喜んで交換しよう。

やがてとうとう、ほこりまみれの、車体の長い黒のヴォルガが通りかかり、彼のそばで停車した。後部の窓がするすると開き、灰色のソフト帽をかぶったいかつい感じの男が、しかめ面をつきだした。

「こんなところで、なにをしてるんです？」と男はきいた。男はソスニツキー少将にそっくりだったが、悲惨な死をとげたジャドフにも少し似ていた。侵入孔の殺戮で戦死したジャドフ――あれはどこの、いつのことだったか。「おかあさんの名前は？」

「ナージャだ」とミルスキー。「ちょっと乗せて――」

「十一歳の誕生日には、どんなケーキを食べました？」

「同志、わたしは――」

「これはとても大事なことなんです。どんなケーキでした？」

「チョコレートのかかったやつだったと思う」

ソフト帽の男はうなずくと、ドアをあけた。「お乗りなさい」ミルスキーは身をよじって、男

のとなりにすべりこんだ。シートは血でぐっしょりと濡れていた。男と同乗しているのは三つの死体で、どれも同じ顔をしており、頭からは血と脳漿がこぼれだしていた。「この人たちを知っていますか?」
「いや、知らない」笑いながら、ミルスキー。「紹介されたことはない」
「これはみんな、あなたですよ。同志」と男はいった。とたんに、夢は灰色の虚無のなかに消えていった。ふたたび、彼はパラシュートを埋め……。
そのうちに、妙だぞと思いだした。とうとう、七回か八回同じことをくりかえしたあとで――今回は、車のなかに死体のないところがちがっていた――ソフト帽の男が共産青年同盟のことをきいたとき、ミルスキーは自分からも質問をしてやろうと決めた。
「これが夢でないことはわかっている、同志。すると、わたしはどこにいるんだ?」
「あなたは重傷を負っていました」
「それは思いだせない――」
「そうでしょう。あなたは頭部を撃ちぬかれ、ひどい外傷を受けたのです。脳の一部は、失われました。この先、あなたはこれまでの一生を細部まで思いだすことはできないでしょうし、かつてのあなたとまったく同じ人間になることもないでしょう」
「だが、完全な感じはあるぞ」
「そうです」とソフト帽の男はうなずいた。「それがふつうなのです。ただし、それは幻想にすぎません。わたしたちは協力して、あなたの記憶がどれだけ残っているかさぐってきました。じっさい、かなりの記憶が残っていましたよ――損傷の程度を考えると、驚くほどです。それでも、

あなたはけっして――」
「わかった、わかった」ミルスキーはさえぎった。「するとわたしは、死ぬのか？」
「いえ、危機は脱しました。あなたの頭部と頭脳は修復ずみで、死ぬようなことはありません。ただし、決断してもらわなければならないことがあります」
「どんなことだ？」
「失われた部分を失われたままにしておくか、それともその部分に精神的補綴プログラミングを施して、残った部分にフィットするよう、人為的部分人格を補塡するか。どちらを選ぶかの決断です」
「なんだかよくわからんな」
男は手さげ鞄から写真集を一冊とりだした。なかは、複雑で美しいデザインでいっぱいだった。けばけばしい色のものもあれば、地味なものやメタリックなものもあり、また味覚その他の感覚を刺激するものもあった。ミルスキーはその本を受けとって、なかを読んだ。読みおわると、たずねた。「どれが自分のでどれがそうでないか、わかるようになるのか？」
「お望みでしたら」
「そして、その……補綴とやらをしなかったら？　わたしはどうなる？」
「不具者になります」と男は説明した。「記憶は残りますが、はっきり思いだせないことや、まったく思いだせないことが出てきます。どうやってものを見るのか、それを思いだすだけで何週間もかかるでしょうし、けっしてよく見えるようにはならないでしょう。嗅覚と左半身での触覚もとりもどせません。数学的推理能力はなくならないでしょうが、言語能力は損なわれ、回復し

ないでしょう」

ミルスキーは男の顔を見つめた。見つめているうちに、その顔が車の窓外の空に融けこんでいくような気がしてきた。「あまり愉快な状態ではなさそうだな」

「選ぶのは、あなたです」

「きみは図書館の記録イメージなんだろう？」

「こういう形で存在しているわけではありません。わたしは、現状のあなたに認識できるよう形成された、都市機能のひとつです。人間の医療施設が手近にないので、都市みずからがあなたの修復にあたったのです」

「わかった」とミルスキー。「いまのところは、もういい。わたしがほしいのは、闇だけだ」

「あなたが答えさえすれば、闇は自然に訪れます」

「つまり、わたしは死にたいということさ」

「それは選択肢のなかにありません」

「わかった、それでは、イエスだ」ミルスキーは速断した。あらゆる可能性を、あらゆる恐怖を考えないでもすむように。

「補綴プログラミングを承諾なさいますね？」

「する」

男は車をとめるように命じ、ほほえんだ。「もうおりてけっこうです」

「ありがとう」

「どういたしまして」

ミルスキーはヴォルガをおり、ドアを閉めた。「ああ、もうひとつだけありました」窓から顔を出して、男がいった。「あなたは、ベロジェルスキー、ヴェルゴルスキー、ヤズィコフのだれかに――とりわけヴェルゴルスキーに、少しでも危害を加える意図がありましたか？」
「なかった」とミルスキーは答えた。「やつらは目ざわりだったし、あの三人がいなければ――たぶん、ヴェルゴルスキーはべつだが――もっとうまくやれただろう。だが、わたしには、彼らに危害を加える意図はなかった」
「ありがとうございました」男はいって、窓を閉めた。
「どういたしましてさ、こちらこそ」ミルスキーは道路に背を向けた。あたりは夜になっていた。彼は草の上に寝ころがると、暗黒を見あげた。

47

「暗いほうがいいな」ラニアーがそういったとたん、部屋は暗くなった。彼は幻影の長椅子の上で半身を起こし、心のなかで、ミーティングのあとにパトリシアがいったことを反芻していたところだった。警報を鳴らしてしまった、か。あれは、われわれが〈ストーン〉に着いたときから、アクシス・シティはそのことを知っていたという意味なのか？　オルミイは外部からのエネルギー補給なしに活動できるといっていたが、いったいどれくらいのあいだわれわれを観察していたのだろう？

考えているうちに、下腹部に名状しがたい緊張が高まってきた。心はセックスのことなどまったく興味がないのに、体が勝手に反応しているのだ。
そのとき、ルーム・ボイスが報告した。「カレン・ファーリーがドアの前にきて、はいってもいいかといっています」
「なんの用で？」あまりのタイミングのよさに、腹がたった。「待てよ——彼女はひとりか？」
「はい」
「それじゃあ……いれてくれ」ラニアーは立ちあがり、V／STOLで着ていたジャンプスーツを——いまはクリーニングされ、プレスされている——身につけた。シングルのベッドルームの楕円形のベッドには、ローブが載せられていたが、それには手をつけていない。
が、カレンはそのローブを着てきていた。ドアが開くと、廊下からの光が室内にさしこみ、その光を背にして、ファーリーがはいってきた。ベッドの上のとそっくり同じローブをまとっているが、色はミッドナイト・ブルーではなく、金色がかったベージュだ。「突然やってきて、ごめんなさい」追いだされまいとするように、両手をつきだし、微笑を浮かべながら、ファーリーがいった。
「なんの用だい？」
「それ、適切なせりふ？」
「ではないな。しかし、ぼくがなにをしてやれる？」
「わたし、パトリシアと話をしてきたの」とファーリーはいった。「というより、パトリシアがわたしのところへきたのよ。で、いくつかあなたも知りたがるようなことを聞いたものだから」

ラニアーは長椅子の向かいのソファを指さした。「ミーティングの前に、ぼくもパトリシアと話をしたが、事情がわかるどころか、かえって混乱が増しただけだった」
「今夜、ハイネマンとキャロルスンはいっしょに寝てるわ」すわりながら、ファーリーがいった。「パトリシアがいったんじゃないのよ。ラノアがいったの。それに、〈ストーン〉を離れる前、呉と張がふたりしてこっそりどこかにいくところも見かけたわ」そこでほほえみを浮かべたが、にこやかなようでいて、その笑みはどこかこわばっており、当惑といらだちがほの見えた。
　ラニアーは両肩をほぐすようにあげてから、そっと手を組みあわせ、もみあわせた。「それが自然な姿だ」
「そうね。でもわたし、あなたの仮面がはずれていたとき、あなたを捕まえたでしょう？　つまり――」
「きみがしてくれたことはありがたいと思っている」
「なんといっていいかわからないわ」もの珍しそうに、彼女は室内を見まわした。「あのときまで、あなたがほそいと思ったことはいちどもないし――」
「〝ほしい〟だよ」にやりと笑って、ラニアー。
「それそれ。そうよ、ほしい、だわ。ともかく、ほしいと思ったことはなかったの。でも、あなたはひどく動揺していたでしょう。わたしもそれは同じだったわ。正直にいえば、あなたはいまでもボスという見方しかできないけれど」
「それはどうでもいい」とラニアーはいった。「問題は、パトリシアが――」
「どうでもよくはないわ」ファーリーはきっぱりといった。「わたしはあなたを楽しんだ。あな

ただってわたしを楽しんだと思う。それは健全なことでもあるしね。わたしはただ、あのときわたしもそれを承知していて、あなたのことを怒ってやしない、ということを知っておいてほしかっただけなの」

ラニアーはしばらく黙ったまま、一見アメリカインディアンを思わせる、黒い瞳で彼女を見つめた。「中国語が話せるようになっておけばよかったな。そうすれば、おたがい、本当に理解しあえるのに。いまからでも……」

「それはそのほうがいいでしょうけれど、いますぐは必要ないわ」ファーリーはにこりと笑って、「わたしが教えてあげられるもの」

「パトリシアはなんといっていたんだ?」

「彼女はわたしたちが、だれかに——オルミイかほかのだれかに——なんらかの目的で利用されていると考えているわ。パトリシアはオルミイからいろいろなことを聞いたそうだし、フラントとも話をしたそうよ。アクシス・シティにはさまざまな政治的思惑が渦巻いていて、わたしたちにはそれぞれがどんなものかを知る機会はないらしいわ。いまはまだね。それに、彼女の部屋のデータ・サービスは、第三空洞の都市のデータ・サービスより、アクセスできる範囲がせまいともいっているわ。たぶん、検閲されてるんじゃないかって」

「そいつはあまり、うまくないな」考えこんで、ラニアー。「いや、うまくないかもしれない、というべきか。そこには、悪意はないかもしれない。ここの連中は、われわれをそっとあつかって、徐々に慣らしていくつもりなのかもしれない」

「わたしもそういったんだけど、パトリシアはただほほえむだけなのよ。なんだかへんな感じだ

ったわ。それから、わたしたちみんな、故郷へもどる方法があるともいっていたっけ。その話をしていたときは、目がクラクラ輝いていたっけ」

ラニアーはあえて、まちがいをたださなかった。「その話はぼくも聞いた。なにか打開策を考えついたのかな？」

「ダカイサク……？　ああ、そうよ。そうみたい。パトリシアがいうには、毎年毎年、〈通路〉は一千キロずつ伸びているんですって。それは、彼女がこれまで考えついた、もっとも美しい曲線だそうよ。パトリシアが誘拐されたのは──ともかく、パトリシアはそう思いこんでるわ──パトリシアが誘拐されたのはね、わたしたちが第六空洞に干渉するかもしれないことを、アクシス・シティの人々が恐れたからだというの。あの人たちを憶えてる？　第三空洞大脱出のあと、何年かして第二空洞から強制的に立ち退かされた、あのネイダー教徒たちのこと？」

ラニアーはうなずいた。

「パトリシアは、彼らが有無をいわせず移住させられたと思っているんですって。アクシス・シティの政府が、〈ストーン〉をからっぽにしたかったからだそうよ。だからこそ、わたしたちは宙ぶらりんの状態でここに足どめされているらしいわ。ネイダー教徒とゲッシェルのあいだには、いまも確執があるんだろうって」

「なにを話すにしても、各部屋が盗聴されているかもしれないとは、だれも思いつかなかったのか？　それに、ここでこんな話をするべきじゃないかもしれないぞ？」

「じゃあ、どこでなら話せるの？」ファーリーが切りかえした。「どこにいこうと、彼らは自由自在にあとを追ってきて、盗聴できるかもしれないでしょう？　心だって読めるかもしれない。

ここでは、わたしたちは子供——ひどく貧弱な教育しか受けていない子供でしかないのよ」

ラニアーは自分とファーリーのあいだにある、乳色の透明なテーブルを見おろした。「それで筋が通る。この部屋の装飾は、ぼくの趣味にぴったりだ」

「わたしの部屋もよ」

「すると彼らは——この部屋は——どうやってみんなの好みを知ったんだ?」

ファーリーの顔に、疑惑の影がさした。「そうなの。じつは、ルーム・ボイスにそのことをきいてみたのよ。そうしたら〝部屋はみなさんの趣味にあうように作られています〟という返事が返ってきたの」

ラニアーは長椅子にすわったまま、身を乗りだした。「そもそも、この都市全体が想像を絶している。とても信じられない。われわれは夢を見ているんだろうか、カレン?」

彼女はきっぱりとかぶりをふった。

「なるほど、それじゃあ——地球へもどる方法を見つけたという話、あれについて、パトリシアは夢を見ていると思うかい?」

「パトリシアはいまの地球にもどりたいんじゃないわ。どういう意味かはともかく、みんなを〝故郷〟に連れていけるといったもの。それも、本気でね。あとで説明するっていってたけど」

「きみは物理学者だ。パトリシアのいうことが可能と思うかい?」

「わたしもここでは、子供のひとりにすぎないわ、ギャリー。わたしには、わからない」

「ほかにパトリシアは、なんといっていた?」

「それなんだけど。その……」ファーリーは立ちあがって、「わたし、もう帰るわ。でも、わた

し……もう!」ファーリーは両手で自分の体をぎゅっと抱きしめて、ラニアーを見つめた。「わたしは、パトリシアの話をしにきたんじゃないわ。わたしがあなたの弱味につけこんだんじゃないって、わかってもらおうと思ってきたのよ」
「わかってる」
「たしかにあれは、あなたのいうように、健全な行為だったでしょう。でもわたし、ずっと気になっていたの」
健全だといったのは、ラニアーではない。彼女だ。だが、そんなことはもう、どうでもよかった。
「いかないでくれ」とラニアー。
「いいわ」
ラニアーは立ちあがって、またしても顔を赤らめながらいった。「じつは……きみがきて、こうして話していると……ティーンエイジャーみたいな気分になってくるんだ」
「ごめんなさい」うつむいて、ファーリー。
「いや、いいのさ、それで。いままでぼくはずっと、若さをすっかり失ってしまった、老人のように感じていたんだ。今夜、きみがいっしょにいてくれるなら、きっと楽しいだろう」
ファーリーはにっこりと笑ったが、急に眉をひそめて、「わたしも楽しいわ、だからいさせてもらうけれど――心配なのは、パトリシアのこと」
「パトリシアが?」
「五人のなかで、いまひとりで寝ているのは、パトリシアだけだもの」

48

徐々に徐々に、パトリシアは五次元を貫く曲線をたどり、それが悪夢の階段のように、ある部分は陰に、ある部分は主曲線に付随する負の曲線となって、どこまでも広がっていくところを見つめていた。目は痛いほど強く閉じられており、その顔には恍惚とも苦悶ともつかない表情が浮かんでいる。いままでパトリシアは、これほど密度の濃い思考をしたことがない。これほど深く計算に没頭したことがない。それはぞっとするような経験だった。目を開き、ほのかな光を受けて天井のブルーが見え、寝返りをうち、片手をベッドの向こうの虚空に伸ばしたときでさえ——そのときでさえ、彼女の指は、空中に投影された生きている蛇のような、曲線の一部をなぞっていた。こぶしを握りしめ、彼女は自分の指が作った道にそって、小さな光点の群れが集まっているのを見た。パトリシアはふたたび目を閉じた。

そして、すぐに眠りに落ち、曲線の夢を見た。眠っているのに、まだ意識は半分目覚めていて、彼方の高所から、レベルを落としながらも、脳の続行している作業を眺めていた。やめようとしても、やめられないのだ。

わずか二、三時間眠っただけで、彼女はぱっと目を覚ました。もういちど、自分の未来の論文を——第三空洞の図書館で見つけた、まだ書いていない自分の論文を、見なおす必要がある。データが出るかどうか案じながら——いままで四回、データ・サービスにアクセスしたが、そのた

びに、そのデータは提供できないとはねつけられたのだ――パトリシアは楕円形のベッドから抜けだし、ラベンダー色のローブをはおると、帯を結びながら、薄暗いリビングルームを横切っていった。

「データを、シティ・メモリー」目の前に、赤と金の輝く帯に包まれた、アーミラリー天球儀が現われた。その上に、たてにふたつ、連なった小円が浮かんでいる。上の小円の直径は、下の小円の二倍あった。むかしのクエスチョン・マークに相当するシンボルである。「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスの論文を見たいの。……いけない、題名と発表年月日はわすれてしまったわ。それ、必要?」

複雑なシンボルが閃いた。パトリシアが話しことばだけにするように要求すると、シンボルは消えた。「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスの小論文すべてのリストをごらんになりたいですか?」データ・サービスの声がたずねた。

「そうね」自分のしていることに、ふたたびいやな予感を覚えながら、彼女はいった。

目の前に、大きな白い紙に印刷されたように見える、ローマ文字のリストが現われた。目的の論文は、リストのなかほどにあった。『ニュートン物理学に適用したn次空間測地線理論と、ρシンプロン世界線の特殊論について』

「それよ」とパトリシア。「表示して」

あいているほうの手で、椅子の縁をとんとんとたたきながら、彼女は丹念に論文を再読していった。やがて彼女は、「よく書けてるわ」と陰鬱にいった。「でも、まちがってる」それは重要な論文ではあったかもしれないが、いまの彼女には、それが初期の荒削りの論文であることがよ

くわかった。「もういちどリストを見せて」
サービスはいわれたとおりにし、パトリシアは後年の論文を選んで、表示するようにいった。
おなじみの、棘だらけの球のシンボルが現われ、「アクセス禁止事項です」と声がいった。
怒りがこみあげてくるのを感じながら、パトリシアはべつの論文を選んだ。「アクセス禁止事項です」
さらにもういちど、リストのおわりのほうから、彼女が六十四になったときの――いや、なるときの――論文を選んだ。「アクセス禁止事項です」
「なぜ自分の書いた論文がアクセス禁止なのよ?」腹だたしげに、詰問する。
返事はなく、棘だらけの球体が現われただけだった。
「どうしてこのサービスは検閲されてるの?」そこまでいったとき、パトリシアはふいに、この部屋にいるのが自分だけではないことに気がついた。「オルミイ? 明かりをつけて」部屋が明るくなった。答えはない。
そのとき、侵入者の姿が目にはいった。天井近くに、野球のボールくらいの灰色の球が浮かんでいる。その中央に、顔があった。つかのま、彼女はこちらを凝視するその顔をにらみかえすことしかできなかった。どうやら男性の顔らしい。小さくて黒い目は東洋的で、鼻は獅子鼻だ。威嚇するような表情ではない。しいていえば、興味津々といったところだろうか。
パトリシアはあとずさり、壁を背にして立った。その顔は動かなかったが、目はずっと彼女を追っていた。
「だれ、あなた?」パトリシアがきいた。彼女にはわからないいくつものシンボルが部屋じゅう

に浮かんだ。「図話はできないの」とパトリシア。「いって、ここでなにをしてるのか」
「正直いって、わたしはここに居てはいけないことになっている」と顔はいった。球は二フィートほど降下すると、明るい薔薇色に変化した。「ともあれ、わたしはただのアイコンにすぎない。そう警戒したもうな」
「警戒するわよ。いきなりはいってきて。あなたはだれ?」
「シティ・メモリーからきた。放浪体だよ」
「なんのことだかわからない。さっさと出ていって」
「わたしにはきみに危害を加えることはできないよ。いらだたせてはいるかもしれないが。わたしはただ、二、三質問したいだけだ」
球はさらに降下し、古いホラー映画の吸血鬼のように、ぱっと姿を変えて、男性の形をとった。男は、ゆったりとした白いシャツと、フォレスト・グリーンのズボンをはいていた。その姿には、本物と変わらない実在感がある。パトリシアの部屋には、いま、中年というにはやや若い、長い黒髪とけだるげな細面を持つ、小柄で繊細そうな男が立っていた。動悸が静まってきたので、彼女は数インチ、壁から離れた。
「われながら、自分のなしとげたことを誇りに思うね」とそのイメージはいった。「わたしは最高の記録を渉猟していた。具体的には、忘れられた記録のことだ。シティ・メモリーのカオス部には、すさまじく混沌とした領域があるんだよ。そんななかに、部分的に抹消された訴訟記録が見つかった……それも、きわめて重大な訴訟の記録がだ。なにしろ、何者かがフローの安全を脅かしたというんだからね。そこに残った情報の断片は、すべてここを指し示していた。……たし

かに、微妙なつながりではあったが、興味を引かれるものだったんだよ」
男の姿が、どこかで会ったか見かけたことのあるような、なじみあるものに思えてきた。「ここでなにをしてるの？」
「わたしは放浪体だ。見ただけではわからないだろうが、少々荒っぽいほうでね。わたしは気の向くままに、どこにでもいく。慎重さをわすれないかぎり、消滅させられることはない。わたしが放浪体となってから、もう百五十年になるよ。表向き、不活性のメモリーに引退させられたことになっているが、不活性化されたのは、わたしのコピーにすぎない。ときどき、いろいろな仕事をたのまれるのさ。たいていは、ほかの放浪体との決闘だ。かれこれもう、六十体はやっつけたかな。血のチェスだよ」
「質問の答えにはなってないわ」パトリシアはもう、いまにも泣きだしそうになっていた。この放浪体とやらがだれだったか、どうしても思いだせない。「もう出ていって。わたしは考えごとをしたいの」
「放浪体というやつは、あまり礼儀正しいほうではなくてね。きみは、アクシス・シティの各方面から関心を集めているんだ。もっとも、きみがどこにいるのかまではわからなかった。たったいま、きみがデータ・サービスを使ってくれたおかげでわかったんだ。見つけたのは追跡者(トレーサー)――わたしの最高のトレーサーのひとつだよ。ネズミのパターンに基づいて創られたやつだ」
「ルーム！」パトリシアは部屋に向かって叫んだ。「この人を追いだして」
「むだだよ」と放浪体。「きみはどこからきた？」
パトリシアは答えなかった。だまったまま、寝室のドアににじりよっていった。

「わたしは、きみがどこからきたのか調べだすように依頼されている。報酬として、ずっとむかしからの宿敵を倒すための情報ももらっている。きみが話さないかぎり、出ていく気はない」
「だれにたのまれたのよ？」ほんとうに恐ろしくなって、彼女は叫んだ。
「待てよ……わたしがしゃべっているのは二十一世紀の英語だ――正確には、米語だ。じつに驚くべきことだな。それだけうまくこのことばを話せるのは、よほど徹底したアメリカ礼賛者だけだ。だが、だれがアメリカ礼賛者などに、これだけ興味を持つ？」イメージは彼女のあとを追って、寝室にまでついてきた。「推測だけでは、報酬をもらえない。話したまえ」
パトリシアはだっと外に出るドアに駆けだし、開けと命じた。ドアは開かなかった。彼女は大きく息を吸いこむと、パニックに陥ってはならないと腹をくくって、イメージにふりかえった。
「かわりに……かわりに、なにをしてもらえるの？　わたしが話したら？」
「取り引きできそうだな」
「じゃあ、すわりましょう」
「ああ、すわりたければすわってもいいよ。わたしは残酷ではないからね」
「あなた、影体(ゴースト)ね」彼女は決めつけるようにいった。
「いままできみが会った影体たちより、もっと影体らしい影体だがね」イメージが鮮明になった。
「名前は？」
「いまはない。臭跡はあるが、名前はない。きみは？」
「パトリシア」
「ありきたりの名前ではないな」

唐突に、彼女は放浪体の顔がだれのものであったか、思いだした。そしてすぐさま、その記憶をふりはらった。そんなの、ばかげてる。「わたしは本物のアメリカ人なの」とパトリシアはいった。
「何パーセントの？　たいていは自慢そうに三パーセントだの四パーセントだのといっているが、統計的に見ると、それはミエでしか――」
「百パーセント、アメリカ人よ。わたしはアメリカ合衆国、カリフォルニア州、サンタバーバラで生まれたの」
放浪体がよろめいた。「あまり時間がないんだ、パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス。きみがいうことには筋が通らない。が、きみはそれを信じているようだ。どうしてきみは、そんなに混乱なく、原始的に育ったんだ？」
「わたしがいたところではね――それに、わたしがいた時代ではね――」パトリシアは気を静めるために、もうひとつ深く息を吸いこむと、「――ほとんどそれ以外に、選択の余地がなかったのよ」そこで、片方に首をかしげて、「わたし、あなたを知ってるわ」といった。「エドガー・アラン・ポーにそっくり」
放浪体の顔に、驚きがよぎった。「それがわかるとは驚いた。じつに驚いたよ。きみはポーと知りあいだったのか？」
「もちろん、そんなはずないでしょう」場ちがいなことに、恐怖の下でかすかに笑いがこみあげてくるのを覚えながら、彼女はいった。「読んだことがあるだけ。ポーは死んでるもの」
「彼はわたしが師として選んだ人物だ。あれは驚くべき精神だよ！」放浪体はやつぎばやに、ま

わりにさまざまなイメージを投射した。幽霊じみた人物、生き埋め、大渦に巻きこまれる船、北極での遭難。「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスはポーの見わけがつく。そして二十一世紀のアメリカ人だと主張している。おもしろい。

わたしはそろそろいかなくてはならない。知りたいことを聞きたまえ。そうしたら、わたしがもうひとつ質問をする」

「この都市の人々は、わたしたちをどうする気？」

「わたしたち？　ほかにもいるのか？」

「あと四人いるわ。都市の人たちはわたしたちをどうする気なの？」

「ほんとうに知らないんだ。調べてみよう。さあ、今回の訪問で最後の質問だ。当局にとって、きみがこれほど特別なのはなぜだ？」

「わたしがいまいったとおりの理由でよ」驚いたことに、恐怖はすっかりなくなっていた。放浪体だか影体だか知らないが、それは進んで協力してくれているようだ。それに、唯々諾々と誘拐者たちのいいなりになっていなければならないという法はない。

「おたがい、われわれは役にたつようだな。きみのデータ・サービスにブロックがかかっていることは知っているか？　当局はきみをここに閉じこめ、選択的にアクセスを抑制している。きみがわたしの来訪を他言すれば、わたしはもうここにはこられないかもしれない。そうすれば、きみの質問に答えてやることもできなくなる。そのことをよく考えてみたまえ。ではまた」放浪体はいい残して、消え去った。部屋がだしぬけに、声をとりもどした。

「セル・ヴァスケス、だいじょうぶですか？　なんらかの干渉が――」

「わたし、知らないわ」とパトリシア。
「なにかお困りのことはありましたか？」
パトリシアはつかのまこぶしをかみ、すぐにかぶりをふった。「いいえ。たいしたことはなかったわ」あのイメージはたしかに驚かせてくれたけど——興味深いこともたくさん話してくれた。あれがテストや実験だとは思えない。あの放浪体は、有用な情報源になってくれそうだ……「きっとあなたの回路が、ショートかなにかを起こしたんでしょう」
部屋はしばらく沈黙していた。「必要なら、修理を行ないます。なにか必要なものはありますか？」
「いいえ、ありがとう」パトリシアは眉をひそめながらイメージ投射機を見つめ、ふたたびこぶしをかんだ。

49

無限ヘクサモン・ネクサスの大主教、イリン・タウル・イングルは、広大なウォルドの奥深くに埋もれた、中央シティの六つの大通気シャフトのひとつに屋敷を構えていた。オルミイはいままで、最下層に住みたいと思ったことはいちどもなかったが、それでも大主教の屋敷だけはうらやましく思った。ウォルドには周囲と隔絶された、落ちついた雰囲気があるし、大主教の屋敷自体にも、エレガントな趣きがあるのだ。

六本のシャフトは、中央シティ最外殻から核部の管理球まで、まっすぐに貫いている。各シャフトには、ウォルドを走る風の道ぞいに、それぞれ一万もの有体者が住んでいた。彼らの家の形状はさまざまで、広い気根に繋留されて浮遊する厚いガラスの集合体から、自由にシャフト内を移動する小部屋まで、多岐にわたっている。小部屋のなかには、せいぜいひとりないしふたりの通常形態しかはいれないものや、平均的新形態が四人までしかはいれないものもあった。
ウォルドはネイダー教徒哲学にとっての、装飾であり、礼儀だった。中央シティで必要とされる空気の三分の一は、これらのシャフトでまかなわれ、残りの三分の二はゲッシェルの設計になる叢林でまかなわれている。ウォルドに植えられた木々や植物は何千種にもおよび——なかには実をつけるものもあった——どれも無重力に適応できるように改良されていた。アクシス・シティの生物量のゆうに三分の一は植物であり、ウォルドに集中しているのだ。
オルミイの大の楽しみのひとつは、牽引フィールドの力を借りることなく、根から枝へ、ターザンのように木々をわたって、ウォルドを移動していくことだった。じっさい、ここにはスポーツ専用の道や近道もあり、おおぜいの通常形態やきまぐれな新形態が利用している。実質的に、乗り物はゼロだ。オルミイ自身、もっと難しいルートに何度となく挑戦して、最外殻からシャフトの底までのタイムを、十五分まで縮めたこともある。
しかし、いまは急ぐ必要はなかった。スケーターのように腕を背中で組み、足をぴんと伸ばし、広葉を蹴ってなめらかな根へと跳び、ゆっくりとしたペースで木々を渡りながら、彼は何度も通ったことのあるコースをたどって、下に降りていった。
ウォルド全体には、〝光蛇〟または〝発光虫〟として知られる、バクテリアがたっぷりの発光

スープを収めた、プラスティック・チューブが織りこまれていた。チューブの一本一本の太さは一メートルほどあり、なかには長さ半キロにおよぶものもある。木々のあいだの小道をぬうチューブは、目もあやな光の模様を作りだし、近づいて見ると、それらはピンクや赤に輝いていることもあれば、豊かでほの暗い黄金に輝いていることもあった。通常形態は、しばしばそんな小道に集まって、その光を浴びることがある。が、オルミイは着実にシャフトを降りることに専念して、通りかかった小道にも、ほとんど目を向けなかった。

大主教の屋敷にたどりつくには、二十分かかった。オルミイはせまい分かれ道を通って主要路をはずれ、ねじまげられた根の形成する、花輪のほうへただよっていった。屋敷は、大主教の私有する谷の中央に浮いていた。

屋敷は十八世紀地球の、荘園の邸宅を基本に、上下の区別がないことを考慮して、さまざまな改良が施されていた。屋根は三つあり、異なる六つの角度から屋敷にはいることができる。出窓も三つの方向へあけられるようになっている。屋敷の向こうには発光虫が走っているため、向こう側の窓のひとつには、幾何学的な糸杉の茂みで覆われていた。

花輪のトンネルを抜けると、すぐにいくつかのモニターが飛んできた。聞かれる前に身分を伝えると、モニターたちはほかの仕事――たとえば、生け垣の手入れや害虫の駆除、大主教のペットたちの世話などをしに去っていった。

ハウス・ボイスが歓迎の挨拶をし、発光虫に面した、明るいドアからはいってください、大主教がすぐにそちらへまいりますから、と伝えた。

オルミイは屋根のドアからなかにはいり、慎ましげに、しかし退屈な思いをしながら、屋敷の

最近の活動を示す簡単なイメージを眺めた。イメージが消えると、大主教の先に立って、見覚えのない新形態が控えの間にはいってきた。その新形態は——おおむね魚のような形をしていて、手足がない——結晶質の狐顔でオルミイを見つめ、形式ばらない挨拶を述べたが、身元は明かさなかった。それがトラーの腹心のひとりであることに気づいて、オルミイも同じように略式の挨拶をかえした。新形態は、自身の小型モニター群をウンカのようにまとわりつかせながら、明るいドアから出ていった。

「連中、どんどん大胆になっていくな。そう思わんかね？」手を差しのべながら、大主教がいった。オルミイはその手を握った。「ひとつきくが——きみは握手できないような相手を信用できるか？」

「たとえ握手できても、あまり信用したことはありませんね」

大主教は、ユーモアと完全には隠しきれないいらだちの入り混じった表情を浮かべながら、オルミイを見つめ、「きょうは、新たに到着した古代人の客のことを説明しにきてくれたのだったな」といって、広大な十二面体の執務室へ案内した。大主教の円形デスクは、中央の一本のポールで支えられている。壁面のうち七面は、古代の本やメッセージ・ブロックを収めた、ウォルドの根を製材した材木の棚で覆われていた。ほかの壁面は、みごとな幻影装飾と幻影窓に覆われ、窓の向こうには、屋敷内のほかの室内の時間遅れの光景が、なかにいる人間だけカットして、映しだされている。

「大統領はまだ動転している」両肘をついてデスクの向こうにすわりながら、イングルはいった。

「大統領の諮問会議の大半は、なぜきみがあの五人を連れてきたか、なかなか理解できずにいる

ようだ」
「わたしが連れてきたのはひとりだけです」とオルミイは訂正した。「ほかの四人は、思いがけなく、かってについてきたのです」
「ああ、それはわかっているが、どうやってきたにせよ、彼らはトラブルの種だ。分離主義者たちは、以前からつけこむ隙を狙っている。各グループが手を結ぶのも、そう遠いことではない状況にきていたのだからな――今度の一件は、確実に彼らを団結させるだろう。それはまた、コジェノフスキー派を、一介の急進派から第一の人気党へと躍りださせかねん。大統領の地位も危ういかもしれんぞ。それでいてなお、大統領はこの件に直接あたる暇はないと考えている。ジャルトの問題で、いまも手いっぱいなのだ。そこで大統領は、セル・オリガンド・トラーと――彼にはきみも会ったはずだな――わたしに、この件を預けたわけだ」
「悪い知らせをもたらしたものが、評価されたためしはありません」
「そうかな？　しかし、その知らせがじっさいにいいものか悪いものかは、われわれがどのように反応するかで変わってくるのではないかね？　正直にいって、わたしは大統領の疑念のすべてを分かち持つものではない。一部はともかく、全部ではない。わたしは現状を――そしてこの知らせを――われわれに有利な方向に持っていけると思う。おそらく、ジャルトに効果的に立ち向かうのに必要な合意さえ得られるかもしれん。ところで、メッセージによれば、またニュースがあるそうだな」
「何者かが、シティ・メモリーの放浪体を、少なくとも一体雇い、客の部屋に侵入させせました。この混乱がなにごとなのか、必死に見つけだそうとしている者がいるようです」

「うむ、そこまではわたしも読んでいた——となると、そろそろわれわれが知っていることをすべて明らかにする潮時かもしれんな。おそらく、一週間もしないうちに、この件はみなに知れわたることになろう。とりわけ、放浪体がからんでいるのならな。きみの意見はどうだね、セル・オルミイ？」

「それは前に申しあげたとおりです、セル・イングル。ネクサス議会の前で公表するべきだと」

大主教はしばらくのあいだ考えこんだ。「それについては、はたして得策かどうか、いまだに考えあぐねている。だが、きみのいうとおりかもしれん。真実が明かされなければならないのなら、明かそう。ただし、繊細に、な。分離の噂で、すでに何百万という新形態が、愚にもつかぬ恐怖をいだいているのだ。そのまっただなかへ爆弾を落とせば——〈冠毛〉が地球へもどってきたなどといったなら——どうなる？　簡単に決められることではない。それに、ジャルトの攻勢に備えるためにといって、ネクサス全体に呼びかけるわけにもいくまい。呼びかけなければならないのは、一部分だ」やはり落ちつかないのか、大主教はデスクを離れた。「今夜、わたしは本格的なタルシットにはいらねばならん」そういうと、腕組みをし、ゆったりした黒のローブを静かに波打たせながら、オフィスの中央に浮かんだ。「するときみは、ヘクサモンのエージェントとして、個人的に証言するというのか？」

「フラントとわたしが、です」

「フラントは証言すまい。誓いを立てることは、彼らの信条に反する」

「フラントにはわたしの証言を裏づけてもらいます。それなら許されていますから」

「で、それからどうする、セル・オルミイ？　そのあと、わが身内の好奇心の強いやから——放

浪体を雇ったやからやコジェノフスキー派を、どうやって抑えておく？　聖者がわれわれにほほえんでくれると思うかね？」
「最大の問題は、そのことではありません。〈冠毛〉には、まだ二千人の人間がいます。遅かれ早かれ、彼らはわれわれのコントロール下に置かねばなりません。われわれの最初の客、ヴァスケスは、すでに第六空洞機構の操作法を解明する寸前までできています。たとえ〈冠毛〉の図書館が情報制限されていようとも、いずれはほかの者たちも、彼女と同じ結論に達するでしょう」
「星と運命と聖霊は、われわれの問題に限度を設けぬらしいな」大主教は嘆息した。その反動で、ローブのひだがゆれた。「ありがたいことだ」
「まったくです」
「われわれはおたがい、ゲッシェル特有の特質、懐疑心を共有していないかね？」オルミイの反応を注意深く見まもりながら、大主教。「ただし、だれにでもそれを見せるのは賢明なことではない――このような高い地位についてしまうとな。いますぐ危険なことをしでかす恐れはあるのかね、われわれの……祖先！……が？　いやはや、祖先などということばを使おうとはな――彼らが第六空洞の機構にすぐさま手を出す可能性はあるのかね？」
「アクシス・シティのヴァスケスがいなければむりです。数カ月、いや、一年たってもむりでしょう」
「それはいい。ものには順序というものがある。われわれの客を公開する動きを少しでも見せれば――いまとなっては、それは避けられないことだろうが――たいへんな関心が集まるぞ。彼らはふつうの人間ではないし――大統領の反対を抑えこむ、切り札となるかもしれない。わたしは

秘書官たちにアジプロの計画を立てさせよう。彼らの代理士は——きみのパートナーのシュリー・ラーム・キクラは——役にたっているかね？」
「はい、とても。もっとも、まだほとんど仕事に手を染めていない段階ですが」
「すばらしい」と大主教。「だが、自信過剰は禁物だ。もしジャルトが早期に攻勢をかけてくれば——あるいは、あってはならんことだが、恒星の核にゲートをあけてこようものなら——われらが客の存在など、二の次になってしまう」イングルはかぶりをふりふり、一連のシンボルをピクトした。それは、太陽の紅炎(プロミネンス)に焼きつくされる、ウンカのイメージだった。

50

ロドジェンスキー伍長は、図書館の黒い壁にもたれかかって、眠っていた。目の前には、糧食のパックや缶がいくつもちらばっている。なかにはソ連軍のものもあるが、ほとんどはアメリカ軍のものだ。伍長は小さく、規則的ないびきをかいている。そのとなりには、ガラベジャン少佐がうずくまり、ハムとポテトのグラタンで夕食をとっていた。まだ批准されていない協定の一部として、第一空洞から輸入されたものだ。
食べながらも、ガラベジャンは四角い広場の向こう側、ここから数十メートル離れたところにかたまっているアメリカ兵たちに、油断なく目を注いでいた。双方の人数はまったく同じだ。ソ連兵十名、アメリカ兵十名で、全員小銃で武装している。レーザーはない。したがって、無音で

闇討ち、ということもありえない。
ロドジェンスキー伍長と中国人の男女の話しあいによって、アメリカ兵たちがやってきたとき、緊張は一気に高まったが、それも徐々に静まってきていた。例の銃声以来、図書館は、ミルスキー中将、ヴェルゴルスキー大佐、ベロジェルスキー少佐、ヤズィコフ少佐、ポゴージン中佐を飲みこんだまま開こうとせず、音信不通の状態がつづいている。はじめは、アメリカの策略ではないかという疑いもあった。が、プリチーキンやシノヴィエフ、アメリカの民間人のリーダー、ホフマンたちと数時間話してみた結果、その可能性はない、とガラベジャンは判断した。
図書館のなかでなにが起こったのかは、だれにもわからない。が、ホフマンがたてたあまりにもつじつまのあいすぎる仮説は、みんなを不安に陥れた。漆黒の壁とアメリカ兵たちを交互に見ながら、ガラベジャンはまだその説を考えていた。
ホフマンの説とはこうだ。政治将校たちは、ミルスキー将軍を殺そうとした。それが成功したかどうかはともかく、図書館はこれ以上の暴力を防ぎ、おそらく証拠を保存するために、みずからを封鎖したのではないか。
ガラベジャンたちにできることは、待つことだけだった。
あれからもう、一週間になる。その間、ガラベジャンとプレトネフは、ソ連の将兵たちに、いっさいの愚かな行為——たとえば、派閥争い、扇動、憶測の吹聴——などに走ることを禁じていた。第四空洞での宿舎建設は順調に進んでいる。だが、若干の兵卒が——最新の点呼では、五十二名だ——キャンプを捨て、第四空洞の森に姿を消していた。そのうち、見つかった者は五名。森のなかには各種の食用植物がふんだんにあるので、いずれも栄養状態は良好だった。ただし、

五名のうちの三名は、退行現象を起こしてまるまっていた。いまごろになって、ショックが襲ってきたのだろう。
　アメリカの心理学者たちが援助を申し出てきてはいる。アメリカ側でも、同様の症例が発生しているそうだ。いちばん有名なのは、三日前に起こった、ジョーゼフ・リムスカヤの例だった。自分で引き裂いたらしく、洋服の前もうしろもぼろぼろにして、激しく泣きじゃくりながら、彼は第四空洞のソ連中央キャンプにまよいこんできたのである。彼の身柄はアメリカ側に引きわたされた。だがガラベジャンには、ソ連兵をアメリカの心理学者に診させることが賢明な措置とは思えなかった。
　なによりも彼が感じていたのは、悲しみ——喪失感だった。それはともすれば、彼の義務感を圧倒しそうになった。彼は——ミルスキーをはじめとする若手の将校たちの大半と同じように——〈小破滅〉でのさまざまな失敗によって浮き彫りにされた諸問題を改善するべく、ソ連軍が新しくはじめた実験の一部だった。彼らや彼らの仲間たちは、むかしながらの十九世紀的システムのなかで敵対しあうのではなく、チームの仲間としてたがいに協力しあうよう訓練された。その成果は大きく、効率も向上し、アル中や脱走、暴力行為、自殺などは減少した。
　彼らは新しい血筋を引く者たちであり、その成功は彼らを文化的な英雄にしたてあげた。このうえ、さらに〈ポテト〉を制圧していれば、とてつもない名誉を与えられ、讃えられただろう。だが、ガラベジャンにはいまだにわからないなんらかのミスによって、制圧はみじめな失敗におわり、祖国はいまや灰と化してしまっている。
　第四空洞各所の島に泳いでいき、森のなかで横になり、腐葉土をかきあつめて濡れた体の上に

かぶせた同志たちの気持ちが、ガラベジャンには痛いほどよくわかった。

無限ヘクサモン・ネクサスの議長、ヒューレイン・ラーム・セイジャは、その祖先をたどれば、十三世紀前、はじめて人類の手に宇宙をとりもどさせた、大東アジア・ゲッシェルの一員にまでたどりつく。にもかかわらず、彼はフラントよりも、さらに人間らしくない姿形をしていた。中央シティで主流をなすおおぜいの新形態市民、その典型が彼なのだ。

ラーム・セイジャの体はまんまるく、半分はピカピカに光る銀色の金属、もう半分は、二百六十四のゲートに通じる諸世界にそのまま出ていける、黒と緑がきれいに渦巻く鉱物の核でできていた。

球状の体から、三方向のいずれにも投射できる顔は、大きく射ぬくような目を光らせ、鋭い歯を覗かせて、薄笑いを浮かべている。いずれも、その攻撃的な性格を隠すものではない。筋骨隆隆とした二本の腕は、見かけは人間の腕そのものだが、特殊な能力をも備えている。必要とあらば、その腕は二メートルも伸ばすことができるのだ。

脚がないので、移動するには、腕と、ネクサスじゅうに偏在する牽引フィールドを利用する。

生まれてまだ一世紀とたっていないが、これは彼のふたつめの形態だった。最初の三十年間は、彼も一般のネイダー正教徒同様、人型の形態をとっていた。ラーム・セイジャが最初の契約を行ない、基本的な政治手腕を身につけたのは、そのころのことである。オルミイにとって、ラーム・セイジャこそは、〈十二世紀への旅〉派の急進的ゲッシェルを体現する存在だった。

ラーム・セイジャは、大統領、ネクサス大主教、アクシス連合会議議長につぐ、ヘクサモンの

ナンバー4なのだ。
中央シティの核近く、フロー軸のすぐ外側にある球形のネクサス議事堂に、ラーム・セイジャは二十三名の有体下院議員、五名の上院議員を召集して、臨時議会を開いていた。集まったメンバーのうち、二十名は再生者だが、このことば自体は、もう何世紀も前からほとんど意味を失っている。いまでは、それが意味するのは、その個体が——必ずしも血肉で作られているとはかぎらないが——基本形態をとっているということくらいでしかない。ただ、いくら便利ではあっても、いまなおジャルト対策会議で頭をしぼっている者たちが——会議が開かれているのは、フラントの母星であるティンブルだ——ネクサスに部分人格として出席することは、法によって禁じられていた。
ラーム・セイジャはネクサス議事堂の中心にただよっていくと、黄金のアーミラリー・バンドに光をともして、議事の開始を宣言した。
オルミイは球の端に浮かんでいた。フラントは彼のそばで身をまるめ、首と頭だけをつきだしている。オルミイは数分前、ローゼン・ガードナー有体下院議員と、へたをすれば物議をかもすことになるやりとりをおえたところだった。コジェノフスキー派の新ネイダー正教徒のリーダーであるガードナーが、これからの証言内容をこっそり教えてくれないかと持ちかけてきたのだ。オルミイは、それはできないと断わった。ガートナーはしばしば手順を省くくせに、それを認めさせてしまうという、数少ない有体下院議員のひとりであり、また、理性的な議論を展開することのできる、数少ないコジェノフスキー派のひとりでもあった。それゆえに——またネイダー教徒の支持者を多数擁していることもあって——急進派のゲッシェルの目には、ひときわ危険な政

敵と映っていた。
「星と運命と聖霊、および、すべての消費者のために平等と公正な取り引きを追求し、かつ世を覆いつくす非人間的なテクノロジーの終焉をもとめた〈よき人〉の名において、ここに無限へクサモン・ネクサスの会議を召集する」とラーム・セイジャが宣言した。「じつはニュースがあるのだ、諸君。
これより、セル・オルミイが調査結果を報告する。また、われらが大切な同盟種族のひとつに属し、セル・オルミイの調査の手助けをしてくれた一員も、その裏づけをしてくれることになっている」
オルミイとフラントは中心に進んでいき、アーミラリー・バンドを受けとった。
「大主教の要請により、わたしはこの一年間、〈冠毛〉で過ごしてきました」とオルミイは話しはじめた。「ここにいるフラントも、わたしに同行しました。わたしたちは協力して、かつて例のない、外部からの侵入者の調査にあたりました。図話で説明したいと思うのですが、調査記録の再生を許可していただけますか?」
ラーム・セイジャが許可を与えた。
ひとりひとりの上院議員と有体下院議員の前に、驚くほど真にせまった〈冠毛〉第七空洞のイメージが浮かびあがった。ものの数分のうちに、一同は〈冠毛〉各空洞の新たな住人となった人類の概略をつかんでいた。オルミイとフラントがとってきた個人記録は、約五百名分もあった。二、三の建物の内部とともに、コンパウンドが投影された。オルミイはつぎに、前〈大破滅〉期の地球からやってきた新たな住人たちの、さまざまな言語について表示した。

ピクトされた記録の視点は、第一空洞の床から南極へと急速に昇っていき、侵入孔にズームアップした。ふたたび稼働状態にもどった回転ドックと収容エリアをつかのま映しだしてから、視点は侵入孔の外に出た。
約三万キロの彼方に、三日月状の地球が、闇のなかに大きく浮かんでいた。その西の縁から、太陽が顔を出そうとしている。
ネクサス球内の人々は激しい反応を示した。人型の有体下院議員が大きく息を呑む。球内の全員が、さまざまな方法で強い感情を露わにしていた。
まっさきに口を開いたのは、ガードナーだった。「聖者コンラッドだ。彼がふたたび、われわれを地球に連れ帰る方法を見つけたんだ」
「やめたまえ。いや、報告のことではない」ラーム・セイジャが命じた。
「これは本物の地球です」とオルミイはつづけた。「〈冠毛〉は建造された軌道にもどってきたのです――自動的に、われわれの知識とは無関係に。〈道〉の創造は、われわれがなじんだ宇宙のすべてからわれわれを切り放したわけではありません。〈冠毛〉は当初予定されていた旅を完了することもできたはずです。ところが、そうはしなかった。そのかわりに、太陽を見つけだし、故郷にもどってくるようコースを変更したのです。
しかしわれわれは、〈道〉創造によるすべての影響から逃れることはできませんでした。〈冠毛〉は近接する連続体へ、それもわれわれのものより比較的過去へと移動してしまいました。すなわち、出発に先立つこと、三世紀前にです」
オルミイがいわんとしていることに呆然となって、ネクサス球内は静まりかえった。

図話による報告はつづいた。四分とかからずに、〈大破滅〉のはじまりから、業火に包まれたのち、分厚い灰色の煙の覆いに包まれて地球が滅び、〈長い冬〉が到来するところまでが描きだされた。

ネクサス球には深い静寂がたれこめた。オルミイは急いで、先をつづけた。

「わたしは、この新しい住人のひとりを伴って、このシティにもどってきました。有体の女性で、名前をパトリシア・ルイーサ・ヴァスケスといいます。それに引きつづき、さらにもう四人が、アクシス・フロー上を乗り物でシティに近づくという違法行為を犯して、追ってきました。彼らは現在、放免され、アクシス・ネイダーの客として遇されています。もちろん、彼らは全員、有体であり、原始的であり、基本形態をとっていて、補助脳も持っていません、彼らは〈大破滅〉以前の、われわれの祖先なのです」

オルミイが見ていると、ひとりの上院議員のまわりで、アーミラリー・バンドが輝いた。発言を認められたしるしだ。彼女は前に進み出た。いまも現役の大ゲート開放師、ライ・オイユの娘、プレシアント・オイユだ。オイユ上院議員は二年前、性再転換者にかぎり、一度だけの再生制限を免除するため、シュリー・ラーム・キクラと組んで働いたことがある。ネイダー教徒のシンパを持つことでも知られているが、その勢力基盤は中庸派のゲッシェルにあった。外見は、性的魅力と指導者としての個性を強調するため、入念にデザインされた通常形態をとっている。

「〈冠毛〉が、まさに〈大破滅〉の起こるそのときに、地球にもどってきたというのですか？」

とオイユは質問した。

「それは報告にあったとおりだ」ラーム・セイジャが指摘した。

「いや、それほどぴったりもどってきたわけではありません」とオルミイ。「〈冠毛〉が太陽系に侵入したのは、〈大破滅〉の五年半前です。むしろ、われわれの到着こそが〈大破滅〉の引き金となった。それを裏づける証拠もあります。サブテキストをご確認ください。地球と月をめぐる軌道に〈冠毛〉が存在していなければ、この連続体における地球は〈大破滅〉をまぬがれていたかもしれません」

ガードナーが恐怖して両手をふりあげた。「なんと忌まわしいことだ。聖者コジェノフスキーがこんなことを意図していたはずはない」

「すべてはヘクサモン・ネクサスの信用にかかわることです」とオイユがつづけた。「ですが、この協議事項の概略に目を通していたさい、ひとつ疑問に思ったのですが——どうしてこのニュースは、シティ全体に通知されなかったのですか？　わたしはありのままを公にし、ネクサス全体に緊急事態を訴えることを提案します」

光の帯が琥珀色に変わり、彼女は一メートル引きさがった。ラーム・セイジャが両腕を広げ、指を大きく開いて、議員たちの注目をもとめた。「このニュースは驚くべき、かつ重大なニュースであるが、社会的に悪影響をおよぼしかねない。われわれは、もっと建設的な形でこのニュースを公開したい」

中庸派ゲッシェルであり、かつてはオルミイと同種の仕事でヘクサモンに仕えていた有体下院議員エンリク・スマイスが、異論を唱えた。あらゆる兆候から見て、ジャルトがポイント2×9以遠から侵攻してくることは確実と思われるのだから、最優先に協議されるべきはジャルト対策である。「それに比べれば、きょうのこの議題など、とるにたらないものではありませんか」

「そうではないかもしれんよ、有体下院議員スマイス」ローゼン・ガードナーが口をはさんだ。「話はこれから紛糾する可能性もあるんだからね」

「〈冠毛〉誘導システムを意図的にプログラムしなおした証拠は見つかったのかね？」ラーム・セイジャがオルミイに質問した。

オルミイは体を回転させて中央に向きなおり、「見つかりませんでした」と答えた。「しかし同システムは、〈冠毛〉が地球周回軌道に到着すると同時に、すべての指示を抹消していました。じっさいのところは、知りようがありません」

ガードナーがアーミラリー・バンドを光らせて、正式に発言をもとめた。ラーム・セイジャはちょっとためらってから、発言を許可した。

「そろそろシティ・メモリーの総ざらえを再度依頼すべきころあいではないかと思うのですが」とガードナーはいった。「われわれが知る必要のあることを教えられる人物が、ひとりはいるはずで――」

「〈技師〉は死んだのだ！」ラーム・セイジャが声を荒らげていった。

「彼が不活性状態にあることはみんな知っています」ガードナーが、彼らしくもない自制を見せていった。「しかし、聖者コジェノフスキーは、シティ・メモリー内に引退するさい、自分のパターンに危険がおよぶことを知っていました。われわれは、暗殺者どもに消去されずにすんだ彼の人格の断片を、捜索させねばなりません」

「越権行為だ」とラーム・セイジャ。

「わたしは全ネクサスを前にして、公聴会を開くことを要請します」ガードナーが食いさがった。

「認められない」
「では、緊急動議を提出しましょう」ガードナーが冷静にいった。ラーム・セイジャの球状ボディの鉱物側半球から、ぐっと顔がせりだして、有体下院議員をにらみつけた。よほどの事態でないかぎり、緊急動議が申請されることはない。うっかりみずからの権限を越える発言をしてしまったために、ラーム・セイジャはガードナーの思惑にはまってしまったのだ。
「支持します」とオイユがいって、驚くガードナーに美しい目を向けた。
「緊急動議か」ラーム・セイジャは承諾した。承諾せざるをえないのだ。だが、その顔には――いまはボディの中央にある――ネクサスにおける有体下院議員ガードナーの立場を、自分の権力のおよぶかぎり、あらゆる手段を駆使して弱めてやろうとの決意がありありと浮かんでいた。
それから先、オルミイはたいして興味も抱かずに議事に耳をかたむけ、退出許可がおりると、フラントを伴って球形のネクサス議事堂をあとにし、アクシス・ネイダーに向かった。アクシス・ネイダーにはいると、高速リフトに乗り、地球人が隔離されている、外層部の一画にもどった。
フラントを連れてキッチン兼ラウンジに向かう途中、オルミイはなんでも好きなものを注文するようにといった。
「ずいぶん待遇がいいんですね、セル・オルミイ」ごちそうをふるまわれる意味を考えて、目を細めながら、フラントがいった。「どうやら、わたしはしばらく、ここにとどまっていなければならないらしい」
「もう少ししたら、あとからきた四人にもきみを紹介する」考えごとにふけりながら、オルミイ。
「わたしはかまいませんよ」

オルミイは最外層セクターに通じる入口を開いた。フラントは棚がならんだ区画にうずくまってから――これはフラントの、伝統的なダイニング・テーブルなのだ――オルミイにふりかえり、目をしばたたいていった。「まさか、これほどトラブルが噴出するとは思いもよらなかったのでしょう?」
オルミイは開いた戸口からフラントにほほえみかけ、「きっときみも驚くさ」というと、ひとつウインクをして、辺境セクターにはいっていった。

51

侵入孔の収容エリアにいたるゼロ・エレベーターは、いままではめったに使われることがない。いまなお収容エリアで仕事をつづけているのは、ふたりだけだ。ロバータ・ピクニーとシルヴィア・リンクである。しかし、ホフマンはふたりの仕事が重要であると考えており、少なくとも週に一回は、個人的にふたりを訪ねるようにしていた。
広々としているうえ、天井が低いためか、収容エリアは屋内駐車場や会議場を連想させる。二名の海兵隊員を護衛につけて、ホフマンはメインドックの下にある、通信・管制センターの前にカートをとめ、そこからはひとりで歩いて、ひっそりとした部屋にはいっていった。
シルヴィア・リンクはスリングのなかで眠っていた。ロバータ・ピクニーが静かに挨拶をし、地球と月から傍受した通信内容を見せた。

「月面植民地はうまくやっているようです」とピクニーはいった。彼女の目の下には、黒々と隈ができていた。はじめて会ったときよりも、ピクニーは十歳は老けて見えた。「地球にも生存者はいますが、こちらは低出力の通信機しか使っていません——たぶん、バッテリーや風力発電機を電源に使うタイプでしょう。この低出力の信号を送りだしているのは、ひとつないしふたつの小都市だと思います。軌道プラットフォームの防衛が成功した地域があるのかもしれませんね。ときどき、こちらからも信号を送っています。まだ応答はありませんが、時間の問題でしょう」
「少なくとも、生存者はいるわけね」とホフマン。
「そうです。少なくとも、ね。でも、だれもわたしたちにはほとんど注意をはらわない。はらうはずもありませんけどね」
「あなた、第四空洞にいって、保養休暇をとるべきだわ」ホフマンがいった。「顔色がよくないわよ」
「おまけに不潔そのものですしね。でも、わたしに残されたものはこれだけなんです。地球や月からの声が聞こえるかぎり、わたしはここを離れません。まさか、ここを閉鎖したりはなさらないでしょう？」
「もちろんよ、閉鎖だなんて。ばかなことといわないで」
「偏執的になるのがわたしの特権でね」ピクニーはいって、下顎をつきだし、またひっこめた。奥歯のこすれあう、ぎりっという音が聞こえた。「ハイネマンがもどってきたら、いっしょにシャトルの改装に取り組んでみます。月には行ってみたいですわ。友だちがいるので」
「探険隊からは、まだなんの報告もないわ」とホフマンがいった。「帰りが遅いけれど、それほ

ど心配することはないでしょう……いまはまだね。ハイネマンの部下の一部を、いますぐシャトルの改装にまわしてもいいわ。なにか新しい考えが浮かんだら、教えてちょうだい」
「消えてしまったロシア人のほうはどうです?」眠たそうに目をしばたたいて、スリングのなかからリンクがきいた。
「まだどうこういえる状態じゃないわ」ホフマンはピクニーの手をとり、ぎゅっと握りしめた。「わかってちょうだい、わたしたちにはあなたたちが必要なの。あなたたちふたりともがよ。過労は禁物だわ」
ピクニーは自信なさそうにうなずいた。「わかりました。ジャニス・ポークとベリル・ウォリスに一日かそこら交替してもらいます。そのあいだ、チューブライトでも浴びて、少し景色を眺めてきますよ」
「それがいいわ」とホフマン。「それじゃあ、さっきいった信号がどこからきたものか、教えてくれる?……」

52

耳もとにくすぐったいものを感じて、パトリシアは目を覚ました。眠っているうちに放浪体がはいってきて、彼女を起こしたのだ。「ミス・パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス。地球から——滅びた地球からやってきた人。いくつか答えを持ってきたぞ」

パトリシアは声のほうに寝返りをうち、目をこすった。放浪体の外見は以前と変わっていた。バギー・パンツにカーディガン・セーターというういでたちだ。髪はふわふわにけばだたせ、ベルトの輪からは時計のない時計吊り鎖をぶらさげて、セーターのヘムライン・ポケットにつっこんでいる。二〇〇五年の典型的な服装だ。パトリシアはベッドから身を乗りだして、放浪体の靴を見やった。ワラチェふうの革の編みあげサンダルに日本のタビ・ソックスとくれば、もう完璧だった。

「わたしの侵入がばれた」と放浪体はいった。「だから、べつの方法で潜りこんでこなければならなかった。いまは、予備のピクターを利用している。メインのやつはロックされているんだ。それに、アパートのプライバシー・ユニットをプログラムしなおして、われわれが話しているあいだ、いかなる記録も残さないようにしておいた。あれから見つけたんだが、シティの記録に潜りこむ方法はたしかにあった。しかし、ひどく失望したよ。ネクサスにとって、なにも神聖なものはないらしい」

パトリシアは目をしばたたき、ベッドからおりると、ローブに手を伸ばしながら、「あなた、いつもそんなことをしてるの?」ときいた。

「いや、まさか。ここまでやるには、相当の労力を伴う。シティ・メモリーでゲームをしていたほうがずっといい。しかし、きみに関する情報と引き替えに、雇い主がとびきりの好条件を出してきたのでね。きみたちの存在が公にされる直前に、きみのことを報告できたのは幸いだった——いまでは、きみたちのことを知らない者はいない」

「それは聞いてるわ」

「けっこう」と放浪体はいった。寝室の明かりがともった。パトリシアはトイレの鏡で身なりを改めた。応急にとりつくろえることはあまりなかった。疲れた顔をしているし、安らかに眠れないため、髪ももつれている。
「ともあれ、このあいだの答えだ」放浪体は先をつづけた。「質問よりたくさんの答えが出てきたよ。きみたちは二日のうちに、ネクサス議事堂において報告させられることになる。わたしと当局を除いては、そのことはまだだれも知らない。そのあとは、最後のゲート開きに出席することになる。これは正式名ではないが、ひとことでいえばそういう性質の式典だ。きみたちはポイント1.3×9で大ゲート開放師に会い、ゲートの開放を見学する。もっとも、あけたらすぐに閉めてしまうかもしれない――もういまにもジャルトがやってきそうだから」
「ジャルトというのは？」
「蚤、とネクサスならいうだろうな。寄生生物だよ。恐ろしく攻撃的で、これっぱかりも協調性がない。〈道〉内部の環境は、〈道〉が〈冠毛〉と結合される一千年も前に整っていた――これはもちろん、〈道〉時間でのことで、この時間も、結合までは同調していなかったんだがね。その結合以前に、ジャルトはある試験的ゲートから侵入してきて、〈道〉に住みつき、繁栄した。だからわれわれは、連中と戦って追いださなければならなかったんだ。ジャルトはゲートの開きかたを知っているし、ポイント2×9から、おそらくはポイント4×9までのあいだを勢力下に置いている。しかし、こういったことはみなシティ・メモリーにはいっているから、あとで自分で調べてくれ。いまは時間がない。オルミイについてニュースがある。きみはネイダー正教徒とゲッシェルのことは知っているか？」

「知っているわ」とパトリシア。
「よし。ジャルトがわれわれを圧倒した場合に備えて——そうなる可能性はいまやかなり強くなってきているのだが——両派はそれぞれ、独自の打開策を提案している。ゲッシェルはアクシス・シティ全体を移動させ、フローに乗って、亜光速でジャルトのテリトリーを突破し、同時に〈冠毛〉を〈道〉の始点から切り離そうと考えているんだ」
「なんですって？　なぜ？」
「そうすれば、〈道〉を封じることが——焼灼することができるからだ。そして、〈冠毛〉がふたたび侵入され、ジャルトに〈道〉全体を制圧される危険も除去できる。もうひとつの選択は、〈冠毛〉を居住可能な惑星に持っていき、〈道〉を捨ててしまうことだ。あるいは、〈道〉を閉鎖し、消滅させてしまうことだ。〈冠毛〉を吹きとばせば、アクシス・シティは始点を通過して、〈道〉から出ていける。そのあとで、惑星をめぐる軌道に乗せればいい。それには時間がかかる……いや、かかるはずだった。だが、〈冠毛〉はすでに地球周回軌道をまわっている。〈道〉を捨てるには理想的な状況だ。だれにでもわかることさ。だから、ネイダー正教徒は——なかでもコジェノフスキー派は——」
「コジェノフスキー派というのは？」パトリシアがたずねた。知っている名前が出たことで、眠けがすっかり消えた。
「彼らは〈道〉の設計者、コンラッド・コジェノフスキーを支持した技師たちの末裔さ。中核は少数の保守的な集団で——ほとんどは地球回帰主義者だよ。最近まで、ゲッシェルは彼らを不活性メモリーの候補だと見なしていた。だが、ネイダー教徒とコジェノフスキー派は、基準の見な

おしを要請している」
「彼らは〈冠毛〉を破壊して、アクシス・シティを地球＝月をまわる軌道に乗せようというのか？」
「そうだ。さあ——時間がどんどんなくなっていく。じきにあらゆる安全装置が働きだすだろう。そうなれば、もう二度とここへはこられない——わたしに使える侵入手段は、これが最後だ。いいかね、オルミイは一見して見える人物とはちがう。彼は——」
つぎの瞬間起こったことは、あまりにも速すぎて、パトリシアには目で追うことができなかった。放浪体のイメージが激しく乱れ、向こう端の壁でシュッという音がしたと思うと、予備のピクターからぎざぎざの赤いビームが放たれ、部屋をよぎってナイトスタンドの上にあるパトリシアのスレートにあたったのだ。つぎの瞬間、放浪体は消えていた。寝室の明かりが暗くなった。
家具も壁も、特徴のない、灰色の塊となった。「明るくしてくれる？」とパトリシアはたのんだ。
「申しわけありません」調和が狂い、愛想の悪くなったルーム・ボイスが答えた。「お部屋のピクターが故障してしまいました。しばらくお待ちください。ただいま修理中です」
パトリシアはベッドの端にすわった。目が慣れてくると、室内からすべての装飾が消え失せていることがわかった。彼女はベーシック・ホワイトのベッド様のものの上にすわっており、やはりベーシック・ホワイトの家具にとりかこまれていた。壁にはなにもない。さっきのビームでダメージを受けていないかどうか調べようと、彼女はスレートをとりあげた。
スレートのディスプレイには、例の二十一世紀ファッションで決めた放浪体のへたな線画が描

かれていて、その横に一連の数字がならび、数字のおわりには、ひとつの三角形が付されていた。スクロールさせると、三角形の下には、三つの方程式とコード化された等号式がならんでいた。パトリシアは二面のデータを統合させ、方程式について基本的演算をさせてみた。
　と、スレートの画面に、つぎのような文字が点滅しながら現われた。〝オルミイはコジェノフスキーを知っていた。いまも知っている。冠毛シティで〟

たいていの場合、オルミイはアクシス・ネイダーに居室を選ぶ。四ヵ月以上つづけて同じところに住んだことはないが、アクシス・ネイダーのこの区画には、ほかのところよりも滞在することが多かった。設備は、最低限、居住に必要な施設だけにとどめて、室内装飾は施していない。じっさい彼は、アクシス・シティの市民が当然と考えているサービスを、できるだけ受けないようにしていた。
　といっても、禁欲主義者なのではない。単にそのような飾りが必要でないだけだ。室内装飾をする者たちを批判するつもりはなかった。
　オルミイは全体が真っ白なリビングルームにすわって、追跡が完了するのを待っていた。追跡者（トレーサー）は、短毛のテリアとして知られた、かつての地球の犬の一種を主要精神プログラムに置き、オルミイの部分人格をいくつか補って作ったものだ。たいていのことではふりきられない、執拗で知略のきくやつである。いままでこれが獲物をとりにがしたことは、めったになかった。
　アクシス・シティの法律により、シティ・メモリー内の放浪体狩りは公的にゲームとして認められている。シティ・メモリー内で放浪体を見つけても、市民がそれを消去することはできない

が、追いつめて即時不活性化に追いこむことはできる。

オルミイは不活性化には興味がなかった。彼はただ、問題の放浪体にぴたりと食らいつき、放浪体に圧力をかけ、その活動の違法性をいっそう強く意識させることだけを目的としていた。その放浪体は、きわめて高い能力の持ち主だった。決闘に勝つこと数十回、そのなかには何十年にもわたる戦いがあった。なにしろそれは、シティ・メモリーのなかで一千年も生きてきたのである。名前はなく、充分な臭跡もない。みずから設計した活性人格は、効率よく、とらえどころがなく、自我も決闘の動機づけを得るのに最低限必要なだけの利己性しか備えていなかった。

トレーサーは放浪体をパトリシアの部屋で捕捉し、オルミイの命令で、ただちに引きさがった。放浪体にうまく逃れおおせたと信じこませるためだ。

オルミイは平均的な放浪体の人格をよく承知している。シティ・メモリーの建造は、〈道〉の創造以前、冠毛シティではじまり、それから五百年以上をかけて完成されたものだが、ほとんどの放浪体は、シティ・メモリー建造の最終段階で生まれていた。

犯罪を未然に防ぐため、犯罪者の肉体は剝奪されて再利用にまわされ、シティ・メモリーに記録された人格も不活性化させられるという極刑が設けられたが、その抜け道を見つけた市民は——たいていは若い市民だった——おおぜいいた。いちばんポピュラーな方法は、シティ・メモリーのなかに、違法の複製人格を残しておくことだ。そうすれば、たとえ極刑を受けたところで、違法複製を活性化させることにより、存続が保証される。

そうやって生まれた〝放浪体〟は、ありとあらゆる犯罪行為を行なった。なかには、ネイダー正教徒のアレクサンドリア強制立ち退き以来、アクシス・シティではかつて見られたことのない、

暴力行為に訴える者まで出てきた。放浪体のほとんどは捕えられ、裁かれ、刑を宣告され、処刑された。処刑とは、事実上破壊された人格の集合体として、シティ・メモリーに封じこめられることだ。だが、時がたつにつれ、放浪体の一部は、ヘクサモンのエージェントの働きかけにより、彼らの時間つぶしとして最良の方法は、決闘にふけることだと――つまり、ほかの放浪体を捜しだし、抹消することだと思うようになった。それによって、多くの問題が解決された。決闘はあちこちでつづけられ、十年のうちに、放浪体の数は半減していた。

もっとも、生き残った者は、なおもおおぜいいた――それも、もっともスマートで、創意工夫に富んだ、したがってきわめつけに危険な放浪体ばかりが。

ここ数十年、ネクサスがかかえる最優先の問題のひとつは、すべての市民にとって、シティ・メモリーを完全に安全な場所とすることだった。だが、解決策はほとんどとられていない――いまなお頑強な抵抗が残っており、シティ・メモリーに損害が加えられ、ときに重要な機能までもが破壊されるありさまだったからだ。

だから、放浪体を雇うには、たえず危険がつきまとうことを、オルミイは承知していた。雇い主は、放浪体に完全な忠誠を期待することはできない。放浪体が忠誠をつくすのは、利益と興味が充分に高いあいだだけのことなのだ。

そのために、オルミイは放浪体に、いくつかの私的データバンクへのアクセスを認め、さらに念をいれて、雇い主がだれであるかだれにもわからないように――とくに放浪体には絶対わからないように、対策を講じておいたのである。

53

まっくらだった図書館が、少しずつ明るくなっていった。彼の目が適応できるようにするためだろう。パーヴェル・ミルスキーは、シートや涙滴型装置がならぶホールのいちばん奥で、目をしばたたきながら佇んでいた。
彼はまっさきに、ヴェルゴルスキーの銃弾が図書館にもたらした被害を調べようとした。被害はまったく見あたらなかった。どの涙滴型装置も壊れていない。ミルスキーは片手で頭の横をさわり、ついで鼻と顎に触れた。傷もない。が、頭のなかで、小さく控えめなシグナルが、いま彼が使っている脳の一部は、もともと彼が持っていたものではないことを告げていた。
歩きまわるうちに、目の奥にひどく不快な違和感があることに気がついた。ついで彼は、シートの列を迂回して、まだ閉じられたままの、特徴のない黒い壁に近づいた。眉をひそめて、呼びかける。「おーい！」だれも応えない。「おーい！　みんな、どこだ？」
きっと、ここにいるのはおれひとりなんだろう。ほかの者たちは、おれを撃ったあと、図書館から出ていったのだ。だが、あの白く渦巻く霧——あの三人の将校は、首をのけぞらせ、大きく口をあけていたぞ。
「ポゴージン！」と呼んでみた。「ポゴージン、どこにいる？」
やはり、返事はない。ミルスキーは図書館の暗い隅を歩いていき、観察ブースにつづく小さなドアに向かった。ドアは抵抗なく開いた。階段をのぼり、ブースにはいる。

眠っているのだろう。ミルスキーはそっとポゴージンの肩をゆすった。「ポゴージン――帰る時間だぞ」
　ポゴージンは、三つの椅子をつなげて横たわっていた。安定した息をしているところをみると、
　ポゴージンが目を開き、びっくりした顔でミルスキーを見つめた。「う、撃たれたはずなのに――やつら、あなたの頭の半分を吹っとばしたんですよ。わたしは見てたんです」
「わたしは夢を見ていた」とミルスキーはいった。「ひどく奇妙な夢だった。ヴェルゴルスキーに――それにベロジェルスキーやヤズィコフになにが起こったのか、見ていたか？」
「いえ」とポゴージン。「霧が覆いかぶさってきて、むずむずしてきて。気がついたら、ここに寝ていたんです」目を大きく見開き、起きあがった。唇が震えていた。「ここを出たい」
「いいアイデアだ。なにが起こったのか、調べにいこう」ミルスキーはポゴージンの先に立って階段を降り、黒い壁の前にいくと、「開け」といった。
　半月型の戸口が、音もなく開いた。
　アンネンコフスキーが、ミルスキーとドアに背中を向け、整列休めの姿勢で立っていた。小銃の銃身を持ち、杖のように敷石についている。
「やあ、少佐」ミルスキーが声をかけた。アンネンコフスキーはびくっとして、片足を軸に勢いよく向きなおり、小銃をかまえた。「おいおい、気をつけてくれ」とミルスキー。
「同志大佐――いや、将軍――」
「彼らはどこだ？」広場にならぶ兵士たちを見ながら、ミルスキー。
「彼ら？」

「政治将校たちだよ」
「まだ出てきていません。それよりも将軍、いますぐキャンプまでいらしてください――無線で連絡しなければ――」
「わたしの姿が見えなかったのはどれだけだ?」
「九日です」
「指揮はだれがとっている?」たずねるミルスキーのあとから、ポゴージンが出てきた。
「いまのところ、ガラベジャン少佐とプレトネフ中佐です」
「では、ふたりのところへ連れていってくれ。あのNATO軍は、ここでなにをしているんだ?」
「それが……」アンネンコフスキーはいまにも失神しそうなようすで、「いろいろと緊張がありまして。このなかでなにが起こったのか、だれにもわからなかったものですから。その、なにがあったんです?」
「いい質問だ」とミルスキーはいった。「たぶん、あとになればわかるだろう。当面は、わたしも無事だし――ポゴージンも無事だ。キャンプにいかねばならんといったが……それは第四空洞のキャンプか?」
「そうです」
「ではいこう。それと、わが軍の兵がここにいるのはどうしてだ?」
「将軍を待っていたんです」
「それなら、わたしといっしょに引きあげだ」

「わかりました」
列車に乗ると、ミルスキーは目を閉じ、頭を壁にもたせかけた。――おれは死んだんだ、と彼は思った。それがわかる。おれの一部は失われ、置き換えられた。ぱっくりあいた溝に、泥をつめこまれたようだ。とすると、おれは新しい人間ということになる。おれは死んで、また生きかえった。新しい人間として。だが、かつての責任はそのままだ。
彼は目を開き、アンネンコフスキーを見やった。少佐は恐怖に近い表情を浮かべてこちらを見ていたが、すぐにそれを押し隠して、弱々しげにほほえんだ。

54

「では、まとめてみよう」とラニアーがいった。彼らはふたたびパトリシアの部屋に集まって、彼女から放浪体についての話を聞き、みんなの共通行動方針を固めたところだった。「われわれは客だが、厳密にはそうとはいいきれない。われわれは保護されている。ということは、われわれの立場が、囚人のそれに近いということだ」
「データ・サービスも検閲されているしね」とファーリー。
「それに――もしパトリシアの聞いたことが本当なら――わたしたち、もうじき名士よ」キャロルスンもいった。
「その放浪体は、〈ストーン〉が地球にもどることを望んだ者がいるかどうか、話したかい?」

とラニアー。

「いいえ。でも、それはないと思う。わたしの受けた印象が正しければ、その小ささゆえにだれにも気づかれずに、〈ストーン〉がずっと宇宙を漂いつづける、とストーン人は思っていたみたい。とくにどこにいくという目的はなかったようよ。〈通路〉というものをこじあけたおかげでね」

「すると、この状況におけるわれわれの立場はどうなる?」ラニアーが問いかけた。「ラリー? ラノア?」

「こっちの望みなど、問題にされまいが? われわれになにができる?」ハイネマンが両腕を広げて問いかえした。

「考えてみて、ラリー」と、ハイネマンの膝に手をのせてキャロルスン。「わたしたちは名士なのよ。わたしたちの要求をあっさり無視できるはずはないわ」

「まさか! 向こうは、おれたちを洗脳しさえすればいいんだぞ。やつらはもう人間でさえない。少なくとも一部はな!」

「いいえ、人間よ」パトリシアがいった。「好きな形態をとれようと、どんな才能や能力を持っていようと、彼らがわたしたちの子孫でないということにはならないわ」

「神さま」かぶりをふりながら、ハイネマン。「こいつはおれの理解を超えてる」

「そんなことないわ」キャロルスンが執拗にいった。「わたしに理解できることなら、あなたにもできるはずよ」そういって、ハイネマンの膝をつねる。

「全員一致でことにあたれば、譲歩を引きだせる範囲も大きくなる」とラニアー。「われわれが

名士であるのなら、それどころか好奇心の対象であっても、われわれの処遇については多少の希望が通るはずだ。それに、それほどではないにしろ、〈ストーン〉にいるみんなの処遇についてもだ」
「で、どんな要求を出すの？」キャロルスンがたずねた。
「第一に、データ・サービスの検閲をやめることよ」パトリシアが提案した。
「おれは使ったことさえないがね」とハイネマン。
「それから、あらゆる手段を使って、〈ストーン〉との通信許可を獲得するんだ」ラニアーがみんなを見まわしていった。
「異論はないだろう？」
全員がうなずいた。
「それと、必ず全員で行動させるよう約束させなければ。ばらばらになるのはまずい。もし別れさせられそうになったら、抗議して――」
「ハンストでもして？」ファーリーがいった。
「なんでもいいから効果のあることをするんだ。ぼくの見るところ、われわれのホストは人食い鬼じゃないし、われわれが不当な待遇を受ける恐れもなさそうだ――たっぷりとフューチャー・ショックをつきつけられて、多少眩惑されるかもしれないが……それは乗り越えられる。みんな、〈ストーン〉であのつらい時を生きぬいてきたんだ。今度もやりぬけるさ。だろう？」
「もちろんよ」上司に対する敬意以上の感情を顔に浮かべて、ファーリーがいった。パトリシアはふたりをちらりと見やり、以前にラニアーが鋭くて陽気な笑みだと思った、けんのある笑顔を

浮かべた。そして、真剣な目で、じっとふたりを見つめた。
　そんな三人を、今度はキャロルスンがしげしげと見つめた。
「オルミイがラウンジにきてるわ」とパトリシアがいった。「ラーム・キクラも連れてきているの。こちらの話しあいがおわるまで待っててといっておいたけれど——わたしたちと話したがってるわ」
「じゃあ、意見はまとまったと思っていいな？」とラニアー。
「もちろんだ」と、ハイネマンが穏やかにいった。
　オルミイとラーム・キクラがパトリシアの部屋にはいってきて、一同のまんなかにくると、あぐらをかいてすわった。ラーム・キクラはにこやかにほほえんでいた。ラニアーの見たところ、パトリシアとほとんど同じくらいの年格好だが、ほんとうはずっと年上にちがいない。
　ラニアーがみんなの要求を伝えた。驚いたことに、オルミイはほとんど全部の要求を飲んだ。ただし、〈冠毛〉との連絡だけは認めなかった。「それだけは、いまのところ承諾するわけにはいきません。たぶん、あとでならいいでしょう。データの無検閲アクセスはだいじょうぶですが、そのまえに、少し教育を受けてもらわなければなりません。データのすべてにアクセスするには、きわめて複雑な作業を通さなければならないし、重い責任もかかってきます。悪用する可能性も出てきますからね。手はじめに、教育者の助けを借りることを承諾しますか？　教育者には、ラーム・キクラは影体（ゴースト）を割りあてることができます。彼女の人格に基づいた部分人格です。教育者はみなさんが検索する手助けをし、助言も与えます。わたしたちの若い市民も、つねにこれを使っていますよ」

「それはどんなことにでもアクセスさせてくれるの？」パトリシアがたずねた。
「それは難しい。市民でさえ、シティ・メモリーのすべてにアクセスすることはできないんです。訓練を受けていない意識にとっては危険なものも――」
「たとえば？」ハイネマンがきいた。
「人格を変えたり、異なる人格同士を融合させるプログラム、精神高揚プログラム、あるいは、さまざまなハイレベル・フィクションや理論的なプログラムなどです。あとでならのぞくこともできるでしょうが、当面、教育者はみなさんを守り、不注意によって難しすぎることにふれることを防ぐでしょう」
「でなければ、やさしすぎることにね」キャロルスンがいった。
「それでもわたしたち、純粋体でいられるの？」パトリシアがきいた。
「ある程度は損なわれます」オルミイが認めた。「しかし、もうテストはすませましたし――」
「すませた？」ハイネマンがびっくりした顔でいった。
「そうです。お寝みのあいだに」
「なにかをされる場合、承諾を得てからにしてもらうべきじゃないかな」顔をしかめて、ラニアー。
「承諾はとりました。みなさんの睡眠人格が、調査を受けいれたのです。睡眠人格の同意がなければ、わたしたちはなにもしません」
「なんてことなの」キャロルスンがいった。「睡眠人格というのは、いったいなに？」
ラーム・キクラが両手をあげて、「たぶんもう、なぜみなさんの法的立場が、子供、もしくは

青少年のそれであるのか、おわかりになったでしょう。みなさんは単に、アクシス・シティが提供できるすべてを受けいれる準備ができていないだけなのです。どうぞお気を悪くしないでください。わたしがここにいるのは、可能なかぎりいつでもみなさんの力になるためであって――邪魔をしたりじらしたりするためではないのです。いっぽうで、みなさんを守ることもまたわたしの役目であり、そのためには、どれだけ抗議をされても、認めるわけにはいかないこともあります」

「それが代理士の役目なのかね？」ハイネマンがきいた。「つまり、代理士は弁護士かなにかなのか？」

「代理士はガイドであると同時に、法の代表者でもあります」とラーム・キクラ。「わたしたちは、わたしたちに割り当てられた影体がシティ・メモリーその他で行なう調査結果をもとに、依頼者の行動方針についてアドバイスします。そのために、いろいろと特典が与えられていて――たとえば、さまざまな私的データベースにアクセスすることができます。そのデータベースの内容をもらすことはできませんが、そこから得た知識を――制約はありますが――利用して行動することができます。代理士のなかには、わたし自身もふくめて、みなさんの時代なら心理学的カウンセリングと呼ばれていたであろう役目をはたす者もいます」

「基本的に」とオルミイが引きついで、「セル・ラーム・キクラは、上層部の特権濫用からみなさんを守る役割も持っているのですよ。ほかになにか質問は？」

「あるわ」ラニアーにうかがうような目を向けながら、キャロルスンがいった。ラニアーがうなずくと、キャロルスンは疑問を口にした。「〈ストーン〉に――〈冠毛〉にいるわたしたちの仲

間は、どうなるの？」
「まだわかりません」とオルミイ。「その決定は、まだなされていません」
「みんなは適正な待遇を受けられるかしら？」ファーリーがきいた。「アメリカ人も、ほかの国の人間も？」
「害をこうむらないことだけは保証できます」とオルミイが答えた。
「いつになったら仲間と連絡がとれるか、見当はつくかい？」
オルミイは、胸のまえで両手の人差し指をとんとんとたたきあわせるばかりで、なにもいわなかった。
「どうなんだい？」
「いまもいったように、それについてはまだ決定されていません。即答はできかねます」
「できるだけ早く知りたいんだがな」とラニアー。
「それはだいじょうぶです」オルミイが請けあった。「いままでみなさんは、保護され、隔離されてきました。しかし、みなさんの存在がもはや秘密ではなくなったいま、それもいくぶん変わるでしょう。どれだけ人気が集まるかは、おわかりのはずです。式典や視察ツアーも行なわれます。たぶん、注目を浴びすぎて、へとへとになってしまうでしょう」
「たぶん、ね」ラニアーが疑わしげにいった。「ところで、セル・オルミイ。きみが一個人であるとすればだよ——どうやらそうらしいし、うしろで糸を引いている者も見えないが——われわれ五人の動きを、どうやって見張るつもりだ？」
「ミスター・ラニアー。わたしと同じように、あなたにもよくわかっているはずです。いまは手

のうちをすっかり見せる時期ではありません。じれったいとは思いますが、みなさんはまだここのことがよくわかっていないし、無理に説明しようとしても、混乱するだけです。いずれは必ず、すべてをお話しします。しかし、まずはこのシティとここの文化を、いろいろ見てもらわなければなりません。これからは、自由にデータ・サービスが使えるのですから——」
「比較的自由に、だろう」とラニアー。
「そう、保護下での自由です……これからの二十四時間は、知識を〝つめこむ〟ことに——このイディオムでよかったですか?——専念なさりたいところでしょう」
「ほかになにか制約は?」
「あります」とオルミイ。「この居住区画を出ることはできません。みなさんのスケジュールが決まり、ネクサスがみなさんの……〝デビュー〟の手配をするまでは。そのまえに、アクシス・シティについて充分な知識を身につけ、少なくとも少しはわたしたちの生活様式を憶えられたほうがいいでしょう」
オルミイは質問はないかと、眉をつりあげ、ひとりひとりの顔を見まわしたが、だれも質問しなかった。ラニアーは首のうしろで両手を組み、長椅子の背にもたれかかった。
ラーム・キクラが、いま立っているところから動かずに、ピクターをプログラムした。「さあ、これから、わたしの人格に基づいた教育者が現われます。みなさんのどの部屋からでもデータ・サービスが使えますし、教育者が利用のお手伝いをします。手はじめに、シティ投影の説明からはじめるのがベストでしょう……それでいいですか?」
七人は黙ったまま、おそろしくリアルに映しだされた、アクシス・シティのイメージを見つめ

た。映像の視点は、特異線――フロー――のすぐそばを舐めるようにして、北からシティに近づいているらしい。いくつか、黒いシールドをくぐりぬけた。
ついで視点は、〈道〉の壁に大きく近づき、おびただしい光が流れる車線の上、数百メートルの高さに浮かんだ。ハイネマンの体がぴくっと動いた。眼下に走る無数の車線の上を、戦車に似た円筒群が高速で走っていく。ひとつひとつの円筒には、先端に円状に配置されたサーチライトがならんでおり、強烈な光を前方に投げかけている。側面には三本の、光の帯があった。ずっと向こうには、幅四キロのゲート・ターミナルが、四方八方から流れこんでくる何千という円筒を飲みこんでいる(つかのま、視覚的な補助説明が、ターミナルの内部を映しだした。積層する切り替えポイントの迷路のなかでは、円筒群が送り先を変更されたり、荷物揚げ降ろしのために倉庫に誘導されたり、ゲートに向かうためにその中身をべつのコンテナに移し替えられたりしていた。ゲートそのものは、これまで彼らが見たことのあるものよりもずっと広かった。縁が階段状になった、少なくとも直径二キロはある穴だ。それは露天掘りの坑道に似ていたが、ずっと正確な円形で、無数の機械で埋めつくされていた)。
アクシス・シティは、どの角度から見ても壮観だったが、〈道〉の表面近くから見た眺めは、まさに圧倒的だった。ピクターはまずシティの最北端を強調し、その機能を説明した。それがおわると、視点は南に移動した。
シティ最南端には、マルタ十字の形をした延長部があった。その向こうには、ほとんどくっつくようにして、ふたつの立方体がある。フローは十字の中心を貫き、さらにふたつの立方体をも貫いていた。ここにはシティをフローにそって動かすための動力源、推進装置、誘導装置などが

あった。フロー上のシティを動かし、またチューブライダーを推進させるその力は、シティに大量のエネルギーをも供給していた。ふたつの立方体のなかには発電機があって、特異線と交差するタービンの〝回転翼〟が、空間変形によって回転するのだ。

（いったいエネルギーは、どこからくるのかしら？　とパトリシアは思った。そもそも、この疑問には意味があるのかしら？）

ふたつの立方体の北には、ワイングラス型をした緩衝帯（バッファー）があり、その広いほうの面が、回転する円筒——彼らの居住区のあるアクシス・ネイダーを向くように配置されていた。アクシス・ネイダーは、シティでもいちばん古いセクションだという。〈冠毛〉から最後に引きあげてきたネイダー正教徒が、アクシス・ネイダーに移り住んだために、ここはネイダー教徒の一種の巣窟となったらしい。

当時増加の一途をたどっていた新形態たちは、より新しい、したがってより好ましい住環境の整った、北の中央シティやその他の自転円筒に移り住んだ。アクシス・ネイダーは自転することによって遠心力を発生させ、その最外層において〈道〉と同じ力がかかるようになっている。その人口の大半はまだネイダー正教徒で、いうまでもなく、ほとんど全員が通常形態をとっていた。

が、アクシス・ネイダーの北にある中央シティは、見ただけで目のくらむような形状をしていた。立方体が幾何学的に歪んでいくさまに、ラニアーは好奇心がうずきだすのを覚えた。立方体の各面は、ひとつずつずんぐりしたピラミッドを支えており、〝階段〟がたがいに対して少しずつ回転して、半螺旋を作りだしている。全体構造は大きく、直径十キロほどの球にかろうじて収まるほどだ。二十世紀の画家、M・C・エッシャーが、建築家のパオロ・ソレリと共作してバベ

ルの塔を造ったなら、こんな形になっただろう。あらゆる点で、中央シティはアクシス・シティの代表的存在だった。〝歪んだピラミッド〟のモチーフは、ここでは普遍的なものらしい。ゲート・ターミナルも、そういえば同じ形をしていた。

中央シティのさらに北には、アクシス・ユークリッドがあった。ここには、ゲッシェルおよびネイダー教徒シンパの両派からなる、新形態と通常形態が混成で住んでいた。アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドはアクシス・ネイダーよりもひとまわり小さく、アクシス・ネイダーとは逆方向に自転していた。

ついで映像の視点は、アクシス・ネイダーの南端につきだした、マルタ十字にもどってきた。十字の中心には、ドッキング施設があり、ラニアーたちの破壊されたチューブライダーと同じ機能を持つ、しかしはるかに大きい、ずっと洗練された乗り物が結合していた。フローシップと呼ばれるその乗り物は、長さが約百メートルはあり、中央部をぐっとしぼったオカリナのような形をしていた。境目の両側の船体は、それぞれのっぺりとして窓もなく、いっぽうは輝く黒灰色、もういっぽうは青紫色をしている。

イメージのそばに、説明と数値が現われた。そのフローシップは、百隻以上もある同形船のうちの一隻で、秒速五千キロで移動できるということだった。ほかの船が通過するさいには、フローから離れて道を譲ることもできる。もっとも、フローは船のまんなかを貫いていたので、どうしてそんなことができるのか、さっぱりわからないとハイネマンはいった。この船はまた、小人数が〈道〉の床に着陸したり偵察に出たりするときに使う、小型艇も搭載していた。

〈道〉の表面付近には、ラニアーたちが接近してくるとき見かけた、巨大な円盤がいくつも浮遊

していた。これは貨物や近距離移動の乗客を運ぶものだそうだ。最後に、金と銀のアーミラリー天球が現われて、イメージによる旅はおわった。
「セル・オルミイ」とラニアーがいった。
「なんです?」
「われわれは客なのか、それとも捕虜なのか?」
「正直いって、どちらでもありません。だれにきくかにもよりますが――そして、きかれた相手がどれだけ率直に答えるかにもよりますが――あなたがたは資産、もしくは負債なのです。それは憶えておいてください。これから三回、レセプションが予定されています。ひとつめはヘクサモン・ネクサス議事堂で行なわれるもの。ふたつめはフラントの母星、ティンブルで開かれるもので、ここでは大統領に会えるはずです。三つめは、新たにゲートの開かれる、ポイント1.3×9で予定されています」
ラニアーはゆっくりと立ちあがり、鼻筋をつまんだ。「なるほど。われわれの存在は公表されており、いまではプロパガンダのために利用されているというわけだ。われわれがここに慣れるには、何年もかかるだろう。もしかすると、結局慣れることはできないかもしれない――補助脳もないことだし。しかし、きみは少なくとも、前よりは手の内を見せてくれた。われわれはもう、〈大破滅〉以前の汚れなきホモ・サピエンスの標本ではないわけだ」自分がなにをいおうとしているのかよくわからなくなり、いったんことばを切って、「しかし――」
「わたしがなにをいっても、あなたはけっして満足しませんよ」オルミイがさえぎっていった。
「どれだけ説明したところで、あなたに理解できない要素は残る。そして、たしかにあなたのい

うとおりです。お気づきかどうかは知りませんが、わたしはいちども、自分を信用してくれといったことはありません。信じろといってもそうそうは信じられないでしょうからね。しかし、こんどだけはべつです。わたしたちがおたがい、大いに力になれることは明らかなはずです。そちらはお仲間たちと連絡をとりたい――ネクサスはネクサスで、みなさんの存在そのものと、それが意味するものをしっかり把握しなければならない。これからの数日間で、みなさんは〈道〉やわたしたちのここでの務めについて、多くのことを知るでしょう――データ・ピラーが語れる以上のことをね。わたしもその手助けをします。シュリー・ラーム・キクラとわたしが、力のおよぶかぎり全力をつくして、みなさんの弁護役を務めます。なによりも、みなさんが最高の利益を得ることが、すなわちネクサスのためにもなることだと信じているからです」

ラニアーはほかの四人を見まわし、とくにファーリーを、ついでパトリシアを、ほかのふたりよりも長く見つめた。ファーリーは力づけるようにほほえんだ。パトリシアの表情は、判然としないものだった。

「納得のいく範囲内で、協力はする。あと七日間だ」とラニアーはいった。「双方の利益といいながら、われわれにとってなんのプラスにもならないことがはっきりしたら――それに、〈冠毛〉と連絡する許可がおりなかったら、そこで協力はおわりだ。もっとも、この脅しにどの程度の効果があるかはわからない」ひとつ、深々とため息をついて、「なにしろきみたちは、ぼくの知るかぎり、コンピューターを使ってわれわれのイメージを作りだし、させたいようにふるまわせることもできるんだからな。あるいは、そっくりのアンドロイドを造ることだってできるだろう。ともかく、ぼくらの条件はそれだ」

「わかりました」とオルミイ。「七日ですね」
オルミイとラーム・キクラは部屋を立ちさった。ハイネマンは前後にゆっくりと頭をふってから、ラニアーを見やった。「で?」
「勉強をつづけるのさ」とラニアー。「そして、時期を待つんだ」

ホフマンは、近ごろ〝厚紙のアパート〟と呼んでいる女性寮の自室で、小さな鏡の前に立っていた。とくにやつれたようすはない。この何日か、睡眠時間が増えているせいだろう。
自殺率は減っていた。同胞たちは——ホフマンは西側の軍人や民間人たちを、いつもそのように考えていた——運命を受けいれたらしく、シャトルやソ連の重輸送船の一部を改修して、月への飛行が可能か調べようという計画も軌道に乗りだしていた。なかにはわずかながら、地球へ探険隊を送ろうという者たちもいた。その先鋒が、ゲアハルトとリムスカヤだった。
リムスカヤは驚くべき速さで、みずからのいう〝堕落〟から立ちなおっていた。それまでひどく混乱していた彼は、とうとう——少々逆説的だが——自分にやさしくするのはやめてくれ、といいだしたのだ。「わたしがみんなにしているのと同じように、たのむからきつい仕事を与えてくれ」
ホフマンはただちに、リムスカヤに兵站業務を預けた。その方面でなら、リムスカヤも充分切りまわせるという判断である。タフで(しかも頭の切れる)落ちこんだ男には、食料と補給品の管理を任せるにかぎる。リムスカヤならソ連人ともうまくやっていけるだろうし、その重荷を彼女の肩からとりさってくれるだろう。結果的に、リムスカヤもいままでは、余暇に——余暇などほ

とんどないも同然だったが――ゲアハルトと地球探訪計画の相談をするまでになっていた。人にハードな仕事をさせる場合の、これがホフマン一流のやりかたなのだ。リムスカヤは、新しい仕事と、ぐっと広がった責任の重みに、はつらつとしているようだった。

いまのところ、ホフマンの唯一の心配は、チューブライダーで〈通路〉の奥に向かった探険隊の安否だ。

三人の政治将校が行方不明となり、ミルスキーがもどってきてからというもの、ソ連側はどんどん協調的になってきている。女性不足の問題はあいかわらずで、レイプが二件、あわやというところまでいった事件が数件あったが、思っていたほど多くはない。NATO、ソ連軍ともに、兵士の多くが、女性たちに小火器を携帯させているからだ。いまのところ、女性がそれを使うような事件は起きていない。

一時間後、第四空洞で、ミルスキーと会見する予定になっていた。ミルスキーがもどってきてから、彼と会談するのはこれで二度めだ。協議事項はたくさんあったが、難航しそうな気配は少しもなかった。

ベリル・ウォリスと海兵隊員二名を連れ、ホフマンはゼロ度線に乗って第一空洞から第四空洞にはいり、NATOコンパウンドでトラックに乗り換えた。ミルスキーが留守のあいだ、ソ連の宿舎はさらに三棟が増えていた。ひとつは湖岸にそって長く伸びたもの、あとのふたつは島に設けられたものだ。島の施設と湖岸との連絡は、丸太をつなぎあわせただけの、巨大なふたつの筏で行なわれている。ボートの建造が、なかなか進まないためだ。原木を製材する設備がまだなく、設備完成まであと二ヵ月はかかりそうで、ボート建造班には、いまのところ、粗雑な木材しか手

にはいらないのである。
　森をぬって自転方向に進むことが、ホフマンには大の楽しみだった。ソ連の〝内陸〟コンパウンドは、九十度線の近く、NATOのコンパウンドから四十キロ離れたところにあった。地形的には第四空洞でもいちばん険しい場所のひとつで、周囲を深い森とストーン人の作った道路が囲いこんでいる。やがて、森をぬって進むトラックの窓を、雨粒がそっとたたきはじめた。
　ウォリスはさかんに、第六および第七空洞の研究活動を再開しようと語っていた。ホフマンは一応耳をかたむけ、うなずいてはいたが、その話題にはなんとなく興味が湧かなかった。ウォリスは数分間しゃべりつづけたあと、それを感じとり、黙りこんだので、ホフマンはより深く、夢想にふけれるようになった。
　ソ連の内陸コンパウンドは、かつてのアメリカ西部の砦に似ていた。高く盛りあげた土塁の外側に、枝を落とし、樹皮をはいだ背の高い若木の塀を張りめぐらして、二重の囲いを造るという構造である。トラックが近づいていくと、ソ連兵たちが木のゲートを開き、トラックが通過すると、ただちに閉めた。
　最初にホフマンの目にとまったのは、絞首台だった。それは草木をきれいに刈りとって、頭ほどの大きさの丸石で囲った、四角い区画の中央に立っていた。ありがたいことに、ぶらさがっている者はいなかった。
　敷地内には、丸太の建物がいくつか建築中だった。いちばん意欲的なものは、むかしのロシアふうの邸宅を模した建物で、完成すれば三階建てになるはずだという。
　兵士たちが手で合図して、割り丸太で造った細長い建物の裏手にトラックをとめるようにと指

示した。その細長い建物の東翼の一画で、ミルスキーは形式ばらずに彼らを迎えいれた。建物のなかには、仕切りの壁がなかった。そのため、ほかの作業区画や寝袋が、素通しで見えた。ミルスキーはホフマンとウォリスと握手をすると、カンバス地の椅子にすわるようにいった。海兵隊員たちは、ソ連兵たちとならび、いかめしい顔で外に立った。

ミルスキーはふたりに、紅茶をすすめた。「そちらの兵站部からの配給品なのは心苦しいが――これは上等な紅茶ですな」

「キャンプの建設は着々と進んでいるようですわね」とホフマンがいった。

「英語で話しましょう」とミルスキー。「わたしも練習する必要があるのでね」いいながら、黒っぽい琥珀色の紅茶を、軽量プラスティックのカップにつぎわける。

「けっこうですわ」とホフマン。

「キャンプの建設状況については、わたしが誉められることではありません」ミルスキーがいった。「作業の大半がなされていたとき、わたしがここにいなかったことはごぞんじのはずです」

「みんなが興味を持っていますわ、そのとき……」ホフマンはいいかけて、ことばをにごした。

「そのとき？　なんです？」

ホフマンはほほえみ、かぶりをふって、「気になさらないで」といった。

「いや、ぜひうかがいたい」ミルスキーが執拗にきいた。「みんな、なにに興味持っているんです？」

「あなたが失跡していたあいだのことです」

ミルスキーはふたりのあいだの宙を見つめ、おもむろにいった。「死んでいたんですよ――そ

れからふたたび生きかえった。それで答えになりますか？」ホフマンが口を開く前に、ミルスキーは先を制して、「いや、ならないでしょうな。それでは、わからない、といっておきますか。あなたがたばかりでなく、これはわたしにとっても謎なのです」

「ともあれ」笑みを浮かべて、ホフマンがいった。「もどってきてくださって、わたしたちもほっとしています。かたづけなければならない懸案はたくさんありますから」

協議事項の第一項は、重輸送船の装備と補給品の荷下ろしについてだった。〈大破滅〉以来、輸送船はずっと侵入孔のドックに接舷したままになっている。乗員たちは下船を認められていたが、積荷の荷下ろしについては、まだ協議されないままになっていた。数分のうちに、ホフマンとミルスキーは満足のいく結論に達した。すべての武器は収容エリアの倉庫にしまいこみ、厳重にロックしたうえで、ソ連・NATO両軍の兵員が警備に立つ。その他の物資は、ソ連領である第四空洞コンパウンドにまわされる。「補給品と交換するためにも、その物資は必要ですからな」とミルスキーはいった。

つぎの協議事項は、ソ連科学者チームの待遇問題だった。ホフマンは、NATOグループに残りたい者はそれを認めるべきだと主張した。ミルスキーはちょっと黙って考えてから、うなずいた。そして、目を大きく開き、顔の筋肉を緊張させて、「わたしの統治に不満のある人間は、これ以上いりませんからね」というと、すばやく二度、まばたきをした。

ホフマンは手もとのノートを見おろした。「今回は、前の会談よりもいっそうスムーズにいきそうですね」

ミルスキーは身を乗りだすと、両膝の上に両肘をつき、手を組んでいった。「わたしはもう、

論争にはあきあきしました。わたしの冷静さは、死者のそれなんですよ、ミス・ホフマン。同志の一部に不安を抱かせるにはしのびない」
「さっきから、死んだ死んだといってらっしゃいますが——それでは意味が通じませんわ、将軍」
「たぶん、そうでしょう。だがこれは、真実です。わたしもすべてを憶えているわけではない。しかし、頭を撃たれたことだけは憶えています。ポゴージンも、たしかにやつらが——」両手をふりあげて、「いわずともわかるでしょう、わたしを殺したのが——頭の半分を吹きとばしたのがだれであるか」片手を頭の右半分でぱっと開き、「わたしは殺されたのち、蘇生させられた。武器を持っていなかったことを感謝しますよ。さもなければいまも、ベロジェルスキーやヴェルゴルスキーやヤズィコフたちと同じところに安置されていたでしょうから」
「で、彼らはいまどこに？」
「はっきりとはわかりません。たぶん拘置所のなかでしょう。冠毛シティはいまも、その法を執行する手段を持っているようです」
「たぶんそんなことだろうと思っていました。ということは、冠毛シティにはいまなお意志決定と判断の能力があり、それに基づいて行動する能力もあるということですね」
「それゆえに、われわれは慎重に行動しなければならない。でしょう？」
ホフマンはうなずき、協議事項にもどった。一件、また一件と懸案はかたづけられていき、四十五分のうちに、予定の協議はすべておわり、交渉が成立した。
「楽しい会談でした」立ちあがり、片手をさしのべて、ミルスキーがいった。ホフマンがその手

をしっかりと握りかえす。ミルスキーはホフマンとベリルのふたりにつきそって、トラックまで送っていった。
「あの絞首台はなんのためだったんでしょうね？」トラックが走りだし、自転の向きとは逆方向に向かって、ゼロ・コンパウンドにもどる途中、ウォリスがきいた。「あれをどう解釈したらいいんでしょう？」
「ミスター・ナイスガイばかりじゃないものね」ホフマンがものうげに答えた。「きっと、ただの警告なんでしょう」
「なんだか気味が悪かったですわ、あの人」とウォリス。
ホフマンはうなずき、「同感ね」といった。

55

シュリー・ラーム・キクラとフラントの案内で、五人はアクシス・ネイダーの居住区から、フロー縦貫筒(パセッジ)に連れられていった。円筒型のアクシス・ネイダーの、自転の中心部である。そこへの降下には、全長三キロにおよぶ中空のシャフトが利用された。シャフトの乗り心地は、冠毛シティの高層アパートのエレベーターとたいして変わらず、したがって——ありがたいことに——それほど違和感はなかった。
一行のなかでいちばん降下をいやがったのは、キャロルスンだった。彼女は崖っぷちが大の苦

手なのだ。高所恐怖症ではなく、崖縁恐怖症というやつである。しかし、ラニアーとラーム・キクラにささえられて、キャロルスンはなんとか耐えた。「わたしはよぼよぼのおばあちゃんじゃないんですからね」と、降下しているあいだじゅう、キャロルスンはぷりぷりしていったものだ。
フロー縦貫筒は、アクシス・シティを貫く、直径半キロのパイプである。そのちょうど中央を、特異線が貫いている。彼らの通り道には、何十万という市民たちが、壁にそって群がり、浮遊していた。もっともそれは、非常に統制のとれた群衆だった。ラーム・キクラとフラントが、縦貫筒の技師となにごとかを相談した。技師は女性の通常形態で、オルミイと同じように完全自足型のため、鼻孔がなかった。
ついで五人は、おおぜいの公務員を統轄する、アクシス・ネイダーの管区長に紹介された。管区長は半白の髪をした、いかにもネイダー正教徒といった趣きの人物で、よくめだつ強壮な顔をしており、左肩の上にむかしの日本の日章旗のイメージを立てていた。見たところ、東洋の血は一滴もはいっていないようだが、外見は人工的に変えられるし——たぶん変えてあるのだろう——五人のだれにも、それを聞くだけの余裕はなかった。「この呼び名になじみがないようでしたら、市長と呼んでくださってもけっこうです」と、管区長は完璧な英語と中国語でいった。このふたつのことばは、いまやアクシス・シティ四管区じゅうの公用語となっていて、どちらも先祖に持たない者たちのあいだにも普及していた。
フローには甲虫のような、黒い保守用フローシップが載っていた。チューブライダーを排除したV／STOLとそう変わらないが、もっと図体が大きく、広くて設備の整ったキャビンがついており、船内には珍しい（しかもイメージではない）赤の幔幕が張られていた。ピクターがフロ

ーシップのまわりに投影する恐ろしくリアルな花火のあいだを、ラーム・キクラと市長とフラントが入口の脇に立って、五人に先に乗るようにうながした。操縦装置のうしろに半円形に配置された椅子にすわると、彼らは見えない力で、そっと固定された。
操縦桿は――両手の指を受ける溝のついた、Y字型の黒いピラーだ――市長みずから握った。ハッチが音もなく、絞るように閉まった。
ほのかな赤いパルスにのって、フローシップはフローの上をすべりだした。そこらじゅうで、いまも花火が咲き乱れている。イメージだから無害だが、ときに群衆と重なるときにはひやりとさせられた。
「ピクターでみなさんを見るだけでは、ものたりないんですよ」とラーム・キクラがいった。
「人間というものは、そんなに変わっていないのでしょう。もっとも、あそこの群衆のうち、たぶん三分の一は影体です。みずからのイメージを投影しつつ、その中心にモニターを置いているんです。見られながら見ているわけですね」
「アリスはどこだい？」ハイネマンがうなるようにいった。
「どのアリスです？」ラーム・キクラが問いかえす。
「アリスはアリスだよ。ここはワンダーランドとしか思えん」
「だれかいない方でも？」市長がふりかえり、心配そうな顔でたずねた。
「ちがいます」とフラントがいって、例の歯ぎしりのような音をたてた。
三十分後、フローシップは、アクシス・ネイダー付近から中央シティまでの、十五キロの旅路をおえた。中央シティでは、群衆はもっと緊密で、もっと無秩序だった。ひとりひとりが――新

形態が圧倒的に多い——ゆっくり進む保守用フローシップの進路をはばむように覆いかぶさり、フローシップ前方に投射されだした牽引フィールドを、そっとかすめていく。

パトリシアはほとんど口をきかず、辛抱強くすわったまま、ときおりラニアーをちらちら見やっていた。ラニアーの顔には、なかば当惑したようなしかめ面が張りついていた。一部の新形態の姿を見たとたん、その口がわずかに開いた。蛇のようにとぐろを巻いた細長い体の者もいれば、銀色に光り輝く者もおり、そのほか魚、鳥、プランクトンの珪酸塩が殻状についた放散虫の球のような者と、通常形態の基本的な形態とは似ても似つかない、さまざまな姿の人間たちがいる。

ファーリーはぽかんと口をあけ、魅せられたようにその姿を眺めていたが、やがて、「わたし、さぞかし乱暴に見えるでしょうね」といった。が、そこで仲間を見まわして、だれにも自分のいったことの意味が伝わっていないのに気づくと、「こういうときは、なんていえばいいの？」とラニアーにきいた。

「見当もつかないな」愛情のこもった笑みを返して、ラニアーが答えた。ファーリーがその肩に手を置いた。パトリシアはシートのなかで、少し縮こまった。

これはなに？　とパトリシアは自問した。ちょっとしたジェラシー？　ポールへのうしろめたさ？　そもそも、どうしてラニアーがわたしに関心を持たなければならないの？　たしかにラニアーはわたしを捜しにはきてくれたけど——それは義務感からじゃないの。

パトリシアはその思いに関連する心の領域を閉ざした。激しい苦痛と不安と罪の意識に、進んで踏みこむ必要はない。

一行は保守用フローシップをあとにして——アクシス・ネイダーの市長とも別れ——今度は新

形態をとった中央シティの管区長と、こちらは通常形態のプレシアント・オイユ上院議員に案内されて、ヘクサモン・ネクサス議事堂に向かった。議事堂の広々とした円形の入口で、オルミイが待っていた。議事堂内を彩るのは、ただ混乱の一語につきた。通常形態・新形態とりまぜて、なかにはアメリカの旗を肩にピクトしている者もおり、中央の演壇のそばには、中華人民共和国とアメリカ合衆国の国旗が一枚ずつ、手でさわれそうなほどリアルに映しだされていた。

歓声と音楽、熱狂的な歓待。

ハイネマンが目をしばたたき、キャロルスンがその腕にしがみついた。オルミイとラーム・キクラの操る牽引フィールドに乗って、一行は奥へ運ばれていった。プレシアント・オイユがラニアーとパトリシアの手をとり――これほど美しい女性にお目にかかるのは、ラニアーもはじめてだった――中央シティの管区長がファーリーをエスコートして議事堂にはいった。

ラニアーの見るところ、上院議員のなかには――それともあれは、有体下院議員だろうか？――ハンマーと鎌をあしらったソ連国旗を立てている者もいた。ほどなく彼らは、ネクサス議事堂の中央へと連れていかれた。上院議員や有体下院議員たちは静まりかえり、すべてのイメージは消え去った。

ヒューレイン・ラーム・セイジャ議長が演壇のもとへやってきて、ネクサスに報告した。われわれの賓客は、〈道〉通商状況視察のため、まもなくフラント・ゲートに赴かれる。そのあとは、プレシアント・オイユ上院議員の案内で、いまもポイント1.3×9でゲート開きの準備にいそしんでおられる、彼女のお父君に会いにいかれる。

ラニアーは地球人の代表として、スポークスマンに選ばれた。シュリー・ラーム・キクラが――

持ちかけたのだ。

――ラニアー自身はやんわりと断わったのだが――彼の要求を持ちだすにはいい機会ではないかと

ラニアーは不安な思いで、牽引フィールドに乗って演壇へ運ばれていき、輝くアーミラリー・バンドをわたされた。

口を開く前に、まわりを――そしてうしろをも――見わたした。

「子孫に語りかけるというのは、容易なことではありません」と彼は話しはじめた。「しかし……わたしは子供をもうけたことがありませんから、みなさんのなかにわたしの血を少しでも引く方がいるとは思いません。もちろん、属する宇宙がちがうという問題もあります。そのへんのことを語りあっていると、はじめて飛行機を――あるいは宇宙船を見た、石器時代の原始人のような気分になってきます。わたしたちは本来属する場所と完全に切り離されており、これほど暖かく歓迎されているにもかかわらず、ここを故郷と呼ぶことはできません……」

目の隅で、パトリシアの目に恐怖と期待の中間の表情がよぎるのが見えた。あれはなんだろう？

「しかし、われわれが故郷と呼べる場所は、いまや破滅してしまいました。これはわたしたちの――わたしたちとみなさんにとっての悲劇です。みなさんにとって、〈大破滅〉という史実は遠いものでしょうが、わたしたちにしてみれば、たったいま起こったばかりの、おそろしく生々しい現実です。わたしたちはいまなおその記憶に、その経験に苦しんでおり、これから何年も、おそらくはこの先一生、ずっと嘆きつづけるでしょう」ふいに、いわなければならないことばが、何日も前から考えていたように――意識的にではないにせよ、おそらくそうしてきたのだろう――

──はっきりと浮かんできた。
「地球はわたしたちの故郷です。そして、わたしのみならず、みなさんの故郷であり、揺りかごでもあります。いまや地球は死と破滅に襲われ、わたしの友人や仲間たちの力ではとても復興のかなわない場所となってしまいました……。
　しかしながらそれは、みなさんの力をもってすれば不可能ではありません。もしわたしたちを歓待してくださるのなら、そしてこの議事堂には場ちがいなわたしたちの存在を歓迎してくださるのなら、わたしたちに手を貸してくださってもいいのではないでしょうか。地球は深刻にみなさんの助けを必要としています。おそらくみなさんは歴史を書きなおし、正すことができるのです。
　だから──いっしょに地球へいきましょう」自分でも声が震えるのを感じながら、ラニアーはいった。
　円形に配列された議席の最前列で、オルミイがいちどだけうなずいた。その向こうの、第二列では、大統領補佐官であり、大統領の代理として議会に出席していたオリガンド・トラーが、落ちつきはらった表情のまま、膝の上で両手を組んでいた。
「さあ、いっしょに地球へいきましょう」とラニアーはくりかえした。「みなさんの先祖は、みなさんを必要としているのです」

プレトネフはほうっと息をつき、斧を木の切り株につきたてると、赤く上気した顔を布きれでぬぐった。数メートル離れたところでは、でこぼこの残った丸太の山が、小屋に組み立てられるのを待っている。丸太同士の隙間につめる泥をこねるための受け皿を作ったのもプレトネフだし、岸辺のそばの木々を切り倒したのも彼だ。

そのそばでは、ガラベジャンとアンネンコフスキーが腕組みをし、真剣な顔つきで彼を見つめていた。

「すると、なにか」もういちどほーっと息を吐いてから、プレトネフは口を開いた。「もうたよりにできないほど、彼は変わってしまったというのか？」

「指揮に専念していないんです」とアンネンコフスキーがいった。「われわれになにもさせようとしない」

「なにをさせようとしない？」

「たとえばですよ」とアンネンコフスキーが語をついで、「ヴェルゴルスキーの追従者たちを、ただのきかん気の子供のようにあつかっているんです——危険分子としてではなく」

「賢明なあつかいじゃないのかね。進んで掃除をしようというやつらは、うちにはほとんどいないからな」

「問題はそれだけじゃない」アンネンコフスキー。「しょっちゅうコンパウンドをぬけだしては、電車とトラックを乗り継いで図書館にいき、混乱したようすで、ただそこにすわっているだけなんだ。彼は、脳に損傷を受けたのではないでしょうかね」

プレトネフはガラベジャンを見やった。「きみはどう思う、同志少佐?」

「以前の彼ではないですね」とガラベジャンもいった。「自分でもそれを認めています。それに、自分は死んだとずっといいつづけている。復活させられたのだと。どうも……筋が通らない」

「それでも彼は、パーヴェル・ミルスキー将軍なのか?」

「その問いになんの意味がありますか? 問うなら、彼はいいリーダーかどうかときいてほしい」とアンネンコフスキー。「あれなら、われわれのうちのだれでももっとうまくやれますよ」

「彼はずっとアメリカ人と交渉してきた……その交渉に、不手際があったか?」プレトネフがただした。

「いや」とガラベジャン。「ともかくも、つつがなくやっています」

「それなら、どこに不満を持つ必要があるのかわからんね。じきに正常にもどるさ。彼はひどくショックの大きい経験をした――なんだか得体の知れないやつをな。それで少しも変わらないと思うほうがおかしい」

アンネンコフスキーは眉をしかめ、かぶりをふった。「彼が交渉を有利に進めるという点には賛同しかねる。するべきでない譲歩をずいぶんしています」

「それに、きわめて役だつ譲歩もしているだろうが」とプレトネフ。「わかってるんだ。譲歩によっていろいろ合意が成立したおかげで、われわれはもうすぐ都市に移住できるようになる」

「彼はもう、本来の彼じゃない!」アンネンコフスキーが激昂していった。「彼のしゃべりかたは同じ人間のそれではないし――彼には少しも……一軍の将が持っているべき雰囲気がない!」

プレトネフはふたりの少佐を交互に見やり、それから目をすがめて、プラズマチューブをふり

仰いだ。「ヴェルゴルスキーやヤズィコフやベロジェルスキーなら、なにをしてくれたと思う？なんにもだ。事態を悪化させるのが、おちだったろう。おれたち三人も、殺されていただろう。おれがいいたいのは、知りあいの悪魔を、見も知らぬ悪魔と交換するなということさ。ミルスキーは悪魔でも、たちのいいほうだ」
「いまの彼は子羊ですよ、悪魔じゃなく」ガラベジャンが疑わしげにいった。「彼のことは友人だと思っていますが、しかし……」
プレトネフがうながすように眉をつりあげた。
「しかし危機にさいしては、どうふるまうか見当がつかない」
「危機はおわったと思うがね」とプレトネフ。「さあ、もうこんな話はやめにしよう。もういってくれ。波風を立てることはない。心静かに、小屋を建てさせてくれ」
ガラベジャンはうなずき、両手をポケットにつっこむと、踵を返して歩みさった。アンネンコフスキーはもう少しとどまって、プレトネフが丸太のでこぼこを削り落とすのを見ていた。
「われわれは、あなたをリーダーに、と思っていたんです」アンネンコフスキーが静かにいった。
「ミルスキー将軍に危害を加えるつもりはありません」
「おれは断わる」プレトネフが顔もあげずにいった。
「彼が完全におかしくなったとしたら？」
「ならんさ」とプレトネフはいった。
「どこにいる？」もう何十回めになるだろう、ミルスキーはまたしても叫んだ。

彼は図書館の椅子とデータピラーの列のまんなかで、こぶしをふりあげて立っていた。頰が真っ赤になり、濡れている。怒りといらだちで、首が震えていた。
「死んだのか、わたしのように？　彼らはおまえたちを処刑したのか？」
やはり答えない。
「おまえたちがわたしを殺したんだぞ！」
歯をくいしばって、呼吸を整えようと努力する。これ以上なにかいおうとすれば、ことばがごちゃごちゃの断片となって出てくることがわかっていた。心のなかの小さなシグナル——いまのおまえは本来の人格以外の部分を使っているぞと告げる、短く説明的な警告は、もう一歩で彼を崖っぷちから追い落としそうになっていた。なにを考えても、なにをしても、必ずこのメッセージにつきまとわれる。その境界を徹底的に見きわめようとして、夜になるとスリングにもぐりこみ、眠ろうとするのだが、彼の体は眠る必要さえなくなっていた。
自分の半生について憶えていることの大半は、論理的に再構築されたもののような気がしてならない。左半身全体が、生まれたばかりのように新しく、以前とはにおいまで異なるように感じられる。しかし、新しくなったのは体ではなく、左半身に対応する脳の半分なのだ。
最初の何日かのうちは、すべてうまくいくかもしれないと思った。ラザロよろしく死から甦ったことにも、いずれ慣れるだろうと思っていた。死から甦ったということで、ヴェルゴルスキーがミルスキーの頭を吹っとばしたというポゴージンの証言をやんわりと否定し、すべてをジョークでごまかしてしまうつもりもあった。だが、ジョークはうまく働かなかった。
図書館の外で警備に立っている兵士たちには、ここは墓場のように厳重に封印された、陰鬱な

場所に思えるのだろう。そしておまえは、その墓場でなにを見つけようとしているのか……？
やがて彼のジョークは、現実を陰気に反映するものとなった。いまでは、彼の統治をあしざまにいう者はいない。彼はもはや、大佐からいきなり特進させられて中将になった男でも、パーヴェル・ミルスキーでもなく、幽霊であり、第三空洞の闇の奥からやってきた見知らぬ者なのだ。迷信。それはとてつもない力となって、兵たちを掌握している。
そしていま、一週間の統治を経たのち、かつての自分たらんとする試みのはてに、彼は図書館へもどってきた。いまのいままで、彼はここにもどってくることを恐れていた。三人の政治将校がここで待っていて彼を出迎え、あの銃撃をくりかえすのではないかと恐れていた。
迷信だ。
館内の先客たちがみな出てくるまで、彼は待った。最初は中国人の男女、つぎにひとりのロシア人――ロドジェンスキー伍長。図書館がすっかりからっぽになるまで待ってから、彼は館内にはいった。
そしてひとり、猛々しく叫びつづけたのである。
彼は椅子にすわり、データピラーのコントロール装置を手探りし、いったんそのふたをあけ、また閉じた。やがて、とうとう五つの窪みに指先をさしこみ、「法律を」と命じた。「廃棄された都市の法律について知りたい」
図書館はいくつか質問を返し、彼が知ろうとしている問題を検索可能な範囲にまで絞りこんだ。
「殺人についてだ」と彼はいった。
詳細かつ豊富なデータが現われた。殺人者に対しては、そのような要請があった場合、精神鑑

定および人格矯正が施されるという。
「もし処罰を実行する者がいなかったなら?」
(これは処罰ではありません) と検索者の声が答えた。(これは罪の償いであり、社会への再適応処置です)
「法、警察、判事、法廷、心理学者、このいずれもない場合はどうなる?」
(容疑者は十九日のあいだ拘留され、その期間を過ぎてもなんの裁定もくだされず、また罪状が宣告されない場合には、容疑者は更生相談所の保護監督のもとに委ねられます)
「で、相談所もない場合には?」
(容疑者は誓約ののち釈放されます)
「どこに釈放される?」
(とくに指定がないかぎり、逮捕された場所に)
「逮捕された者はどこに拘留される?」
(救急医療施設として、充分な大きさを持つ建築物内で逮捕された場合——)
目の前に、北の壁のつぎめなしドアの向こうの、装備でつまったふたつの小さな部屋が浮かびあがった。
(——容疑者は当局に釈放されるか、事件後十九日が経過するまで、鎮静状態に置かれます。緊急の場合には、医療関係者が警察としての機能もはたします)
とすると、あと二日か。
ミルスキーは第四空洞にもどり、数時間ほど、指揮官であるふりをつづけた。ホフマンとリム

スカヤに会って、第二・第三空洞の都市を〝入植者〟に開放することについても、協議を重ねた。
それから、こっそりぬけだして、AKVを一挺とり、第三空洞にもどった。図書館には五人の人間がいた。またもやロドジェンスキーと、それから合衆国海兵隊員一名をふくむ、NATO側の人間が四人だった。ミルスキーは辛抱強く彼らが引きあげるのを待ってから、小銃を片手に図書館にはいった。
政治将校たちには、すでにいちどチャンスを与えた。もしあのまま釈放されれば、やつらはまた同じことをするだろう。これからの二日間、図書館に詰めて、辛抱強く彼らを待たなければ……。
それから数時間、図書館にはだれもはいってこなかった。その間に、彼は当初の計画が無意味であることに気がついた。図書館がこのままずっと来館者なしでいられるはずはない。しかし、処刑を——殺人を——するのなら、秘密のうちに行なわなければならない。さもないと、無意味というだけではすまなくなる。三人の政治将校の脳を、こちらがやられたよりも徹底的に破壊しないかぎり、彼らはまた復活する。そしてこちらは十九日間拘留され、またはじめから同じことのくりかえしになる——ゴーゴリの夢想すらもおよばない、狂気と暴力のくりかえしだ。
彼はシートの列の北の端にいき、三人の政治将校が意識をなくして眠る部屋の前に立って、銃口を床に向け、はげしく目をしばたたいた。
「おれはおまえたちが殺したミルスキーと同じ人間じゃない。なぜ復讐をする必要がある？」
たとえ同一人物だという意識があるにしても、これは格好の口実になる。何年も前からしたいと思っていたことを、実行できるようになる。おそらく、脳の不合理な思考をする部分が破壊さ

れたため、思考が純粋になり、より自分に忠実で、より純粋な衝動が解放されたのだろう。
ミルスキーはつねに星々を望んでいたが、それは魂を犠牲にしてのことではなかった。そして、ソビエトの制度のなかで活動することは――たとえそれがこれから建設しようとしているようなものであっても――ベロジェルスキーやヤズィコフやヴェルゴルスキーのような連中とたえず対抗していくことを意味する。ソ連の歴史を通して、彼らの顔がふたたび浮かんできた。たちの悪いふたりの追従者と、有能だが残酷で、少しばかり心のねじけた指導者。
このサイクルから抜けださなければ。チャンスはいまだ。母国はなくなってしまった。義務もなくなった。部下のために、すでにいちど死んでもいる。あるいは、ソスニッキー少将が生きてさえいれば……いやしかし、少将が生きていれば、おれはこの地位についていない。それはソスニッキーの役目だったはずだ。
ミルスキーは図書館をあとにし、地下鉄に乗って、第四空洞の砦にもどった。そこで、補給品をかき集めてトラックに乗せた。なにをしているんですかときく者はだれもいない。数メートル離れたところで、かすかに当惑の表情を浮かべて見ていたプレトネフでさえ、なにもきこうとはしなかった。
みんな、おれがいなくなるのがうれしいんだ、とミルスキーは思った。また権謀術数と残酷政治をくりひろげられるのがうれしいんだ。三人組こそはこの場所にふさわしい。おれはずっと、邪魔者だったのだ……。
最後の義務は、ガラベジャンにメッセージを残すことだった。

ヴィクトルへ
三人の政治将校がもどってくる。これから四十時間のうちに、第三空洞の図書館に現われるはずだ。そうしたければ、リーダーとして受けいれるがいい。わたしはもう、彼らの邪魔はしない。

パーヴェル

メッセージを封筒にいれて、ガラベジャンのテントに残す。
ミルスキーはトラックを運転して森の奥に向かった。めざすは、まだ未踏査の、百八十度線付近だ。あそこでなら、おれはひとりになれる。筏と竿を作って浅い湖をわたり、木々で覆われた島にひそむのもいいだろう。頭上五十キロの彼方まで見える広大な森林の奥に分けいるもいいだろう。
そこで、つぎにどうするかを決めるのだ。
もう、ここにもどってくることはあるまい。

57

特権階級の市民や高官たちでにぎわうフローシップ内は、オルミイの飛行艇よりもずっとつかみどころがなかった。内壁の色は、オイスター・パールからアバロウニ・グレイにたえず変化す

るし、角や隅といったものはまったくないように見える。あるのはただ、直径三メートルのフロー・カバーと推進装置を管状にとりかこむ、広くて長いキャビンだけだ。さまざまな姿形をした人々が、図話を交わしたり英語や中国語の会話を交わしたりしながら、牽引フィールドに乗ってあちこちへ移動している。あたりには、液体の荷電球が——まわりの動きを予想しているのか、通りかかる人々を優雅に避けながら——浮遊しており、そこから飲み物をすすっている者もいる。

ラニアーはかろうじて、牽引フィールドが操作できるようになっていた。天性のカンがあるのだろう、ファーリーはもっとうまく使いこなしていた。ラニアーはなんとなく、それがおもしろくなくて、いっそう熱心に、操作の修得にはげんだ。「すてきだわ、これ」そばをゆっくりと回転しながら、ファーリーがいって、手足を伸ばし、ほのかに輝く紫のフィールドでブレーキをかけた。

ハイネマンとキャロルスンは、ぎこちない笑みを浮かべ、うなずきながら、たがいに協力して、新形態や通常形態のあいだを動きまわっていた。オルミイの話では、彼らがどんなことをしても、社会的に失礼なことにはならないという。なにをしようと、どんな過ちを犯そうと、かえってそれが魅力になるのだそうだ。なんといっても、彼らは〝変わっている〟のだから。

パトリシアは、スレートとプロセッサーと万能メーターのはいったバッグを抱きしめ、なるべく人に近づかないようにしていた。しかしそのために、かえってひときわめだつ結果となっていた。

黒い赤鉄鉱のような肌をした男がパトリシアに近づいてきて、しきりに図話で話しかけてきた。シュリー・ラーム・キクラがやってきて、それをやめさせた。男は、パトリシアが最高レベルの

図話を知っていると思いこんでいた、許してほしいという意味の、簡単なシンボルをピクトした。それから、そこそこ通じる英語に切り替えて——乗船に先立つ数分間で、簡易学習してきたものにちがいない——初期の地球経済についての難しい議論を吹きかけた。キクラはすでに、ほかのトラブルを片づけに、パトリシアのそばを離れてしまっていた——ラニアーたちがゆっくりと、しかし容赦なく、ふたりのスマートで印象的な女性によって、広い窪みへ押しやられていこうとしていたのだ。女性たちは足首まであるレオタードを身につけ、固い部分と柔らかい部分が交互に混じった、布製の長い扇形の羽を、足のあいだと両の脇の下にたらしていた。その華やかなスタイルは、まるで金魚のようだ。ラニアーもファーリーもなすすべもなく、ふたりに追いやられていくばかりだった。

パトリシアは数分間、男の話に耳をかたむけてから、いった。「わたしはそのことについてはなにも知りません。わたしの専門は物理学だから」

男はまじまじと彼女を見つめた。補助脳のなかの、最近プログラムしなおされた部分から情報を聞いているのが、手にとるようにわかった。「ああ、それはすばらしい。物理学のほとんどはあなたの時代に花開いたもので——」

オルミイがすばやく割ってはいり、パトリシアにはわからないイメージをピクトした。男は顔のまわりに赤く細い環を浮かべ、むかっ腹をたてて立ちさった。

「これはあまり、いい考えではなかったようですね」とオルミイがいって、彼女をほかの場所へ連れていった。そこではフラントが、ふたりの新形態と話しこんでいるところだった。ひとりは放散虫型で、もうひとりはネクサス議長、ヒューレイン・ラーム・セイジャのようだった。

「これに慣れなくちゃならないんでしょう」パトリシアはそういったが、それから、なぜ慣れなくてはならないの？　と自問した。いつまでもここにとどまっているつもりはないというのに。
「セル・ラーム・セイジャ」フラントがいって、パトリシアに向きなおり、「こちらはわたしたちの最初のお客です」と議長に紹介した。フラントの大きく開かれた目は、ユーモアと善意をごく自然に放射しているようだった。〝お客〟ということばは、どう見つもっても婉曲的すぎるとパトリシアは思ったが、フラントにいわれると、少しもいやな感じはしなかった。
「議事堂の外であなたとお話しできる機会を、楽しみにしていました」とラーム・セイジャがいった。「しかし、いまはあまりふさわしい時期ではないようだ……」
パトリシアはラーム・セイジャの顔に目をこらした。彼の顔は、球形をしたボディの中央部に投影されていた。ごくありふれたもののなかに、突然異様なものを見せられたようで、パトリシアはふと、ディズニーランドにきているような気分になった。彼女はしばらく黙っていたが、やがて自分に鞭打って夢想から抜けだし、答えた。「ええ、そうですね」
「わたしたちの世界、ティンブルはきっと気にいりますよ」と、これはフラント。「ティンブルはずっとむかしから、ヘクサモンの属領となっているんです。長いあいだ使われているので、ゲートもよくなじんでいます」
「まず最初にいくのが、ティンブルなんですよ」とラーム・セイジャがいった。「フラント・ゲートはポイント4×6だから、四時間あれば着きます。そこで二日、ゆっくりと逗留していただく予定でしてね。大統領も会議を抜けだして顔を出してくれればいいのですが」
ポイント4×6なら——すなわち、〈通路〉を四百万キロくだった地点ということだ——ホッ

プ、ステップ、ジャンプの距離だわ、とパトリシアは思った。そして一千キロ進むごとに、時間が一年進んでいく。一ミリ上のどの一点にも、平行宇宙への入口があって……。
故郷への道はどのあたりにあるのだろう?
「それに――いえ、彼に会うのも、ティンブル訪問も楽しみですわ」その場の雰囲気にしたがって、ともかくも彼女はいった。
そのときファーリリーに押されて、ラニアーが通りかかり、声をかけた。「船首のほうで、お呼びだぞ」ハイネマンとキャロルスンは、すでにそちらへ向かっていた。目の前で、パトリシアのために群衆が道をあけた。これほどたくさんの笑顔で迎えられたことも、これほどおおぜいの関心が自分に向けられたことも、彼女ははじめてだった。いやだった。逃げだして、隠れてしまいたかった。
ジャンプスーツを通して、ポールからの手紙を探り、それがそこにあることをたしかめ、上からぐっと押しつけながら、パトリシアはフラントとオルミイのあとについて、フローシップの船首に向かった。
船首には、オイユ上院議員が待っていた。そばには、三人のネイダー教徒の通常形態が控えている。いずれもアクシス・ソローからきた歴史家たちだ。彼らは笑顔を浮かべて、五人のために場所をあけた。最後に、フローシップの船長が――上半身はたくましい人間、腰から下は蛇の形をした、身長がゆうに三メートルはある新形態だ――やってきた。
「この短い旅の出発にあたり、出港指示の名誉を、アクシス・シティに最初に到着されたお客に賜わりたいのですが」と船長がいった。パトリシアは船長の手をとり、フロー縦貫筒近くの、船

首の一画に浮遊していった。「ミス・ヴァスケス、この名誉を受けていただけますか？　ひとこと、フローシップに出発とおっしゃっていただければけっこうです」
「出発」と、パトリシアは静かにいった。
縁の鋭い、直径五メートルの口がフロー縦貫筒の一端に開き、〈道〉の眺めがあらわになった。フローシップは、無数の車線やゲート・ターミナルのはるか上に浮いていた。なんとも形容しがたい特異線のラインが、船首のすぐ外で強烈なピンク色に輝いている。しばらくのあいだ、フローシップはほとんど動いているのがわからなかった。
うしろをふりかえって、彼女はオルミイとラニアーとファーリーを見やった。ラニアーがほほえみかけた。パトリシアもほほえみかえした。いろいろいやなことはあるけれど、これはたしかにエキサイティングだわ——。パトリシアはひどく変わったおとなたちのパーティーに招待された、引っこみ思案の子供のように、夢中になってきた。
わたしたちは幼虫で、彼らは蝶なのよ。
三十分がたつころには、フローシップは猛烈な速度で——秒速百四キロ強で——進んでおり、〈道〉の壁面はぼやけて、なめらかな黒と金のまだらになっていた。すでに踏破した距離は九万四千キロにおよび、船はなおも加速をつづけている。前方で、特異線が深紅色に明滅している部分が見えてきた。そこでパトリシアは、肩にファーリーの手がかかるのを感じた。
「驚きね、ここのパーティーも、地球のパーティーにそっくりだわ」とファーリーがいった。
「河北でのじゃなくて、ロサンジェルスや東京のパーティーとそっくり。むかし、東京経由でロサンジェルスにいって、そこからフロリダにまわったことがあるの……そんなにレセプションが

あったわけじゃないけどね。大使館のパーティーなんて……」かぶりをふって、にっこりと笑い、
「いったいここは——いったいここはどこなの、パトリシア？　わたし、なにがなんだか」
「ここの人たちはみんな人間よ。わたしたちと同じように」
「わたしにはわかれない——わからないの、いったいなにが起こっているのか。本当は、河北でとうさんに勉強を教わっていた、小さな女の子のころにもどりたいわ。逃げだしてしまいたい」
わたしもとうさんに、よく新聞を持っていってあげたっけ……。
「パーティーというのは、はじまってしばらくすると、必ず退屈になってくるものよ。わたしは、研究してたほうがいいわ」とパトリシア。「でも、それではあんまり社交的とはいえないしね。オルミイはわたしたちに、社交的になるよう望んでいるのよ」
シュリー・ラーム・キクラが心配そうな顔で近づいてきた。「だれか失礼なことでもいいましたか？　それとも、なにかいやなことでも？」
「ちがうわ」とファーリー。「パトリシアとふたりで、外を見てただけ」
「ああ……やはり、お疲れでしょうからね。オルミイでもわすれることがあるんです——人は眠ったり休んだりする必要があるっていうことを」
「わたし、疲れてはいないわ」とパトリシアがいった。「むしろ、ひどく気が張っている状態」
「わたしもよ」ファーリーがうなずいて、「たぶん、〝呆然としてる〟というほうが正しいと思うけれど」
「いつでも好きなときに、個室で休んでくださっていいんですよ」とラーム・キクラ。
「もうしばらくここにいて、外を見てるわ、わたしたち」とパトリシアがいった。彼女が蓮華座

を組んで浮かぶと、ファーリーもそのとおりにした。
「わたしたちはだいじょうぶよ」とファーリーが代理士にいった。「もう少ししたら、みんなのところへいくわ」
ラーム・キクラは納得して、たがいに複雑な図話シンボルを交わしあっている、新形態の一団のもとへ去っていった。
「ここもそんなに悪いところじゃないわ」しばらくの沈黙ののち、ファーリーがいった。「ここの人たちも、悪い人じゃないし」
「もちろんよ」かぶりをふりながら、パトリシアが、「オルミイはいろいろ力になってくれるし、キクラも好き」
「出発する前に、彼女とギャリーと、わたしたちの歴史情報販売権について話しあっていたわ。彼女のいいかたによれば、特典および交換の権利、ね。どうやらわたしたち、自分の記憶と交換に、あらゆる価値ある私的データベースにアクセスできるらしいわよ」
「わたしもそう聞いたわ」とパトリシア。
一時間後、ラニアーとハイネマンとキャロルスンは、キャビンの後部に引きこもった。三人が仮眠をとっているあいだ、フラントが好奇心に引かれてやってきた者たちを追い払う役をつとめた。パトリシアとファーリーは、緊張しすぎていて、とても休める状態ではなかった。ふたりは船首にとどまり、〈通路〉の壁面が後方へ飛びすぎていく眺めを見つめていた。六G弱に加速した直後、フローシップは秒速四百十六キロで旅の中間地点を通過した。そして、減速を開始した。
それから二時間のうちに、フローシップの進みは這い進む程度に遅くなり、時速数十キロにま

で落ちた。下方では、たくさんの巨大な銀灰色のディスクが、車線の上に威風堂々と浮いていた。彼方には、巨大な四つのねじくれたピラミッド構造物が見えた。ティンブルへの四つのゲートをおおうターミナルだ。

ふたりの通常形態がやってきた。オルミイをもう少しラディカルにしたような、自足型だが人工器官の多いタイプだ。ふたりは、前腕とふくらはぎが極端に膨らんだ、ブルーと白のボディスーツを着ていた。ひとりは女性で、オルミイと同じくらいの長さに髪を切りそろえており、もうひとりは性別不明だった。彼らはパトリシアとファーリーにほほえみかけ、単純なシンボルをピクトした。パトリシアが首環にふれて、挨拶を返した。ファーリーは返事に失敗し、ふたりの新形態の悪意のない笑いをさそった。性別不明のほうが前に進みでた。だしぬけに、その左肩に中国の国旗が立った。

「お会いするのははじめてですが」とそれはいった。「わたしはサマ・ユーラ・リクサー。大統領の特別秘書官です。祖先は中国人でした。いままで、当時の形態学について議論していたんですが――。ミス・ファーリー、あなたは稀な例なのでしょう？　中国人なのに、白人の風貌をしていらっしゃる。それはあなたが……当時においても可能だった、いわゆる美容整形を受けたためですか？」

「いえ……」ファーリーはちょっととまどって答えた。「わたしは中国で生まれましたけど――両親は白人で――」

パトリシアは船尾をあとにし、もう目を覚ましていた、ラニアーとキャロルスンとハイネマンのところへいった。そこへ、ラーム・キクラがすべるようにやってきて、まもなくフローシップ

を降りますから、と伝えた。ＶＩＰ用のディスク・シャトルが、彼らを収容するため、すでにターミナルを発っているという。
　ハイネマンはオルミイに、彼らにずっと付きそっているフラントのアイデンティティについて質問した。もしかするとあのフラントは、フローシップに同乗しているほかの九人のフラントと入れ替わっているんじゃないか。「どうもちがうような気がするんだ。あれがいつもと同じフラントであると、あんた、断言できるかね？」
「成熟すると、フラントはみんな同じように見えるんです」とオルミイ。「それがなにか？」
「だれかといっしょにいるときには、それが本人であることを知っておきたいものじゃないか」
顔を赤らめながら、ハイネマンがいった。
「それは重要なことではありません。ひとたび均質化され、最新記憶を交換してしまえば、フラントが途中で替わっても、まったく同じように務めることができます」
　ハイネマンは釈然としない顔をしていたが、それ以上つっこんでも無駄だと思ったようだった。
ＶＩＰ送迎ディスクは、フローシップの全長と同じだけの直径があった。特異線の三十メートル以内まで上昇してきたディスクの表面は、プラズマ・フィールドで拾ってきた荷電粒子の幕で輝いていた。やがてその輝きが、螢光を放つ海の泡のようにディスクの上面から消えると、中央部に円形の入口が開いた。
　フローシップのハッチがいっせいに開き、ゲストたちは連結フィールドを通って、ふたり、または三人ずつ手をとりあい、ディスクの開口部に移乗しはじめた。オルミイはファーリーとラニアーの、ラニアーはパトリシアの手を握った。ラーム・キクラが握ったのは、キャロルスンとハ

イネマンの手だ。彼らはひとかたまりになって、ほかの者たちといっしょにディスクへジャンプした。
ディスクは、第七空洞を出て最初のゲートを覆うキューポラを、ずっと大きくしたものだった。輝く牽引ラインの綱があるだけで、それには目に見える下面がなく、ハイネマンが仰天したことに、足場も体を支える台も、なにひとつなかった。一行はただ、円盤の下の空間に、目に見えない牽引フィールドにまわりをとりまかれ、さらにより小さな輝く線の網に包まれて、宙に浮かんでいるだけだった。彼らを真空と隔てるものは――そして彼らと二十五キロ下の〈道〉の壁面を隔てるものは、ただ真空しかない――実体のないエネルギーのバリアーだけなのだ。
ラニアーは数人の通常形態と、それよりずっとたくさんの新形態のパイロットや作業員たちが、ディスクの縁で働いているのに気がついた。VIPとは隔絶されているわけだ。見ていると、紡錘形の新形態がひとり、フローシップのべつのセクションから運びだした箱の列をつらねて、紫色のフィールドのなかを移動していた。フローシップの反対側のハッチでは、八人のフラントたちが下船を待っていた。ゲストつきのフラントはすでに均質化をおえており、ハイネマンの疑問をアカデミックなものにしてしまっていた。
ラニアーは細い紫の牽引ラインに手をふれ、首をめぐらしてハイネマンを見やった。
「気分はどうだい？」
「最悪だ」
「意気地がないんだから、もう」本人もちょっぴり青くなっているくせに、キャロルスン。
「きみはこういうものが好きなはずじゃないか」ラニアーがなだめるようにいった。「機械もの

は大好きだっただろう」
「そうさ、機械ならな！」とハイネマンはうなるように、「機械があるなら見せてくれ！　どこもここも、動いてる部分はひとつもない。不自然だよ、こんなの」
しゃべっているあいだに、ディスクは降下をはじめていた。乗客の群れが、興奮して図話を交わしている。パトリシアは手足を伸ばし、ラニアーが握っているのと同じ牽引ラインをつかんで、宙に浮かんだ。
その格好で、ターミナルを見おろす。いくつものディスクが、四方から基部近くのポートに出入りしている。さらにたくさんのディスクが、パンケーキを積みあげたように重なったり、大気コラムのなかをぐるぐるまわったりして、待機している。
ディスクはゆっくりと降下したので、ターミナルのまわりの壁面の交通をじっくり観察することができた。車線の多くは、円筒形のコンテナ車でいっぱいだった。車両の形状は、円筒形のほかに、球形、卵型、ピラミッド型とさまざまで、なかにはたくさんのカーブで構成された複雑な形のものもあった。ラニアーは、データピラーから学んだ知識を基に、その形状の意味を理解しようと努めたが、できなかった。明らかに秩序はあるが、そう簡単にはそれと目的がわからないのだ。パトリシアがこちらに浮遊してきた。
「あそこに見えているものの意味が、全部わかるかい？」ラニアーがたずねた。
パトリシアはかぶりをふって、「全部はわからないわ」
ラーム・キクラが、明るい服を着た通常形態の一団から抜けだして、こちらへやってきた。
「数分以内にゲートを通過します。ひとつ憶えておいてください。オルミイとネクサスが承認す

れば、わたしはみなさんを非常に裕福にしてあげられることを」
「富というものに、まだそれほど大きな価値があるの?」キャロルスンが疑わしげにきいた。
「富すなわち、情報です」とラーム・キクラが答えた。「それに、すでにわたしは、四つ五つの強力な情報配分者と図話を交わしてきました」
「サーカスの見せ物みたいに、おれたちを巡業に出すわけだ」ハイネマンがうなるようにいった。
「少しはわたしを信用してください、ラリー」彼の肩に手を置いて、ラーム・キクラ。「あなたが辱めを受けるようなことはありません。わたしはそんなことをさせるために付いているのではありませんし、たとえわたしが――なんといいましたっけ――ああ、力不足でしたね。力不足であっても、オルミイが守ってくれます。それはわかっておいでのはずでしょう」
「そうかねえ?」ラーム・キクラが立ち去ると、ハイネマンが小声でいった。
「そうすねないの」キャロルスンが叱りつける。
「おれは自分の身を守ろうとしてるだけだ」ハイネマンがつっけんどんにいった。「ローマにいったら、公共手洗い所にご用心、てやつさ」
ラニアーが笑って、首をふり、「ラリーがなにをいってるのかさっぱりわからないがね」と、こっそりパトリシアに、「あの用心は立派だよ」
いまやディスクは、ターミナル東側にある、間口が広くて背の低いポートと平行になっていた。ターミナルの表面は、乳白色のガラスに似た物質で覆われており、さらにその上に、見たところランダムな間隔で配置された真鍮様のオレンジ色の金属の帯が、水平にならんでいた。
「きれいだわ」とファーリーがいった。パトリシアも同じ思いだった。見ているうちに、ふと目

頭が熱くなってきた。なぜだかはわからない。ごくりとつばを飲んで、溢れだした涙を、パトリシアは頬からぬぐった。
「どうかしたのかい?」ラニアーが心配して近よってきた。
「あんまり……きれいなんだもの」なんとか泣くまいとしながら、パトリシア。思いがけなく、ラニアーは自分の目にも涙がにじんでいることに気がついた。
「どうしても、地球の人間がつきまとうな」とラニアーはいった。「どこにいこうと、なにを見ようと——彼らはずっと、ぼくらといっしょにいる。四十億の人間のすべてが」
パトリシアはこくんとうなずいた。オルミイがうしろからやってきて、彼女の肩ごしに、まさかこの世界にあるとは思ってもみなかった、古典的な〝ハンカチ〟をさしだした。驚きながらも、彼女はハンカチを受けとり、オルミイに礼をいった。
「このまま泣きつづけていると」オルミイがささやき声で警告した。「たちまち人だかりができますよ。ここでは、人が泣くのはめったに見られないんです」
「なんてことでしょう」とキャロルスン。
「わたしたちに感情がないなどと思わないでくださいよ。わたしたちもみなさんと同じように、感情の起伏は激しい。ただ、それを表現する方法がちがうだけです」
「もうだいじょうぶ」パトリシアがいって、ハンカチでぎこちなく目頭を押さえた。「そのために、わざわざこれを持ち歩いていてくれたの?……」
オルミイはほほえんで、「緊急事態に備えてね」
ラニアーがパトリシアの手からハンカチをとると、彼女の顔をきちんとふいてから、空中に漂

っていた二、三滴のしずくをすくいとり、オルミイに返した。「ありがとう」
「どういたしまして」
ディスクはターミナルのなかにはいった。中空の構造物内には、侵入してくる車両のために、光のビームが進路を形作っていた。その中心には、ディスクの位置からさらに一キロほど下だろう、ゲートそのものがあった。ブルー一色の深みにつづく、巨大で縁のなめらかな穴。
「これはわたしたちの二番目に大きなゲートで、直径が五キロあります」とオルミイが説明した。
「最大のものは直径七キロで、タルシット世界に通じています。それがあるのは、ポイント1.3×7です」
「このなかに――降りていくのかね?」ハイネマンがきいた。ディスクはすでに、降下を再開していた。
「そうです。危険はありません」
「おれの精神面以外にはな」とハイネマン。「ギャリー、こんなことなら、ペンキ屋にでもなるんだったよ」
ディスクはいまやゲートの真上にあったが、ブルーの色彩にはばまれて、細部までは見えなかった。下方で編隊を組んで働いていた五つの小型ディスクが、道をあけた。ゲートの縁では、何百という円筒やその他の車両が、壮大で整然とした瀑布となって流れ落ちている。光の誘導ラインが変形し、ディスクをとりかこむ柱となった。ディスクがゲートの縁とほぼ同じ高さに降下したとき、だしぬけに、真下に底の細部が見えた。ブルーの広がりのなかに見えるのは、まさしくフラント・ワールドだった。全体に像が歪んでいて、むかしよくあった、まるい鏡の上に置いた

ときだけちゃんとした形に見える、円柱に描いた絵のようだ。群青色の空と引き伸ばされたまばゆい太陽を背景に、海や黒々とした彼方の山脈が識別できる。
「なんてことでしょう」キャロルスンがふたたびいった。「あれを見て」
「見られなきゃいいんだがね」とハイネマン。「オルミイのやつ、船酔いの薬を持ってるかな？」
浮遊する通常形態や新形態の群れが、感動して明るい環や色彩の爆発を投影している。ディスクが振動し、ついで地形がすっと正常な形状にもどった。ディスクを誘導していた光のビームの柱が消滅し、ゲートの通過は完了した。つぎの瞬間、ディスクは目のくらむほど白い大地の上を低空で飛行していた。
ラニアーはキャロルスンとパトリシアをともなって、ディスクの下部、力線の網の境界付近に向かった。フラント・ワールドの地平線を見るためだ。ディスクの両側では、円筒形その他の形をした車両の列がならび、さらにその向こう側では、ディスクの群れが浮遊しながら貨物を吐きだしている。ラニアーは三百六十度回転して、白く舗装されたゲートの受けいれエリアの向こうにある、海や山脈を見わたした。これほど濃いブルーの空を見るのは、はじめてだった。
天に弧を描くブローランプのように、隕石が彼方の海面に向かって落下していった。が、隕石が海面に激突する前に、地平線から脈打つオレンジ色の光の網が放射され、隕石を打ち砕いた。さらにたくさんのビームが射ちだされて、ちりぢりに四散した破片をこなごなに破壊した。海なり陸地なりに落下したのは、塵だけだろう。
「ひとことでいうなら、あれがフラントの歴史です」隕石が末路を迎えたあたりを指さしながら、

ラーム・キクラがいった。「あれが、フラントのフラントたるゆえんなのです」彼女はラニアーの手をとり、ついでパトリシアにも手をさしのべた。ほかの三人は、オルミイが連れてきた。「きてください。もうじき下船です。ここの重力は少し強いので、まずベルトをつけなくてはなりません」

ディスクは所定の着陸エリアに舞い降りた。白い舗装が近づいてくると、外側の透明なフィールドが変形し、まばゆい力線の網が渦に変わった。

「最初に、大統領補佐官とネクサス議長が降ります」とラーム・キクラが説明した。「そのつぎにわたしたち、それからフラントたち、ついでほかのみんな、という順番です」

オリガンド・トラーとヒューレイン・ラーム・セイジャが、随員たちをしたがえて――ふたりの魚型新形態と、三人の通常形態だ――渦の中心に漂っていき、するりとディスクの下の舗装に降りた。オルミイにうながされて、ラニアーたちも同じ道をたどっていき、大統領補佐官一行から数メートル離れたところに降り立った。

〈冠毛〉と〈道〉で何カ月も過ごしたあとでは、ティンブルの引力は衝撃的なほどだった。いきなり両足に、重いブロックをくくりつけられたような感じがした。パトリシアの膝ががくりと落ち、足の筋肉が悲鳴をあげた。ハイネマンはうめき、キャロルスンは顔をしかめた。

バスくらいの大きさの、四角くて車高の低い車が、大きな白い車輪に載ってやってきた。それに乗る前に、フラントたちが、重くなった重力を軽減するための浮揚ベルトを身につけてくれた。牽引フィールドがなくては事実上動けない新形態たちは、体をすっぽり包む範囲内で、体重をゼロにできるようセットされた、特殊な浮揚リフトを与えられた。

「きっとここが気にいりますよ」白い舗装の上をバスが動きだすと、ラーム・キクラがいった。進行方向には、幅の広い煉瓦色の道路が見えた。「これから、海岸に向かうんです」

フラント・ワールドは、人類をはじめとして、〈道〉ぞいに住む何種類もの酸素呼吸種族の、リゾート地として利用されていた。明るい黄色矮星からの紫外線レベルが、人間が慣れ親しんでいる量よりも多いため、頭上には数千平方キロの範囲にわたって、大気シールドが設けられているという。そのシールドの陰に、リゾート地があるわけだ。

「海には大型の肉食生物は——少なくとも、人間を食べようとするようなものは——まったくいませんし、環境は清浄そのものです。理想的なリゾート地ですよ。休暇をとる余裕のある者は——事実上、すべての有体市民がそういう立場にありますが——だれでもここをたずねてくることができます」

リゾート地の中心をなす、長くて低い建物は、理想的な位置に立っていた。建物は半月型の入江に面し、すぐ前に広大で真っ白な水晶砂の浜辺が広がっていたのだ。

各室にはパティオがつき、さらにいくつかずつ透明なドアがあって、じかに本物の景観を眺めることもできたし、さまざまな幻影を映しだせるようにもなっていた。古えの地球のリゾート地にならって、家具類はみなちゃんとした造りをしており、イメージによる装飾はできないようになっていた。

一行はレストランで、昼食をとった。フラント・ワールドで食べる最初の食事だ。レストランには二十世紀末ふうの装飾が施され、給仕も通常形態をしていた。メカニカル・ワーカーの姿は、まったく見あたらなかった。昼食後、一行は宿舎に歩いていった。各室にはいる前、ラーム・キ

ーはもう、ベルトなしでもやっていけそうな感触を持っていた。もっとも、ハイネマンがつけているあいだはこちらもつけているつもりだったし、そのハイネマンは、当分つけていそうな気配だった。

クラがひと部屋ひと部屋、丹念にチェックした。みんなはまだベルトをはめていたが、ラニア

パトリシアは部屋のなかをひとわたり見まわってから、ラニアーのパティオに集まっているみんなのもとへ合流した。ラーム・キクラが、数時間余裕があるので、そのあいだに休憩したり泳いだりしてもけっこうです、ご用があればわたしとオルミイは近くにいますから、といった。ラーム・キクラが立ち去ると、キャロルスンが自信ありげにいった。「あの人たち、ふたりで上の階にひと部屋とっているのよ。きっと恋人同士なんだわ」

パトリシアがいきなり、パティオの金属のゲートをあけ、「わたし、散歩してくるわ」といった。それから、ラニアーをちらりと見やって、「もっとも、あなたがみんなずっとくっついているべきだというんならやめるけど」

「いや、たぶんここは安全だろう。いっていいよ」

ラニアーは、パトリシアがこわばった足どりで、浜辺を歩み去るのを見送った。砂浜には、通常形態はもとより、新形態の姿も二、三見うけられた。だれもパトリシアにはほとんど注意を払わない。ラニアーはにやりと笑って、かぶりをふった。「まるでアカプルコだな――おかしな風船が、いくつか浮かんでるが」

ファーリーがラニアーの腕に自分の腕をからめて、「わたしはアカプルコにいったことがないけど、まさかあんな色の空じゃないんでしょう」

「お熱いこと」キャロルスンが鼻を鳴らし、ちらりとハイネマンを見やった。「あなた、わたしには、あんなふうなまねをしてくれたこともないわね」
「おれは技師だぜ」とハイネマン。「人をあやすんじゃなくて、ものごとを正すのがおれの仕事だ」
「たしかにそうでしょうよ」
「どうしたことだ、みんな、陽気になってるぞ」とラニアー。
「でも、パトリシアはちがうわ」キャロルスンがいった。「これまでに二回見たの、あなたたちふたりを見ると、あの子がああいうつらそうな顔をするのを。きっと、嫉妬してるんじゃないかしら、ギャリー」
「なんだって?」ラニアーはパティオの椅子にすわりこみ、まばゆい砂浜と濃いグリーン・ブルーの海の向こうの、鋭い地平線を見つめた。「……はじめて会ったときから、彼女は謎だったんだが」
「わたしには謎じゃなかったわ」とファーリーがいった。三人の顔が、彼女に向けられた。「少なくとも少しは、理解できるわ。わたし、彼女に似てるのよ――あんなに頭はよくないけれど、内向的で、頑固で。わたしの人生は、二十五、六までみじめなものだったわ。そのあとで、もっとノーマルになろうと決心したの――ともかくも、外見はね」
「あの子はあしたで、二十四よ」キャロルスンがいった。
「誕生日なの?」ファーリーがきいた。
キャロルスンはうなずいて、「オルミイには誕生日のことを説明して、バースデイ・パーティ

ーを開こうといってあるの。いいアイデアだと思ったみたいよ。あの人たちには、誕生日というものがないでしょう――生物学的な意味で、じっさいに母体から生まれる人はめったにいないものね。命名日や成人式はあるけれど――それも、おおむねアクシス・ネイダーにかぎっているみたい。きっとあの人たちにとって、年齢はわたしたちの場合ほど大きな意味を持たないのよ」
「そのバースデイ・パーティーは、どんなものになるの？」
「ささやかなものにしてほしいといっておいたわ――わたしたちと、オルミイと、ラーム・キクラだけの。オルミイは承知してくれたわ」
「ラノア、あなたはすばらしい女性だわ」無意識のうちにホフマンの口調をまねて、ラニアーがいった。キャロルスンは礼をいって、両手の人差し指を両方のほっぺにあてた。
「陽気なんてもんじゃないね」キャロルスンをじろじろ見ながら、ハイネマンがいった。「みんな、完全に舞いあがっちまってる」

パトリシアが浜辺を歩きはじめて、五百メートルほどいったあたりだろうか、少し向こうの砂浜に、オリガンド・トラーがちょっと膝を曲げるようにして立っていた。ショート・パンツをはいているので、ブロンドの毛に覆われた形のいい足がまる見えだ。上にははでなハワイアン・シャツをはおっている。「お気に召したかな？」トラーはいって、ぐるりとひとまわりして見せた。
パトリシアはなんといっていいやらわからず、ただまじまじと見かえすばかりだった。
「なるべく違和感のない格好を、と思ってきたんだが」がっかりしたようすで、トラー。「よろしければ、ちょっとお話をしたい」

ったた。
彼女は押し切られまいと、顎を引き、上目づかいにトラーをにらみつけたが、なにもいわなかった。
「これは重要なことかもしれない。あなたがた全員にとってね」
「わたし、そういう——」パトリシアがいいかけた。
「それじゃあ、話しましょう」とパトリシアはいって、すっとトラーの前を通りすぎた。トラーは小走りに走って、彼女に追いついた。
「歩きながら話そう」とトラー。「大統領と会う前に——彼が時間を割いてくれればだが——いくつか説明しておきたいことがあってね」
「わたしたちはあなたの敵ではないんだ、パトリシア」とトラーは話しはじめた。「オルミイになんと吹きこまれたかは知らないが——」
「オルミイはだれのことも、なにひとつ悪くいってはいないわ」とパトリシア。「愛想が悪いのはわたしの性格です。わたしたちは——わたしは、このところ、あまりおもしろい思いをしてないの。あるはっきりした理由でね」
「それはよくわかる」パトリシアと歩調を合わせて、大統領補佐官はいった。海水浴客も、浮かんでいる新形態たちも、だれひとりとして、大統領補佐官と何世紀もの過去からきた女性がならんで歩いていることを、奇異には思わないらしい。ふたりとも、さりげなく無視されている。
「このリゾート地はすばらしい——わたしもよくくるんだよ。人間であるとはどういうことか、思いださせてくれる……わたしのいう意味がわかるかな?」
「本物の事物を見ることね」パトリシアがいった。

「そう。そして、しばらくのあいだ、いろいろな問題から逃れるためだ。ともあれ、今回は仕事を兼ねた休暇でもあるし、時間も短い。ここの時間にして、せいぜい二日だ。それでも、われわれのシステムがどう動くかを見せるには、ここにくるのがいちばんだと思ったんだ。まずは、きみたちの支持を得るためにね、パトリシア。こう呼ばせてもらっていいかな?」

パトリシアはうなずいた。

「事態のしからしむるところにより、きみたちの存在はきわめて大きな影響力を持つ。しかし、きみたちをわれわれのやり方や考え方の鋳型にはめるつもりはない。それがわれわれの政府のやり方だ。結局、自分のいいようにやってもらうしかない」

ふたりは、海にせりだした、天然の玄武岩の防波堤の前で立ちどまった。パトリシアは海面を見やった。小さくまばゆい隕石が、水平線上数度のところをかすめていく。それを破壊するビームは閃かない。小さくて、ほうっておいてもひとりでに燃えつきてしまうのだろう。

「われわれは、フラントが〈スカイ・ランス〉を設置するのに手を貸したんだ」とトラーがいった。「ここのゲートを開いたとき、彼らはまだ初期の原子時代にあった。われわれは情報交換の協定を締結し、盟主"属領関係を結び、はてしない彗星の通過からこの世界を守るのに必要なものを与えたというしだいさ」

「そのかわりに、なにを得たわけ?」

「たいしたものじゃない。フラントは自分たちの与えるものに比べて、〈スカイ・ランス〉はもとより、はるかに大きな利益を享受している。つまり彼らは、〈道〉を利用できるようになったということだよ。いまではフラントも、三つのゲートで一人前のパートナーとなり、三つの世界

とそれをとりまく通常空間交易システムで、貿易に従事している。その見返りとして、フラントは原材料と情報取得の権利を貸与する。しかし、いちばん価値あるのは、彼ら自身の奉仕だ。オルミイのパートナーには会っただろう。フラントは理想的なパートナーといえる。機転がきき、信頼性が高く、つねに感じがいい。そして、こちらから見るかぎり、彼らはわれわれと働くことを純粋に喜んでいる」
「まるでフラントが、できのいいペットみたいないいかたね」
「そう、たしかにそういう要素もある」トラーは認めた。「しかし、彼らは少なくとも、われわれと同等の知能を持っている。もちろん、われわれが補助脳等を使わない場合だがね。だれも彼らを、二級市民やペットのようにあつかったりはしない。われわれの社会を正しく見すえるためには、過去の偏見をいくぶん捨ててもらわなければならないようだね、パトリシア」
「偏見は捨てたわ」とパトリシアはいった。「わたしはただ……」パトリシアは両手をふりあげ、かぶりをふった。出会ったときからずっと、彼女はいちども、トラーの顔をまともに見ていなかった。
「われわれがくる以前、惑星ティンブルは千年ごとに、むかしからの彗星群と遭遇していた。そのたびに、フラントは人口の半分以上を失っていたんだ。この海も、彗星の運んできた水でできているんだよ。何十億年もかかって、ここまで蓄積されたものだ。ところが、百万年ほど前、長い凪の時代があったらしく、その間にフラントは現在の形に進化して、基本的な文明を形成した。そこへ、ふたたび彗星群がやってきた。やがて、しだいしだいに、フラントの固体はたがいに似かよっていき、情報や個人的特徴を、最初は化学的メッセンジャーで、ついで文明的な手段で伝

達するようになった。なぜかというと、均質社会を形成することで、彗星群の衝撃を吸収しやすくしたんだ。しかし、彼らは自分たちの潜在能力に気づいてはいなかったし、ほうっておけばいつまでも気づかないままだっただろう。そこへわれわれがゲートを開いた。いまではフラントも、われわれのテクノロジーの一部を利用するようになっている。たとえば、高速ピクターを使って、最新情報の交換はもとより、部分人格の交換まで行なうようになったことだ。もっとも、総合的に見れば、フラントとわれわれの、どちらがより恩恵をこうむったのかはわからない。フラントの援助がなければ、われわれは何世紀も前に、ジャルトに敗れ去っていただろうからね」

パトリシアは熱心にトラーの話を聞き、時間がなくてデータ・サービスで調べきれなかったことを吸収した。「そのジャルトとは、どうして盟主＝属領関係を結ばなかったの？」

「ははあ！　ジャルトはまた全然べつの問題だよ。もちろん知っているだろうが、〈道〉を第七空洞とつなげたとき、ジャルトはすでにそこに住みついていたんだ」

「それは聞いてるわ」あの放浪体がいったことを思いだして、彼女はうなずいた。

「〈技師〉は運悪く、実験ゲートをジャルトの母星につないでしまった。〈道〉内の時間の進みは、当時まだ、われわれの時間の進みと同調していなかった。そして、実験ゲートの開通から〈道〉と第七空洞の連結までに、不完全な〈道〉内では約三世紀が経過しており、その間にジャルトは、〈道〉を住居とし、粗雑なゲートのあけ方まで発見していたんだ。〈道〉が連結され、開通したときには、ジャルトはすでに、いまと同じくらいの規模で根を張っていた。強力で、知的で、攻撃的で、全宇宙に広がるよう運命づけられていると頑なに信じこんでいる生物。われわれはジャルトと激しい戦いをくりひろげ、最初の数十年間のうちに、彼らを奥へと押しやった。

と空気で満たした。そのいっぽうで、アクシス・シティを建設し、小競り合いをくりかえしながらジャルトをさらに奥へ奥へと追いやって、彼らのゲートを封じていった。とうとうジャルトは、ポイント2×9まで後退した。われわれはそこに障壁を作った。こちらは交渉し、交易しようと試みたのだが、ジャルトは受けつけなかった。といって、われわれにはジャルトを〈道〉から駆逐できないこともわかっていた。当時のわれわれには、それだけの力がなかったのだ」

そして、選択的にゲートを開き、〈道〉の最初の区画を——ポイント1×5までの区画だ——土

パトリシアは、防波堤の上に登る階段の、いちばん下の段に腰かけた。「それで、わたしたちがどういうふうに力になれるというの?」

「じっさい、それは複雑な質問だな」とトラーがいった。「いちばんの方法は、われわれを支持してくれることだ。あるいは——われわれに敵対しないでくれることだ」

「みんな、もう故郷に帰れるのよ」とパトリシア。「あんな状態ではあるけれど」

彼女の発想の飛躍にとまどって、トラーはしばし口ごもった。それから、「たしかに」と、パトリシアから数センチ離れて、となりに腰をおろしながら、つづけた。「あんな状態ではある。わたし個人としては、セル・ラニアーの胸うつ熱弁にもかかわらず、いま地球にもどるべき理由はなにひとつ見いだせない」

「生存者を助けられるじゃないの」

「パトリシア、われわれは彼らの——きみたちの——末裔なのだよ。世界がみずからの傷を癒すままにさせておくことは、少しも不公平なことではあるまい。われわれが回帰的ループを描いてもどってきたという事実は——それも、われわれの世界線のなかで最悪の時点にもどってきたと

いう事実は——わたしには利点だとは思えない。現時点では、むしろハンディキャップだ。オルミイは、われわれがジャルトを〈道〉から——永遠に——駆逐しようと思ってどれだけ必死になっているか、説明したかね?」
パトリシアは首をふった。
「これは無謀ともいえる計画だが。きみは分離について——アクシス・シティを半分に分割することについて、噂を聞いたことがあるかね?」
パトリシアはもういちど、黙って首をふることにした。
「われわれのフロー研究グループが何年も前に発見したことなのだが、アクシス・シティはc近くまで——つまり光速近くまで、加速できるらしい。シティ自体にはなんのダメージもなく、市民もわずかに不快な思いをするだけですむそうだ——」
「このことは、全員で聞くべきだと思うわ」いきなり立ちあがって、パトリシアがいった。「わたしの仲間たち全員でね。わたしひとりではなく」
「彼らは好きなだけ調べることができる。アクシス・シティにもどったら、きみがガイドしてやればいい。すべてシティ・メモリーで検索可能だから。あるいはオルミイが説明してくれるだろう」
「なぜオルミイは先にそういわなかったの?」
「パトリシア、われわれの世界はきわめて複雑だ。それはきみのほうがわたしよりもよくわかっているだろう。たぶんオルミイには、われわれについて知っておくべきより重要なことがらの、千分の一も教育する時間がなかったはずだ」

「わかったわ」砂に一歩踏みだし、トラーと面と向かって、パトリシア。「つづきを聞きましょう」
「それだけの速度に到達するには、三百Gで加速して、一日以上かかる。三百Gというのは、アクシス・シティほど大きな物体がフロー上を移動するさいの限界であり、慣性吸収システムの理論的限界値だ。フローには深刻な負荷がかかり、強力な輻射線と重い粒子を発生する。しかし、〈道〉内では、光速の三分の一の速度でさえ、時空に衝撃波を作りだす。シティがその速度に達するのは、ポイント7×9になるはずだ。そして、とてつもない破壊を引き起こしながら、シティはジャルトの領土を通過する。〈道〉内の相対的歪みは、とほうもないものになるだろう。シティが通過したあとは、〈道〉の形そのものが変わってしまうし、ジャルトが開いたゲートはすべて、ならされて消滅してしまう――」トラーは片手をすっと平らにひとなぎして、「――ちょうど、きみたちの世界の洗濯屋が、布地をアイロンで平らにしてしまうのと同じように」
パトリシアは、遠いところを見る目つきになっていた。彼女の心は、〈道〉内の相対論的物体という概念を吸収しようとして――また、〈道〉のなかでは、光速の三分の一の速度で動く物体は相対論的であることを理解しようとして、さかんに働いていたのである。
「壮大な計画だ、とは思わないかね?」
パトリシアはうわの空のようすでうなずいた。「〈道〉をどこまでいくつもり?」
「それはまだ議論がつくされていない」
「それで、代案は?」
「代案はいまもジャルト対策会議で検討されている。この会議は、もう三週間以上もつづいてい

るものでね。われわれは、せいぜいあと数年、ことによると数ヵ月のうちに、ジャルトがわれわれの障壁を破ると読んでいる。そうなれば、彼らはわれわれのもっとも拡張されたゲートをも蹂躙するだろう。もちろん、われわれはそれらのゲートを封鎖しつつ、撤退することになる。そしてついには、十年ほどのちに、〈冠毛〉まで押しもどされてしまうだろう。ジャルトの追撃をふりきるためには、〈道〉を破壊するしかあるまい。それはすさまじい災厄をもたらすだろう」

「押しもどされるのは確実なの？」

トラーはこっくりとうなずいた。「長くは持ちこたえられない。ジャルトはとてつもなく強大になっているし、ほかの諸世界からの支援も得ている。連中、〈道〉の領土じゅうにゲートをあけているんだ」

「こちらも同じことはできなかったの？」

「さっきもいったように、ジャルトはわれわれより何世紀も長く〈道〉に住んでいるんだ。〈道〉を創造したのはわれわれでも、ある点でジャルトは、われわれより〈道〉に親しんでいるといえる」

トラーは放浪体がいっていた代案のひとつは話さなかった。〈冠毛〉を〈道〉の端から吹きとばし、〝焼灼〟して〈道〉を密封した上、第六空洞の機構がなくても〈道〉が存在できるようにするという、あの方法だ。パトリシアはその可能性については問わないことにした。「ありがたいわね——考えることをいっぱいくれて」

「そうだろうな、たしかに、わたしがエチケットをことごとく破ってしまったことは重々承知している。わたしの話に耳をかたむけてくれて、とてもありがたく思う。だが、われわれの時間は

かぎられているし、きみたちはこの方程式に、付加的要素をもちこんだのだ……」
「それはたしかだわ」とパトリシアはいった。たぶん、あなたが知っている以上にね……。「わたし、もうもどりたい」
「いいとも。宿舎まで送ろう」
パトリシアはなおも遠い目をしたまま、ほほえんだ。浜辺を歩いて宿舎にもどる途中、トラーはほとんど口をきかなかった。パトリシアにはそのほうが、都合がよかった。
彼女はすでに没我状態にはいっており、例の独自の記数法を呼びだして、思考に没頭していた。ラニアーの部屋の前をすっと通りかかり、ふたことみこと声をかけてから、自室に閉じこもり、ベッドに横たわって、両目をきつく閉じた。
トラーはほかの者たちに挨拶をし、数分ほど話をして、あなたがた全員にとって重要な話題に関し、パトリシアと有意義な話をしてきたと説明した。トラーが去ると、ラニアーはパトリシアの部屋のドアをノックした。返事はなかった。
「パトリシア？」とラニアーは呼びかけた。
「はい」パトリシアが顔をあげ、低い声で答えた。
「だいじょうぶかい？」
「休んでるの」とパトリシア。「ディナーになったら、いくわ」
ラニアーは腕時計を見た。フラント・ワールドにきて二度めの食事、現地時間での夕食は、あと一時間ほどではじまる。ラニアーは自室にもどった。
「あの子は？」キャロルスンがきいた。

「だいじょうぶ、といってる。寝ているようだ」
「そうは思えないわね」とファーリー。「トラーはいったい、パトリシアになにを話したのかしら?」

58

ミルスキーの権力の衣を引きついだ三人の会議は、はじまって三十分でおわった。会議はプレトネフの小屋で開かれ、だれにも聞かれないよう、アンネンコフスキーが外で見張りに立った。
議題は、ミルスキーがガラベジャンに残したメッセージについてだった。プレトネフは、どのみち選択の余地はないのだと主張した。「いいか、やつらはミルスキーを殺そうとして幽閉された。それが釈放されようとしているんだぞ。ミルスキーのいいたいことは明白だろうが? あのアメリカの女もそう考えている。おれもそう思う」
「では、どうします?」
プレトネフはカラシニコフをとりあげた。レーザー兵器の大半は、とうのむかしにバッテリーが切れていたし、それ以前にプレトネフは、つねづね銃弾を発射する銃が好きだったのだ。
「われわれも拘留されないでしょうか?」
「戦闘終結のあと、ひとりでも拘留された者がいるか?」プレトネフが問いかけた。ポゴージンがかぶりをふった。

「それなら、やつらを抹殺するのみだ」
「軍法会議もなしに殺してしまうというのは、気が進みませんね」とガラベジャン。
「ほかに選択の余地はない」とプレトネフ。「なんたることだ、ミルスキーはおまえにメッセージを残したのに、彼がほんとうにいいたかったことを理解したのが、おれだとはな。ヴェルゴルスキーにはまだ支持者がいる。ミルスキーがいなくても、おれたち三人でとどこおりなくやっていけるだろうが、政治将校どもがもどってくれば、おれたちは銃殺だぞ。やつらに会って、しなければならないことをするしかない。いいな？」
ポゴージンとガラベジャンがうなずいた。
「では、いこう」とプレトネフ。「やつらが出てくるのを待つんだ。遅れるよりは、早めにいっていたほうがいい」

ミルスキーは水ぎわでトラックを捨て、乾燥糧食がいっぱいに詰まったバックパックを背負って、内陸部へ向かった。第四空洞のこのあたりでは、細長い池がたくさんあり、どこでも豊富に魚が釣れた。生きていけることには、なんの不安もない。ここの森は、苛酷な環境になるようには作られていないのだ。雪が降ることもあるが――ここはソ連キャンプから空洞の四分の一区画ほど離れた、百八十度ラインのあたりだ――その量は多くないし、また空洞全体にも、植物が充分成育できる程度に雨が降った。
〝必死で生き抜く〟ようなことは、まずない。
最初の二、三日、ミルスキーはのんびりと過ごし、適当な釣竿をつくること以外に、ほとんど

なにもしなかった。前に読んだアメリカの生物学者たちの報告書から、餌に使えるミミズや地虫がいることはわかっていた。気分はしだいに爽快になっていき、なぜもっと早くぬけだしてこなかったのだろうと思った。
いままでは、新しい精神との境界線と出会うことも、めったになくなっていた。使っているうちに消えてしまったのでなければ、意識が無視することを憶えたのだろう。
百八十度ラインの森にきて五日め、ミルスキーは、ここにいるのが自分ひとりだけではない形跡を発見した。ソ連の糧食容器とアメリカのプラスティック容器が、ひとつずつ落ちていたのだ。ということは、最低ひとりのソ連兵がここまでやってきたということになる。それでもミルスキーは、気にしなかった。ここには事実上、全員が住めるだけの余裕があるし、プライバシーを保つこともできるからだ。
七日め、部分的に森がとぎれ、原っぱになった一帯の端で、ひとりのソ連兵と出くわした。ミルスキーは見覚えがなかったが、向こうはこちらを知っていて、たちまち森のなかに消えた。
八日め、ふたりはまたもや、細い池ごしに出会った。今度は兵士も逃げなかった。
「ひとりなのか?」と兵士はきいた。
「いまのいままではね」とミルスキー。
「だってあんた、指揮官だろう」と、怒ったように兵士。
「いまはちがう。このあたりは、よく釣れるかい?」
「あまり釣れない。なあ、ここには蚊やら蠅やらがそこらじゅうにいるのに、どいつも刺さない。気づいてるか?」

「ああ、気づいてる」
「なぜかな?」
「そういうふうにできているのさ」
「雪は降るんだろうか」
「降ると思う。一年に一度くらいの割合で。しかし、それほど寒くはならない。モスクワとちがってね」
「雪が降ってくれるといいな」と兵士はいった。ミルスキーはうなずいた。やがて、ふたりは池の一端で合流し、いっしょに森をぬけて、もっといい釣場を捜しにいった。
「アメリカ人なら、ハックルベリー・フィンとトム・ソーヤーだというところだな」釣糸を水流にたらし、ようすを見ながら、兵士がいった。「アメリカ人も、地球にいたときほど性悪じゃないみたいだ。森に脱走する前は、向こうに逃亡しようかとも思ったくらいでね」
「なぜそうしなかった?」
「人がそばにいるのがいやだったからさ。でも、あんたがここにいるのはいやじゃないよ、将軍」鱒がよってくるようにと、兵士は釣竿の先をひょいひょいとふって、「人間性ってやつに対する信頼がもどってくるね。将軍でさえ、あのごたごたから逃げだしたかったというんだから」
兵士は——絶対に名前を教えようとはしなかったが——何週間も前、ミルスキーが図書館で死ぬ前に宿舎を脱走しており、その後に起こったことはなにひとつ知らなかったし、ミルスキーもべつに教えようとはしなかった。
ミルスキーはふたたび、ふつうの人間になったような気がしはじめていた。もう、異常者でも

幽霊でもない。ゆったりと大地に腰をおろし、雨粒が木々の葉の上に落ちるのを眺め、虫を食べに浮かびあがってきた魚のまわりでさざ波が立つのを見るのは、すばらしいことだった。自分がだれであるかも、それどころかなんであるかも、もうどうでもよかった。

さらに二日が過ぎた。ミルスキーは、だれかが捜しにきはしないかと心配になってきた。高性能望遠鏡なら、簡単にこちらの居場所を見つけられるし、赤外線センサーを使えば、木々の陰に隠れていようがいまいが関係ない。だがいまごろは、政治将校たちがふたたび自由になって、権力の基盤固めを行なっている最中だろう――もしプレトネフやほかの者たちが、残してきた警告に機敏に反応していなければ。

もっとも、その後のことは、ほとんど気にならない。

気になるのは、夜がないことだ。目を閉じてもまったく明かりが見えず、まぶたを通してはいってくる、ほの暗い森のかすかな茶色の光さえ見えない、真っ暗闇のなかで数時間ほど過ごせるのなら、ミルスキーはなんでもさしだしただろう。それに、星と月が見えないのもさびしかった。

「地球にいる知りあいで、生き残っている人間がいると思うかい?」ある朝、小さな焚火をたき、切った枝に鱒を刺して料理しているとき、兵士がきいた。

「思わない」とミルスキー。

兵士はいちどうなずいたが、それから、びっくりしてかぶりをふり、

「思わない?」

「まず生きてはいないだろう」

「最高司令部でさえも?」

「たぶん。もっとも、最高司令部に知りあいといえるほどのやつはいないがね」
「ふうん」と兵士。それから、うまいことを思いついたという顔で、「でも、ソスニッキーは知ってたろう」
「さあなあ」
「あれはいいオヤジだったと思うな」兵士はいって、鱒をとりあげ、軍用ナイフをふるって、慣れた手つきでさばいた。その半きれをミルスキーにわたし、頭と骨は茂みに放り投げる。
ミルスキーは軽く頭をさげ、皮ごと魚をかじり、なにごとかを考えているようすで、かんだ。そのとき、兵士のうしろの木々のあいだで、なにかが銀色に光った。ミルスキーの口の動きがとまった。その視線に気がついて、兵士はうしろをふりかえった。
長い金属の物体が、木々のあいだを浮遊してきて、二、三メートル離れたところに停止した。ミルスキーは目をまるくしてそれを見つめた。銀色に輝く物体は、キの字のような、ロシア十字にそっくりの形をしていた。ただし、その下面には、ひとつ大きな涙滴型のものがとびだしている。十字架の中心部には、強烈な赤に輝く点があった。
兵士が立ちあがった。「あれは、アメリカ人のものか？」
「ちがうだろう」自分も立ちあがりながら、ミルスキー。
「そこのおふたり」いきなり、女性の声が、英語でいった。「警戒することはありません。傷つけるつもりはありませんから。探知機によると、補塡手術を受けた有体者がいるようですね」
「やっぱりアメリカ人じゃないか」と兵士はいって、あとずさり、いつでも逃げられる態勢をとった。

「おまえは何者だ？」ミルスキーも英語を使って問いかけた。
「補塡手術を受けたのは、あなたですね？」
「と思う。いや、たしかにわたしだ」
兵士はのどの奥でくぐもったうめき声をあげると、だっと木々のあいだにとびこんだ。
「手術を受けたのはわたしだ、彼にはかまわないでくれ」
黒い服を着た女がひとり、木々のあいだからゆっくりと歩いてきた。その制服を見て、ミルスキーも一瞬、これはやはりアメリカ人だと思ったが、そのスタイルは、アメリカのそれとは全然べつものだった。それに、その髪――頭の両脇は短く刈ってけばだたせ、ひと筋の長い房をうしろにたらしたスタイルは、明らかにアメリカ人のものではない。ややあって、女の鼻には鼻孔がなく、耳が小さくてまるいことに気づいた。女は銀色の十字架のそばに立って、片手をあげた。
「あなたはアクシス・シティの市民ではありませんね？　それにネイダー正教徒でもありませんね？」
「ちがう」とミルスキー。「わたしはソ連人だ。きみは何者だ？」
女は十字架の腕にふれた。ふたりのあいだの空間に、閃光が閃いた。「いっしょにきてくれますか？　わたしたちは、全空洞の全住人を集めているところなのです。危害を加えたりはしません」
「いやだといえば、いかずにすむのかね？」冷静さを保ったまま、ミルスキーはきいた。いちど死んだ人間が、恐怖を感じたりするものだろうか？
「申しわけありませんが、それはだめです」と女はいって、感じのよい笑みを浮かべた。

ジュディス・ホフマンは、〈ストーン〉のNATO側人員にかかわる法制再建について、延々九時間におよぶ会議をようやくおえたところだった。女性寮にもどって休んでくださいといいはるベリル・ウォリスに負けて、自室にもどるなり、彼女はたちまち眠りこんだ。あまり疲れていたので、眠りの底でその音に気がついたとき、目が覚めるまでしばらくかかり、目が覚めてからも、なぜ目が覚めたか気づくのに何秒かかかったほどだった。そこではっと気づいた。コムラインの警報が鳴っている。ホフマンはとびおきてスイッチをたたき、「こちらホフマン」と、まだよくまわらない舌で、ぼそりといった。

「第四空洞ジョーゼフ・リムスカヤだ。ジュディス、あちこちでブージャムが目撃されている。わたし自身、二回見た」

「どんなもの?」

「十字架型の金属で、こちらのコンパウンドやソ連領の上をとびまわっている。追跡装置でいくつか追ってみたが、この空洞だけで、二、三十はいるにちがいない。そこらじゅうにうようよしている」

ホフマンは歯がみして目をこすり、その寸前、ちらりと腕時計を見た。眠ってから一時間とたっていない。「いまは第四空洞のゼロ・コンパウンドね?」

「そうだ」

「すぐいくわ」

コムラインを切ると、直後にまた呼びだしがかかった。スイッチをいれたとたん、今度はアン

が割ってはいり、かけてきた声とやりあうのが聞こえた。
「ジュディス、申しわけありません」アンがうろたえた声でいった。「なにがあっても寝かせておくようにとベリルにいわれていたんですが、ちょっと席をはずした隙に――」
「ミス・ホフマン、こちら第七空洞のベレンソン大佐だ――」
「おねがいです、大佐」アンが割りこむ。
「これは緊急事態で――」
「アン、いわせてあげなさい」ホフマンがいった。
「ミス・ホフマン、こちらの探知機に、何十――いや、何百という物体がかかっている。大きいのも、小さいのもある。一部は確実に連絡孔を通ってそちらへいった。いまごろは第六空洞に――
――」
「少なくとも、第四空洞まではきてるわ」とホフマン。「大佐、リムスカヤと連絡をとって。彼もそれを目撃してるの。わたしはつぎの電車で、第四空洞にいくわ」
ホフマンは小さな緊急携帯ケースに必要なものを詰めて、通路を駆けぬけた。階段の最上階でつまずいてころげ落ちそうになったが、すんでのところで手すりを引っつかみ、もうろうとした意識がもとにもどるのを待ってから、首を折らずにすむ程度に、できるだけ急いで階段をおりた。
いちばん下で、アンがコップ一杯の水と興奮剤の錠剤を用意して待っていた。
「よして、なんなの、それは」錠剤を押しやるようにして、ホフマンがいった。
「ハイパー・カフェインです」とアン。「ラニアーはいつもこれを飲んでいました」
ホフマンは二錠の錠剤と水を押しもどした。

「今度はなにごとです?」と、蒼ざめた顔でアンがきいた。「また襲撃じゃないんでしょうね?」
「外からの攻撃ではないわね、ハニー。ウォリスとポークはどこ?」
「第二空洞です」
「第四空洞のゼロ・コンパウンドにいくようにいって。第四空洞かゼロ度線でおちあうようにと」
ホフマンは女性寮をとびだし、第二空洞にいくトラックはないかと大声で叫んだ。ゲアハルト将軍が、無線機を手に、カフェテリアから短い足で駆けだしてきて、海兵隊員を呼び、ホフマンについてくるようにと手招きした。ドリーン・カニンガムが保安フェンスの前でふたりを出迎え、土塁の外でアイドリングしている二台のトラックを無言で指さした。
近いほうのトラックに乗ろうとしたとき、科学者コンパウンドの警報が消えた。本能的に、ホフマンはトラックのドアからあとずさり、コンパウンドをふりかえった。頭上に、銀色の十字架が、ゆったりと浮かんでいた。その一端のまるい膨らみが、禍々しさと同時に、滑稽さをも感じさせる。ホフマンはその姿から、八〇年代のある格闘技映画に出てきた、東洋の武器を連想した。
「あれはソ連のものじゃないわね?」急にたたき起こされ、まだ少し寝ぼけたまま、ホフマンはきいた。
「もちろんさ、マム」片手でプラズマチューブの光から目をおおいながら、ゲアハルト。十字架はコンパウンドの上で旋回し、それからプラズマチューブに向かってみるみる上昇していくと、小さな点となって消えた。「あれは本物だよ。本物のブージャムだ」

太陽が水平線にかかるころ、空の青さはますます深まり、ミッドナイト・ブルーに変化した。真っ赤に燃える、太陽の最後のひとかけらが海に飲みこまれてしまうと、水平線からまっすぐに上に、ダークブラウンの雲の影が伸びているのが見えるようになった。それはうごめき、くねりながら天頂に達し、そこでふわふわしたいくつものラインに分かれていた。各ラインの先端は、電子的な紫色の輝きを帯びている。ファーリーとキャロルスンは、一時間前に部屋にもどっていて、ここにはいない。フラント・ワールドの一日は、約四十時間つづく。ラニアーはいろいろ考えることばかりあって、まだ寝る気になれず、パティオから日没を眺めていた。となりには、ハイネマンもいる。トラーと話して以来、パトリシアはまだ部屋から出てこない。

足にはなにもはかず、ショーツと長袖のブルーのジャケットという姿のオルミイが、数メートル向こうの砂浜を通りかかり、ふたりに気づいて、近づいてきた。「ハイネマンさん、ラニアーさん」ふたりとも、オルミイに会釈を返した。これでパイプをくわえ、正装し、イブニング・ドリンクを手にしていれば、みんなどう見ても、上流階級の紳士たちだ。「いかがです、ここは」

「とてもいいところだね」とラニアー。「自然の風にふれるのは、二カ月ぶりだ」

「おれは一年ぶりだな」ハイネマンもいう。

「わたしはもっと長いですよ」とオルミイがいった。「〈道〉の外の世界にくるのは――」と、ちょっと考えこんで、「――かれこれ十五年ぶりです。フラント・ワールドにきたのは、五十年ぶりですよ」

「そんなにこきつかわれてるのかい、ミスター・オルミイ？」目をすがめて、ハイネマンがオル

ミイを見あげた。
「たっぷりとね。パトリシアはどうです？　セル・トラーと話をしたそうですね。それ以来、部屋に閉じこもりっぱなしとか」
「そうなんだ」とラニアー。「もう少ししたら、ようすを見にいってくる。なにか食べるのなら、持っていってやらないと」
「このところ、彼女はずっと緊張しているようですが」
「〈ストーン〉に――〈冠毛〉にきてから、ずっとさ」とラニアー。「ぼくらはとんでもなく重い責任を彼女に背負わせてしまったんだ――じっさい、重すぎる責任を」
「〈冠毛〉の謎を解いてくれるかもしれない、と思ったんですか？」
「図書館で発見されたとおりのことが、われわれの世界でも起こるかどうか、教えてもらおうと思ったんだよ。じっさいには――」
「起こったともいえるし、起こらなかったともいえる」ラニアーのことばを引きついで、オルミイ。
ラニアーはじっとオルミイを見つめ、それから深まりゆく宵闇に目を転じて、うなずいた。
「たしかに、パトリシアの行動は妙だった――状況を考慮にいれてもね」
オルミイはパティオの手すりにもたれかかった。「アクシス・シティに着いてから、彼女とはずいぶん長いこと、いろいろと興味深い会話をかわしましたよ。彼女はアクシス・シティのこと、わたしたちのことを知ろうと懸命で、懸命に適応しようとしていました。とりわけ、ゲート開きのことを知りたがりましてね。わたしたちが近々ゲート開きをするのも、ひとつにはそのためな

んです。彼女はもう、〈冠毛〉で最後になにをしようとしていたのか、話しましたか？」
「聞いた憶えはないいな」とラニアー。ハイネマンが身をのりだし、興味津々の顔で、オルミイを見つめた。
「わたしたちに連れてこられる直前、彼女は最後の研究をしに、図書館にいこうとしていました。〈道〉のなかにはいっていけば、ゲートとゲートのあいだ、わたしたちが幾何学的スタック領域と呼ぶ場所が見つかるという仮説をたてていたんですよ。わたしは感嘆しましたね、彼女がそのような領域の存在を知りえたことに——その存在を計算ではじきだしたということに。なにしろ、〈道〉理論の基礎を理解するためには、すべての要素を理解しなくてはならないのですから。そのうえ彼女は、ゲート開放装置を作り、幾何学的スタックの存在を証明できるかもしれないとさえ思っていたんです」
「幾何学的スタックというのは、なにかね？」ハイネマンがしわがれ声でたずねた。それから、咳払いをして、ラニアーを見やった。
「ゲート領域は、〈道〉にそって、特別な周期にしたがって配置されています。ゲートというものは、わたしたちのこの宇宙とは微妙にちがう宇宙の、きわめて限定された位置に通じるものです。〈道〉を奥に進むにつれ、ゲートひとつごとに、外の宇宙では、約半年ずつ時間がずれていく。奥にいくほど時代がくだるわけです。パトリシアから聞いた話では、彼女はこのことを、かなり前から知っていたそうです。しかし、無数に存在する平行世界が、このように明確に位置づけられ、ゲート領域によってひとつにたばねられるはずだということには、しばらく気づかなかったそうです。このような収束は幾何学的スタックの領域でのみ起こるもので、それによって生

じる歪みは、超常空間・〈道〉両方の時間において、一部の宇宙間の完全な置換を可能にします」

「なにをいってるんだか、さっぱりわからないな」ラニアーが静かにいった。

「パトリシアは、平行宇宙のひとつに——平行宇宙の、〈大破滅〉が起こらず、といって彼女の世界とほとんど変わらない地球に、ゲートをあけられると信じていたんです。ゲート開放装置が、ある程度まで調整可能であることも理解していました。わたしたちの装置があれば、そういった平行世界の、平和な地球にいたる道があけられる、というのが彼女の仮説だったんです」

「そのとおりなのかい?」ラニアーがきいた。

オルミイはしばらく、黙っていた。「このことについては、ふたりのゲート開放師に相談するつもりです。ひとりはこのティンブルの開放師、もうひとりは、プレシアント・オイユ上院議員の父君であり、大開放師である、セル・ライ・オイユです。セル・オイユはいま、ポイント1.3×9で待っておられます」

「アクシス・シティから移動させられたのには、ほかにも理由があるのかな?」

ラニアーの質問に、オルミイはにやりとして、うなずいた。「パトリシアを連れてくることには、わたしもかなり周到な計画を立てていました。ひとりの訪問者だけなら政府部内の秘密にしておけたでしょう——もっとも、いまから考えると、それも怪しかったですがね。ところが、みなさんがやってきたおかげで、事態の収拾がつかなくなってしまった。それが五人ともなれば、隠しとおすのは不可能です。大統領は、みなさんが負債ではなく、資産であるように願っていますよ」

「千三百年たっても、人間はあいかわらず人間ってわけか」ハイネマンが、ちょっとけんのある声で、考え深げにいった。「いまでもつまらない喧嘩をしてるんだな」
「そうですね。しかし、まったくあなたのいうとおりでもありませんよ」とオルミイ。「あなたの時代には、人格の混乱や不完全な思考構造によって、おおぜいの人々が深刻なハンディキャップを負っていて、しばしばみずからのいちばんの利益に反する行動をとっていました。はっきり目標を定めていながら、それを達成するための明白な道筋を、理屈はおろか、直感でさえ見とおすことができなかった。同じ目標を敵対者が定めることもしばしばあって、たとえそれがこちらとよく似た信条体系の持ち主でも、おたがいひどく憎みあっていた。いまの人間には、無知や精神障害、それどころか能力の欠如さえありません。なぜなら、それらは矯正できるからです。セル・ラーム・キクラのサービスのひとつは、人々がみずからの仕事に対して、適切な技術と態度を選択する手助けをすることです。必要なら、人々は適切な補助機能を身につけることもできます。一群の記憶を付加することもあるし、人格補助機能でさえ加えることもあります」
「すると、なぜ意見の不一致が出る?」ハイネマンがきいた。
オルミイはかぶりをふった。「それがわかれば、星と運命と聖霊の世界の——いや、わたしたちに赴けるすべての平行宇宙の、すべての争いのルーツが解明できますよ」
「それじゃ、わかっていないんだ」とラニアー。
「いや、とんでもない。原因は明々白々ですよ。もっとも望ましい目標がひとつ以上あって、それらの目標にいたるためにも、多数の同じくらい有効な方法があるからです。不幸にして、資源にはかぎりがあり、だれもが望んだとおりの道をいけるものではありません。わたしたちにとっ

てさえ、それは厳然たる事実です。アクシス・シティの市民は、おおむね善良であり、有能で、多様です。ただし、それはあくまでも、〝おおむね〟です。なぜなら、アクシス・シティのシステムはけっして完全なものではなく……」
「きみがいっていることは、神々自身でさえ、戦争をすることがあるということか……」
オルミイはうなずいた。「おもしろいではありませんか。若き人類の生んだ各種の素朴な神話が、永遠の真実となってもどってくるなんて?」

ラニアーはパトリシアの部屋のドアをノックし、名前を呼んだ。二、三分して、もう何度かノックすると、パトリシアがドアをあけ、なかにはいるように手招きした。パトリシアの髪はくしゃくしゃで、ひどくもつれていた。着ているのも、前に浜辺で着ていたのと同じ服だった。
「ちょっとようすを見にきたんだ、どんな具合かと思って」腕を組んだものやら、両脇にたらしていたほうがいいのやらわからず、ラニアーはぶざまに、リビングルームに立ちつくした。
「考えていたの」パトリシアはいって、こちらにふりかえった。その目が、もの悲しげな光をたたえていた。「あれから、どのくらいたつの?」
「浜辺を散歩してから?」
「そう。どのくらい?」
「十二時間かな。外はもう真っ暗だ」
「知ってる。あなたをいれる前に、明かりをつけたから。ここはホテルの部屋みたいね。たぶん、そういうふうに作られたんだろうけど。古風で。基本にもどっていて。大統領補佐官もそういっ

ていたわ」
「なんだかようすがへんだぞ」とラニアー。「どこかおかしい」
「考えがとまらないの。あれからずっとこの状態――わたしが深層思考と呼んでいるやつよ。もう十二時間、ずっとこれ。こうしていても、それがつづいてるの。こうして話すのも難しいくらい」
「なにを考えてるんだ?」
「故郷に帰ること。すべてはそのため」
「オルミイが――」
「ギャリー、わたし、現実との接点を失ってしまいそう。このままじゃ、あの放浪体みたいになってしまう。すべてが歪んで、非現実的で。考えがとまらないのよ。大統領補佐官のいったことが……ギャリー、助けがいるわ。なにか気をまぎらすものがいる」
「どうすればいい?」ラニアーがきいた。パトリシアは片腕をさしのべ、手を広げて、指先で彼をさし招いた。ラニアーはその手を握った。
「わたしも人間よ、でしょ? 現実の存在。おもちゃでもプログラムでもないわ」
「きみは現実の存在だよ。こうして、手でふれられる」
「もう、それもあやふやだわ。わたしの頭のなかにあることが、あなたには信じられない。わたしには見えるの……あれは人工的なものでも、補助器具によるものでもない。あれはわたしのうちからくるもの。すべての計算が、理論に組み立てられていく。無数の宇宙が、聖書のページのようにひとつに集まっているのが見える。問題のページの番号もわかる。オルミイはわたしのい

うことを信じなかった。完全には信じなかった。でも、いまでもわたしは正しいと思う。あの人たちはいろいろなゲート開放装置を持っている。大きなものも、小さなものもある。そのひとつを手にいれられたなら、いますぐわたしたちみんなを故郷へ連れて帰れるのに。なにもかも平穏なところへ。そのページの番号もわかっているの」

「パトリシア――」

「いわせて！」パトリシアがぞっとするような声でいった。「もどれるのよ、核戦争のないところへ。とうさんが新聞を読んでいるところへ。ポールがわたしを待っているところへ。だからわたしは考えてるの、でも考えてるのはそれだけじゃない。大統領補佐官は、相対論的速度で、アクシス・シティを〈通路〉の、〈道〉の奥へ進められるといったわ。そして敵を殲滅するの。たしかにそれはうまくいくわ。でも……」

「おちつくんだ、パトリシア」

「できないのよ、ギャリー。接点がいるわ。ポールがいるの。でもあの人はまだ死んでる。わたしが見つけてあげるまで」彼女はラニアーの手をさらにきつく握りしめ、いった。「あなたの助けがいるの。おねがい」

「どうすればいいんだ？」

パトリシアは向かい風に面と向かうときのように目をすがめ、むりに曖昧な笑みを作った。

「〈道〉はラッパのように広がるわ。巨大な相対論的物体が、特異線上を移動したなら。膨れあがるわ。そしてゲートをことごとく閉じてしまう。溶融させて、閉じさせてしまう」

「どうすれば力になれる？　キャロルスンを呼んで――」

「ちがうの。おねがい。あなたでなきゃだめ。わたし、メモをとっていたの」パトリシアはスレートをとりあげた。スクリーンは、ラニアーにはさっぱりわけのわからない数値で埋めつくされていた。「証拠があるのよ。わたしを幾何学的スタックの地点まで連れていってちょうだい……そこへいけば、みんなを連れて帰れる。でも、考えがとまらないの」
「パトリシア、ぼくなら力になれるとはどういうことだ」
「抱いて」いきなり、パトリシアはいった。
ラニアーは啞然として、パトリシアを見かえした。
「たったいま、思いついたわ。わたしを抱いて」
「ばかをいうんじゃない」ラニアーは腹をたてて――そのことばに反応しはじめている自分にも腹をたてて――拒絶した。
パトリシアはたじろいで、「ポールは死んでる。もうあの人を裏切ることにはならない。ゲートを開いたら、あの人はまた生きかえる。でもいまは、どこにもいない。あなたがファーリーとずっといっしょにいたのは知ってるわ……それに、ホフマンとも……」
パトリシアはもう少しで見当ちがいのことをいいかけ、彼のホフマンに対する責任のことをもちだしかけた。ふたりとも、それに気づいていた。「わたし、嫉妬してる。でもちがうの。わたしはカレンが好き。わたしはみんなが好き。あなたには特別の気持ちをいだいたけれど……でも、みんなといっしょにいたい。みんなにわたしを好きでいてもらいたい」
「きみの弱気に、つけこむようなまねはできない」とラニアー。
「つけこむ？　わたしはあなたが必要なのよ。つけこむのはこっちだわ。そう、わかってるのよ、

わたしがつけこんでいるのは——でも、どうすれば助けてもらえるのかもわかってる。わたしも小さな子供じゃないわ。こうしているいまも、わたしの頭のなかには、ここの人たちでさえ理解できない思考が渦巻いているの。オルミイもそれを知っている。でも、これ以上考えていたら、それが全部なくなってしまう。パンクよ」

あいているほうの指を、パチンと鳴らして、

「ベッドの上では、わたし、あまりじょうずじゃないだろうけど」

「パトリシア」ラニアーは彼女の手から自分の手を引きもどそうとしたが、いっぽうで、そのままでいたい気持ちもあった。

パトリシアが彼に近づき、片手をラニアーの腹にあてた。「必要ならわたし、卑怯なまねだってする。体は虎、頭は龍よ。たがいに食いあいをさせてやるわ」

「そんなことをすれば、こっちもおさまりがつかなくなる」ラニアーが静かにいった。

パトリシアはその手をおろし、ラニアーの堅くなっているものにふれた。「わたし、なにも知らない、小さな天才じゃないのよ」

「それはそうらしいが」

パトリシアは首をのけぞらせ、ラニアーの感触を味わい、目をつむって、恍惚とした笑顔を浮かべた。ラニアーはもう、少しも抵抗しようとする気配はない。パトリシアはラニアーの手を離した。ラニアーはその手をパトリシアの胸もとにあげて、ブラウスのボタンをはずしだした。

ふたりとも一糸まとわぬ姿になると、強く抱きしめあった。ラニアーがひざまずき、パトリシアの胸にキスをした。しだいに高まりゆく情熱で目を輝かせながら、乳首を口のなかでころがす。

パトリシアの乳房は中くらいの大きさで——乳房のあいだにはそばかすがかたまっているため、ほかの部分より黒く見える——ほんの少したれかかっており、ちょっと見ただけでも、片方がもう片方より大きいのがわかった。しかし、大きさなどどうでもいいことだ。パトリシアに手を引かれて、ラニアーはベッドルームに連れられていき、キスをしながらベッドに横たわって、軽く体を触れあわせた。それから、両手でパトリシアの尻をつかんで大きく押し開き、自分の腹とヒップの筋肉をきゅっと締めながら、自分のものを深々とパトリシアにすべりこませた。ついで、ふたりは位置をいれかえ、パトリシアが上になり、まるではかない願いをはたそうとするかのように、目を閉じ、しかしリラックスして、体をこすりつけ、また離れた。ラニアーは自分が、たがいのぴったり息のあった動きを、いつもの覚めた気持ちとは切り離された目で見ていることに気がついた。かわりに、そこにあるのは、完全さと一体感だ。だが、わけがわからない。ふたりのあいだには、こんなに深い結びつきなどなかったはずだ——ただ、仕事でいっしょに働いたというだけの関係だったはずなのに。ほかの者となら、こういう一体感を感じたこともある。

だがいま、おれがベッドをともにしているのは、ホフマンの切り札である小さな天才少女なのだ。そういえば、はじめてこの娘と会ったとき、おれは狼狽したっけ。そう、いまならその理由がわかる。ホフマンの判断に敬意を払うあまり、パトリシアの見かけの弱さの前に、ほんとうの印象が覆い隠されてしまったのだろう。おれはこの娘の弱さに目をくらまされ、職務の名のもとに、じつは喜んでこの娘の面倒を見ていた。お笑いぐさだ。

おれが狼狽したのは、ひとつには、この娘に魅かれたからなのだ。

パトリシアは、間近にせまった絶頂に向けて、自分の意志で体を動かしていた。彼女はかつて、ポールといっしょに愛をかわすときであれば、自分がごく自然にふるまえることに気づいていた。思考の暴走状態が、消滅するというのではなく、しまいこまれる形で、引いていくのが感じられた。思考が澄みきった。焦点が見えた。

絶頂が近づき、パトリシアはつかのま動きをとめ、また腰を使いだした。ラニアーが腰をつきあげ、いちど落とし、もっと高くつきあげ、うめきながら、押しつけられた肩に、ついで頬に、キスをした。つぎの瞬間、彼は息もたえだえになって口をあけ、声なき絶叫をあげた。最後のひとつきで、ラニアーはすべてが――自分では意識さえしていなかった何年分もの緊張が、一気に解放されるのを感じた。

ガラスのドアの外から響いてくる寄せ波の音を聞きながら、ふたりはひとこともしゃべらず、余韻に包まれて、長いあいだ、静かに横たわっていた。

「ありがとう」と、パトリシアがいった。

「こちらこそ、だ」ラニアーはいって、ほほえみかけた。「気分がよくなった？」

パトリシアはうなずき、彼の肩に鼻をうずめた。「とても危険な状態だったの……ごめんなさい」

ラニアーはパトリシアに顔を向け、自分の肩と頬で、パトリシアの頭をはさんだ。「ぼくらはふたりとも、変わり者なんだよ。気がついてたかい？」

「ええ」パトリシアは目をぎゅっと閉じ、ラニアーの肩に顔をすりよせた。「今夜はここで寝ないほうがいいわ。わたしはもうだいじょうぶ。今夜はカレンといっしょに寝て」

ラニアーは注意深く、彼女の顔を見つめ、「わかった」といった。
パトリシアが目を——大きく——開き、真摯なまなざしで、ラニアーを見あげた。いまの彼女には、この数日間よく見かけた猫型新形態よりも、ずっと猫らしい雰囲気があった。あの新形態たちは、外見こそ変わっていても、中身は人間なのだ。
しかし、パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスのなかには、なにか——おそらくそれは、ずっとそこにあったのだろう——人間とはどこかちがうなにかがあった。
神と宇宙人だけ、か。
「どうしたの、おかしな顔をして」とパトリシアがいった。
「ごめんよ。なんだか、すっかり意外なことになってしまったなと思って」
「後悔してない?」背筋を伸ばし、目を糸のように細めて、パトリシアがたずねた。
「してない」
パトリシアの部屋を出るとき、ラニアーは鳥肌が立っているのに気づいた。腕を見おろしながら、思いかえしてみると、ここ何年かでさまざまな驚異を見せられどおしだったが、鳥肌が立つほどの興奮を覚えたのは……いまがはじめてだった。

59

リゾート地の夜が明けきらないうちから、オルミイは待っているバスのもとへ、五人を連れだ

でいた。風はなく、外気はひんやりとして、ブルーブラックの夜空に、降るような星々が冴ざえと輝いていた。

パトリシアは、昨夜自分とラニアーのあいだにあったことはおくびにも出さず、おとなしくしていた。ファーリーも気づいているようすはない。ラニアーがふたりの部屋にもどったときには、ファーリーは眠っていたのだ。だが、ラニアーのほうは、悶々としてなかなか寝つかれなかった。思春期以来、あんな状態になったのははじめてだった。

数分後、ラーム・キクラが青緑色の草地の上を駆けてきて、バスにとびのり、報告した。

「大統領はこられないそうです」

「それは残念ね」それほど残念そうでもなく、キャロルスンがいった。「なにかトラブルでも？」

「わかりません。いま、セル・トラー、大統領、大主教の部分人格の三人で、なにか協議しています。みなさんは先にいってください。わたしはここに残って、状況を確認しますから」

フラントの運転手が、オルミイをふりかえった。オルミイはうなずいた。バスはなめらかに芝生の上を進みだし、こまかな砂利で舗装された道路に乗った。ほどなく、白く舗装されたハイウェイにはいり、リゾート地をまわりこんで、もうじき昇ろうとしている太陽に向かって進みだした。島の稜線の向こうは、もう深紅色に染まりだしている。パトリシアはなにか甘いにおいを感じとった。ティンブルの海の豊かで鋭いにおいとは、全然ちがうにおいだった。リゾート地の境界の外に広がる、丈が低く密生した黄色い茎植物の畑の上をわたって、風が吹いてくるのだ。畑

では、たくさんポケットのある赤いエプロンをつけたフラントの農夫たちが、小型の自動トラクターをしたがえて、すでに収穫をはじめていた。

「彼らが収穫しているのは、生物学的な人格素です」とオルミイが説明した。「あの植物は、品種改良したプランティマルで、影体化する前の記憶にいたるまで、複雑な生物学的構造を複製できます。規模的には、家内工業、という程度のものですがね。なかなか割りのいい交易品なんですよ」

「人間にとって？　それともフラントにとって？」ラニアーがたずねた。

「プランティマルはたいていの生物に利用できます」とオルミイ。「炭素型生物であれば、遺伝子コードを書きこむことは難しくありません」

ラニアーは、その家内工業で利益を得るのが、人間なのかフラントなのかときいたつもりだったのだが、質問をくりかえすのはやめにした。バスは白い道路を通って、畑のまっただなかを通りぬけ、人家の密集する沿岸の平野にはいった。平野は、内陸部に向かっては少なくとも十キロ、沿岸ぞいには何十キロにわたって広がっており、フラントの村で覆いつくされていた。

わずか三平方キロほどしかない、小さな村も十ほどあった。ひとつひとつの村には、屋根の低い長方形の家がいくつかずつ、円環状に配置されていた。その中心には、ストゥーパのような建築物があり、たいていは高さ五十メートルほどもあって、さまざまな色の旗で飾りたてられていた。陽がすっかり昇りきると、内陸に向いている旗の色が変わり、穏やかな風に乗って、なよやかな虹のように、ゆっくりとたなびきだした。

「あなたたちと比べて、フラントの進み具合はどうなの？」キャロルスンがたずねた。

「もっと基本的ですが、これは原始的という意味ではありません」とオルミイ。「テクノロジーや科学に対する彼らのとらえかたは――あなたがおっしゃっているのはそれだと思いますが――幅の広いものです。その生き方やひとあたりのよさに、目をくらまされてはいけません。フラントは能力豊かな種族です。わたしたちは、彼らに多くをたよっています」
　畑と村を通りすぎると、道は螺旋を描いて、低い山を這い登っていた。山の頂上には、いくつもの透きとおった灰色の岩の柱が、天をさしているのが見えた。山頂に出ると、岩の柱が連なる大地の上に、白地に銅色の帯のはいった、高さ六十メートルほどのずんぐりしたドームがあり、その基部が膨れて、広々としたパビリオンになっていた。バスはパビリオンの周囲にせりだした屋根の下にはいって、停車した。
　オルミイの案内で、一行は中空のドームのなかにはいった。そこには、良好に保存された、しかし明らかに古い、青銅や黒鉄や白エナメルで作られた、ひとつの機械が鎮座していた。そして、幅が五メートルはありそうな、その馬蹄形の土台のそばに、上半身裸の、見たところ中年の男がひとり、幅広のベルトに工具キットをぶらさげて立っていた。男は褐色の肌をしていて、それがかすかに虹色の輝きを帯びている。馬蹄形の台座のまわりには、ちょっと離れたところに三人のフラントが立っており、それを布で磨きながら、低い声で話しあっていた。台座の上にそびえているのは、十字型をした巨大な黒鉄の檻だ。ヴィクトリア朝時代の橋を、まちがって持ってきたようにも見える。
「こいつは、天体望遠鏡だ」とハイネマンがいった。「すげえ！」
「たしかに、天体望遠鏡です」褐色の男が、笑顔を浮かべていった。「われわれのゲートが開く

前、フラントが造った最後の天体望遠鏡ですよ」
「こちらはセル・レンスリア・イェイッ——ゲート開放師です」オルミイがいって、全員に紹介した。「ポイント1.3×9まで、いっしょにきてくれます」
イェイッは工具キットをはずして、いった。「ずっと前から、お会いできるのを心待ちにしていました。セル・オルミイのはからいで、みなさんのことは耳にいれてもらっていましたのでね。わたしはもっぱら、フラントの依頼で、彼らの歴史的宝物のいかけ屋をやらされているんですよ」イェイッは片手で天体望遠鏡や、ドーム、パビリオンなどを指し、ついで青いシャツをはおると、合わせ目を上から押しつけてとめた。「当節、ゲート開放師は、あまり仕事がありませんでね。われわれが手伝わなくても、大開放師ひとりだけで立派にゲートをあけられるんですからね」それから、彼はパトリシアに近づいて、「あなたのことは、オルミイからたっぷり聞かされていますよ。たいへんな発見をなさったそうですね」
パトリシアはほほえんだが、なにもいわなかった。しかしその目は、凛（りん）とした光をたたえていた。秘密をいだいた猫の目だ。昨夜以来、彼女が著しく成長していることに、ラニアーは誇らしさを——それとも、べつのなにかか？——いだいた。
「ああいうものの修理なら、おれがやりたいね」ハイネマンがうずうずしているような声でいった。
「きっとそのうち、あれでなくとも、似たようなものを修理する機会がありますよ。残念なことに、フラントというのは、どうも自分たちの過去を保存しようという気がなくってね」イェイッは天体望遠鏡の台座をぽんとたたき、「わたしはしばらく、ここにはもどってこられません」と、

悲しげにいった。それから、ハイネマンとキャロルスンに向かって、打ち明けるような口調で、「あのフラントたちに仕事をつづけてくれるようにはたのんでいきますが、いずれ彼らはべつの仕事についていってしまいます――すべてのフラントがそうであるように、外に出ていって、情報を共通化するんです。そうなったら、ここはふたたび荒廃しはじめる。かつて、これをふくめて全部で十五あった天体望遠鏡は、襲来する彗星群をもとめて、日暮れから夜明けまで忙しく働いていたものなのに」イェイツは、あとについてきてくれるようにと手招きをすると、パビリオンの外に出ていき、せまく平らな庭を横断した。

険しい絶壁の縁に立って、彼らは下の平原と、その向こうの海を見わたした。「わたしたちがきたとき、フラントはすでに、宇宙時代にはいりかけていました。核弾頭を装備した、何千発ものミサイルも建造していました。盲点をつく、よく工夫された、しかしきわめて混乱したテクノロジーです。安普請、といってもいい。こういうことば、ありましたね？　われわれがきたときは、最後の大規模な彗星雨から九世紀たっていて、フラントはつぎの襲来に備えていたんです。

これやその他の天体望遠鏡のいずれかが彗星を発見していたら、何千人ものフラントが精神を結合して、その軌道を計算していたでしょう。計算には何年もかかったかもしれないが、当時は原始的なコンピューターしかなかったのです。その結果にしたがって、村はより安全な地域へ移動する。惑星じゅうのすべての村がね！　われわれがきたために、フラントはそれをせずにすみました。しかし、それでもこれは――」と、ドームに片手をふりあげて、「崇高な機械です」それだけいうと、イェイツはかぶりをふって、「セル・オルミイ！　さあ、出発しよう。ここでのわたしの役目はおわった」イェイツはひとりひとりのフラントを抱きしめ、情報均質化のしるし

として——これは人間にとっては純粋に儀式的なしぐさにすぎないが——全員の手にふれた。

と、一行がトラックに乗ろうとしたとき、朝日を浴びてパビリオンの端に立っていたフラントのひとりが、さえずるような声をあげ、海岸を指さした。見ると、三つの小さな白い点が、海の向こうから天体望遠鏡に向かって近づいてくる。オルミイは眉をひそめた。

「ミスター・ラニアー、あなただけ残って、みんなはドームに避難させてください。セル・イェイッ、きみはみんなについていてくれるか?」イェイッはうなずき、パトリシアたちをせきたてるようにして、パビリオンに向かった。

「なにがあったんだ?」

「わかりません——ゲート・ポリスがくる予定はなかったんだが」

三つの白い点は急速に大きくなり、先端のまるくなった鏃(やじり)型の乗り物になった。三機はドームのまわりを旋回し、北側の平らな広場に着地した。一機の機首のハッチが開き、オリガンド・トラーが現われた。うしろには、四人のゲート管理官と、外交関係の高官であることを示す、緑の帯をつけたひとりのフラントをしたがえている。トラーはオルミイをまっすぐ見すえながら、足早に近づいてきた。

「アクシス・シティでやっかいなことが起きた」開口一番、トラーはいった。「わたしは、きみたちの視察行を中止させ、全員ただちにアクシス・シティへ連れ帰るよう指示されてきた」

「その前に、説明していただきたい」オルミイが強い調子できいた。「やっかいごととはなんです?」

「コジェノフスキー派とネイダー正教徒どもが、不当な権威を行使し、管区間の通信を切断した

のだ。大統領は急遽ジャルト対策会議を休会し、ティンブルを離れた。いまはアクシス・シティに向かっているところだ。われわれもいますぐ発たねばならん」

「全員をここに残しておいたほうが、安全ではありませんか？」とオルミイ。「状況がもっとはっきりするまで」

「もう充分すぎるほどはっきりしているではないか。分離主義者どもが、たくらみを強行しようとしているんだ」トラーはタイト・ビームの図話に切り替えていった。激昂しているため、そのメッセージは、赤みがかった紫色をしていた。「この問題については、われわれの客が重要な鍵となる。それはきみにもわかっているはずだ、セル・オルミイ」

オルミイは図話を使わずに答えた。「わかってはいますよ、セル・トラー。しかし、あなたはわたしのほうの論点を見落としておられるようだ。大統領がいないのであれば、ティンブルにおける人間の最高権力者は、セル・イェイッということになる」

トラーはただちに状況を把握した。「彼らを引きわたさないというのか？ わたしは大統領権限に基づいて行動しているのだぞ」

「全員を引きわたさないとはいいません」とオルミイ。「残ってもらうのは、ふたりだけです。ほかの三人は、連れていってけっこう」

ラニアーが抗議しかけたが、オルミイは鋭い一瞥をくれて、黙らせた。

トラーが一歩あとずさった。「ゲート当局に命じて、きみたち全員を逮捕させることもできるのだぞ」

「はったりはおやめなさい、大統領補佐官」いつのまにかそばにきていたイェイッが、横から警

告した。「たとえ相手が不活性状態にあるゲート開放師であろうとも、その命令にしたがわないゲート当局はない。セル・オルミイ、ひとりはわかるが、もうひとり残るのはだれだ？」
「ミスター・ラニアーだ」とオルミイ。
「きみは分離主義者に味方するのか？」いまははっきりと怒りをあらわにして、トラーが詰問した。オルミイはそれには答えずに、
「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスとギャリー・ラニアーは残していただく」と、きっぱりといった。「ほかの者は連れていってもかまわない」
「別れ別れになるのは拒否する」ラニアーを制止しようとして、やはりそばにきていたハイネマンが彼の腕をつかんだが、ラニアーはそれをふりきって、進みでた。
「選択の余地は与えられない」とオルミイ。「もう婉曲ないいまわしや外交ゲームをやっている段階はすぎたようです、ミスター・ラニアー。わたしは、ミス・ヴァスケスの役にたつかもしれないと思ってあなたを選んだ。ほかの三人の安全は保証します」
「こちらは全員の安全を保証するぞ」とトラー。「ただし、きみといっしょにいく者については保証できないがな、セル・オルミイ」
「彼らの代理士はセル・ラーム・キクラだ。どこに連れていこうと、この三人にはつねに彼女がつきしたがい——その安全を図る」
飛行艇からメカニカル・ワーカーが何台か現われ、車輪や牽引フィールドなどで移動してきて、ファーリー、キャロルスン、ハイネマンの三人をとりかこんだ。「ギャリー」ファーリーがこわばった声でいった。

いのだから」
「危害を加えられる心配はありません」オルミイがふたたび保証した。「これは抗争事件ではな

「現在、〈冠毛〉の疎開がはじまっているのは知っているな?」オルミイにさらに反抗的な態度をとらせようとして、トラーがいった。「ローゼン・ガードナー有体下院議員が責任者となって、小惑星の疎開作戦にあたっている」

オルミイは当然だといわんばかりにうなずいた。
「ヴァスケスとラニアーをどうするつもりだ?」
「さあ、だが、たしかに三人はわたした」とオルミイ。「三人の身柄は、あなたの責任において保証していただく」
「このままではたいへんなことになるぞ。〈道〉に噂が流れれば、ゲートは閉鎖され、車線はがらあきになり――」
「どのみち、ゲッシェルはそう計画していたのではなかったのかな? 〈道〉からジャルトを一気に一掃するために。対策会議の結論は、大統領の提案によって、その方向に固まりかけていたはずだ。だろう?」

トラーは神経質そうに、ゲート開放師を見やった。「きみもこの……分離主義者に手を貸しているのか?」

イェイツはただにやりと笑い、工具キットから腕環をとりだすと、DNAの円環でとりまかれた地球のシンボルをピクトした。

かぶりをふりふり、補佐官はワーカーたちに合図した。ファーリー、キャロルスン、ハイネマ

ンが、飛行艇に運ばれていった。キャロルスンは怒りで真っ青になって、叫んだ。「このまま黙って連れられていくの?」
「ほかにどうしようもなかろうさ」ハイネマンが深刻な顔でいった。「きょうはパトリシアのバースデイ・パーティーだ。ステップに気をつけろよ、ギャリー」
ファーリーが肩ごしにラニアーにふりかえり、涙を流しながら、「ギャリー?」と呼びかけた。
「この、ひとでなしども」ラニアーはオルミイとトラーに向かって、「やはりパトリシアのいうとおりだった。われわれはチェスの駒でしかないんだ」
「自分たちを過小評価してはいけないな」トラーはそういい残すと、ゲート管理官たちを引き連れて飛行艇にもどった。外務フラントはあとに残った。飛行艇はふたたび舞いあがり、ゲートの受けいれエリアにとびさった。
「こういう状態になったことはお詫びします」とオルミイがいった。「さあ。急いでポイント1.3×9にいかなければ。事態は思ったよりずっと切迫しているようだ」

呉と張は、ベレンソンの部隊の手を借りて、テントから装備や書類を詰めた箱を運びだし、トラックに積みこんでいた。南極から吹きおろしてくる冷たい風が、テントの生地をはためかせている。荒い息の音と足音、ときおりベレンソンがのどの奥でうめく音を除けば、撤収はごく静かに行なわれた。
道路の上、三メートルのところには、六体の十字架が浮いている。それらの赤いスポットは、兵士や科学者たちの動きをすべて監視しているようだ。はるか頭上、プラズマチューブの中心に

は、連絡孔から五十メートルと離れていないところに、なにか長くて黒いものが、特異線に重なって静止していた。呉が双眼鏡で見たところ、長さ百五十メートルはありそうだった。それが飛来し、ベレンソンに撤収するよう命じてから、まだ十分とたっていない。

トラックが荷物でいっぱいになり、テントがからっぽになると、兵士たちは荷物の上によじ登り、ふたりの中国人はあいているふたつの助手席に乗りこんだ。ベレンソンは屋根の端の手すりをつかみ、車体側面のはしごに足をかけた。トラックは車体を揺らしながら進みだし、Uターンして傾斜路に登った。

空洞から人がひとりもいなくなると、十字架群は集合して立方隊形をとり、空洞の床を走査するために飛び去った。

いっぽう、二十五キロ上空の、フローシップのなかでは、ローゼン・ガードナー有体下院議員つきの影体が、撤収経過を眺めながら、〈道〉の奥のアクシス・シティに向け、直接ビームですべての経過を送信していた。

もっとも、当のアクシス・シティ自体では、三つの自転円筒と中央シティとの通信は、切断されたままになっていた。アクシス・ネイダーにいたっては、輸送システムからも完全にブロックされていた。シティ・メモリー主要セクションも——ふだんは二十四時間ぶっとおしで活発に活動しているのに——いまは孤立して、ひっそりと静まりかえっている。潮流は変わった。ゲッシェル急進派たちは、オルミイのニュースと五人の客を利用しようと急ぐあまり、出払っている。

ローゼン・ガードナー再生有体下院議員がネクサス議事堂に乗りこんできたのは、数時間前のことだった。目的は、中央シティにおける、ただでさえ不安定な立場を危険にさらし、アクシス

・シティ全体の活動の中心となること。反乱にあたっての雑事を処理するため、四体の部分人格も作ってある。
しかし、コジェノフスキー派の者や支持者たちは、だれもこれを反乱とは呼ばない。彼らにしてみれば、ゲッシェル急進派の攻勢からみずからの権利をまもるため、どうしても必要な行動だったのだ。もっとも、それがなんと呼ばれようと、ひどく複雑な行動であることにかわりはない。
〈冠毛〉からの情報は不充分だが、さしあたってそちらは、いちばん心配のいらない部分だ。
ローゼン・ガードナーの部分人格は、三つのアクシス円筒のそれぞれと、ポイント9×6の〈道〉通商委員会に詰めている。アクシス・シティ内、および付近の〈道〉における全戦略的交通拠点には、同派の戦闘的な者たちで押さえてあった。シティ・メモリーとアクシス・シティの下部構造の深領域を利用して、ネイダー正教徒とコジェノフスキー派は——後者はガードナーの仲間たちだ——いま、過去数時間に稼いだ得点を整理しているところだ。彼の父もふくめ、シティ・メモリーのコジェノフスキー派シンパたちは、通信網の妨害を引き受けてくれている。
すべては計画どおりに進んでいた。だが、ローゼン・ガードナー有体下院議員は、過去二世紀の人生で、かつてなく大きな不安を覚えていた。大主教や大統領の非難などは、歯牙にもかけていない。彼らが歯がみするところ見たさに——そのたびに、その権力によって痛い目にはあわせられてはきたが——彼らにさからったことは何度もある。
彼がおちつかないのは、自分がついこのあいだまでネクサスで守りぬこうとしていたすべてを——そして、アクシス・ネイダーの新ネイダー正教徒区有体下院議員として選出される以前から信奉していたすべてを、みずから破ってしまったことにある。みずからの部分人格のひとつに、

その背信行為を糾弾されるかもしれないと思うと、ますます気が滅入った。

すでに同派の者たちは、フローにそって、南へ、〈冠毛〉へとシティを動かす準備にとりかかっている。シティを移動させるためには、障壁をはずしてしまわねばならない。時間がかかるのはそこだ。

がらんとしたネクサス議事堂の中央で、アーミラリー情報リングにとりかこまれ、ジャルト問題で集まっている大統領や上院議員や有体下院議員がもどってくるのを、ガードナーは待った。彼らがアクシス・シティにはいろうとして拒否されれば、もはやガードナーがこの行為をなんと呼ぼうと関係なくなる。

その時点で、ほんとうの反乱がはじまるのだ。

大統領の部分人格の一体がそばに現われ、彼が注意を向けるのを待った。ガードナーは時間をかせいだ。とうとう、すべてが順調にいっており――とりわけ、シティ・メモリーの分割が大成功であったと得心がいくと――ガードナーは部分人格にピクトを許した。

「これだけのことをして、ただですむと思っているのか？」と部分人格はきいた。「わたしの本体はすでにこちらに向かっている。ヒューレイン・ラーム・セイジャ議長は、すでに告訴状を提出しているぞ。きみがネクサスの慣例的手続きを踏んでいないことは、いうまでもない」

「たしかにそうです。しかしこれは緊急事態であり、また絶好の機会でもありましてね」ガードナーはそういった意味のことを、感情の多分に混じったシンボルを添えてピクトした。まず、DNAの環でとりかこまれた地球からなる、ネイダー教徒が故郷を表わすときに使う複雑なサインを描きだし、ついでそれが炎に飲みこまれ、黒焦げになった動物の頭蓋骨に変化し、その意味を

限定する諸シンボルを投げかけたのだ。それから、より直接的なシンボルで、つづけた。「セル・ラーム・セイジャには、分離ののちにでも裁いていただきましょう――ただし、わたしがいなくなってからね。われわれはいま、議長自身が冒したネクサス議事手続き違反について、審理準備を進めているところです」

「そういったことは、なにひとつ聞いていないぞ」部分人格が、信じられぬといった面持ちでいった。

「あなたはお忙しかったですからな、セル・大統領」そう口にしてから、ガードナーは自分の口調にうしろめたさを感じた。大統領はジャルト問題にかかりきりになっていたのであって、いかなる責務であろうとないがしろにするのは、大統領の本意ではない。大統領の不在を利用させてもらっただけで、もう充分というものだろう。「それはささやかな違反ではありますが、わたしには訴えるだけの権利があります。審理にかけられているかぎり、セル・ラーム・セイジャはすべての職務から凍結される。変わって議長代理の座につくのはプレシアント・オイユ上院議員ですが――彼女はどこかに出かけていて、自分の職務を代行させるため、部分人格を一体残しているのみです」

「きみについては、すでに反逆者である旨公表し、きみの全権利を剝奪するため、必要な議決をとってある」と、大統領、ヴァン・ハンファイスの部分人格はピクトした。ガードナーはすでにそのことを知っていた。が、合法的処置により、プレシアント・オイユ上院議員の部分人格の助言もいれて、ガードナーはその議決が無効であることを宣言していた。議決のさい、再生上院議員および有体下院議員が定数に達しておらず、かつ投票者が再生者ではなく、部分人格であった、

というのがその理由だ。
戦いはまだおわりにはほど遠い。再生者ティーズ・ヴァン・ハンファイスは、もう数時間で、アクシス・シティのそばにまでやってこようとしていた。

60

第一から第四空洞にかけ、プラズマチューブの内側ぎりぎりのところを、鏃型の飛行艇がパトロールしていた。さらに、より大きな乗り物が谷の床のすぐ上を気ままに飛びまわり、横棒が二本ある十字架はいたるところに浮遊していた。
第四空洞ゼロ・コンパウンドで、ジュディス・ホフマンは、いかなる防衛努力も無益であることを悟った。技術力と物量が、あまりにもちがいすぎるのだ。
「あれがみんな〈通路〉の奥からやってきたことは、まちがいないのね？」ホフマンはコンパウンドの中央で、撤収のために待機しているトラックのそばに立ったベレンソンにたずねた。「まちがいない」とベレンソンは答えた。興奮で、発音がなまっている。
「となると、最良の状況を期待するしかないわね」
「どういう状況です？」ポークがきいた。その髪が、ひどくくしゃくしゃだ。いつも非のうちどころのない格好をしているジャニス・ポークがこれなのだから、よほど動転しているのだろう。
「彼らが人間であること。わたしたちの子孫であることよ」

皆殺しにされるよりはと、ホフマンはゲアハルトに、向こうから攻撃されないかぎり、部下には発砲させないよう指示しておいた。もちろん、ソ連人にまで指示することはできない――彼らには独自の判断でこの状況に対処してもらうしかない。

一応、ソ連側にも、ウォリスとポークが連絡をつけようとはした。が、無線で何人かのソ連人と話はしたものの、こちらの状況についてはいっさい教えられないとつっぱねられるばかりだった。もっとも、公正にいうなら、士官にはひとりとして連絡がつかなかったのも事実だ。そのためリムスカヤが、必要とあらば、じかにいってソ連の指揮官たちにメッセージを伝えてこようと志願した。勇敢な申し出ではあったが、ホフマンはそれを退けた。ソ連側にメッセージがとどくころには、状況が変わっているだろうからである。

三体の十字架が、三角隊形を組んでコンパウンドの上を飛翔していった。が、南極に達すると、そのうちの一体が別れ、コンパウンドにもどってきて、中心部の真上、ホフマンのちょうど上で停止した。ベレンソンとホフマンのあいだに、まばゆい光が閃いた。ホフマンはのけぞり、よろめいてリムスカヤにもたれかかった。ベレンソンは大きく目を見開き、鼻の穴を広げて、仁王立ちをつづけた。

ついで十字架が、女性の声でしゃべった。

「危険はありません。いかなる状況においても、あなたがたを傷つけたりはしません。また、あなたがたが、おたがいに傷つけあうことも許されません。現在、全空洞に居住する全員は、アクシス・シティの管轄下にあります」

「じゃあ、どうしろっていうの？　地べたに頭をすりつけろとでもいうの？」ベリル・ウォリス

がいった。
　浮かぶ十字架に片目をすえたまま、ゲアハルトがゆっくりとホフマンたちのもとへやってきた。そして、「なんなんだ、あのしろものは」と小声でホフマンにいった。「部下たちは、失禁していいのか、ひれ伏せばいいのか、判断に苦しんでいるぞ」
「悪いわね、わたしにもわからないの」
「いったい、〝アクシス・シティ〟とはなんだ？」ベレンソンがきいた。
「これは想像だけれど」とホフマン。「〈通路〉の奥で――きっと特異線の上で――あの人々が住んでいるところでしょう」
　リムスカヤが大きくうなずき、「ともかく、話してみることだ」と提案した。
　ホフマンは目をすがめて、十字架を見あげた。「こちらも攻撃はしません。あなたたちは、何者です？」
「あなたがこのグループのリーダーですか？」
「そうです」とホフマン。それからゲアハルトを指さして、「それから、この人も」
「あなたがたは、全空洞の全グループのリーダーですか？」
「ちがいます」ホフマンは、証言台に立った証人のように、聞かれないことは黙っているのがいちばんだと判断して、自分からは情報を与えないことにした。
　十字架より大型の、先端のまるい鏃型の飛行体が二機、ゆっくりと飛んできて、コンパウンドの北と南の端に停止した。地表からの高さは、二十五メートルくらいだろうか。
「交渉者の安全を保証しますか？」十字架の声がたずねた。

ホフマンはちらりとゲアハルトを見やり、「そう命令して」というと、もっと大きな声で十字架にいった。「保証します。でも、しばらく時間をちょうだい」ゲアハルトが無線で、全空洞の各部隊に指令を出した。

「もう準備ができましたか？」

「できたわ」ホフマンはゲアハルトにうなずいてみせた。

南端の飛行体が、コンパウンド中央から十メートルほど離れたところへ進んできて、優雅に降下し、一本のパイロンをついて着地した。機首のハッチが開いた。

そのハッチから、黒い服を着たひとりの男が降りてくると、すばやくコンパウンド内を見まわし、ホフマンに視線をとめた。男は胡桃色の髪を三つに分けており、頭髪の中央は両脇よりも短く、ふわふわに縮れていた。鼻孔はなく、耳は大きくて、まるかった。

「わたしはサンチャゴといいます」近づいてきながら、男はいった。そして、いちばん近くにいたゲアハルトに手をさしだした。ゲアハルトはその手を握り、いちどだけふってから、あとずさった。つぎに男は、ホフマンに近づいてきて、ふたたび手をさしだした。ホフマンは軽くその手を握った。男はホフマン以上には力をこめずに握りかえした。「必要なこととはいえ、ご不快の段はお詫びします。わたしは、みなさん全員が、これよりアクシス・シティの名誉あるお客となられることをお伝えするよう、指示されてきました。ただし、恐縮ですが、もうそれほど長く〈冠毛〉には居住できないことも申し添えておきます」

「わたしたち、ほかにどこにもいく場所がないんです」男に圧倒され、シャトルで地球をあとにしたときよりもさらに無力感にとらわれながら、ホフマンがいった。

「みなさんのお世話はわたしがさせていただきます」とサンチャゴ。「わたしたちは、ここにいる全員を集めなければならないのです——研究者、兵士、連絡孔にいる方たち——そして、ソ連人。それも、早急にね」

ミルスキーは飛行艇を降り、まばゆいプラズマチューブの光に目をしばたたいた。静かで暗かった飛行艇のなかと、第七空洞の強烈な明るさとは、鋭い対比をなしていた。ここにきてはじめて、彼は〈通路〉の奥を見やり、いままで話にしか聞いていなかったことがまぎれもない真実であることを実感した。なにしろ、時間がなくて、〈ポテト〉内を視察する余裕はほとんどなかったのだ。指揮官として割ける時間のほとんどを、図書館で費やしていたのだから……。

うしろから、もう五人のソ連人が降りてきた。全員が、第四空洞百八十度線付近で、森のなかに潜んでいた者たちばかりだ。彼らもまた、まぶしさに眉をひそめ、目を覆っていた。そして、やはり〈通路〉の奥を見つめ、その広大さをいっそう強く認識していた。

西に一キロいったところで、ゼロ度トンネル付近に、何百人もの人々が集まっていた。ほとんどは、やはり追いたてられてきた、NATO側の要員たちらしい。いまのところはよくわからない理由で、どうやら〈ポテト〉はからっぽにされようとしているようだ。

森のなかで出会ったあの兵士がミルスキーの腕をつつき、東を指さした。何百人ものソ連人が、広場に集まってうずくまっている。その周囲には、少なくとも十体の十字架が浮かび、ミルスキーの見たことのない、彼を捕まえたあの女によく似た格好の人間が、三人立っていた。

先端のまるくなった鏃型の飛行艇がもう何機か降りてきて、南極付近に着地し、さらにおおぜ

いの人々を吐きだした。ミルスキーはぼんやりと、われわれはみんな殺されるんだろうかと考えた。そんなことが、まだ気になるのか？　いちど殺されたくせに？　たしかに、気になるらしいな。

おれはいまも、星々がほしい。いまでは星々を手にする可能性は遠いものに思えるが、それでもその望みがあること自体、自分の本質がパーヴェル・ミルスキーであることの証拠といえる。いまになっても、おれのなかには、冬に縛られたキエフで星空を見あげた五歳の少年のころと、同質のものが残っているらしい。じっさい、その記憶は純粋で、再構築されたのではない、オリジナルなものだ。ヴェルゴルスキーも、彼の原体験を頭から吹きとばすことはできなかったのだ。

ミルスキーはぼんやりと思った。ヴェルゴルスキーやほかの政治委員たちは、あの虜因の群れのなかにいるんだろうか。連中にいま、おれをどうすることができる？　なにもできはしない。こんな状況にあって安堵のため息をつけるのは、ロシア人だけだろう、とミルスキーは思った。

リゾート地にもどると、プレシアント・オイユ上院議員がやってきて、イェイッとオルミイに、フラントがゲートを閉じようとしていることを知らせた。〈道〉に緊急事態が発生した場合の、これは標準的な措置だという。

オルミイはすばやく行動した。ゲートが閉じられる前、イェイッをさしむけて、ゲート開放師とその客が移動するから、小型の防衛フローシップを一隻用意してほしいと要請させたのだ。要請は拒否されたが、イェイッはゲートのフラント側でも権威を発揮して、受けいれエリアに待機していた二機の連絡艇のうち、一隻を譲渡してほしいと申しいれた。駐留していた人間の防衛隊

は——ほとんどがネイダー教徒だ——トラーが立ち去りしなに残していった指示よりも法令を優先することに決め、ゲート開放師の要請にしたがって、連絡艇のほか、二名の護衛と一台の防衛メカニカル・ワーカーを与えてくれた。

連絡艇に乗って〈道〉の軸部に上昇した彼らは、フロー付近で、三隻のフローシップを発見した。いずれも、トラーの飛行艇に道をあけるため、フローからはずれていたものだ。そのうちの一隻には、だれも乗っていなかった。ほんの数分前停泊したばかりで、ネイダー教徒のクルーたちは、船体を牽引フィールドでフローにもやい、自転軸の検査エリアに待避させていったものらしい。やはり法令の定めるところにより、この種の小型フローシップは、利用時間一万時間ごとに検査を義務づけられているからである。

イェイツの権威は、フローシップのクルーたちに与えられた曖昧な指示にやすやすと打ち勝ち、船の接収に成功した。

オルミイたちは乗船し、フローシップを特異線に乗せた。船体の中心を貫くフロー縦貫筒が、外殻の外に広がっていき、切れ目のない円柱の一部が軸ぞいにぱっくりと開いて、フローを飲みこむと、また閉じた。ポイント1.3×9に向かって、フローシップは加速を開始した。

「こんなことをして、成算はあるんだろうな？」黒と金のまだらにかすみだした〈道〉の壁面を眺めながら、ラニアーがオルミイにきいた。

「いちかばちか、賭ける程度には」

「急進派ゲッシェルは、ここ何十年も不安定な立場にあったんです」とオイユ上院議員がことばを添えた。「彼らは悪い指導者ではなかったけれど、その計画を実行に移せるだけの準備ができ

ていなかった。そして彼らは、ネイダー教徒を慇懃に拒絶することによって、一種の復讐をも行なっていました。その反動の一部が、こういう形で表われたのです」
「あなたたちはみんな、ネイダー正教徒なの？」
「ちがいますよ」とオルミイ。「わたしはずっと前にネイダー教徒であることをやめましたし、セル・イェイツとセル・オイユは、生粋のゲッシェルでした」
「それなのに、なぜこんなことをするの？」
「どちらの派にとっても、目的を達成する方法がひとつあるからです——理性的な人間があいだにはいりさえすればね」
彼らの小型フローシップは、高速・急加速タイプだった。オルミイたちは平均秒速四千九百キロで移動し、二十八時間のうちにポイント5×8の第一防衛ステーションに到着した。
ポイント5×8からポイント1.3×9にかけて、防衛ステーションは〈道〉の三ヵ所に配置されていた。それぞれが、〈道〉の壁をぐるりととりまき、百キロにわたってつづく厚さ五十メートルの黒い層で、その表面には無数のくぼみがつけられ、砲座やフィールド発生装置がぎっしりとならべられている。
三つの防衛ステーション全部で、オルミイたちは目的説明と通行権の提示をもとめられた。が、イェイツが身元を明かすと、ステーション要員たちはすんなり通してくれた。〈道〉を奥へ進む乗り物を制止するようにとの命令は、出ていなかったためである。各ステーションから十万キロずつ離れた地点には、ロボット・フロー防衛船が待機しており、彼らが近づいていくとフローから離れて道をあけ、小型艇が通りすぎるとまた特異線上の定位置にもどった。これらのロボット

は、ジャルトのフローシップやフロー移動兵器に対する、押さえの役をするものだった。
五十時間後、オルミイは小型艇を減速させ、ポイント1.3×9の大気障壁に近づいていき、這い進む程度のスピードで——秒速数十メートルほどだ——軸付近の穴を通りぬけた。障壁の向こうに現われた姿は、ラニアーたちの予想を超えた——そして魅力的なものだった。
肉眼で識別できるかぎり、〈道〉内は〈冠毛〉の第四空洞にそっくりだった。それどころか、もっと緑が多く、ずっと自然豊かといっていい。いくつもの雲が、プラズマチューブの外を、ものうげに漂っていく。そのはるか下で、森に被われた丘陵地帯の向こうに広がる、緑と金色の平原。多数の川が、きらめく筋となって丘陵地帯をぬい、ところどころプラズマチューブの光を反射して、きらきらと銀色に輝いている。
パトリシアはフローシップの船首に浮かび、腕組みをしてその情景を眺めた。プレシアント・オイユの説明によると、〈道〉のこの区画は、人間の安住の地として造成されたものだという。計画の創始者がこの事業に着手した動機は、アクシス・シティの過密な人口密度が生みだす緊張を、なんとか緩和できないかと思ったからということだった。なにしろアクシス・シティでは、シティ・メモリーの膨大な記憶領域でさえ満杯状態にあり、近々拡張を余儀なくされているありさまなのだ。
〈道〉にはほかにも、人類の居住に適するよう造成された小区画がいくつかあるが、それらはいずれも、貿易のために使われている。しかしポイント1.3×9の区画は、通常形態とその特別な要求にあわせて——つまり、おもにネイダー正教徒のために用意されたものだった。
だが、一年前、この区画への移住は延期されてしまった。ポイント2×9の向こうに、ジャル

トが侵入してきたからである。ジャルトとその同盟軍は、戦力を増強しており、ポイント1.3×9まで突破してくる可能性もでてきたため、いまでは移住は、無期延期されていた。もっとも、人間がここから撤退してしまったわけではない。移住は行なわずとも、ほかのさまざまな活動は行なわれている。そのなかには、ポイント1.301×9にゲートを開くこともふくまれていた。

区画内の緑化地域は、長さ二、三千キロしかつづいていなかった。フローシップは、ゲートをおおうターミナル・ビルの上を飛びすぎた。この区画の土や空気は、このゲートから運びこまれたものだ。フローシップはふたたび加速を再開し、第七空洞のすぐ外によく似た、不毛な砂漠地帯を下に見ながら、飛行をつづけた。ほどなく、またべつの大気障壁を通過した。

そこから先の区画では、貿易活動はまったく行なわれていなかった。ゲートもひとつも開かれたことがない。さらにもう三つの防衛ステーションを除けば、〈道〉はのっぺりとして、百万キロの彼方までつづく、黒っぽいブロンズの筒としか見えなかった。パトリシアは、むきだしになった〈通路〉内の幾何学構造を、くいいるように観察した。それを収束させるゲートがない以上、〈道〉の構造はちがっているかもしれないが、それでも幾何学的スタックは存在するだろう――じっさいこの領域は、わたしの研究にとって理想の場所かもしれない……。

「ここで試してみたいのでしょう、あなたの考えを?」オルミイが静かにきいた。パトリシアはふりかえり、目をまるくして、うなずいた。

「セル・イェイツとわたしであなたの理論を検討してみたんですが――まず、セル・ライ・オイユに相談するべきだと思いますよ……」

パトリシアの目が、疑わしげに細められた。「これはなにか、コジェノフスキーと関係あるこ

となの?」いまこそオルミイの秘密を探る絶好の機会だと判断して、彼女はきいた。
オルミイは陰謀めかして自分の唇に指をあて、「その考えを試してみたいというのであれば……たぶん、関係あるでしょうね。しかし、セル・ライ・オイユに会ってからです」
ポイント1.301×9で、フローシップはふたたび障壁を通りぬけた。その向こうには、奥行きわずか六十キロほどの区画があった。濃密で靄のかかった大気を通し、その床がなめらかな緑の平原で覆われているのが見える。区画中央の、まだ開かれていないサーキットには、四つの小さなターミナル・ビルが——各辺の長さはせいぜい百メートルほどだ——配置されていた。
ティンブルのターミナルで彼らを運んだものの三分の一ほどの直径しかないディスクが、ゼロ度ターミナル付近の白く舗装された発着場を飛びたち、フローシップに向かって上昇してきた。
パトリシアは、あまり強く歯をかみしめていたため、顎が痛くなっていることに気づき、なんとか顎の力をぬこうと努力した。オルミイはなにをしようとしているのだろう——そして、オルミイとゲート開放師たちはわたしになにをさせようとしているのだろう?　この機会と引きかえに、わたしはなにを与えられるのだろう?
一行はフローシップをおり、小型ディスクの表面に降下した。このディスクの構造は、前のものよりずっと実用的だった。底の半分は不透明で、唯一の照明は、牽引フィールドの安定した輝きだけなのだ。
ディスク下部のパイ型の区画がスライドして開き、牽引フィールドのシュートが下に降りて、一行をやんわりと発着場に導いた。最後に降りたのは、オルミイだった。プレシアント・オイユが先頭に立って、ターミナルに向かった。

「歩いていける距離ですから」とオイユ。「すぐにセル・ライ・オイユに会いにいくのがいちばんでしょう」

一行は白い舗装の上を歩いていき、肉厚の立派な葉のある草地の上に出た。樫の木や楓の木が、公園のような区域のまわりに、均等に植えられている。木々の向こうには、わずか四つの階段しかない、黄色いターミナル・ピラミッドが見えた。階段はたがいに対して、やはりねじれている。

ターミナルの一面からは、それぞれ直径三メートルほどの、四本の牽引パイプが伸びだして、ターミナルの周囲の地面を何キロにもわたってぐるぐるとりまいていた。そのパイプのなかに、ほのかな紫の輝きにさえぎられてはっきりとは見えないが、およそ人間とは似ても似つかない影がいくつも動きまわっている。

「わたしたちの従属者や同盟者たちですよ」オルミイが、その影のひとつ、アリジゴクの付属肢に似たふわふわしたたてがみが、ふたつに別れたまるい〝頭〟を覆う、八本脚の円筒を指さした。「あれがタルシットです。第三期形態ですね。彼らはきわめて古い種族で――その歴史は、地球年にして、少なくとも二十億年過去まで遡れます。じきにほかのタルシットにも会えますよ――ひとりは、大ゲート開放師のアシスタントをしていますから」

ターミナルは、せいぜい覆いといった程度のもので、高さは約百メートル、幅は基部で百五十メートルしかなかった。ターミナルのなかでは、優美なガンメタル・ブルーの吊り足場が、直径五十メートルほどの、縁のなめらかな穴の上にかかっていた。

吊り足場の中央に、交差する牽引フィールドに包まれてぶらさがっているのは、比較的小さい、手のひらを三つ合わせた程度の大きさの物体だった。パトリシアはそれを見て、大昔の日本の、

首受けがへこんだ枕を連想した。ただし、基部は自転車のハンドルのように、ふたまたに別れている。それがなんであるか、パトリシアはほとんど本能的に理解し、それが自分にとっていかに重要なものとなりうるかをかみしめながら、よく観察しようとして、吊り足場のそばに立ちどまった。

ラニアーの目には、それはレーダー・ディッシュをとりつけた、占い棒のように見えた。

「あれは、なに？」パトリシアが小さな声できいた。

「ゲート開放師が〈道〉の多様性を膨張させる道具です」オルミイが答える。

パトリシアは体に身震いが走るのを覚えた。「なんと呼ばれているの？」

「〈鎖骨〉です。この世に三つしかありません。あれはライ・オイユの所有になるものです」

「あなたのはどこ？」パトリシアはイェイツにきいた。

「ここでは使えません」とイェイツ。「ひとつひとつの〈鎖骨〉は、ゲート開放師にチューンされていましてね。ゲート開放師が公の仕事をしていないときは、〈鎖骨〉も不活性化されているんです」

パトリシアは不承不承、宙吊りになった〈鎖骨〉から目を放し、みんなのあとにつづいて、ターミナル・ビルの西端にいった。そこには、黒と金の線の走る、まだ未完成のキューポラが浮いており、その下にデータピラーがあって、そのとなりに、背が高くて痩せぎすの、赤褐色の髪を短く刈った人物が立っていた。パトリシアはまずその男を観察し、ついでキューポラに目を転じた。

「みなさん」とプレシアントト・オイユがいって、その人物にオルミイとラニアーを紹介した。

「これが父のセル・ライ・オイユです」大ゲート開放師は、それぞれに会釈をした。
「そしてこちらが、パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス」彼女の肩に手を置いて、イェイッ。
「この女性と話をするために、わたしはむかしのことばを学んだのだがね」とライ・オイユがいった。「それに、古い文化と習慣もだ。それでもこの人は、奇抜に見える！」
パトリシアは背筋を伸ばし、かすかに寄せていた眉根をもとにもどした。
「きっと、もっと目をむくようなものを予想していたのでしょう？」とライ・オイユ。「それがオズの魔法使いでなければいいのですがね」彼はそういって、うれしそうに目を細め、手をさしだした。「光栄です、このうえもなく」
パトリシアはその手を握り、細くて黒い眉をいぶかしげに寄せた。
ライ・オイユはパトリシアの手を父親のように暖かくたたいてから、オルミイに不安そうな目を向けた。「さて、これで陰謀の加担者がおおむね集まったわけだ。わたしの研究者たちは、いま、第一クォーターのゲートで作業している。二、三時間したら、ここにもどってくるだろう。彼らには、ここでなにが起こっているのか、少しも知らせていないんだ。さてさて、みんなになんといって説明していいものか――わたしのような立場にある者が、ささやかな陰謀に加わったのだからね。ミス・ヴァスケス――」
「パトリシアと呼んでください」この人物の雰囲気に圧倒され、まだ小さな声しか出せずに、彼女はいった。
「パトリシア、わたしたちがなにを話しあうためにあなたをお連れしたのか、見当はついていますか？」

「少しは」
「ほう？　いってみてください」
「〈通路〉に――〈道〉に関するわたしの研究と関係があるんでしょう。それに、コンラッド・コジェノフスキーもからんでいるんじゃないかしら」
「いい線です。どうやって彼女は、ここまでつきとめたんだね、オルミイ？」
「放浪体をひとり、彼女のもとへ忍びこませました」
パトリシアはつかのま愕然とし、ついで怒りに燃えた目でオルミイをにらみつけた。
「なるほど。で？」
「その放浪体が、いくつかの事実を彼女に教えたわけです」
「危険な手だったとは思わないかね？」
「そんな危険など、とるにたらないものでしょう」とオルミイ。「なにしろ彼女は、特別な〝神秘性〟を持っているのですから」
「たしかにな」ライ・オイユはパトリシアに近づいた。「彼がなにをいっているのかわかりますか？　〝神秘性〟というのがなにか、わかりますか？」
パトリシアはかぶりをふった。「いいえ」
「われわれにとって、これがどれだけ大事なものか、わかるでしょうか？　いや、もちろん、わかるはずがない。いや、いちどきに質問ばかりして……その、パトリシア――」
「オルミイはコジェノフスキーの完全な記録がどこにあるか、知っているんですね」いきなり、パトリシアがいった。それは当て推量もいいところだったが――まるっきり無知に思われるのは

いやだったのだ。

「さあ、それはどうですか」とライ・オイユ。「彼の完全な記録というものは存在していないんですよ——〝抹殺〟以来ね」

オルミイがライ・オイユのあとを引き継いで、コンラッド・コジェノフスキーに関し、パトリシアがすでに知っている断片をはめあわせていった。

コジェノフスキーが〈技師〉と呼ばれていること、〈冠毛〉の慣性吸収システムを設計したこと、飛行中、ベックマン航法の整備を監督したこと。さらには、慣性吸収理論を応用して、第六空洞機構を設計し、〈道〉を創造したこと。

〈道〉創造事業の完成には三十年を要し、ゲッシェルが大部分を占める〈冠毛〉の政府組織と、第二空洞のアレクサンドリアに住むネイダー正教徒が手を結ぶことで、実現にこぎつけた。コジェノフスキー自身が——オルミイと同じように——生まれながらのネイダー教徒で、ネイダー教徒の望みは必ず実現させるからと請け負ったことも、両者の協力に貢献したという。ネイダー教徒の要求は、〈道〉を創造しても、本来の目的をないがしろにしない、というものだった。本来の目的とは、彼方の恒星、イプシロン・エリダニをめぐる、地球型惑星を発見することにあった。ネイダー教徒は、地球の名において彼方の諸世界に植民するという基本目的が、聖なる義務であり、太陽系の外に飛び立つことを許される唯一正当な理由だと位置づけていたのである。

だが、コジェノフスキーも見落としていた問題が、多々あった。その第一は、〈道〉と〈冠毛〉第七空洞をつなげることが、小惑星恒星船をもとの宇宙からはじきだし、べつの宇宙に移動させてしまうことに気づかなかったことだ。それにまた、結合の前、遠隔操作によって実験ゲー

トを開いたのはいいが、信じられない不運によって、ジャルトを〈道〉内に侵入させ、三世紀にもわたって地歩を築かせてしまったことも問題だった。
第一次ジャルト戦争の直後、コジェノフスキーは高まりはじめた非難の声を避けるため、〈冠毛〉のシティ・メモリー内に引退した。だが、そこでも彼は、いろいろと悩まされた。しまいには、ゲッシェル急進派が、彼をネイダー教の背教者であると断じ、彼の人格記録を消去するよう手を打った。すなわちコジェノフスキーは、抹殺されたのである。
「それは、彼が死んだということなの？」パトリシアは混乱してたずねた。
「そうじゃありません」オルミイが説明した。「シティ・メモリーのなかから、彼はアクシス・シティの建設を監督していました。そうする上で、仕事をより迅速に進めるために、各所に部分人格を配していたんです。そのうち、主要ないくつかの部分人格は、仲間の技師たちによって回収され、ある女性に託されて、その女性の手で、秘密のバンクに安置されました。コジェノフスキーの抹殺から一世紀後、その女性もアレクサンドリアの暴動に巻きこまれて死亡しました。彼女はネイダー正教徒で、当時のネイダー正教徒は補助脳を認めていませんでしたから、その死は決定的なものでした。
それから一世紀のち、最後のネイダー教徒たちがアレクサンドリアから追いたてられてきて、一時的に冠毛シティに滞在させられました。わたしはそのとき生まれたんです。そして、家族で住んでいたアパートの、遺棄された私的メモリー・バンクを漁っていたとき、コジェノフスキーの隠された部分人格群を発見したんです。わたしがまだ、子供のころのことでした。〈技師〉といっしょにいられた時間は、二、三年しかありませんでした。しかし、その間に……」

オルミイはセル・オイユを見やった。彼はもう何世紀ものあいだ、このことを秘密にしてきたのであり、それを明かすべきときがきたいまも、なかなかふんぎりがつかなかったのだ。セル・オイユは、力づけるようにうなずいた。

「その間に、わたしは〈技師〉が、いかに不可抗力であったとはいえ、自分が仲間にしてしまったことを償うため、手を打っていたことを知ったのです。対ジャルト戦争ののち、ゲッシェルの牛耳るヘクサモンは、イプシロン・エリダニまでいく必要はないと決定しました。〈冠毛〉のコースが不安定である上に、正直なところ、彼らは単純に、移住先としても開発地としても、〈道〉のほうが有望であると思ったのです。たしかにそのとおりでしたが、それではネイダー正教徒がおさまりません。生きる目的を失うばかりか、地球を、そして彼らの宇宙までもなくしてしまうのですから。そのため、引退する前に、コジェノフスキーはひそかに、〈冠毛〉の誘導システムをプログラムしなおしていったのです。その結果、小惑星恒星船は母なる太陽系の位置を捜しあて、帰途についたというわけです」

「それで、わたしがなんの助けになるというの？」とパトリシア。

「コジェノフスキーの部分人格は、全部合わせると、ほとんどオリジナルに等しくなるんですよ」とセル・オイユがいった。「ただひとつ足りないのが、彼をわたしたちのもとへ連れもどすための最終刻印イメージ、すなわち、〝神秘性〟です。それを与えることで、彼がしてくれたことに報いられればいい、というのがわたしたちの願いなんです。わたしたちは彼に、そのもくろみがうまくいったことを見せてやりたいんですよ」

パトリシアはオルミイを見やり、オイユに目をもどし、ついでイェイツに視線を転じた。

「けれど、わたしたちはどうなるの？」とパトリシアはきいた。
「あなたの同胞たちは、地球にもどるか、ゲッシェルとともに〈道〉の奥へ向かうか、どちらかを選択する機会が与えられます。そしてあなたには、あなたの夢を試す手段を」
「わたしの、夢？」
ライ・オイユはきらめくキューポラの中心の下にある、つややかな黒のキャビネットのところへ歩いていった。そのふたをあけ、小さな真珠色の箱をとりだした。それから彼はもどってきて、その箱をパトリシアに手わたし、あけてごらんなさい、といった。
パトリシアはふたをあけた。なかには、緑のビロードのくぼみのなかに、吊り足場からぶらさがっている〈鎖骨〉にそっくりの、ミニチュアがはいっていた。パトリシアの横から、イェイツがしげしげとそれを見つめて、ため息をついた。
「どうです、取り引きをしませんか。あなたのほうには、失うものはなにもありません」とライ・オイユがいった。「〈技師〉の人格記録を完成させるため、あなたは、〝神秘性〟をコピーさせてくれるだけでけっこう。こちらは、あなたに家を捜させてあげましょう」
「わたしの魂とコジェノフスキーの魂が、同じものだということですか？」
「〝魂〟というのは不適切かな」と大ゲート開放師。「〝神秘性〟といういいかたのほうが、少なくともより正確な意味を伝えてはいます。記憶、思考パターン、思考能力など、人格のすべてをとりだしたとしても、その各部の総体は、全人格とはなりません。そこには、精神全体を彩る超パターンがあり、たとえ断片のほとんどを集められたとしても、それだけは失われてしまう。それが〝神秘性〟と呼ばれるものです。人工的手段でこれを創りだせた例は、かつてありません。

それは名状しがたいなにかであって、ひとりの個人のパターン全体を、かき集めたべつの人間の部分人格集合体にコピーしたときのみ、転写可能なのです。すでに存在する部分人格集合体の上に、あなたの部分人格が転写されることはありません。転写されるのは、集合体が持っていないもの、すなわち〝神秘性〟のみです。それがつまり、あなたがわたしたちに――コジェノフスキーに――与えられる贈り物なのです」

パトリシアは急に怖くなって、ラニアーの手を握った。これはいままでに起こったことと同じたぐいの問題ではない。問題がいきなり、神秘的で不確実になったようだ。いままでパトリシアは、この子孫たちにとって未知のものはなにもないと思っていた。それなのに、ここにひとつ、初歩的で基本的な、綿密に体系づけられ、巧妙に処理されてこそいるが、解明されていない問題が残っていたのだ。

「でも、その〝神秘性〟とやらを力ずくでとりあげることもできるでしょうに――どうして説得しようとするの？」

「この場合、力ずくではだめなんですよ」とライ・オイユがいった。「みずから進んで協力してもらわないかぎり、転写はできないんです」

「どうして彼を甦らせたいの？　彼はもう、目的を達したんじゃないの？」

「これは名誉の問題です」オルミイがほほえんで、いった。「アーサー王をこの世に呼びもどすことができるとしたら、円卓の騎士たちはそうすると思いませんか？　〈技師〉は必ず、自分の計画が達成されたところを見たいはずです」

「でも、彼が思ったような形で達成されてはいないわ」

「たしかに」とオルミイ。
パトリシアは握りしめた自分の手を見つめた。「わたしはなにかを失うんですか?」
「なにひとつ」と、辛抱強く、大ゲート開放師。
「そして、それと引き替えに、わたしはこれを使うことができる……」パトリシアはミニチュアの〈鎖骨〉を指さした。「これは、どうしてこんなに小さいの?」
「不活性化されているからですよ」とイェイッがいった。
「これは、あなたのもの?」
イェイッはうなずいた。
「イェイッはこれをあなたに譲ります。使い方は、儀式のときにわかるでしょう」とライ・オイユ。「わたしのそばについていてください」
「コジェノフスキーはここにいるんですか? コジェノフスキーの部分人格たちが?」
「わたしのなかにね」とオルミイがいって、自分の頭を指さした。
すばらしい嘘をいわれているのか、信じられない真実を告げられているのか、どちらとも決めかねている小さな女の子のような顔で、パトリシアはラニアーを見やった。それから、オルミイに視線を転じ、「あなたの補助脳のなかにいるの?」ときいた。
オルミイはうなずいた。「彼を収容できるだけの、予備の補助脳を埋めこんであるんです」
「あなたのシティでは、なにか大きなことが起こってるんでしょう?」パトリシアがきいた。
「とても大きなことがね。まだ〈冠毛〉にいるあなたのお友だちは、いまごろもっとはっきりそれを目のあたりにしているはずです」

「大統領がわたしたちといっしょにいられないのは、そのため？」
「そうです」
「すこし休まなきゃ」とラニアーが口をはさんだ。「われわれはもう何時間も眠っていないし、なにも食べて――」
「アクシス・シティを地球周回軌道に乗せるつもりなの？〈冠毛〉を破壊して？」
「すっかりそのとおりというわけではありませんが」とライ・オイユ。「いまのところは、それで充分でしょう。ミスター・ラニアーのいうとおりです。休憩してから、再開としましょう。あなたの時代の英語では、いつでも自分の専門の話ばかりすることを、〝トーク・ショップ〟というのでしたね」
パトリシアは目を細め、ゆっくりとかぶりをふった。「わたしには、どうしてあなたたちがわたしとそんな話をしたがるのかわかりません。あなたたちと比べれば、わたしはどうしようもない素人で、原始的な……」
「あなたにどれだけの価値があるのか、どれほどの影響力があるのか、まだ納得していただけないとすると、わたしたちのことばが足らなかったにちがいない」とオルミイがいった。「コジェノフスキーの〈道〉創造は、あなたの研究に基づいているんです。理論的基盤を築いたのは、あなたです。だからこそ、われわれはあなたがコジェノフスキーに〝神秘性〟を分かち与えられると信じているんですよ。彼はあなたの研究に、心底ほれこんでいました。
そして、彼の教師はあなただったのです、パトリシア」

ミルスキーは、ソ連人の集団のなかをかきわけかきわけ、頭上をとびまわる十字架群に目を配りながら、ポゴージンやアンネンコフスキーやガラベジャンたちを捜しもとめた。かつて彼の指揮下にあった兵士たちは、むすっとした顔で彼を見やり、宿命にしたがって、無関心に道をあけた。爪先だちになって、頭の海の上から見わたすと、プレトネフの赤ら顔と短く刈ったもじゃもじゃの髪が見つかった。人波をかきわけながらそちらに向かい、前重輸送船団指揮官のうしろにたどりついて、その肩に手をかける。プレトネフはすばやくふりかえってその手を払いのけたが、それから首をかしげて、ミルスキーを見つめた。
「ほかのみんなはどこだ?」とミルスキーはたずねた。
「だれのことだ? ほかの人殺したちか? あんたもえらくやっかいな問題を残していってくれたもんだよ、同志将軍」驚いたのと怒りとで、プレトネフは声をつまらせながらいった。
「ポゴージンや、ガラベジャン、アンネンコフスキーたちだ」とミルスキー。
「会ってないよ。なんだか知らんが、こいつがはじまってからはな。さあ、もうほっといてくれ」
「きみはみんなといっしょにいたんだろう?」ミルスキーは食いさがった。「どうなったんだ?」
「どういう意味だ、どうなった、とは?」
「ヴェルゴルスキーやほかの政治将校たちだよ」
プレトネフはうさんくさそうに空を見あげ、十字架を目で追った。「死んだよ、同志将軍。おれはその場にいなかったが、ガラベジャンにそう聞いた。射殺さ」そういうと、プレトネフはミ

ルスキーに背を向けながら、つぶやいた。「この天の番犬どもが、そいつをかぎつけなけりゃいいんだがな」
さらに多数の十字架が頭上をよぎり、無数の頭が、風になびく小麦畑のように、そのあとを追って動いた。ミルスキーはポケットに両手をつっこみ、人波を肩で押しのけながら、歩みさった。なにごとかを真剣に考えているようすで、その眉間には皺が刻まれていた。

ストーン人の最後の残留希望者が追いたてられたときも、きっとこんな感じだったんでしょうね、とホフマンは思った。先端のまるくなった飛行艇が、ひっきりなしにやってきては、また連絡孔へもどっていく。ベレンソンの話では、連絡孔内に巨大なチューブライダーが待機していて、各空洞からの回収者を、二十人ずつ収容しているのだそうだ。ウォリスとポークが同じグループでよかった。ホフマンはすっかり、このふたりに頼りきるようになっていたからだ。アンだけはいなかった。まだ第一空洞にいるのか、でなければもう乗船させられたのだろう。
四百人からなるホフマンのグループは、サンチャゴの残していった、黒服の女性が面倒を見ていた。羊の群れを見張る牧人のような、あざやかな管理ぶりだ。その番犬である銀色の十字架群が、おだやかに、しかしねばりづよく見張っているせいか、反抗する者は――少なくとも、逃げだそうとする者は――いなかった。ホフマンはぼんやりと、なにか人々の気分を変えさせる装置でも使われているのではないかと思った。彼女自身、冷静で、恐怖はまったくなく、頭も明晰で、くつろいでさえいる。じっさい、この何週間よりは、気分がいいほどだ。
彼女のグループの半数は、ソ連人だった。双方の同意により、ソ連人はアメリカ人と分けられ

ることになっていたのだが、飛行艇はそれにはおかまいなしに、いっしょに運んでくるのである。彼女の見るかぎり、ミルスキーはこのグループにはいないようだった。それに、彼の指揮権を引き継いだ将校たちも見あたらなかった。

ホフマンの番がやってきた。見張り役の女性が、選ばれたら前に出てくださいといって、ひとりひとり指さしていき、グループのなかから二十人を選りだした。選ばれているあいだに、先端のまるい飛行艇が着陸していた。

自分が指名されると、ホフマンは深く吐息をついた。ある意味で、これは救済だ。すべての責任がなくなるのだから。これで、いままで起こったことのすべてに一線が引かれる。過去を手ばなすことは、自分でも意外なほどやさしかった。

ホフマンはほかの十九人とともに、羊のようにおとなしく、飛行艇に乗りこんだ。

61

パトリシアとラニアーは、個室として、ターミナル・ビルの南のはずれにある小さな部屋をあてがわれた。パトリシアに睡眠をとらせ、また考える時間を与えるためだった。ピクターは、アクシス・シティのパトリシアの部屋と同じ、基本的な装飾パターンを使っていたため、環境にはすぐになじめたが、ラニアーはとてもくつろぐ気分になれなかった。腹がたっているうえに、混乱していたからである。

「彼らがなにをいっているのか、ぼくはさっぱりわからない」〝長椅子〟の、パトリシアがすわっているのとは反対の端に腰かけて、ラニアーがいった。「ぼくらにわかるのは、彼らがきみの魂を盗もうとしているということだけだ。呼び方はともあれ、いかにもそんなふうに聞こえるじゃないか？」
パトリシアは部屋の反対側の幻影窓に映しだされた、松の木々とその向こうの、ぬけるように青い空をじっと見つめた。「その気になれば、盗むこともできるでしょう」
「そうとも、できるだろうさ。ぼくらには連中のことがなにひとつわかってやしない――それに、ぼくらがやってきて以来、ずっとこちらのものの見方を操作しようとしている」
「わたしたちを教育しようとしていたのよ。きたばかりのころより、わたしたちはたくさんのことを知っているわ。オルミイとラーム・キクラがいっていたことも、筋が通っているし」
ラニアーははげしくかぶりをふった。なにがなんだか、さっぱりわからない。怒りが炭のように、ぶすぶすと心のなかでくすぶっていて、彼にはどうしてもそれを消すことができなかった。
「連中、じっさいには、選択の道を与えているわけじゃ――」
「いいえ、与えているわ」パトリシアは譲らなかった。「わたしがうんといわないかぎり、あの人たちがわたしからなにかをとりあげることはないわ」
「まったく！」ラニアーはとうとう爆発した。立ちあがり、荒々しく歩きだしかけて、したたかに壁にぶつかった。部屋の一辺が三メートルしかないことはわかっているが、投影された装飾で、もっと広いように見えるのだ。そんなにせまい部屋だとは、見たところわからない。幻影は完璧で、室内を歩きまわるラニアーからは、パトリシアがほんとうの位置よりずっと遠くにいるよう

に見えた。「ここはなにもかもまがいものばかりだ。ぼくらにわかるかぎり、ここにきて見たものので、本物はひとつもなかった。それも道理さ。見せなければすまないこと以外、どうしてこっちに見せる必要がある?」

「あの人たちは……」パトリシアはなんとかぴったりのことばを見つけようとした。「……悪い人じゃないわ」

「きみが教師だった、先駆者だったなどというでまかせを信じるのか?」

「いけない?」パトリシアはラニアーのほうを向き、手をさしのべた。ラニアーは長椅子にもどってきて、その手を握った。「わたし、これから書くはずの論文に、いくつか目を通したの……」まぶたをぎゅっと閉じ、首を横にふり、もういっぽうの手を頬にあてて、「たぶん、わたしはあのとおりのものは書かないでしょう……でも、あれを書くのは——あるいは、もう書いてしまったのは、わたしであるべつのだれかだわ。そして、ここの人々はそれに基づいてこのすべてを創りあげた。これはずっと、もう何年も前から、わたしの頭のなかに、もやもやした形であったものなの。それに、やはり何年も前から、わたしたちの時代、わたしたちの世界で、こういうことを本気で考えているのが、わたしひとりしかいないということもわかっていたわ。だから、エゴはぬきにして、ここのことが信じられなくはないのよ」にっこりとラニアーを見あげて、「ジュディス・ホフマンはわたししかいないと思った。あなたもそれを受けいれたんでしょう?」

「文明のヒーローになりたいのか? そうなんだろう?」ことばがきつすぎるぞ、とラニアーは思った。気を静めろ。なにをそんなに怒ってる?

「ちがうわ」パトリシアは静かに答えた。「そんなこと、考えてもいない。いまわたしが考えていることは、ひとつしかないわ」
ラニアーは彼女の手を放し、テーブルの向こうにまわりこんで、顎をなでなで、目の隅でちらちらと彼女を見やった。「きみは家に帰りたいんだ」
パトリシアはうなずいた。
「だが、帰れない」
「帰れるわ」
「どうやって？」
「基本的なことは話したはずよ」
「ぼくが知りたいは具体的なことだ。どうすればきみの家が見つけられる？」
「〈鎖骨〉の使い方を教えてもらったら、くるとき通ってきた〈通路〉の空白地帯にもどって、ある幾何学的スタックを捜すつもり。ここの人たちにとっては、幾何学的スタックは不要の場所でしかなかった。役たたずの、いえ、それよりまだ始末に負えない場所だったわ。でも、わたしが家を見つけられるのは、そこなの」
「あんまり綿密な計画とはいえないな」
「こまかいことはあの人たちが教えてくれるわ」彼女は黒い大きな瞳でラニアーを見つめた。いまはまったく虚勢をはったふうもなく、猫のような感じもなく、穏やかで落ちついたまなざしをしていた。
「それで、彼らはきみからなにをとりあげる？」

「なにもよ！」パトリシアは長椅子の背に頭をもたせかけた。「コピーするのであって、とりあげるんじゃないわ」
「どうして信用できる？」
パトリシアは黙っていた。
「ほんとうは、考える時間なんかいらなかったんだろう？」
「ええ」とパトリシア。
「なんてこった」
彼女は立ちあがり、ラニアーをぎゅっと抱きしめ、頰を彼の肩にすりよせた。「お礼をいっておかなくちゃね。おたがいにとって、わたしたち、どんな存在であるのかわからないけれど」
ラニアーは片手で彼女の頭をなでながら、目をしばたたき、難しい顔をして、壁と天井の境目を見つめた。「ぼくにもわからない」
「わたし、自分が人間じゃないいんじゃないかと思いはじめていたの」
「そんな……」
「わたしが考えていたことは……ある意味でわたしを、あなたよりもここの人たちに近いものに作りあげてしまったんだわ。わかる？」
「わからない」
「そのことが、わたしの〝神秘性〟をコジェノフスキーにぴったりのものにしたんだと思うの。コジェノフスキーはわたしと同じようなことを考えていて、わたしと同じ目標を持っていた。彼は同胞たちを、故郷にもどしてやりたかったのよ」

ラニアーはすべてを拒絶して、首を左右にふった。
「あの人たちはわたしを傷つけたりしないわ。わたしを教化してくれるつもりなのよ。わたしとしては、イエスというしかないわ」
「彼らはきみを威してるんだ」
パトリシアは眉をひそめ、顔をあげて、「そうじゃないわ」と、なにかに気をとられているような口調でいった。「わたしが威していないのと同じようにね。ギャリー、いま思いついたんだけど……どうしてもっと早く気づかなかったのかしら……あの人たちはどうして、いまごろゲートをあけるの？」
「さあね」ラニアーは言下に答えた。こんなときにこんなことをいいだすなんて、なんと場ちがいな。
「わたし、きいてみる」
ラニアーは笑って、「本気かい？」
「わたしたちはそのために連れてこられたのよ、その儀式を見せられるために……いえ、それは明らかにほんとうの理由じゃないわ。パッケージの一部でしかない」
パトリシアを抱きしめたまま、ラニアーはちょっと考えた。なにもかも否定したい気持ちにもかかわらず、疑惑と恐怖と不信にもかかわらず、ラニアーは認めざるをえなかった……。
たしかに彼は、それを見てみたいのだ。
「わたしたち、眠ったほうがいいわね」とパトリシアがいった。
あのとき愛しあったのは、おたがい決していいかげんな気持ちからではなかったが、あれがパ

トリシアにとって必ずしも必要ではなかったことに、ラニアーは気づいていた。彼女にはもうゴールが見えている。それ以外のすべては、室内装飾やふたりが横になっているベッドのように、飾りでしかないのだ。

それを思うと、ラニアーは自分がとるにたらない人間に思えてきた。そして、〈ストーン〉にやってきて以来、パトリシアはどういう存在になってしまったんだろうと考えこんだ。

「わたし、人間かしら」ラニアーに寄り添って寝ながら、パトリシアがたずねた。

「たぶんね」できるだけ平静な声を出そうと努めながら、ラニアーはそう答えたが、あまりうまくはいかなかった。

ヴァン・ハンファイス大統領のフローシップが、ついさっきまでアクシス・シティのあった場所に到着するころには、〈道〉ぞいのすべてのゲートが閉鎖され、ゲート間の車線も通行どめになっていた。〈道〉の歴史はじまって以来、こんな事態ははじめてだった。

アクシス・シティは動きだしていた。最後の抵抗が排除され、シティのフロー動力ステーションも、ローゼン・ガードナー有体下院議員の指揮下にはいったのである。戦闘で死んだ市民たちについては——いまのところ、百八十三人だ——その補助脳をていねいに回収してある。死者を出したことで、ガードナーは良心の呵責を覚えていた。彼らが永遠に死んだままではないのが、せめてもの幸いだった。フロー縦貫筒を掌握したのち、ガードナーは〈冠毛〉がある南に向け、アクシス・シティを加速させた。旅がはじまってから、十六時間になる。ヴァン・ハンファイスのフローシップは追跡してきているが、大統領にできることはなにもない。

〈冠毛〉第六空洞では、ガードナーの属するコジェノフスキー派の四人のメンバーが、究極の犯罪を行なっていた。〈道〉の機構をいじったのである。ちょっとした変更を加えただけだが、ほんのちょっとした変更といえども、肉体剝奪、全人格記録の完全消去に値する。ここまでくれば、もう引き返せないことを、ガードナーは心得ていた。

フローは第七空洞北端の向こうまでつづいているが、その必要はない。現在のように、第七空洞の南極付近まで延長部が伸びているのは、〈冠毛〉からの大脱出、およびアクシス・シティ建設の最終段階にあたっての、純粋に便宜的な処置の名残にすぎないのだ。第六空洞機構を調整して、いまはフローの長さを二十キロ縮めてあった。

それぞれ三人ずつの市民からなる四つのチームは、フローの調整後、最近やってきた地球人たちには未発見のエレベーターを使って、小惑星の外に出た。これらのエレベーターは、じかにベックマン駆動装置に通じているものだ。

駆動装置の調整により、小惑星の自転速度はしだいに遅くなっていき、ついにはゼロになった。どの空洞でも、はじめのうちは、自転停止による影響はほとんどなかったが、第四空洞だけは大きな影響をこうむった。広大な水面を擁しているため、巨大な水滴がいくつも空中に舞いあがったのだ。だが、その効果を吸収している時間はなかった。ガードナーのスケジュールは、ぎっしりつまっていたのだ。

ゲッシェル急進派、および積極的行動をとったことのない中庸派にも、いちおう、ガードナーの行動に参加する機会が与えられた。もっとも、多くの者にとって、選択の余地はなかった——ガードナーの計画には、急進的な新形態の割りこめる余地はなかったからである。各管区の人口

は可能なかぎりの速さでシャッフルされ、シティ・メモリーは再構成ののち分割化された。すべては、ガードナーの計画のつぎなる段階の準備である。

第七空洞に到着したアクシス・シティは、順次、管区ごとにフローからはずされていった。最初はアクシス・ネイダーと中央シティだ。ガードナーの計画では、〈道〉を亜高速でつき進み、ジャルトを閉めだそうと計画するゲッシェルのため、このふたつの管区を残してやる予定になっている。彼の計画完了のために必要なのは、ふたつの自転円筒、アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドなのだ。

〈冠毛〉"〈道〉間の重力勾配の再調整は、きわめて微妙なものだった。第六空洞につめる技師たちは、その作業にかかりきりとなった。いちばんたいへんだったのは、アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドをフローからはずせるよう、中央シティとアクシス・ネイダーの大質量を、第七空洞の床付近に寄せたときだ。

作業には五時間かかり、全部おわったときには、アクシス・ネイダーと中央シティは、アクシス・ソローおよびアクシス・ユークリッドと入れ替わっていた。ついで二対の管区は、一キロメートル引き離され、ゲッシェルのために残された一対は——アクシス・ネイダーと中央シティだ——フローにそって、ゆっくりと北に動きはじめた。

地球人たちにも、選択の道が与えられた。約二千名の捕虜のうち、地球へもどるグループに同行しないことに決めたのは、四人しかいなかった。

そのうちふたりは、アメリカ人のジョーゼフ・リムスカヤとベリル・ウォリス、そしてもうふたりは、ソ連人のロドジェンスキー伍長と、パーヴェル・ミルスキー中将だった。

小惑星は自転を再開した。どの空洞でも、なんらかの被害は避けられなかったが、とくに第四空洞では、甚大な被害が出た。遠心力がもどってくるにつれ、巨大水球はゆっくりと降下して、溜め池や陸地の上で崩壊し、何十億ガロンもの水が木々を襲い、森を洗い、新たな川となって大地を走ったのである。

全空洞で、だしぬけにプラズマチューブが消滅した。遠心力によって、大気を押さえるフィールドは残ったが、この十二世紀来はじめて、空洞内には真の闇が訪れた。

そして第七空洞では、〈道〉と空洞の床との境界で、小惑星の北端を吹きとばし、〈道〉を焼灼するため、メカニカル・ワーカー群が強力な爆薬をセットしはじめていた。

大統領とその追随者たちには、手も足も出せなかった。ガードナーの組織は有能であり、同志の忠誠心は完璧だ。人類の歴史は、またもやここに、政治において最大の過ちは、敵の過小評価であることを証明したのである。

ヴァン・ハンファイスとしては、ガードナーの居住区提供の申し入れをのみ、ゲッシェル急進派に割り当てられた二管区の制御をとりもどすしか、とる道はない。

いっぽう、中央シティのウォルドのなかで、無重力中にただよったまま、新形態のゲッシェルの後見人に預けられたパーヴェル・ミルスキーは、自分の決定を後悔しはじめていた。まるでボッシュの悪夢にまぎれこんでしまったかのようだ。これほどの異様さと不安に包まれてまでして、探求心と新しいものへの欲求を貫く価値があるのだろうか。

過去と文化を完全に捨て去るさいには、必ず不都合がつきものだが……。

結局ミルスキーは、人類史上、最も大胆な亡命の道を選んだのだ。

62

オルミイは、吊り足場のそばに立って、〈鎖骨〉を見つめていた。〈技師〉がわたしの考えに反応し、肯定するにせよ否定するにせよ、わたしの行動についてコメントしてくれればどんなにかいいだろう。だが、コジェノフスキーはまだ、不活性状態で記録されたままなのだ。

パトリシアとラニアーは、いまも個室のなかにいる。オルミイにとって、つづけて八時間も寝られるということは、驚異であると同時に、魅力でもあった。人生のなかで、日々、長い空白の時間を持つこと。思考から解放された、一種の異世界的な虚無のなかに埋没する時間を持つこと……。それだけなら、タルシットの浄化作用のほうがはるかに効果的ではあるが、自分の心のなかの原始的な部分が、いまなお単純な睡眠に憧れているということが、オルミイには興味深かった。

いままで彼は、現代とパトリシアたちの時代の人間のちがいについて、深く考えたことがない。せいぜい、彼らに必要な環境を整えるにあたって、少し考えた程度だ。環境、設備、機能、これだけ大きく変わった現代にあっても、人間の性質は、差異より類似点のほうがはるかに多いらしい。

イェイツがグリーンのカーペットのような芝生を横切って、吊り足場にやってきた。浮かない顔をしている。

「時間がなくなってきた」と彼は図話でいった。「ポイント1.9×9の防衛ステーションが、過剰なフロー輻射を探知したといってきた。ジャルトが新しい、超大型のゲートを開く準備をしているのかもしれない」
「恒星の核に通じるゲートか？」
「そう思われる。ステーションの要員は、撤退準備中だ」
そのようなゲートの可能性は、防衛当局の上層部のあいだで、何十年も前から議論されていたものだった。単純な手段ではあるが、その効果は劇的だ。〈道〉は多数のポイントで恒星に接触している。〈道〉は、本質的には中空の、真空のチューブなのだ。恒星の核に通じる一サーキット分の大型ゲートが開けば、そこから超高圧、超高温のプラズマが流入し、〈道〉内に拡散する。〈道〉の時空を調整して造った障壁も、過剰の熱を受けることにより、最終的には崩壊して、〈道〉の内壁にならされてしまう。〈道〉自体に影響はないが、数十億キロ以内の範囲にあるそれ以外のすべてのものは、猛烈な熱によって、構成粒子に分解してしまうだろう。
「プラズマの前線はどのくらいの速度で進む？」オルミイがきいた。
「勢いを削ぐものがあるとすれば、攪乱効果だけだ。最終的には、秒速六千キロほどになるだろう」
「すると、撤退には約三十二時間しかないのか」
「ジャルトが遠隔地からゲートを開けなければ……」
ジャルトが〈道〉のゲートを遠隔地から操作できるかもしれないという考えは、何年も前から防衛当局を慄然とさせてきた。人類の制圧地域内で、ジャルトがそのような能力を示したことは

ないが、〈道〉変動のデータから、多くのゲート研究者が——ライ・オイユのチームもふくめて——ポイント2×9の向こうで、ジャルトがそうしていると確信している。
「大ゲート開放師には、オイユ上院議員からこのことを伝えてもらう」とイェイツがつづけた。「大ゲート開放師は、いま研究者たちと協議中だ。手があいたら、彼女が伝えてくれることになっている」
そこでオルミイは、ターミナル・ビルの北端にある居住区の個室から、パトリシアとラニアーが出てくるのに気づいた。
「セル・ヴァスケスはうんといってくれるだろうか。どう思う?」イェイツがきいた。「きみはぼくよりも、ずっと長いあいだ彼らといっしょにいただろう」
オルミイはあきらめの混じったユーモアをこめて、わからないというシンボルをピクトした。ふたつのファッション性の高いボディのうち、どちらのデザインをとろうか迷っている、不完全な新形態のイメージだった。
「きみの冷静さがほしいよ、ぼくも」とイェイツ。「いますぐ、タルシット瞑想にはいりたいくらいだ」
パトリシアがオルミイとイェイツを見つけ、手をふって、ラニアーの肩をつかんだ。ふたりは芝生を横切って、吊り足場へ歩いてきた。
「セル・オイユに会わせて」そばにくるなり、パトリシアがいった。ラニアーはおちつかなげに、あたりを見まわしている。
「大開放師は助手たちと会議をしています。伝言があるなら、オイユ上院議員が伝えてくれます

よ」イェイツがいった。
「そうね、セル・オイユでなければならない、ということはないわ。ねえ、オルミイ……」
おもしろくなさそうな、腹をたてている顔で、ラニアーがオルミイをにらんだ。
「決心したわ。取り引きに応じます」
オルミイはにっこりと笑って、「では、いつにします?」
イェイツが横から押しかぶせるように、「時間があまりないんです」といった。
パトリシアは肩をすくめた。「いまでもいいわ。いつでもけっこうよ」
「きみ個人の責任で、パトリシアの安全を保証してもらうからな」オルミイに指をつきつけて、ラニアーがいまいましげにいった。
「その責任は負います」オルミイが厳粛な顔で答えた。「パトリシアの安全は、わたしが必ず保証します」
イェイツが、いつでもはじめられるようになったことを、オイユ上院議員に知らせにいった。オルミイはパトリシアとラニアーをともなって、彼らがはじめてライ・オイユと会った未完成のキューポラの下へいき、近くに浮かんでいたモニターに指示をピクトした。「まもなく、医療ワーカーがやってきます。ワーカーがきたら、プログラムを少し手なおしして、コジェノフスキーの部分人格を転写する。そこへ、あなたの〝神秘性〟を複写させてもらえれば、コジェノフスキーの人格は完全なものとなります。ごく簡単な手つづきですよ」
「そんなことが可能だとすれば、それは奇跡だ」ラニアーが押し殺した声でいった。「それなのに、簡単な手つづきだと?」

「あなたたちの視点から見れば、〝ラザロの復活〟というところかな」
「気どったいいかたはやめろ」
オルミイは軽口のつもりでいったのだが、ラニアーは過敏な反応を示した。だんだん怒りが鬱積してきているようだった。その理由が、オルミイにはわかる気がした。パトリシアが決心したいま、ラニアーは一連のプロセスから切り離されてしまったのだ。彼はもう、おまけでしかない。パトリシアは明らかに、彼の不信感を無視していた。
ほどなく医療ワーカーが、芝生の上数センチの高さに浮かんで、近づいてきた。高さ一メートルほどの、細長い卵型を直立させたような機械で、マニピュレーターやその他の装置が収められた部分が、紫色の線でかこわれている。
オルミイが修整の指示をピクトすると、ワーカーは太いメタリック・グレイのケーブルの先から、小さなカップ型のものをさしだした。オルミイはそのカップを耳の下に持っていき、目を閉じた。パトリシアは、手を組んだり離したりしながら、目をまるくしてその成行きを見まもった。いまはもう、むりに冷静さを装っているような感じがある。ラニアーは腹わたの煮えくりかえる思いで、そのようすを見つめた。
オルミイがカップをはずす直前に、オイユ上院議員と父親の大ゲート開放師がやってきた。ふたりは無言のまま、数メートル離れたところに立って、そのプロセスを見まもった。
医療ワーカーが、パトリシアに近づいた。その前で、牽引フィールドが莢のような形に広がった。オルミイがパトリシアに、この上に横になってくださいとたのんだ。パトリシアはいわれたとおりにした。ついでワーカーが、黒いケーブルの束を伸ばして、パトリシアの頭をヘアーネッ

トのように包みこんだ。

ネットはひとりでに彼女の頭の形にフィットした。パトリシアは手をあげて、それをさわり、「こんなものをつけていたら、人前には出られないわね」と冗談をいった。

ラニアーが莢のそばに膝をつき、パトリシアの手を握った。「まるでふたりのホッテントットだな——風に吹き流される」

パトリシアはちょっとつらそうな顔をしてから、オルミイに顔を向けた。「準備はいいわ」

「痛みはもちろん、いっさいの感覚はありません」オルミイがいった。

「たとえあっても、だいじょうぶよ」パトリシアはラニアーの手をぎゅっと握ってから、離した。

ラニアーはうしろにさがった。

ネットがパトリシアの体を締めつけた。痛いほどではないが、思いがけない強さだったので、彼女はちょっとたじろいだ。ラニアーもいっしょになって顔をしかめたが、近づこうとはしなかった。プレシアント・オイユがラニアーのそばに歩みより、その肩に手をのせた。

「彼女はわたしたちの夢の一部をになっているのです——どうか、心配しないで」ラニアーは目をすがめて、オイユを見かえした。

集中しはじめたのだろう、パトリシアは目を半眼に開いている。ラニアーはその姿に、異様な魅力を感じた。音もなく、はっきり目に見えるプロセスもなく、淡々と行なわれる、パトリシアの〝神秘性〟の複写。

パトリシアが目を開き、頭をラニアーに向けた。

ネットが広がった。

「だいじょうぶみたい」フィールドのなかで起きあがりながら、パトリシアがいった。「以前と変わった感じは全然ないわ」
「〝神秘性〟と部分人格との結合には、二、三時間の熟成時間がかかります」オルミイがいった。
「そののち、コジェノフスキーはふたたびわたしたちのもとへ現われるでしょう」
「彼の体はどうなる?」ラニアーがきいた。パトリシアがそのそばに立つ。
「新たな体が用意されるまで、ワーカーのなかに住むことになるでしょうね。もっとも、自分のイメージを投影することはできます。イメージが現われたときが、再生の完了したしるしでもあります」
パトリシアはふたたびラニアーの手をとり、ぎゅっと握りしめ、「ありがとう」といった。
「いったいなんのために、礼をいわれるんだい?」
「勇敢でいてくれたからよ」
ラニアーは狐につままれたような顔で、パトリシアを見つめた。

パトリシア、ラニアー、オルミイの三人は、医療ワーカーのあとにつづいて、前夜を過ごした居住区に向かった。コジェノフスキーが意識をとりもどすのは、慣れ親しんだ環境——すなわち、あまり装飾もなく、人もおおぜいおらず、とうてい人間とは思えない生物もいない、ふつうの部屋でのほうがいいだろう、とオルミイが判断したからだ。ライ・オイユも、イェイツとともに賛同し、こういってくれた。「そもそも、この瞬間を五世紀も前から待ち望んでいたのは、きみたちだからね。立ちあうのは、われわれよりも、きみたちこそふさわしかろう」

居住区にはいり、十五分ほど待ってから、オルミイがワーカーにピクトして、ワーカーに内包された人格の融合状態を見せるようにと命じた。イメージが目の前に投影されると、パトリシアは思わず口を押さえた。

イメージは全体にひどく歪んでおり、体の半分は巨大に膨れているが、もう半分は小さくて、いまにも消えてしまいそうだった。外見上の質感も不完全で、透明な部分と不透明な部分がまだらになっている。全体の色は、おおむねブルーだ。引き伸ばされた、異様な形の頭部は、こちらを向いていて、ひとりひとりを観察しているように見える。

「たじろぐことはありません」オルミイがいった。「肉体的な外見は、最後に熟成されるものですから」

何分かのうちに、いつのまにか、イメージの歪みは修整されていた。青みがかっていた色も自然な色に近くなり、透明だった部分もちゃんと不透明になった。

調整が完了し、コジェノフスキーのイメージが完全に、正確に形成されると、オルミイは満足そうにうなずいた。その姿は、かつて公式の立体写真に使われた、〈技師〉の姿にそっくりだった。痩せ型で中背の、黒髪の男。鼻はとがっていて長く、黒い目は鋭いがユーモアをたたえている。肌の色は淡いコーヒー色だ。

オルミイはなおも歪みを点検していた。部分人格群の上にかぶせられた〝神秘性〟は、いくらコジェノフスキーのオリジナルに近いといっても、まったく同じものではない。しかし、コジェノフスキーにすっかり意識をとりもどさせるには充分であり、もどった意識は部分人格群のほぼ完全な記憶によって再構成され、オルミイが生まれる前に消去された——殺された——人格に近

いものを再生したのだ。
「ようこそ」オルミイが声に出していった。
イメージはオルミイをしげしげと見つめてから、しゃべろうとした。唇が動いたが、声が出てこない。イメージは唐突にゆらぎ、また固まり、今度はしゃべった。「きみを知っているぞ。前よりずっと気分がよくなった。全然ちがう感じだ。わたしは再生させられたのか？」
「わたしたちの力のおよぶかぎりにおいて」とオルミイ。
「ほとんどなにも思いだせない。悪夢のようだ。きみは子供だった……はじめて会ったときには」
「少年でした、まだ五歳の」オルミイは、ラーム・キクラなら先祖返りとでも呼びそうな感情が湧き起こってくるのを覚えながら、答えた。アパートのメモリーのなかで〈技師〉の部分人格に会ったときのことは、いまでもはっきりと憶えている。有名な——しかも死んでいるはずの人物に会っているのだと思うと、子供心にも驚愕し、また興奮したものだった。
「わたしが不完全な状態になってから——あるいは死んでから——呼び方はどうでもいいが——どれくらいたつ？」
「五世紀です」
〈技師〉が口にしたののしりことばは、彼の時代ではいちばん口汚いものだったのかもしれない。が、オルミイにとっては、古めかしい、奇妙なことばでしかなかった。「なぜわたしは呼びもどされたのだ？　わたしがいないほうが、万事うまくいくはずだったのではないかね？」
「それはちがいます」オルミイは誠意あふれる声でいった。「わたしたちは、あなたがもどって

きてくださったことを光栄に思っています」
「わたしの知識など、とうに時代遅れになっているはずだ」
「それは数時間でとりもどせます」
「わたしはまだ……完全な状態ではない気がする。なぜだ？」
「熟成期間がいります。あなたの人格は、まだ再構成の途中なのです。あなたの体もありません。あなたがはいっているのは、医療ワーカーです」
ふたたび、さっきよりも強い調子で、ののしりことばが吐きだされた。「たしかに、わたしは時代遅れのようだ。あの当時は、もっとも進んだワーカーでさえ、収められるのは矮小な精神でしかなかったのだから……」イメージが首を前につきだし、その眉毛の下から、問いかけるような目をオルミイに向けた。「わたしはダメージを受けたのだろう？」
「そうです」とオルミイ。
「失われたのはどの部分だね？」
「〝神秘性〟です。残されたのは、部分人格群だけでした」
「では、かわりにだれの〝神秘性〟を使った？」
オルミイはパトリシアを指さした。
「礼をいうよ」しばらく考え深げに黙りこんでから、コジェノフスキー。
「どういたしまして」パトリシアは場ちがいな返事を返した。
「どうも見覚えがあるようだ……前に会ったことがあるね」
「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスですよ」とオルミイ。

コジェノフスキーは、はじめ、まさかという顔をした。ついで、イメージの手がパトリシアに伸びた。パトリシアはその手を握った。イメージなのに、ちゃんと手ごたえがあり、しかも温かかったが、パトリシアはもう、驚かなかった。
「あのパトリシア・ルイーサ・ヴァスケスか？」
「まぎれもなく当人ですよ」とパトリシア。
コジェノフスキーのイメージがしかめつらを作り、首をうしろに引いた。「追いつかなければならないことが、たっぷりとあるようだな」小声で詫びをいって、彼はパトリシアの手を放した。それから、ラニアーが手をさしだした。コジェノフスキーは、力づよく、しかしあっさりとその手を握った。
ラニアーは、体がふるえそうなほどの畏怖を覚えていた。では、これが〈通路〉の創造者なのか！「わたしは持っていますよ、あなたをかたどった、小さな……あれがなんなのか……肖像なのか、ホログラムなのかわかりませんが、そのようなものを。わたしのデスクのなかにあります。あれは何年も前から、わたしにとって謎だったんです……」そこで、自分が意味のないことをいっていることに気づき、「わたしたちは、地球からきたんです」といって、ことばを切った。
コジェノフスキーは表情を変えずに、「ここはどこだね？」ときいた。
「〈道〉の奥、ポイント1.3×9です」オルミイが答えた。
「〈冠毛〉の現在地は？」
「地球と月をめぐる軌道上です」
「年は？」

「二〇〇五年」とパトリシア。
「それは航行歴でかね?」コジェノフスキーが祈るようにきいた。
「西暦で、です」オルミイが答えた。
〈技師〉はふいに、疲れはてた顔になった。「わたしの教育をはじめられるまで、どれくらいかかる?」
「いますぐにでも。あなたの人格が熟成されていないうちからでも、はじめることができます。そのほうがよろしいですか?」
「おたがいにとって、そのほうがいいのではないかね?」コジェノフスキーはふたたびパトリシアに向きなおり、「あなたはとても若く見えるが。どれだけの仕事をなしとげたのです? どれだけの論文を発表しました?」
「いちばん重要な論文は、まだひとつも」
「まさか、こんなことになるとは思ってもみなかった……これはわれわれの研究から得られた結果とはちがう。なぜわたしは予測をあやまったのだろう? 教えてもらわなければ——どうやってあなたがここにきたのか……そして、なぜあなたがやってきたのかを」
オルミイが情報更新の手配をはじめる前に、パトリシアと〈技師〉は、すでに議論に夢中になっていた。
四時間後、通路を利用する七つの種族を代表して、研究者たちは吊り足場のまわりに集まっていた。いずれも、盟主である人類にとって有用な種族ばかりだ。しかし、彼らは決して、人類に

屈従しているわけではない。彼らは〈道〉開発事業において、人類と完全に対等なパートナーなのだ。その姿形はさまざまだったが――アクシス・シティの新形態ほどバラエティには富んでいないな、とラニアーは思った。

異種族のうち、三人はフラントで、きらきら光るフォイルのマントをはおっていた。ティンブルの外では、あれがふつうの服装らしい。フラントから数メートル離れたところには、こぶだらけの肉のひもにつながった、Uの字をさかさまにしたような生物もいて――目らしいものはなく、黒いガラスのような肌はなめらかで、特徴がない――四本の象のような足で、検疫用の赤いラインのなかにじっと立ちつくしていた。しかし、ここの空気は、少しも不快ではないようだ。

吊り足場の北側の、イェイツのとなりには、タルシットの研究者がひとり、八本の足で立っていた。そのまわりは、タルシット用の混合気体を満たした、牽引フィールドのバブルでかこまれていた。気体の成分は、酸素がごくわずかで、二酸化炭素の割合が人間用の空気よりはるかに高く、バブル内の温度がかなり低いため、フィールドの柔軟な境界では、それが液化している。その蛾の触角のような〝枝角〟は、たえず動きつづけていた。その他の非人類研究者たちも、同様のフィールドに包まれていたが、いちばん衝撃的なのは、くねくねした蛇のような体を持った生物だった。その生物は、まるで標本のように、深緑色の液体の球のなかに浮かんで、四つの頭をひとつずつ、コイルのなかでゆらゆらさせていた。

どうやら人型の生物というのは、一般的なものではないらしい。

メンバーがすっかりそろう前、ラニアーはタルシットと話をした。不思議なことに、タルシットは快活でとても親しみやすく、町会のパーティーで顔を合わせた新しい隣人同士のように、気

軽に話しあうことができた。
そのタルシットは、いまは吊り足場の北に立って、フラントのひとりと話している。そのそばに、もうひとりのフラントが黙って立っていた。フラントたちは、数時間前、情報を交換しあったばかりだ。だから、平行的な思考が必要とされないかぎり、ふたりめのフラントが会話に加わる必要はまったくないのである。パトリシアは、ラニアーといっしょに、食べ物のふんだんに盛られた浮かぶランチ・テーブルから好きなだけ食べてから、オルミイとともに、コジェノフスキーとの議論を再開しにもどっていった。
タルシットと話をすることになったのは、まったくの偶然だった。はじめタルシットは、ゲート開きの影響について、ライ・オイユの計画を検討するため、プレシアント・オイユに近づいてきたのである。はじめのうち、彼女はタルシットと図話で話していたが、ほどなく英語に切り替え、タルシットをラニアーに紹介した。タルシットは完璧な英語を話したが、その体のどこにも、音を出しているような動きをする器官は見あたらなかった。
もっともラニアーには、そんなことまで気にしている余裕はなかった。ささやかなものから大きなものまで、驚異につぐ驚異の連続で、もう感覚がすっかり麻痺していたからだ。自分たちがどうやってここにきたのかを説明するため、適切なことばを見つけるのに、彼はありったけの集中力をふりしぼらなければならなかった。なにしろ相手は、外見的にはほんの少しも人間に似ておらず、心の働き具合にいたってはまったく得体の知れない（完璧な英語を話せる以上、タルシットはほんとうの思考プロセスを被い隠せるはずだ）生物なのである。ラニアーはさりげなく、〈大破滅〉のことや、平行宇宙のこと、〈ストーン〉への奇襲のことなどを語った。タルシット

はかわりに、自分たちのことを話した。ほんの数ヵ月前なら、およびもつかなかった話を聞きながら、ラニアーはその話を理解し、自分がうなずいているのに気がついた。

タルシットと呼ばれる種族は、きわめて古い恒星系の十四の惑星に広がる、統合されたひとつの生物＝機械知性の末裔だという。ある時点で、その知性は、メモリー・バンクのなかにすっかり記録された。アクシス・シティのシティ・メモリーとちがって、はじめのうち、それには物理的に明白な個体の区別はなかった。だが、徐々に徐々に、統合知性は個体に——すなわちシステム中の意識の凝固体に分裂し、その個体の集団は、その物理的な区別のために、新たな形態を創造した。それがタルシットの親種族である。その親種族は、いまも存在しているらしいが、内向的で孤独を好む種族だという。だから、通商上での代表と、より若い文明の相談役にあてるため、タルシットを創造したのだそうだ。そこへ、たまたまゲート・サーキットのひとつが彼らの惑星のひとつに開通し、彼らは交易を開始した——はじめはジャルトと、そして、ジャルトが押しやられてからは、人類と。

そのタルシットがほのめかしたところによれば、タルシットとその親種族は、少なくとも人類の百倍は古い種族らしい。

「それなら、われわれと交渉を持つ必要などないでしょう?」とラニアーがきいた。

「それは年寄りの趣味、あるいは老蒙の気まぐれだとでも考えてください」へりくだるようでもなく、とぼけるようでもなく、タルシットは答えた。「わたしたちが提供するサービスは——とくに、情報の浄化と再整理ですね——人類やその他の種族にとって、かけがえのないものとの評価を得ています。役にたつのはうれしいものですし、わたしたちはその代償に、わたしたちにと

ってにおおいに価値ある情報をもらっているのです」

数分後、式典開始の合図として、よく通る、澄んだ音色が響きわたった。フラントのひとりが、吊り足場の南側の棒に吊るされた鐘を鳴らしたのだ。

ラニアーは両手をうしろに組み、整列休めの姿勢で、コジェノフスキーのイメージとプレシアント・オイユのそばに立った。パトリシアは名誉招待者として、イェイツとライ・オイユのあいだに立った。

ライ・オイユの典礼服は、布製のラフな白のシャツに黒のズボンという、シンプルなスタイルだった。足にはやはり布製の、黒のスリッパをはいている。イェイツのほうは、少しすりきれかけた、フォレスト・グリーンのローブをまとっていた。

ライ・オイユが、盛りあがった吊り足場の上に登る、カーブした階段の前に進みでた。そこで立ちどまり、一礼して、あとをついてくるようにパトリシアをさし招いた。

「このやりかたを憶えておかなくてはね」吊り足場の最上部に立つと、ライ・オイユはパトリシアに話しかけた。「〈鎖骨〉はどこにゲートが開くかの手がかりを与えてくれますが、それだけでは完全にはわかりません。あなた自身も、その場所を感じとり、目的の世界に同調しなくては。計算だけでなく、あなたたちのいう直感もおおいに必要となるのです」

ライ・オイユは腰をかがめ、〈鎖骨〉の把手を握り、牽引フィールドの放射点にあるホルダーからそれをぬいた。下を見おろしたパトリシアは、目がくらみそうになった。吊り足場の最上部は、穴の底から少なくとも六十メートルはありそうだ。

「それから、祈禱文も必要です。精神を同調させやすくするために。祈禱文によって、心の準備

ができるのです。どうしても必要というわけではありませんが、わたしの経験では、つねに有用でした。さて」とライ・オイユはいって、〈鎖骨〉をつきだし、目を閉じて、「きょう、われわれがあけようとしているのは、ありきたりのゲートではありません。わたしは、少なくとも五十年間、この接合点を捜しもとめてきました。そして、いまにいたるまで、つねに見つけそこねていました」片目をあけ、問いかけるような微笑をうっすらと浮かべて、「ジャルトが攻めてくるかもしれない——あるいは、アクシス・シティが踏みにじってしまうかもしれないこのポイントで、なぜいまわれわれが、新たにゲートを開こうとしているのか、いぶかしんだことはありませんか？　おかしいと思ったでしょう？」

パトリシアはうなずいた。

「現ゲッシェル政権にはそむいても、わたしはヘクサモンには忠誠を尽くします。たとえヘクサモンがわたしのことを反逆者だと断じようともね。事実、わたしが分離運動について果たしている役割を知ったなら、ヘクサモンはそう確信するでしょう。ですから、みずからの名誉を回復するために、わたしはこのゲートを開くのです」

「まだよくわからないわ」頭をいっぽうに傾け、〈鎖骨〉に目を注いだまま、パトリシアがいった。

ライ・オイユは把手から片手を放し、手を広げ、大きく腕を動かして円を描いた。「これまで、すべてのゲートは、惑星に通じるように設定されてきました。〈道〉には他の惑星に通じる無限の接合点があり、われわれはその無数の接合点のなかから、最適のポイントを選ばなくてはなりません。おそらく気づいておいででしょうが、われわれのゲートは、必ず四百キロメートル以上

かりますか？」

パトリシアはうなずいた。「ええ」

「われわれは、スタック自体にはいっていくような冒険は冒しません。スタックには、平行宇宙と時間線とが、われわれには有用ではない形で混じりあってるからです。したがって、利用するのは、スタックとスタックの隙間ということになります」ライ・オイユは、手刀で空を切るしぐさをした。「その隙間は、十メートルというところでしょう。しかし、その十メートルの範囲から通じるポイントは、十億にものぼります。そのなかから、惑星とおぼしき質量を持つ物体の、できるだけ近くのポイントを選ばなくてはなりません。そして、われわれの心に直接ピクトしてその質量の存在を告げ、必要な情報をすべて与えてくれるのが、この〈鎖骨〉なのです。感じてください、これを」ライ・オイユはパトリシアの手をとり、それを〈鎖骨〉のいっぽうの把手に持っていった。パトリシアの心に、イメージと情報があふれた。「さあ、わたしを見て」

パトリシアはライ・オイユを見つめた。頭のなかに、オイユのピクトする安定した技術の奔流が、やつぎばやに流れこんできた。「補助脳さえあれば、情報の受けとりはずっと簡単にいくのですが、少なくとも、あなたには意欲が——学ぼうとする意欲があります。わたしにもすべての技術を伝えることはできませんが、あなたの直感を研ぎ澄ます助けはできます」ライ・オイユはふたたび、べつの指示の奔流を送りこんできた。片手で〈鎖骨〉の把手を握ったまま、パトリシアは、データの流れが心のなかで融合するのを感じた。「あなたが故郷へもどる道を探る力にはなれません」把手を放すようにと、パトリシアの手を軽くたたいて、ライ・オイユがいった。

「わたしはあなたといっしょにいくことができませんし、それはイェイッとオルミイも同様です。みんな、しなくてはならないことがあるからです。しかし、あなたの理論が正しければ――そしてわたしには、正しくないという理由が見いだせないのですが――幾何学的スタックのなかに、適切なゲートを見つけられるはずです。あなたはもう、それを見つけるだけの、充分な知識を得ました。あとは、わたしのすることを注意深く見ていてください。きょう開くのは、べつの世界へのゲートではありません。〈道〉そのものへのゲートです」

パトリシアは眉をひそめた。

「あなたはあの曲線を見たはずですね、パトリシア。あなたは、〈道〉の曲線を計算したはずです」

「したわ」とパトリシア。

「どこでみずからと交差するかは、見とどけましたか？」

「いいえ」

「それはきわめて微妙な交差で、向こうの位置はここからとほうもなく離れています。それほど離れていれば、〈道〉の性質も相当ちがっているかもしれません。

旅をつづけるうちに、いずれアクシス・シティは、その領域に到達するでしょう――おそらく百万年くらいのうちに――ゲッシェルがいますぐ例の計画を実行すれば、もっと早くにでも。この接合点でゲートを開くことにより、われわれは〈道〉がじっさいにはどんなものであるのか、われわれはどのようなものを創造したのか、知ることができるでしょう。そしておそらくは、それがどれだけ彼方まで伸びているかも。われわれは、先駆者となることによって、ヘクサモンに

対し、名誉を回復するのです。これで、われわれがここに残っている理由がわかりましたね?」
パトリシアはうなずいた。
ライ・オイユは吊り足場の下に集まっている、研究者たち、彼の研究仲間たちに向きなおった。
「〈技師〉は立ちあい準備ができていますか?」
「わたしはここにいる」
「すべてを明確に知覚できますか?」
「うむ。できると思う」
大ゲート開放師は大きく息を吸いこみ、パトリシアのほうを向いて、「この日、われわれはみな、栄光に包まれるのです」といった。
ライ・オイユは、牽引フィールドに足を踏みおろした。〈鎖骨〉がブーンとうなりはじめた。
彼はパトリシアに、ついてくるようにと手招きした。パトリシアが彼のそばに立った。と、ふたりの立っている位置を中心に、フィールドが沈みだし、まわりの壁が、カップ状にくぼみだした。
降下がとまったときには、穴の底はもう数メートル下にせまっていた。ライ・オイユはひざまずき、〈鎖骨〉をホルダーのなかにおさめて、いった。「すでに対象範囲は、数センチの幅にまでしぼりこんであります」
そして、パトリシアの驚いたことに、彼はこうべをあげ、詠唱をとなえはじめたのだ。
「星よ——われらが竈(かまど)、われらが存在の塊鉄炉、炎のなかで至高の炎よ。われらに光を与え、闇のなかにおいてさえ、しかるべき創造の贈り物を賜わる星々よ」
ライ・オイユは〈鎖骨〉を調整し、両手でしっかり握ると、目を閉じて、ターミナル・ビルの

天井をふりあおいだ。
「運命よ――われらが全幅の信頼を受けし、生命と光の道、究極の定めのパターンよ。選びしもの否定することあたわざれども、自在に選ぶことかなうパターンよ。
聖霊よ――われらが精神の吐息、われらが想いの風よ。肉体に生まれ、また機械に運ばれようとも、われらが手をとりて、熱狂へと導きたまえ。われらみずから真実を生みだし、なかと外にありしものを見きわめんために」
ラニアーは、コジェノフスキーのイメージの口が、ライ・オイユとともに、同じことばをとなえているのを見た。いま大ゲート開放師が使っている祈禱文を書いたのは、〈技師〉なのかもしれない。
〈鎖骨〉のうなりがかんだかくなりだした。パトリシアは胸の前で両手を組んでいる自分に気がついた。これは祈りのしぐさだ。が、どうしても、その手をほどき、下におろすことはできなかった。
「そして祖先よ……いまもこの場にてわれらとともにあり、肉体を持ちて生まれ、われらが過去の創造性によりて、復活せしものよ――さらに、われらがより正しき道を見つけるために燃え、〈大破滅〉にて滅びし人々よ――」
パトリシアもラニアーも、涙があふれだし、頬をつたい落ちるのを感じた。
「われこの〈鎖骨〉を、あまたの世界にかかげ、〈道〉に新たなる光をもたらさん。願わくは、ここに開かれしゲートの、導きし者導かれし者、創りし者創られし者、〈道〉を照らす者与えられし光に浴する者、ことごとく栄えんことを」

ライ・オイユは〈鎖骨〉を容器のなかからとりだし、膝のあいだに押しいただいた。〈鎖骨〉からあふれでるピクト・シンボルの奔流が、炎のように彼の顔を染めあげた。うなりは可聴域を越え、聞こえなくなった。

「見よ。

われここに——新たなる世界を開かん……」

足もとの〈道〉のブロンズ色の表面が変容し、綾目模様を織りなす黒と緑と赤の線に分解したように見えた。ライ・オイユは立ったまま、〈鎖骨〉を手のなかで水平にかかげている。

牽引フィールドのくぼみが、大ゲート開放師とパトリシアを数メートル押しあげた。パトリシアはふたたびめまいを起こしながら、無限の可能性をこめて渦巻く色彩の幻影を見おろした。

幻影が分裂し、中心部にねっとりした黒い環が形成された。

ライ・オイユがパトリシアに〈鎖骨〉をわたした。彼女はその把手を、両手でしっかりと握りしめた。「さあ、いま起こっている現象の、この力を感じなさい」と、彼は英語でいった。「正しいゲートの感覚を学びとりなさい」

手のなかで、〈鎖骨〉は生きていた。たえまないシンボルの奔流を介して、彼女と結びつき、彼女の一部となった。ライ・オイユの与えてくれた指示はきわめてこまかく、いま、それが、ついに頭のなかに定着した。

それは陽性の力だった。〈鎖骨〉が〈道〉の表面に穴を押し広げるにつれ、パトリシアは笑いだしたくなるような気分になった。頭上では、ライ・オイユの研究エリアを覆っていた不完全なキューポラが、あるべき位置に移動してきており、擾乱の中心を捜しもとめていた。

「危険なのはいまです」とライ・オイユ。「ここでキューポラの制御が失われれば、あれはわれわれを包みこみ、擾乱を静めてしまう。そうなれば、われわれは永遠に〈道〉から失われてしまいます。流産したゲートの通じるところへわれわれは連れていかれ、もどってくることはできません。その潜在的な脅威が感じられますか?」

感じられた。彼女のうちに膨れあがっていた陽気な感覚は、なにかとてつもなくおぞましく、異質なものを飲みこんだような感覚に変わっていた。パトリシアは〈鎖骨〉を見つめつづけた。「それでいいのです」とライ・オイユがいった。「たしかにオルミイのいったとおりだ。あなたはご自分の時代よりも、われわれの時代にこそふさわしい」

キューポラの表面を覆う粗雑な線の群れが縮まって、ほかのゲートで見た、あのおなじみのブロンズ色に変化した。穴の中心では、黒い円をとりまいていた渦がせりあがりはじめ、牽引フィールドがふたりをさらに高く押しあげた。

「さあ、こちらへ」研究者たちが後退しはじめると、イェイツがラニアーにいった。彼らは吊り足場から五十メートル離れた、ゲート開放師の研究エリアのそばで合流した。穴のまわりでは、地面がたわみ、裂け、盛りあがったゲートの斜面の上に、塚を形成していた。吊り足場と牽引フィールドは平行なままだ。ライ・オイユがふたたび〈鎖骨〉の把手を握り、「ここには十万もの可能性が秘められています」とつぶやいた。「〈鎖骨〉を通して、それが感じられる……体験できる。いまわたしは、十万の世界を心でなでています。だが、わたしがほしいのはたったひとつ。それが聞こえる……その特徴はわかっています……それが占める接線も。〈鎖骨〉は探索を制御し、その位置を安定に保ちますが、〈鎖骨〉に指示を出し、見つけるのは……わたしです」

ライ・オイユの顔に、勝ち誇ったような表情が浮かんだ。ねっとりした黒い円は押し広げられ、目の覚めるような空色になった。その円のまわりに、ブロンズ色の〈道〉の地肌がふたたび出現し、空色の円盤を中心において、くぼみを形成した。地肌は、円盤の縁となめらかに接している。くぼみが深くなった。時空の歪みが癒され、不自然な侵入にならされていく過程は、いやでもパトリシアの心に刻みこまれた。

空色の領域の外側に、魚眼レンズで覗いたように歪んだ、なにか長くてまばゆいものが、いくつもの巨大な黒い物体をとりまいて走っているのが見えた。

「ゲートは開きました」ライ・オイユは疲れはてたようすでいうと、〈鎖骨〉を容器のなかにすべりこませ、両腕を伸ばした。「あとは、向こう側になにがあるか調べるだけです」

「はいっていくの？」パトリシアがきいた。

「いいえ」ゲート開放師は、ちょっとおかしそうな顔をして、「メカニカル・ワーカーの一体にいってもらうのですよ。われわれの命を危険にさらすことなく、機械に向こうのようすを探らせるのです」

牽引フィールドのくぼみはもとにもどり、ふたりは吊り足場の最上部の階段と同じ高さに押しあげられた。ライ・オイユはパトリシアに先にいくようにというしぐさをした。ふたりは研究エリアのそばで、ほかの者たちと合流した。

一辺が五十センチほどの立方体のモニターが——この種の機械にしては、大型のほうだ——新たにできた斜面の上を浮遊していき、吊り足場の格子のあいだを通りぬけた。それは静かに降下していき、ゲートをくぐりぬけた。イェイツがピクターをオンにして、吊り足場の中継機から中

継されてくる、モニターの信号に同調させた。
ラニアーの目には、パトリシアがひときわ大きくなったように見えた。それに、前よりも自信に満ち、落ちつきが出てきたようだ。彼の手をとり、それを両手でぎゅっと握りしめて、パトリシアは彼にほほえみかけ、ささやいた。「できるわ、わたし。感じられるの。きっと道を開けるわ」
モニターのイメージは、まだ焦点があっていなかった。イェイツが向こう側の状況を示す情報シンボルの意味を訳してくれた。「モニターはほぼ完全な真空中にいます。放射線値はきわめて低い。向こうがほんとうに〈道〉のべつの領域だとすれば、フローがかなり不活性で、安定な状態にあるのでしょう」
「そもそも、フローそのものがなさそうだ」目をすがめてイメージに見いりながら、ライ・オイユ。
視覚的なイメージが、鮮明になった。
「広大だわ」オイユ上院議員が、静かにいった。
ゲートが通じたのが〈道〉のどの部分であれ、筒型をしたその宇宙は、少なくとも直径五万キロには広がっていた。「測地線の偏差よ」パトリシアがいった。
「それも関係あるかもしれないが」とライ・オイユが、「それだけではないかもしれない」
ラニアーは説明をもとめようともしなかった。聞いたところで、理解できるとは思えなかったからだ。
〈道〉には、長さ数千キロにもおよぶ、黒い結晶質の巨大な構造物がいくつも存在していた。な

かには浮遊している物もある。蛇のように曲折しながらまばゆく輝いているのは、プラズマチューブだ。その向こうを、構造物のひとつが横切ったとき、〈道〉の向こう側の壁に、巨大な影が落ちた。
「表面重力、約十分の一G」イェイッがいった。「パラメーターにはかなり変化が見られるな、ライ。これはわれわれのものとはちがう、べつの〈道〉なのだろうか？」
「われわれ以外に、このような構造の宇宙を造る者がいると思うかね？」大ゲート開放師が問いかえした。
「いや」
「〈道〉を創造するにあたって、われわれは伝統を持ちこみ、円筒形の形状にした――ほかにそのような形をとるものがいるとは思えない。どんな形にするかは、無限の可能性があるのだから」
「しかし、このような形には利点が多い。とりわけ、交易をしようと思うなら……」
ライ・オイユはそっけなくうなずいて、その点は認めた。自分のなしとげた偉業の成果を観察しながら、彼は腹をたてているようだった。「じつに奇妙なところだ。それとわかるフローはないし、プラズマチューブはひどく歪んでいる。ねじ曲げられたといってもいいくらいだ」
「ジャルトに？」
「ちがう。あの無数の構造物は、ジャルトの造ったものらしくない。あれがなんの役にたつのかは、見当もつかんよ――幾何学的歪みか、時空が噴出して結晶化したものか、あるいは……」いいかけて、ライ・オイユはかぶりをふり、「あるいは、われわれの理解を超えたなにかだ。それ

に、ジャルトがここまで進出してきているとは、とても思えないな。この接合点は――これが接合点ならばだが――ポイント1×15より向こうにちがいない。これは〈道〉を百光年以上も進んだところだ」
「それでは、ゲートなんか開けるはずがないわ」とパトリシアがいった。
イェイツがいぶかしげな顔で、「なぜです？」
「そこが、わたしたちの宇宙の、時間的な終端の向こうだからよ。ゲートが開いた先は……」パトリシアは両手をふりあげ、「無よ。虚無」
「そうとはかぎりません」とライ・オイユ。「しかし、それは興味深い視点だ。〈道〉はオリジナルの世界の条件に適応するよう調整されている。その条件を超えたところでは――その向こう側に伸びる〈道〉は――自然にべつの様相を呈するのかもしれない」
「アクシス・シティはそこまで移動できるのかしら？」プレシアント・オイユがたずねた。
「わからない。フローが存在しなくなったなら、推進方法を調整しなくてはならんだろうが……それは難しいことではない。しかし、ある地点から、ふいにフローが消えているとしたら――」
「〈道〉は自力で存在していることになる」イェイツがあとを引きついだ。
「まさにそのとおりだ。もはや〈道〉は、第六空洞の機構も、〈冠毛〉との結合も必要としなくなる」
「なんだか、がらんとしているようだな」議論に口をはさんでいいものかどうかとまどいながらも、ラニアーがいった。「交通がまったく見えない――動くものはなにひとつ」
イェイツが、あたりをよく観察するようモニターに命じた。周囲のイメージが大きく増幅され、

巨大な結晶がずっと細かいところまで映しだされた。〈道〉には無数の結晶が存在していた。なかには、端から端まで何万キロもあるものもあり、それぞれのまわりにプラズマチューブがからみついていた。
ひとつひとつの構造物は——悠然と浮遊しているものまでもが——キューポラに似た無数のディスクで覆われていた。各ディスクが覆っているのは、明らかにゲートの入口だ。イメージがさらに数倍に増幅された。構造物をぎっしりと覆いつくすゲート群のあいだには、輝く光の線が縦横に走り、緊密な網を形成している。交通の流れだ。通商活動の一種だろう。だが、スケールがとてつもなくでかいし、いままで見たものとは、性質がまったく異なるようだ。
イメージのそばで、また図話のシンボルが閃いた。「フローはまったくありません」とイェイツが説明した。「あのポイントでは、〈道〉は完全に安定で、自立しているようです」
ラニアーが見ると、パトリシアはなかば眠っているような顔つきになっていた。ふたたび、あの状態にはいったのだろう。彼女はあれがどういうものか理解しようとしているのだ——ラニアーにはとうてい理解のおよばないことを。
「あれはでたらめに連結されているのよ」パトリシアが声をつまらせながらいった。
「なんだって?」ラニアーはみんなをちらりと見やりつつ、彼女の肘を軽く押さえながら、ききかえした。パトリシアは大きく目を開き、彼を見つめた。
「アクシス・シティが亜光速で〈道〉をつき進めば、こういう結果になるの——旅がはじまる前からね。〈道〉は本質的に時間の外にあるものだから、その領域内で起こることには、すべて〈道〉だけで対応しなければならない。だから、ああいうふうになるのよ——とくに、〈冠毛〉

側の端が封じられているのなら」
「というと？　いや、つづけてください……」イェイツがうながした。
「彼女のいうとおりだよ」横から、コジェノフスキーがいった。「明々白々なことだ。そして、〈道〉の変質によって得をするのは、人間でもジャルトでもない、われわれの宇宙のものでさえない――なにかだ」
ライ・オイユがにっこりとほほえんだ。「残念ながら、わたしたちには明白ではないようです。つづけてください」
パトリシアは〈技師〉を見やり、予感めいたものを感じた。これはわたしだ……どこかわたしと似ている。コジェノフスキーもうなずいてみせ、「なかなか立派な説明ですよ」といった。
「わたしたちが見ているのは、超常空間のベクトルに沿って、これから〈道〉のなかで起ころうとしていることの結果なの」とパトリシアははじめた。「ティンブルに発つ前、放浪体がわたしの部屋にやってきたあと、わたしはこのことを考えてみたの。もしアクシス・シティが光速の三分の一以上の速度で移動したなら、その結果、〈道〉はねじ曲げられ、光速を越える時空の衝撃波が生まれて、アクシス・シティに先行して進んでしまう。つまり、衝撃波だけが時間の外で働いて、その原因より先に進んでしまうのよ。あのポイントは、すでに衝撃波が通過したあとなの――おそらく、何世紀も前に……おそらく、〈道〉自体が開かれるずっと前に。特異線、つまりフローの上をなにかが亜光速で移動すれば、その負荷は特異線に耐えられる限界を超えてしまう。そして、仮想粒子はエネルギーに変換され、放射されて、〝蒸発〟するのよ」パトリシアは深々とため息をつくと、目を閉じ、しゃべりながらも頭のなかで行なわれている計算を見つめながら、

「〈道〉は安定な構造をとるため、膨張することを余儀なくされた。そのために、フローは消滅してしまったの」
オルミイは黙ったまま、静かにコジェノフスキーとパトリシアの説明に耳をかたむけていた。
この男、誇らしいんだな、とラニアーは思った。
「〈道〉が膨張し、アクシス・シティの衝撃波が消滅するまでには、何光年もの領域にわたって、アクシス・シティの前にあるものはすべて破壊しつくされてしまうでしょう。その領域で存在できるのは、シティだけ。すべての構造は一掃され、すべてのゲートは溶融されてしまう」浮遊する構造物を指さして、「明らかにあそこでは、〈道〉は膨張しているわ。でもあの相対論的物体は、なにごともないように存在している」
ラニアーは、その〝蒸発〟を引き起こす物体が建設される以前に、フローが消えてしまうという意味を理解しようとしたものの、すぐに矛盾につきあたった。だが、コジェノフスキーもゲート開放師たちも、その矛盾は気にならないようだった。「報告書の作成準備を整えたら――すぐに作成にとりかかれますね?――」ライ・オイユがパトリシアにきいた。
パトリシアはうなずいた。「セル・コジェノフスキーの助けがあれば」
「――では、知らなくてはならないことは、われわれにもおおむねわかるわけだ」とライ・オイユ。「その報告書を大統領に提出することもできます。あとはゲッシェルたちがやるでしょう――」そこで、にっこりと笑って、「――しなければならないことをね」
ふいに、防衛モニターの前に、真っ赤なまばゆいシンボルが閃いた。緊急メッセージがはいったしるしだ。オルミイがそれを聞きにいった。もどってきたときには、満面に喜色をたたえてい

た。が、そのあとにつづいたことばを考えると、それは不可解な表情としかいえなかった。「ジャルトがゲートを開きました。遠隔操作によるもので、場所はポイント1.5×9です。最後の防衛ステーションも蹂躙されました。プラズマの奔流は最高速度に達しつつあります。ここにくるまで、あと七時間というところでしょう。いますぐここを離れなければなりません」

プレシアント・オイユが父親を見やった。「ゲッシェルは、ジャルトに押しやられるのを拒むはずですわ」

「それなら、大統領に選択の余地はあるまい？」とライ・オイユ。「〈道〉はみずからの定めを書き記す。ジャルトもまたしかり。大統領は大統領の、われわれはわれわれの管区を分かちあい、それぞれの道をいくのみだ」

63

ミルスキーほか三人の〝脱走者〟たちは、中央シティのウォルドに、それぞれ小さな球形の個室をあてがわれた。世話係兼、短期間の教育・適応の案内役として割りあてられたのは、三人のゲッシェルの通常形態——女性がふたりに、性別不明の者がひとりだった。

ミルスキーは、ほとんどの時間を、個室球のなかにすわり、データピラーからピクトされる情報のさまざまなチャンネルに集中して過ごした。情報のなかには、案内役の教育用部分人格によって翻訳されてくるものもあった。彼とロドジェンスキーは、高速学習と高速理解を可能にする

ため、一時的に補助脳をつけていた。ふたりとも、情報に見いり、耳をかたむけるのに夢中で、ほとんど口をきく余裕さえなかった。いま、ロドジェンスキーは、ミルスキーのすぐそばにいた。例の女みたいな名前のアメリカ人――リムスカヤは、ぽつんとひとり離れている。同類の三人には、ほとんど注意を払おうとしない。彼らは大いなる謎のなかの、とるにたらない存在でしかないからだ。

案内役たちはこともなげな顔でやってきては、短いながら高密度の教育を行なった。ゲストたちはできるかぎりそれらを吸収した。

だが、あたりの空気にはぴりぴりしたものが張りつめていた。三人の案内役を除けば、ゲッシェルたちはミルスキー一行にほとんど興味を示さない。ウォルドががらんとしているのは、なにがはじまるのかミルスキーたちにはわからないが、なにかに備えて、分離された管区の態勢を整えにいっているためだ。

最も遠い防衛ステーションからの報告は、分割されたアクシス・シティにもとどいていた。ジャルトはついに遠隔操作でゲートを開き、恒星の深奥部のプラズマを〈道〉に導きいれたという。〈道〉のこちら端にプラズマが到達するまでには、約七十時間の余裕があるが、アクシス・シティのゲッシェル管区に住む者たちは、早急な決断を迫られていた。〈道〉にとどまり、ジャルトに〈道〉をあけわたすことを拒むのであれば、プラズマの前線と遭遇する前に、アクシス・シティを少なくとも光速の三分の一の速度に加速しなければならない。

恒星の核から〈道〉に流入してくることで、プラズマの温度は著しく低下し、核融合の反応点には遠くおよばなくなる。だが、それでも九十万度前後にはとどまるだろう。しかし、ゲッシェ

ルの管区が亜光速で進めば、その状況は変わる。
アクシス・シティがプラズマの前線と衝突したとき、アクシス・シティの引き起こす時空の衝撃波は、超高温のプラズマを、薄いフィルムのように突き破る。〈道〉の内壁に張りつけられたそのフィルムは、アクシス・シティ通過後、核融合の反応点よりはるかに高い温度にまで熱せられ、それまでよりいっそう猛々しいプラズマとなって〈道〉を満たすだろう。結果的に、アクシス・シティはプラズマをパワーアップし、プラズマを筒状のノヴァにしてしまうのだ。
ミルスキーは、公に行なわれる議論を理解しようと努めるうちに、彼らの狂騒的な計画が、狂気の魅力に満ちていると思うようになった。もはや、自分が死んだかどうかなど、どうでもいいことだった。彼はいま、かつて想像することさえできなかった、とてつもない大計画のただなかにいるのだ。
分離主義者にアクシス・シティの半分をあけわたされたゲッシェルの政治家たちは、まさに狂気の計画を立てていた。アクシス・シティの前後には、強烈な輻射線から住人を護れるだけの、シールドを設ける必要がある。だが、それを作るとなると、超高速でフローと接触するため、ただでさえ大きな負担がかかるはずの、それも四機しか残されていないメイン・フロー・ジェネレーターに、さらに大きな負担がかかってしまう。それでも計画は実現可能なのか？
可能だ、と物理学者は判断した。ただし、ぎりぎりのところで。
フローに対しても、シールドを施さなければならない。フロー自身も、きわめて高いレベルで強烈な輻射線を放出するからだ。そのすべてに対して、シールドを維持することができるだろうか？

できる。だが、制約はいっそう大きくなるだろう。
それだけ見通しが不透明であるにもかかわらず、アクシス・シティの住人たちの意見は、驚くほど一致していた。彼らは地球にもどりたくないのだ。過去ではなく、未来を見つめたいのだ。それに、何世紀にもわたって戦ってきたジャルトに、いまさら〈道〉をあけわたしたくもない。
リムスカヤは、じぶんの個室球の外にある林を散歩したりして、すべての情報に耳を塞ぎつづけた。だれに見られようと、どういう反応を示されようとおかまいなしに、ひたすら神に祈りつづけた。彼のいちばんの心配は、通常の時空の外にいても、神の耳に祈りの声がとどくかということだった。一瞬たりとも、神から完全に切り離される、などということがあるのだろうか？
リムスカヤの案内役を務める女性の新形態は、自分にはリムスカヤをなだめられないと知って、あまり彼に近づかないようになっていた。彼女にとって、リムスカヤの質問は、針の頭の上で何人の天使が踊れるかというのと同じくらい無意味な、無用の知識でしかなかったからだ。
ロドジェンスキーとミルスキーは、木々のあいだで数メートル離れて浮かんだまま、最終計画の知らせがとどくのを待っていた。からみあう光の蛇が、彼らの個室球の向こうの深い三次元的な散策路を照らしだし、ふたりの上に枝葉の影を落としている。
若い伍長をしげしげと見つめているうちに、ミルスキーは気がついた。生き生きとした肌の艶、口もとににじんでいる興奮、きらきら光る目の輝き——この男にとって、未来は麻薬なのだ。おれにとってもそうなのだろうか？
「ほとんど理解できませんよ」枝づたいにミルスキーのいる湾曲部に近づいてきて、ロドジェンスキーがいった。「しかし、理解できるようになるだろうという気はします。それに、ここの人

たちの協力的なことときたら！　彼らにとって、わたしたちは異物です――それは感じられるでしょう？　なのに、こうも歓迎してくれるんですからね！」
「もの珍しいのさ、われわれが」ミルスキーはそっけなく答えた。自分でも感じている興奮を、伍長に見せたくなかったからだ。彼の動悸は、これからはじまろうとしていることを思うたびに、速くなるいっぽうだった。
　と、女性の新形態がひとり――あのむっつりしたアメリカ人に割り当てられている案内役だ――こちらに漂ってきて、声をかけた。
「あなたがたのお友だちには、ほとほとこまってしまいますわ。みんなのもとへ帰そうかとも話しているんですよ……彼は認めようとしませんが、わたしは彼があやまった選択をしたと思います」
「時間を与えてやってください」とミルスキー。「わたしたちは、あまりに多くのものをあとに残してきたんです。重いホームシックになるのもしかたがない。彼にはわたしから話してみますよ」
「わたしもつきあいましょう」ロドジェンスキーが意気ごんでいった。
「それはだめだ」片手をあげて、ミルスキー。「わたしだけでいい。アメリカ側と交渉したとき、彼とは話したことがあるんでね。それに、ここにくる決断をしたとき、われわれは同じグループにいたんだ」
　ロドジェンスキーは顔を赤らめ、短くこくんとうなずいた。
　ミルスキーは、リムスカヤが閉じこもっている個室球の、透き通った真珠色の外殻をノックし

た。なかからリムスカヤが、英語で答えた。「はい？　だれ？」
「パーヴェル・ミルスキーだよ」
「話したくない」
「時間があまりないんだ。いますぐ〈ストーン〉へ帰されたくないのなら、われわれの選択した道を見すえなくてはならない」
「ほっといてくれ」
「はいってもいいかい？」
球のドアが広がり、ミルスキーはなかにはいった。「シティはいまにも出発するところだ。出発してしまえば、もう選択の余地はない。きみは永遠に、アクシス・シティにいることになるぞ」
リムスカヤは見るも哀れな状態になっていた。顔色は悪く、赤い毛をもじゃもじゃにして、口のまわりは四日分の髭で覆われている。「わたしはここに残る」とリムスカヤがいった。「そう決めたんだから」
「きみの案内役にもそういっておいたがね」
「わたしのスポークスマンを気どるのか？」
「ちがう」
「きみにとってはなんでもなかろうさ。きみは死の世界からもどってきた。おまけに、自分の地位を惜しげもなく譲りわたしたくらいだ――自分を殺そうとした連中にね。だが、わたしはつらい……責任と忠誠心を捨てていくことが」

「なんのために捨てる?」
「それがわかれば、悩むものか」
「わたしにはわかるような気がする」
リムスカヤは、疑わしげにミルスキーを見やった。
「きみはその目で、究極を見たいのさ」とミルスキー。
リムスカヤは、肯定するでもなく、否定するでもなく、じっとミルスキーを見つめた。
「きみ、わたし、ロドジェンスキー、そしてたぶんあの女性も——われわれはみんな、不適応者だ。ひとつの人生を送るだけでは満足できない。すばらしいものに接する機会と見れば、それに手を伸ばす」なにかを握ろうとするように手をさしのべて、「わたしも、つねに星々がほしくてたまらなかった」
「星々がほしかったからといって、宇宙まで戦争をしに出てきたのか!」とリムスカヤ。「われわれには、この先にどんなものがあるのかわからない。神に見捨てられたこの〈通路〉が、はてしなくつづいているだけなのかもしれない」リムスカヤは、両手のなかに顔をうずめた。「小さなころから、わたしはずっと気むずかし屋だった。だれもがわたしのことを、情熱のない年寄りの……ろくでなしだと思った。数学と社会学と宇宙。わたしの人生は、研究室のなかだけにかぎられていた。だが、〈ストーン〉に派遣されてきたとき——ああ、あれはなんとすばらしい経験だったことか! そこへさらに、この機会だ……」
「きっとこの先には、地球ではとうてい見つけることのできない、すばらしい驚異が待っているはずだよ」

「だがほかの者たちは、生存者を救うために、地球にもどっていく」こぶしをぎゅっと自分の脇腹に押しつけて、リムスカヤ。
「それに背を向けることが無責任ということになるだろうか？　なるかもしれない。だが、それは、このアクシス・シティの半分に住む者たちも同様なんだ」
リムスカヤは肩をすくめた。「ともかく、わたしは残ると決めたんだ。てでもここを動かない。わたしのことは心配いらない。わたしはだいじょうぶだ」
「わたしが聞きたかったのは、そのことばだよ」とミルスキー。
「きみは連中のくれた補助脳をつけているのか？」リムスカヤがきいた。
ミルスキーは右の耳を前に倒し、頭の右側をリムスカヤに向けて、装置をつけていることを見せた。
「わたしもまだ、自分のを持っている」リムスカヤは、握っていた片方のこぶしを開き、ピーナッツほどの大きさの装置を見せた。
「いまに必要になるよ」とミルスキーはいった。もうしばらく球内に残っていると、アメリカ人はゆっくりと補助脳を上に持っていき、耳のうしろにセットした。

64

「さあ、これでおわかれだ」ライ・オイユは、娘とイェイツにいった。彼がさしだした手を、上

院議員は両手で握りしめた。オルミイ、パトリシア、ラニアー、コジェノフスキーは、ディスクの下で待っていた。
「彼はなにを計画しているの?」パトリシアがきいた。
「ゲートの向こうにいくつもりなんですよ」オルミイが答えた。「あのタルシットもいっしょです。それと、フラントのひとりもね。それ以外の者は、全員わたしたちといっしょにきます」
「しかし、そんなに長く生きられるはずがない」ラニアーがいった。「そんなに大量の食料や酸素を持っていけるはずはないし——その準備期間も——」
「肉体を持っていくつもりはありません」オルミイが説明した。「三人ともね。彼らは反永久的に動けるゲート・ワーカーのボディに人格を移していくんです。だから、心ゆくまで研究することができる——ほかのゲートを開いたり、アクシス・シティがあそこに到着するのを待ったりしながら。エネルギーなら、何百万年分もあることだし」
プレシアント・オイユが、父親の顔を見つめながら、ゆっくりとかぶりをふった。「あなたとはとてもうまくやってこられました。きっと、なかなか立ち直れないでしょうね……あなたと……二度と話ができないなんて」
「ゲッシェルの管区といっしょにやってくればいい」とライ・オイユ。「〈道〉のはるか彼方で、また会えるかもしれんよ。彼らが成功するとしても、その計画がどんなものか、だれにわかるね? だいいち、だれかがふたたびこのゲートを開いて、われわれを見つけるかもしれんじゃないか……」
「もういちどこのゲートをあけられる者など、いはしませんわ」オイユ上院議員は否定した。

「これを見つけ、開くことができるのは、あなただけです」
「そのとおりですよ」イェイツも横からいった。「これは、あなたならではの業績です」
ライ・オイユはパトリシアのほうに顎をしゃくって、「コジェノフスキー、あるいは、あの地球の女性がいるではないか。あのふたりならできるだろう……だが、コジェノフスキーは地球にもどるというし、彼女はこのゲートなどよりさらにとてつもないものを捜しもとめている。まあ、なにごとにも、上限はないものだ」
「このゲートこそ、究極のゲートですわ」プレシアント・オイユがいいはった。「では――わたしは地球にもどります。わたしたちはそのために働いてきたのですから」そういうと、彼女は父親の手を放した。
大ゲート開放師が、彼女にひとつのシンボルをピクトした。地球――純白の雲で包まれた青と緑と茶色の地球と、それをとりかこむDNAの環――そして、その外に描かれた、コジェノフスキーが後世のパトリシアの論文から選びだした方程式を単純化したもの。
ライ・オイユのうしろには、冷たいバブルに包まれたタルシットと、永の別れをつげる白いマントをはおった――これはついいましがた出してきたものだ――フラントが立っていた。プレシアント・オイユは父親を抱きしめ、キスをすると、ディスクの下にいる者たちのもとへもどっていった。
大ゲート開放師とふたりの助手は、新たなゲートのまわりに設けられた工房と塚に歩きだした。
「彼はヘクサモンに対する誓約をまっとうしました」ディスクのフィールドがまわりで閉じると、プレシアント・オイユはいった。「アクシス・シティの半分が首尾よく到達できたなら、彼がア

クシス・シティの人々を導いてくれるでしょう」彼女は、ふたたび目に涙をにじませているパトリシアに手をさしのべ、その頰にふれた。こぼれ落ちた涙をぬぐって、プレシアント・オイユはその手を自分の頰にあてた。
オルミイがディスクに、ターミナルを離れ、待機しているフローシップに向かうようにと命じた。

二隻のフローシップ――大ゲート開放師の船と、オルミイたちが乗ってきた防衛船は、フローから離れて、牽引フィールドでもやわれていた。北から防衛船が撤退してきた場合に備え、じゃまにならないようにするためである。オルミイはすばやく決断した。彼らに必要なのはスピードだ。そして、小型の防衛船のほうが速度が速い。
彼らとしては、加速中のアクシス・シティの半分が高速の三分の一の速度に達する前に、交差しなければならない。その場合、とるべき道はふたつ。アクシス・シティ側が一時的にジェネレーターの出力を落とし、フローから離れ、こちらを通過させてくれるか、さもなければ、こちらがフローを離れ、壁にへばりつき、シティの前方に押しやられてくる粒子と原子の圧力波を乗り切るかだ。
だが、アクシス・シティと交差する前に、まずパトリシアとの約束をはたさなければならない。約束とはつまり、彼女が必要とする幾何学的スタックが見つかりそうな荒廃領域で、〈鎖骨〉とともに、彼女を〈道〉の表面におろしてやることである。彼女がその仕事に取り組める時間はほとんどない。プラズマの前線は、すぐ背後にせまっているからだ。

イェイツが船内の人のいない一画にパトリシアを連れていき、〈鎖骨〉の使い方について、最後の指示を与えた。「わすれないでくださいよ」説明をおえると、イェイツは念を押した。「あなたには、本能と強い欲求がありますが、技術はほとんどありません。知識はあっても、経験はありません。あせりは禁物です。慎重に、注意深くやることです」それから、パトリシアの肩をつかみ、まっすぐに彼女の顔を見つめて、「成功の確率はわかっていますか?」
パトリシアはうなずいた。「あまり高くはないわね」
「それでも危険を冒すのですか?」
パトリシアはもういちど、ためらうことなくうなずいた。イェイツは手を離し、ポケットから小さな箱をとりだした。「この〈鎖骨〉をあなたの手に押しつけて、その使用権をあなたに譲ったとき、〈鎖骨〉は本来の大きさになります。これはあなたにしか反応しません。あなたが死ねば、崩れて塵となります。あなたが生きているかぎり、これはあなたに仕えますが――うまくいったとすれば、そのあとはなんの役にたつものか、わたしにはわかりません。〈道〉のなかから新しいゲートを開くことはできても、外から開くことはできないのですから。もっとも、たとえ閉じられていても、かつてのゲートの存在を認識することはできます」
イェイツは〈鎖骨〉をとりだして――いまはせいぜい長さ十二センチほどしかない――それをパトリシアの左手に押しつけた。「両手で把手を握ってください」パトリシアはいわれたとおり、両手の親指と人差し指のあいだに把手をはさんだ。〈鎖骨〉はイェイツに向かって、一連の安定した赤いシンボルをピクトした。
「いまはまだ、これはあなたを認知していません」とイェイツ。「最後の所有者に指示をあおい

でいるのです。いま、〈鎖骨〉を活性化させます」コードをピクトして、イェイツは〈鎖骨〉に指示を与えた。
パトリシアの手のなかで、〈鎖骨〉は少しずつ大きくなり、とうとうライ・オイユが使っていた〈鎖骨〉と同じ大きさになった。
「さあ、あなたに制御をわたしますよ」さらにコードの指示がつづく。つぎの瞬間、パトリシアはだしぬけに、自分と〈鎖骨〉のあいだに、暖かいものが流れるのを感じた。コジェノフスキーは、数メートル離れたところから、そのようすを見まもっている。ラニアーは彼のうしろで、フロー縦貫筒のそばに浮かんでいた。
「これと、話ができるわ」パトリシアが感に堪えないようすでいった。「じかにいろいろなことを話しかけることができる……」
「そして、〈鎖骨〉もあなたに語りかけることができます。〈鎖骨〉は活性化しました。これからはあなたが主人です」イェイツの声は、さびしげな響きを帯びていた。
コジェノフスキーが近づいてきた。「あなたの研究について、少し思うところがあるのだが——技術的なことで、いくつか提案したい」
「ぜひおうかがいしたいわ」とパトリシアはいった。
二十Gで加速をつづけながら、フローシップは〈道〉を一路南に向かった。
プラズマ前線は、最後のゲート開放地として用意されていた、幅六十キロの領域に到達し、障壁につぎつぎにぶちあたって、そのすさまじい高熱により、薄い時空歪曲構造を突き破った。最

初の障壁が踏みにじられるとともに、ささやかなオアシスは灰と化した。井戸のサーキットは溶融して閉じ、〈道〉の内面はなめらかで平坦になった。
人類の管理する〈道〉の全域にわたって、各ゲートから送られてきた最後のメッセージは、それぞれの閉鎖を伝えていた。各ゲートに詰めていた何百万という人間たちは、アクシス・シティの半分にもどるよりも、ゲートの向こうの世界に残ることに決めていた。〈道〉に残っていた最後の交易活動もおわりを告げ、各ゲートは閉鎖されて、アクシス・シティの通過とプラズマ前線の到来に対する備えは完了した。
プラズマ前線がすぐうしろにせまっているにもかかわらず、オルミイは船を減速させた。フローシップには、先のまるくなった小型艇が二隻、搭載されていた。パトリシアの旅のために、プレシアント・オイユが一隻余分に運んできたものだ。
パトリシアはラニアーのもとへいき、思いきり抱きしめた。
「あなたがしてくれたことに、心から感謝するわ」
ラニアーは、心のなかでは冒険をやめてくれといいたくてたまらなかったが、懸命にその気持ちを抑えこんだ。「ぼくにとって、きみはとてもたいせつな存在になっていたんだ」
「面倒をみてやらなければならない、小娘じゃなくて？」ほほえみながら、パトリシア。
「もっともっと、ずっとたいせつなものさ。ぼくにとって……」ラニアーは目をそむけ、百面相のように顔をくしゃくしゃにしてから、かぶりをふって、「きみは特別ななにかなんだよ、パトリシア」といった。涙があふれだすのもかまわず、声をたてて笑いながら、「それがなにかはわからない。でもきみはたしかに、特別ななにかだ」

「パトリシアについていきますか？」彼の袖を引いて、オルミイがたずねた。両手にひとつずつ、小さな黒い球形のモニターを持っている。
「どういうことだ？」
「パトリシアには助手がいるでしょう。わたしもついていきます」
ラニアーのとまどい顔を見て、プレシアント・オイユが説明した。「部分人格を作るんですよ。そのモニターが、部分人格を投影するんです。もちろん、あなたに報告を送り返すことはできません。パトリシアを送りだしたら、わたしたちはただちに出発しなければならないのですから」
「その部分人格は、死ぬのかい？」ラニアーがきいた。
「モニターが破壊されると同時に消滅します」とオルミイ。「しかし、本人はなんともない」
ラニアーは、頭のなかに不気味な風が吹きぬけるのを感じた。「なるほどな」と彼はいった。
「それはとても、ありがたいね」

（ティエンポス・デ・ロサンジェルス紙を読んでいるとうさん、帰ってくるわたしのために料理を作っているかあさん。帰っていくわたし。待っているポール。ポールになんていおう？「とても信じられないだろうけれど……」？　それとも、「じつはポール、わたし、不実なまねを……」？　それとも、黙ってポールにほほえみかけ、また一からはじめるべきかしら……）
パトリシアはいま、飛行艇に乗っていた。となりには、オルミイとラニアーが——正確にはふたりの部分人格が——すわっている。パトリシアの膝の上には、〈鎖骨〉が載っていた。目の前のスクリーンに映っているのは、荒涼とした、なめらかな〈道〉の地肌だ。彼女は〈鎖骨〉の把

手をぎゅっと握りしめ、〈鎖骨〉を通して伝わってくる、表面の〝下〟の各ポイントごとに、超常空間の感触を探っていた。

目的のものを見つけだすのは、砂浜で特定の砂粒ひとつを捜しだすより、はるかに難しい。彼女の捜しているのは、〈大破滅〉がなく、彼女がおらず、〈ストーン〉は到来しているが、それが戦争の引き金ともならず、その世界におけるパトリシアがなんらかの形で死んでしまっている宇宙なのだ。

それが見つけられなければ（そこまで正確につきとめられるかどうか、とても自信はなかったが、そのような場所は存在するはずであり、ほかの世界とはっきり区別がつくはずだった）、彼女は自分がふたりいる宇宙に住まざるをえない。しかし、ともかくも家のある世界でさえあれば、目をつぶることができる。彼女はラニアーのイメージを見やった。ラニアーは力づけるように、同時にどうしていいかわからないように、ほほえみかけた。

だしぬけに、なんの理由もなく、成功の保証はいっさいないにもかかわらず、パトリシアはすばらしい気分に包まれた。過去のすべてのできごとから解放され、きたるべきできごとのこともわすれて、彼女は喜びにひたった。こんな思いははじめてだった。それは自信でも陶酔でもなかった。いままで経験したこと、これから経験することに対する、すなおな感慨だった。いまここに、ふつうではありたくないという子供時代からの強迫観念は、ついに現実のものとなったのだ。ふつうの人間としてではなく、自分にできるかぎりもっともふつうではない経験をすること——それが彼女の願いだった。だが、世界はいつまでも、なんの変哲もないままだったので、彼女はずっとむかしに、そのふつうではない世界を、自分の頭のなかに築こうと思うようになった。と

ころが、突如として、世界は一変した。いくつもの宇宙が、想像を絶する形でからみあい、まさしく彼女の頭のなかにあるヴィジョンそのままの体験をもたらしたのである。それは歴史によって、また何百億という、非人類もふくめた知的存在たちの行動によって、いっそう奇妙な、常軌を逸した、しかしすばらしいものとなっていた。

これは唯我論的な感覚ではない。彼女はもう、自分が孤独であるとも変わった人間であるとも、少しも思わなかった。それにしても、自分の人生は、いかになみはずれたものであったことか。すでに彼女は、自分のもっとも度はずれた、心の奥底にひそかにしまっておいた夢を実現させてしまったのだ。

それ以外のことは、すべてついでにすぎない。家に帰ることでさえも。

飛行艇はふわりと〈道〉の表面に着地した。彼女の両手のなかで、〈鎖骨〉が心地よい振動をたてつづけに放ち、もう何キロか南にいくようにと告げた。パトリシアがオルミイの部分人格にそう伝えると、オルミイはふたたび飛行艇を飛翔させた。

頭上では、フローシップがふたたび南へと加速をはじめていた。

パトリシアは目を閉じ、〈鎖骨〉の感覚が体じゅうに流れるにまかせた。無数の平行宇宙の団塊が、目に見えるようだ。その感触を探り、その一部となることはできる。だが、その世界をはっきり見ることはできない。感覚を通じて彼女にできることは、〈鎖骨〉を誘導することだけであり、他の平行宇宙におけるこまかな知識までは伝わってこないのだ。わかるのはただ、いま捜している領域に見あたらなくとも、それらがたしかに存在するという事実だけだった。

部分人格には防護フィールドがいらないが、彼女には必要となる。オルミイが牽引フィールド

で球を作り、そのなかに生存環境を用意してくれた。ラニアーはそばにとどまっている。ここにいるのは、ラニアーの人格のうちのどれだけなのだろう？　部分人格が消滅するのは、どんな感じなのだろう？

パトリシアはふたたび、全神経を〈鎖骨〉に集中させた。機首のハッチが開くと、柔軟な、かすかに輝く牽引フィールドの球に包まれて、パトリシアは〈道〉の表面に足を踏みおろした。ラニアーとオルミイは、真空のただなかを、フィールドに守られることなく、歩いてついてくる。

「時間は三十分ほどしかありません」オルミイがいった。その声は、モニターからパトリシアの首環に送られてきていた。「三十分を過ぎると、プラズマ前線の輻射量が危険値を越えます。三十分で見つけられますか？」

「できると思う――できてほしいわ」バッグを調べ、すべてがちゃんとなかにはいっていることをたしかめる。万能メーター、プロセッサー、スレート、メモリー・ブロック。

ついで、〈鎖骨〉を前につきだし、走査を開始した。十分ほど、北に南にと、いったりきたりをくりかえす。一歩ごとに、〈鎖骨〉は無数の平行宇宙の膨大な広がりを伝えてきた。感覚が損なわれないよう、そのほとんどの世界については、接触しないようにした。

それからさらに十分、パトリシアは長さ数センチほどの線にまで範囲をしぼりこんだ。その線のどこかに、彼女のもとめる点があるのだ。パトリシアは膝をついた。牽引フィールドが、膝の下でやわらかくたわむ。〈鎖骨〉はひとりでに動いて、彼女の手を、そのわずかな領域に導いた。

さらに五分後、パトリシアはもとめる点を、一ミリの範囲にまでしぼりこんでいた。それぞれの宇宙から流れこんでくる情報は、いまはもう、はるかに複雑になっている。もとめる地球はも

うすぐそこだし、時代もおおむね正しい。せいぜい二、三年の誤差だ。

「急いで」とオルミイがいった。「プラズマはそこまできています」

そこから先は、ひどく難しかった。どうやら彼女の理論は、そうあってほしいと思っていたほどには正確ではなかったようだ。幾何学的スタックのほんの微小な領域中にさえ、さまざまに変化する世界が交錯している。いまなら、コジェノフスキーやその信奉者たちが、なぜはなから幾何学的スタックを無用と見なしていたのかが、よくわかった。

〈鎖骨〉がとまった。充分正確な領域までしぼりこめたかどうか、自信がない。だが、何日かかっても、これ以上正確な点には近づけないだろう。パトリシアは目を閉じ、〈鎖骨〉に最後の走査をかけさせた。

「準備はいいわ」

「では、はじめてくれ」ラニアーがいった。パトリシアはラニアーの部分人格をふりかえり、感謝をこめてほほえんだ。

「ありがとう――あなたのしてくれた、すべてのことに対して」

ラニアーはうなずいた。「いいんだ。ぼくもすばらしい思いをさせてもらったんだから」

「ええ……そうね」

パトリシアはゲートの開放にとりかかった。〈通路〉の北は、いまや赤い輝きで満たされていた。一秒ごとに、その輝きはスペクトルの階段を登っていった――いまはオレンジ色、ついで緑がかった毒々しい青――

〈鎖骨〉のたてる音が、耳に痛いほどかんだかくなった。パトリシアの足もとに、さざめく蓋然

性の円が広がりだし、その円の内側が——直径はせいぜい一メートルほどしかない——明瞭になり、歪んだ光景が浮かびあがった。青空、明るい黄褐色の広がり、大きなものの影、水——

正確にどこかはわからない。地面の上ではあるらしい——それは感じとれる——だが、いったいそれが地球上のどこなのか、見当もつかない。もっとも、それがどこであろうと、牽引フィールドが身を守ってくれるはずだ。

ラニアーの部分人格が身をかがめ、フィールドをつきぬけてきて、別れのキスをした。唇は柔らかく、暖かかった。

「早く!」オルミイがせきたてた。

パトリシアはゲートに足を踏みいれた。まるで丘の斜面をすべりおりていくようだった。まわりでは、なにもかもが歪み、流れている。パトリシアはいったん〈鎖骨〉を離し、片手に握りなおした。水の音がする。なにか巨大な、白くてとがったものが、それほど遠くないところにあるようだ。そして、まばゆい太陽——

ラニアーとオルミイは、せまりくるプラズマを見つめていた。

死ぬ、という感じはないな、とラニアーの部分人格は思った。ここにいたっても、おれの逃避を完全なものにしてくれるという感じしかない。だが、本体はこれを経験することはない。本体に〝報告する〟ことはできないのだから。

ふたりは、光や熱の概念を超えた、すさまじい光輝にのみこまれた。オルミイは顔をしかめながらも、笑みを浮かべていた。この感覚を楽しんでいるのだ。いままで、何度も部分人格を死に赴かせてきたが、それがどんな感覚であるのか、味わったことがない。だがいま、彼はそれをじ

かに感じようとしている——。
　とはいえ、オルミイ本人がこの感覚を知ることは、やはりない。
「プラズマ前線そのものがやってきたら、モニターは瞬時に破壊されてしまう」とオルミイはラニアーに説明した。「だが、その瞬時のあいだに、われわれは恒星の核を体験するんだ……」
　苦痛もなく、ほとんど恐怖もいだかずに、ラニアーはまっすぐ北を向き、秒速六千キロで迫りくる溶鉱炉の心臓を見すえた。
　その感覚を味わうだけの余裕は、なかった。

　荒れ狂うプラズマがすぐうしろに追いすがるのもかまわず、フローシップのなかで、ラニアーは目を閉じ、何度も何度も自分に語りかけた。おれは責任をまっとうした、最後の最後まで重荷をかつぎとおしたのだ、と。

　なおも〈鎖骨〉を握りしめ、バッグを肩からかけたまま、パトリシアは五、六メートルの高さから、水中に落下した。
　体は濡れもしなかった。彼女は呆然として、水面にただよう牽引フィールド球の底に横たわっていた。水の流れにのって——河か運河らしい——ゲートから数十メートルは離れただろうか。ここがどこかたしかめようと、彼女はいっぽうに顔を向けた。
　だが、なにも見えなかった。だしぬけに、ゲートからまばゆい青白色の水柱がたちのぼり、瞬時にして大量の水を蒸発させ、あらゆるものを濃密な白い雲でおおいつくしたからである。彼女

にとって、そして半径数百メートル内のすべてにとって幸いなことに、ゲートは数百万分の一秒のうちに、溶融されて永遠に閉じられた。

パトリシアはフィールドの底であおむけに横たわり、一時的にほとんど見えなくなった目を片手で覆って、もう何分間かただよいつづけた。やがて、ジャリジャリという、砂浜にフィールドがこすられる音がした。そのころにはもう、視力は充分に回復していた。

胸をどきどきさせながら、立ちあがり、あたりを見まわす。

そこは、広くてまっすぐな運河の河べりだった。濁った水は、泥の色をしている。土手には、背の高い緑色の葦が、どこまでもならんでいた。空は明るく、うすい青で、雲ひとつない。そして太陽は、ひどくまぶしい。

不安を覚えながら、牽引フィールドを切り、大きく深呼吸をした。空気はかぐわしく、すがすがしく、暖かかった。

ティンブルにいたときよりも、体が重く感じられる。いまは、体を浮かせる浮揚ベルトがないためだ。その重さがつらかった。

だが、ここはまぎれもなく地球だし、核戦争で荒廃してもいない。事実、ここの光景はうんざりするほど見覚えがある。どれもこれも、前に見たことのあるものばかりだ……子供のころ、かあさんにぜひにと受けさせられた、聖書の講義で見せられたものだ。

片手を目の上にかざして、西を見やった。

運河の向こうの大地には、漆喰色のピラミッドが、陽光を浴びて白く輝いている。何キロも離れているが、砂漠のすんだ空気のおかげで、くっきりとその姿が見える。彼女はしだいに興奮し

てきた。
ここはエジプトだ。エジプトからなら、どうやってでも帰れる。それは瑣末な問題でしかない。ここからなら、家に帰れるのだ。
パトリシアはまわりを見まわした。葦のあいだにつきだした、貧弱な足場の上に、せいぜい十歳か十一歳くらいの、褐色の肌をした細身の娘が立っていた。腰のまわりをおおった白い布以外、なにも身につけていない。長い髪はいくつもの小さな房に編まれ、それぞれの房は青い石でとめられている。娘は、驚きと恐怖の混じった顔で、呆然とパトリシアを見つめていた。
「ねえ!」パトリシアは声をかけ、重い足どりで、砂におおわれた土手を登りだした。「あなた、英語が話せる? ここがどこだか、教えてもらえる?」
娘は足場の上で器用に身を翻すと、逃げだした。一瞬パトリシアは、数千年ほど時間をずれてしまったのではないか……じつは、古代エジプトにいるのではないかという予感をいだき、ぞっとした。
そのとき、彼方からかすかな轟音が響いてきて、空をふりあおいだ。安堵のあまり、彼女はいまにも叫びだしそうになった。あれは飛行機だ。砂漠の上空高くを飛んでいる。おそらく、ジェット機だろう。
〈鎖骨〉を握りしめ、運河にそって歩いていきながら、パトリシアはもういちど牽引フィールドをつけようかどうしようかと考えた。太陽が耐えられないほど暑かったからだ。が、迷っているうちに、道に出くわし、彼女はそれをたどりはじめた。ほどなく、ナツメヤシの林の向こうに、小さな方形の街が見えるようになった。家々はみなずんぐりとして、どれもこれもそっくりだ。

人影はまったく見あたらない。正午を過ぎたばかりなので、涼しくなるまで、みな休んでいるにちがいない。
ふと、なにかが心をよぎった。いままで気にもならなかったことだが、いまになって、彼女は思いだした……。
〈鎖骨〉を石畳の上に置き、両手で目の上に覆いを作って、パトリシアはふたたび西を見やった。いまの位置からは、種類はわからないが、こんもりとした木々がピラミッド群をとりまいているのが見える。おかしいのはそこだ。エジプトのピラミッドは、砂漠にあるのではなかったか？
それに、地球のエジプトには、大ピラミッドはいくつあった？　三つか？
地平線上にずらりと連なる、表面のなめらかな白いピラミッドの数を数える。それは全部で、八つあった。
「まちがったらしいわ」と、パトリシアは静かに、みずからに語りかけた。

65

ラニアーはひとり、フローシップの船首に浮かび、長いあいだそのままの姿勢にとどまっていた。もう何千キロを踏破したのだろうか。黒と金の混じりあった〈道〉の壁が、どんどんうしろに飛び去っていく。
結局たどりついた結論は、自分はパトリシアよりも、地球に対してより重い責任を負っている

ゲートをくぐりぬけるまで見まもることもできない。なぜならそれは、彼がするべき旅ではないからだ。

パトリシアは生き延びるだろうか？　目的地にたどりつけるだろうか？

たとえ生き延びるにしても、無数の宇宙が積層する、この夢と悪夢からなっているような〈道〉からは、もはやとうてい手がとどかない。彼女は死んだも同然だ。

オルミイがうしろにただよってきて、咳ばらいをした。

「ぼくならだいじょうぶだよ」ラニアーはそっけなくいった。

「それをきく気はありませんよ。現在の状況を知りたいだろうと思いましてね。フローシップはプラズマ前線のはるか前方にいます。輻射量は許容範囲内。もっとも、向こうに着いたら、徹底的に物理的なタルシット処置を受けたほうがいい」

「アクシス・シティはどうなっている？」

「連絡をとりました。思ったとおり、向こうはいま、こちらに向かって加速のまっさいちゅうです。一時的にフローから離れて、こちらを通過させてくれるそうです」

「そんなことができるのか？」

「運がよければね」とオルミイ。「交差時には、向こうは光速の三十一パーセントに達しているでしょうから」

「きっと、見ものだろうな」とラニアーはいった。

「なにかが見えるとは思えませんがね」

「ことばのあやさ」
「わかっています。なにか食べたければ、準備しますよ。セル・イェイツはものを食べる機能を持っているから、あなたが同席すれば喜ぶでしょう」
「アクシス・シティと交差するのはいつだい?」
「三十七分後です」
ラニアーはごくりとつばを飲みこみ、体を回転させた。「つきあおう。少しは食べられるだろう」
だがラニアーは、食事にはほとんど口をつけず、船室のなかにいる者たちを、おちつかなげに目で追うばかりだった。異星人たちは、それぞれの牽引バブルのなかにこもっており、じっとしているものもいれば、活発に動いているものもいた(四頭のあの蛇は、緑色の液体のなかで、すばやく痙攣するような踊りを踊っていた)。プレシアント・オイユは、彼の視線をまっすぐ受けとめた。イェイツはふつうに食べている。一行のなかで、いちばん人間らしく、いちばんあたりまえの習慣を持つ彼は、しかしゲート開放師なのだ。
オルミイは口をきかず、じっとしていた。彼からそれほど離れていないところには、コジェノフスキーの再構築された人格を――そしてパトリシアの一部をも――収めたワーカーが、牽引フィールドに包まれて浮かんでいた。最後の長い熟成プロセスにはいっているため、そのイメージは、いまは投影されていない。
ラニアーは食べ残しの皿を脇にのけ、やはり船首で待っていたいといった。オルミイはうなずいた。

ラニアーは、オルミイとイェイッといっしょに船首に集まった。フロー縦貫筒の反対側には、いまも検疫フィールドに包まれた、あのU字型の奇妙な生物がいた。ふたりのフラントは、彼らの背後でゆったりと浮かび、体をまるめ、首と頭部だけをつきだしていた。
前方で、黒と金のまだらが、オレンジと茶色に変化していた。フロー自体は、フローシップの加速に影響され、かすかなピンク色に明滅している。
「あと数秒」とオルミイがいった。
瞬時に、〈道〉があらゆる方向へ膨れあがった。ラニアーは、自分の手が震え、涙がにじんでくるのを感じた。フローが振動し、目をつきさすようなブルーに輝いている。船の中央を貫くフロー縦貫筒が振動し、うめいた。
あともうほんの数秒で、死ぬかもしれない——。
自分の体が爆発したような気がした。ラニアーは苦痛のあまり悲鳴をあげ、驚き、四肢をはじけるように伸ばした。
つぎの瞬間、それはおわっていた。ラニアーは目をしばたたきながら、牽引ラインの網に包まれてその場にただよった。〈道〉はふたたび、黒と金のまだらにもどっていた。フローも淡いピンクに輝いている。
「ダメージはなかったようだ」とオルミイがいった。
「らしいな」片手で片目を覆ったまま、イェイッ。ラニアーの肘が、彼にあたった。ラニアーは詫びをいった。
「これでもう、なにも案じるものはない」とイェイッ。「タルシット処置にかかる理由が増した

だけだ。じっさい、きわめてエキサイティングだったよ」
フローシップの背後では、ふたたびフローに乗ったアクシス・ネイダーと中央シティの結合体が、四百Gで加速を再開していた。ほどなく、それが巻き起こす時空の衝撃波がプラズマ前線と衝突し、〈道〉を長大なノヴァと化すプロセスがはじまった。
フローシップの外では、輻射線の量が飛躍的に高まりだした。

第七空洞の南端に爆薬をセットする作業は完了した。技師たちは〈冠毛〉じゅうにちらばり、最終的な構造チェックを行なうとともに、第六空洞機構のテストにとりかかった。小惑星が〈道〉から切り離されるさいには、第六空洞の機構にとほうもない負担がかかるだろう。〈道〉のスタビライザーとしての役目がおわると同時に、各空洞内で荒れ狂う破壊的な力をおさえなければならないからだ。
アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドは、第七空洞から十万キロメートル北に移動していた。双子のようにそっくりなふたつの円筒内は、いまや、混乱のきわみにあった。市民の大半は——正教徒および一般のネイダー教徒と、驚くほど多数の通常形態のゲッシェルたちだ——すでに新たな居住区に移されていた。新しい管区になじみのある者はほとんどいない。ふたつのアクシス円筒内には、休日と勝利のはなやぎとともに、不安に満ちた重苦しい空気がたれこめていた。
ゲッシェルの医師たちに看護され、代理士たちに監視されて、登録ホールには何百人という地

球人が収容されていた。
　男性の通常形態が——ホフマンはこのことばを耳にとめ、急速に増えてゆく語彙のひとつに加えていた——自分の管轄下にある二十人から、皮膚のサンプルを採取していた。ホフマンはその列の、七番めにならんでいた。代理士はひとりひとりにほほえみかけ、地球人たちを元気づけるため、ふたことみこと、慎重に選びぬかれたことばをかけていた。代理士はハンサムだったが、ホフマンの好みではなかった。顔だちが整いすぎているし、ほかに十人ほどいる通常形態たちとほとんど見わけがつかないほど似通っているのだ。でなければ、彼女の感覚がまだ洗練されていないのだろう。彼女の時代、人々の顔つきはそれこそ千差万別で、歪んだ鼻、肥満、ふぞろいな歯などの欠陥は避けられず、中世的な人相の饗宴を呈していたのだから。
　サンプルをとりおわると、代理士は空中に浮かんでいる道具箱から、顔型のカップをとりだして、「これは、さまざまな医療分析を行なう装置です」と説明した。「これについても、受けるも受けないもみなさんの自由ですが——協力していただければとてもありがたい」
　二十人は全員協力し、そのカップのなかを覗きこんで、数秒間ずつ、一連の複雑なパターンを見つめた。
　その検査のあいだじゅう、ホフマンは代理士たちが居丈高ではなく、いたわるような態度をとっていることを感じていた。代理士たちの多くは、左肩の上に、誇らしげに投影された国旗をはためかせている。インド、オーストラリア、中国、合衆国、日本、ソ連、その他の国々の国旗だ。そして全員が、受け持ちの者たちに、進んで——というよりも熱心に——それぞれの母国語で話しかけていた。

検診がおわると、ホフマンたちはホールの一面に口をあけてずらりとならんでいる、エレベーターに連れていかれた。かつてはラニアーの、いまはホフマンの秘書であるアン・ブレイクリーが、そこに待機していたべつのグループを離れて、こちらへやってきた。そのとなりには、科学者コンパウンドで警備隊長を務めていた、ドリーン・カニンガムもいた。
「みんな、ひどく緊張しているようです」と、カニンガムが耳打ちした。
「わたしはそうでもないわ」とホフマン。「まるで祝日のよう。大いなる人々が、すべてを引き継いでくれたんだもの」そこでホフマンは、エレベーターのなかを覗きこんで、小さく悲鳴をあげた。エレベーターには、床がなかったのだ。代理士たちに説明され、実例を見せられても、なかに足を踏みいれるには、かなりの勇気を必要とした。
エレベーターにはいった六十人は、たがいにしがみついたまま、〈道〉に運ばれていった。カニンガムはずっと目を閉じたまま、ホフマンに伝えた。ソ連人のほとんどはあきらめておとなしくしたがっている。ソ連人特有の陰気なペシミズムで、じっと耐えているのだろう――。
「だれかから聞いたけど、アメリカ側からも脱落者が出たそうね」目の前に立っているだれかの背をじっと見つめながら、ホフマンが聞いた。エレベーターの壁は変化がないので動いていることがわからないし、動いている感覚もまったくなかったが、それでもこれは、あまり愉快な経験ではなかった。
「抜けたのは四人です。ソ連人、アメリカ人、各ふたりずつ。わたしがきいたのはそこまでですわ」とアンがいった。
「それがだれか、知ってる?」

「リムスカヤです」とカニンガムがいった。「それと、ベリル・ウォリス」
「ベリルが……」ホフマンは目をまるくしてかぶりをふった。「まさか、ベリルがそんなことをするなんて……リムスカヤも意外だけれど」この感情は、裏切られたという思いなのか？　いいえ、ばかげてるわ。「ソ連のほうは？」
「ひとりはミルスキーです」とアン。「もうひとりの名前は、聞き覚えがありませんでした」
ミルスキーについては、意外ではない。自分の指揮下にない人間ならば、異質なものがはっきり見わけられる。大管理者の本能ともいうべきものだ。
地球人たちの居住区は、アクシス全体にちらばって用意されていた。さらにたくさんの通常形態が現われて、六十人のグループをふたたび分割し、各階の部屋へと案内していった。
「ひと部屋に、三人ずつはいっていただきます」とホフマンたちの代理士がいった。「いまとなっては、空間は貴重ですので」
「同室しますか？」カニンガムが、ホフマンとブレイクリーにいった。
「いいわね」とホフマンが答え、ブレイクリーもうなずいた。
十二人のグループに入れられたホフマンたちは、代理士たちの案内で、ひとけのない居住区に連れていかれた。ホフマンたちは最後の三人となり、左肩にソ連の国旗のイメージを掲げた女性の通常形態に付き添われて、奥へと進んだ。三人の部屋は、円筒形の、長くてゆるやかにカーブした廊下のつきあたりにあった。彼らが近づいていくと、部屋のドアの下に、緑の番号が輝いた。
部屋はせまく、ひどくそっけなかった。付き添いの女性は、データ・サービスの使い方をざっと教えてから、ゆっくりくつろいでくださいとだけいって、早々に立ちさった。

「あわただしいこと」かぶりをふりながら、ブレイクリー。
「どちらにしても、なにもすることはないし、あとはあなたまかせなんだから、くつろぎましょう」とホフマンがいった。
それからしばらくして、三人は、図書館から割りあてられてきた影体と、部屋の装飾をどんなふうにするかについて、夢中で話しあっていた。代理士たちのいう〈突破〉までには、まだ何時間かある。ホフマンはその時間を利用して、同じアクシス円筒内に部屋をあてがわれた者たちと連絡をとった。
ブレイクリーとカニンガムは、仮の装飾として、ともかくも多少の色と飾りを施し、見かけ上は広々として見える装飾を選ぼうと決めた。ホフマンもふたりに加わって、部屋の機能を確認し、一画にセットされた自動キッチンのさしだす料理をつまんだ。
影体の話では、市民と同様に、地球人も〈突破〉の一部始終が見られるという。〈冠毛〉じゅうに設置されたモニター群が、〈突破〉の過程とその結果をつぶさに中継してくるのだそうだ。そう望めば、だれもがリングサイドに席をとれるというわけだった。
食事もとり、部屋を使って遊ぶのもあきてきた三人は、腰をおろし、小惑星とアクシス円筒のなかでなにが起こっているのかを眺めることにした。
イメージは本物と見分けがつかないほどリアルだった。しばらくして、カニンガムがディスプレイから目をそらし、どうにもこらえきれないようすで笑いはじめた。「ばかげてるわ」彼女は頬を押さえ、東洋風の絨毯のイメージの上をころげまわった。「あきれてものもいえやしない」ついでブレイクリーにも、笑いの発作が移った。

「わたしたち、ヒステリックになってるわね」ブレイクリーがそういったとたん、また新たな発作がふたりを襲った。「いったいなにが起こっているのか、さっぱりわからないわ」
「わたしにはわかるわ」とり残されたような思いを味わいながら、ホフマンが真顔でいった。
「なにが起こってるんです?」笑いを抑えようとしながら、ブレイクリー。
ホフマンは片手を、近くに浮かぶおおむね円筒形をした〈ストーン〉のイメージにつっこんだ。イメージを通して、その手が透けて見えた。「この一端を吹きとばすの――かつてだれもつき破ろうとしなかった端――〈ストーン〉の北極を」
「そんな――」はじまったときと同じように、カニンガムの笑いはぴたりととまった。「もしわたしたちが北極をつき破ろうとしていたら、どうなっていました? 穴をあけたら、どこに出るはずだったんです?」
「北極を吹きとばして」答えようのない質問を無視して、ホフマンはつづけた。「〈ストーン〉を〈通路〉から切り離すの。そして――」
「そして?」もう笑いが抑まり、やはりひどく真面目な顔になって、ブレイクリーがきいた。
「アクシス・シティのこの半分が〈通路〉を出ていくのよ。ここは宇宙ステーションになるの」
「そして、〈ストーン〉は?」カニンガムがきいた。
「新たな月になるわ」
「それで、わたしたちは地球にもどるんですか?」今度はブレイクリーがきいた。
ホフマンはうなずいた。
「なんてことなの」とブレイクリー。「まるで……まるで……なにがなんだかわからない。おと

ぎ話だわ。復活の日よ。あれはなんていったかしら？　そう、昇天。死者たちがフリーウェイをつきぬけて昇っていくの。人々が、屋根をつきぬけて、車から天に昇っていくのよ」困惑して、ブレイクリーは投影されたイメージに向きなおった。「まるで感じが出ないわ。フリーウェイも、車もないいんだもの。ただ、天使たちが空からやってきただけで」
　ホフマンは深々と、体を震わせるようにしてため息をついた。「そのとおりよ――これはおとぎ話じゃないの」それから、唐突に、ホフマンは笑いの発作に見舞われた。肺が痛くなり、顔じゅうが涙でびしょびしょになるまで、その発作はつづいた。

〈突破〉予定時刻の一時間前、ローゼン・ガードナー有体下院議員が、ホフマンにあてて個人的メッセージを送り、訪問の許可をもとめてきた。許可してから数分後、ガードナーはじきじきに、ホフマンの部屋の前に現われた。イメージではなく、本体がやってくることを、ここのことばでは〝顕現する〟というのだったわね、と思いながら、ホフマンはガードナーを招きいれた。そのころにはもう、ホフマンとふたりの同室者は、いくぶんなりと自制力をとりもどしていた。
　ガードナーは、三人にこう説明した。もはや自分は、分割されたヘクサモンおよびネイダー教徒の代表として、政治的折衝につく必要はなくなった。だから、新ネクサスの有体下院議員として、地球の人々のために働くことを志願した。そのために相談すべき適切な相手は、当然ながらホフマンだろう。したがって、あなたに対しては、個人的なデータベースおよび情報サービスを提供して、たえず情報を供給することにしたい。
　わたしの休暇もこれまでね、とホフマンは思った。しかし、あまり休暇に未練はなかった。ふ

たたび、出番がまわってきたのだから。

「それに、ニュースもあります」と、両手をうしろに組み、ホフマンの前に立って、ガードナーはいった。ホフマンはしだいに、ネイダー正教徒の雰囲気をつかみつつあった。彼らは献身的で、騎士道的ともいえるほど高潔で、地球で相手にしていた保守的な政治家たちとは大ちがいだった。

「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケス、および彼女を捜索するために派遣された四名の消息です」

「まあ」

「四名のうち、三名はわれわれの管区にもどってきました。ローレンス・ハイネマン、カレン・ファーリー、ラノア・キャロルスンの三名です。申しあげるのも恥かしいことですが、彼らはアクシス・ネイダーおよび中央シティのゲッシェルたちによって、しばらく幽閉されていたのです。三名が解放されたのは、ゲッシェルの管区が加速を開始する直前でした。三名とも、もうじきここへやってきます」

「ほかのふたりは?」

「パトリシア・ルイーサ・ヴァスケスは、家に帰る道を見つける機会を与えられました」とセル・ガードナーはつづけた。「厳密にどういうことであるかは、わたしも知りません。詳細は不明なのです。彼女とギャリー・ラニアーは、引きとどめられ、ゲート開放師とその一行とともに、ポイント1.3×9に送られました。一行の多くは、ラニアーもふくめて、現在ここへ向かっており、加速中のアクシス・シティの半分ともぶじ交差をおえています。もっとも、〈道〉の切り離しまでには、まにあいそうもありませんが」

ホフマンには、〝ゲート開放師〟がなんであるかわからなかったが、それをきいている場合ではないことはわかった。それならあとで調べればいい。「彼らは〈通路〉を出るつもりなの？」

「わかりません」とガードナー。「彼らのリーダー、セル・オルミイは、こちらのタイムテーブルを承知していて、〈道〉の閉鎖までには、〈道〉を出られると思っているようです。遅れているのは、非人類種族をおろすため、何ヵ所かでとどまって、再度ゲートを開いているからです」

ホフマンは、左手で軽く太腿をたたきながら、ガードナーの話を黙って聞きつづけた。いままで彼女は、パトリシアと四人の捜索隊が、なんらかの事故にあって、死んでしまったか行方不明になってしまったと思っていた。しばらくのあいだは、彼らのことをわすれていられた。だが、ふたたびホフマンは、彼らの心配をしなければならなくなった。しかも、彼らにどんな危険がせまっているのかまったくわからず、彼らが危機から逃れられるかどうかもわからないという。

「〈道〉の切り離しは、五十三分後です」と、ガードナー有体下院議員はいった。「ところで、お知らせしておいたほうがいいと思いますが、ヘクサモンの市民のかなりの数が、あなたがたのグループのごく一部から〝誘い〟をかけられています。そちらの女性のなかには、なにかの品物と交換に――どんな品物かは知りませんが――サービスを提供している方もいるようです。その種のパーティーには、こちらの人間は立入禁止にしていますがね」

ホフマンは愕然とし、なんと返答していいかわからず、しばらくガードナーを見つめていたが、ようやくのことで、「それが賢明ですわね」と答えた。「だれがだれを堕落の道に引きずりこんでいるのか、わたしにはわかりませんが」

――ティー〟まで行なわれているしまつでしてね。

〈ストーン〉内部――。

七つの空洞のすべて、隅々までに、闇と静寂が広がっていた。第一空洞では、ふたたび自転がはじまって以来、雲が固まり、闇をついて、雨がふりつづいていた。

各連絡孔は、真空のため完全な無音状態にあり、ときおり飛翔する小型モニターを除けば、動くものはいっさいない。

第二空洞では、大気が均衡をとりもどすとともに、かすかなうなりをあげて風が吹きわたりはじめていた。技師たちの努力にもかかわらず、ますます多くの窓が割れ、いくつかの建物は――メガもふくめて――崩れてしまっていた。

第三空洞も大きな被害を受けていたが、建物は崩れていなかった。冠毛シティのあちこちでいまなお機能している幻影窓の輝きは、ホタルの群れを思わせた。

第四空洞では、奔流に洗われた森と、湖から解き放たれた水とが、ついに和解するにいたった。かつて東西のブロックの要員たちが住んでいたコンパウンドは押し流され、その破片が湖に流れこみ、あるいは湖岸の木々に引っかかったりしていた。

〈ストーン〉――または〈ポテト〉――または〈冠毛〉の侵略・防衛線で命を落とした者たちは、パターンをばらばらにされ、人格を失い、〝神秘性〟をさらに不可解なものにしたまま、いまも墓のなかに横たわっている。

第五空洞は、地球の巨大な洞窟のように、暗黒と虚無に閉ざされ、滝と川の音が永遠に響くばかり。

第六空洞では、いまもその機構が休むことなく働きつづけていた。第七空洞を除き、プラズマチューブでいまも照らされているのは、この空洞だけだ。もっとも、そのプラズマチューブの光も、不安定で信頼性が低くなっている。

と、とうとうプラズマチューブがまたたき、ふっと消えた。だが、かまいはしない。すべての準備が整ったいま、〈冠毛〉の広大な内部を巡回しているのは、モニターだけなのだから。

第七空洞。ここではいまも、氷冠から吹きおろしてくるそよ風が、灌木の森をざわめかせている。風はかすかなうなりをあげて、置き去りにされたテントを吹きぬけ、カンバス地をはためかせていく。自転が再開されたとき、ポールの一本がはずれたため、テントの一画がへこんでいたが、それ以外の部分は、驚くほど影響を受けていない。

七つの爆破点のそばで、信管は辛抱強く待っていた。

アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドは、〈道〉のずっと奥まではいりこんでおり、第七空洞からは、高性能望遠鏡でも使わなければ見ることができなかった。しんと静まりかえった、広漠たる〈道〉は、どこまでも無限に、はてしなくつづいているように見える。これこそは、かつて人類が生みだした、もっとも壮大な創造物だ。

〈冠毛〉の外には、暗黒の宇宙空間と星々、月、そして、さんざんに打ちのめされ、焼きつくされたあげく、酷寒にあえぐ地球があった。地球には、小惑星の存在はおろか、救助がくるという可能性さえ考えている者はいないだろう。これほど徹底的な破滅と死に見舞われて、どこから救助の手がさしのべられるというのか？　歴史は彼らを見捨ててしまったのだ。

オーバーホールされたベックマン駆動のエンジンは、このドラマの一端をになうべく、準備を

完了していた。非物質化させ、収束ビームとして放射するための反応物質も、すでに蓄積されている。ビームの推力は、分離による反動を大きく削ぐはずだ。そして、ふたつの力の差を利用しながら、〈冠毛〉は移動を開始し、高度約一万キロで地球をめぐる、円軌道に乗る。

アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドは、第七空洞の南極に向かって、一見自殺的とも見える加速を開始した。両管区のなかでは――有体・影体ふくめて――二千九百万の人間が、自分たちが生きるか死ぬかを見きわめる瞬間を待つあいだ、こんなときに人間のしそうな、ありとあらゆる行為を行なっていた。

いっぽう、ふたつの管区の後方、〈道〉の五十万キロ奥のあたりでは、小型の防衛フローシップが、猛烈な減速を開始していた。よほどの負担がかかっているのだろう、その前方のフローが、紫とブルーに輝いている。アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドのあとについて、〈道〉の端からとびだすときには――そもそも、そんな離れ業が可能ならばだが――地球の公転速度まで減速していなければならないからだ。

第七空洞の壁面に埋めこまれた爆薬が、シンクロされた。

フローをつかんでいたアクシス・ソローとアクシス・ユークリッドのグリップが完全にはずれ、ふたつの巨大な円筒は、第七空洞の南極めがけて、時速四千キロ強、すなわち秒速十一キロメートルでつき進みだした。

信管は、マイクロ秒単位の正確さで、発火した。

第七空洞内部に、人間の耳には聞こえない音が響きわたった。何十億トンという岩と金属が、

七つの爆破点から〈冠毛〉の軸に向かって吹きとばされたのだ。同時に、真空の宇宙空間に面する外部には、巨大な亀裂がいくつも走った。
小惑星の北極のまわりで、塵と破片が巨大な円を描いてとびちり、つぎの瞬間、太陽よりもまばゆい白光が閃いた。光輝はしだいにうすれ、赤に、ついで紫に変化した。幅七十キロにおよぶ岩の帽子が、小惑星の本体から吹きとばされる。小惑星本体は、その帽子よりもゆっくりと後退した。と、ふたつの岩塊のあいだで、つかのま、宇宙空間にぽっかりと穴があいた。穴のなかはプラズマチューブの光で満たされており、穴自体はどこまでも無限につづいているかのようだ——。

そのなかから、小惑星本体のすぐあとを追うようにして、円錐形の牽引フィールドで破片をはじきとばしながら、アクシス・ソローとアクシス・ユークリッドがとびだしてきた。ふたつの円筒は、消えゆく光輝と回転する岩や金属のかけらを通して、〈冠毛〉のベックマン駆動のビームの通り道から離脱した。たちまち、ベックマン駆動が点火して、〈冠毛〉を地球周回軌道へと導きはじめた。
〈道〉はいまや、独立した領域となったのだ。宇宙空間の穴は、紫や深い暗緑色、カーマイン、藍色など、一千種類のさまざまな暗黒に包みこまれ、一千もの嵐よりすさまじい勢いで真空中に風を噴きだしながら、癒されはじめた。
しだいに穴が閉じていく。
永遠に、この宇宙から、みずからをしめだすために。

オルミイはシートにもたれかかり、目を閉じた。イェイツはそわそわと手をこすりあわせている。オイユ上院議員はいつもと変わらず冷静に見えたが、ラニアーは彼女の目の動きがおちつきなく、不安そうなのに気がついた。
プレシアント・オイユでさえわずかに神経質になり、オルミイが運を天にまかせているのであれば、おれには恐怖をいだく立派な権利があるな、とラニアーは思った。
「ほんとうに、うまくいくんだろうか?」とラニアーはたずねた。
「ぎりぎりのところで」目を閉じたまま、オルミイ。
ラニアーは船首に向きなおった。
あの七つの同時爆発が起きたとき、そのあまりにも強烈な輝きをさえぎるため、船首は不透明になっていた。が、船首もいまでは透明にもどっており、〈道〉の端がはっきり見えた。融けた岩塊と、噴出した水蒸気が凍ってできた筋の輝く環の内側に、ぽっかりと黒い円が口をあけている。
その円は、目の痛くなるような真珠色の虚無によって侵食され、収縮しつつあった。新たな〈道〉の終端だ。
と、縮みゆく黒い円のなかに、鈍く光る白い三日月が見えた。ラニアーは目をしばたたいた。月だ。
フローシップは、噴出する空気流にもまれて、くるくる回転している。真珠色の虚無は、ほとんどその仕事を完了していた。永遠とも思える時間が過ぎても、急速に縮みゆく暗黒と三日月にはいっこうにたどりつけない。

壁面から舞いあがった土くれが、いまや完成寸前の、真珠色の境界の手前で踊っていた。その境界が、月をおおい隠した。

「神よ」とラニアーはつぶやいた。そして、両手を握りしめ、目を閉じた。

エピローグ　四つのはじまり

〈大破滅〉後六年

1

〝そして王の馬、王の兵士はすべて……〟

先端のまるくなった飛行艇を駆って、荒廃した地点から地点へと地球のまわりをとびまわるハイネマンの心に、何度もこのことばが浮かんできた。〈大破滅〉の業火を生き延びた土地も、〈長い冬〉で荒廃していた。しばらくは、新ヘクサモンの叡知、技術、力をもってしても、地球を復興させることは不可能ではないか、と思われたほどだ。

だが、ラノアは――ハイネマンがラノアと結婚してから、もう四年になる――彼が最悪の状態でおちこみきっていたとき、こういって思いださせてくれた。「あの人たちは、わたしたちの手助けもなしにあそこまでやりとげたのよ――わたしたちが手を貸せば、必ず復興は早まるはずだわ」

だが、より明るい未来への希望と展望があっても、一日の調査飛行でまのあたりにしたゴールの遠さは、少しも減じられるわけではない。

インド、アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南アメリカの大半は、〈大破滅〉の傷が小さいことがわかった。北アメリカ、ソ連、ヨーロッパは、完膚なきまでに破壊しつくされていた。中国では、核の応酬で人口の四分の一が失われ、引きつづく〈長い冬〉で、さらに三分の二が餓死していた。中国人の餓死率が衰えたのは、軌道をめぐる管区からの援助がはじまった、つい最近になってからのことである。東南アジアは無政府状態におちいり、革命と虐殺が進行していた。同地域での荒廃ぶりは、悲惨の一語につきた。

灰燼、荒れはてた大地、じきに氷河となる、雪の降り積もった谷や丘、灰色にたれこめ、雪を降らせながら、〝休閑中〟の大地に黒々とした影を落とす重い雲。陸地は細菌とゴキブリとアリに占領され、一変した環境のなかで、かつて快適な家のなかで生活し、電気配線の基礎を知り、新聞を購読し、現実に関する偏狭な視点を固持しつつ、みずからを人類と呼んだ動物たちは、ちりぢりになって、細々と生きていくばかり……。

かつては、潤沢な思考をする余裕のあった存在の、それがなれのはてだ。

それは胸のいたむ光景だった。ハイネマンは、自分の同類——地球の技師や科学者や技術者たちが、悪魔の道具だったのではないかと思うようになった。心の奥で眠っていた信仰心が、強くよみがえったのはそのためだ。その境地に達するまで、ラノアをひどくいらだたせはしたが、いまは彼も、屈折した黙示録と天使と復活の日のヴィジョンのなかに、少なくとも慰めを見いだし、そこに意義を認め、運命と神の計画を捜しもとめるようになっていた。自分がかつて悪魔の下僕であったのなら、いまは——技師としての仕事はそのままに——地球を楽園へ変える天使たちの、使徒となろうではないか……。

ラノアは何度も何度も、こういって力づけてくれた。地球を破壊に導いたのはたしかに技師だが、完全な破壊から救ったのも技師ではないか、と。軌道プラットフォームや宇宙防衛システムがなかったなら、いまごろ地球からは、完全に生命が一掃されていたはずだ。NATOとソ連のプラットフォームがあったればこそ、かろうじて全ミサイルの四十パーセントを破壊することができたのではないか。

だが、それでは充分ではなかった。充分では……。

いったいどれだけの子供たちが、動物たちが、罪のない者たちが死んでいったことだろう——。

しかし、ラノアはいいかえす。口を持って生まれてきた者で、罪のない者などいはしないと……。

もちろん、ラノアが正しいときも多かった。

ハイネマンがいま仕えている主人たちは、完全ではなく、天使にはほど遠い。たしかに知的で、強力で、合理的ではある。彼らの指導者たちは、地球の指導者たちに特有の、無知も気まぐれも盲目性もない。だが、それでも彼らは、ひとりひとりに意見のちがいがあり、ときにそれは、きわめてはげしく衝突することがあった。

だからハイネマンは、きょうも妻とともに地球の空を飛びまわり、被害状況を記録しながら、大地が緑の草でおおわれ、花々が咲き、雪が融けて、空気から放射能が消える日を待ち焦がれるのだ。その日のために、一心不乱に働くのだ。

もちろん、新しい主人たちには忠誠をつくす。なぜなら、いろいろな意味で、ハイネマンは生まれ変わったからである。地球にもどってきた最初の日、彼は心臓発作で、いちど死んだのだ。

ラリー・ハイネマンはいま、ふたつめの体にはいっている。ラノアは、前の体よりもすてきだと請けあった。
それはすなおに受けいれられなかったが、前より快適になったことだけはたしかだった。
ニュージーランドにふたたび黄昏が訪れ、壮麗な夕陽が、遠く水平線にかかった。
頭上には、〈冠毛〉の巨大なビーコンが、はっきりと視認できる。そこからそれほど遠くないところには、高速で移動する光点が、〈冠毛〉とは逆方向に天を横切っていた。軌道をめぐる、アクシス・シティの半分だ。
タルシット・テントから出てきたギャリー・ラニアーは、キャンプの柵のところで、カレン・ラニアーが一団の牧夫たちと話しているのを見つけた。あの牧夫たちは、二週間前、子供たちにタルシット浄化を受けさせるため、キャンプにやってきた者たちだ。少なくとも彼らの子供たちは、怪物を生んだり、放射線による疾患で長く苦しむことはない。だが、おとなたちは、まだかなりの疑惑と不審にとりつかれている。宇宙人が攻めてきたという当初の噂と、空を飛びまわる悪魔の群れは、世界終末後の災厄を、とりわけ信憑性の高いものにしたのである。もっとも、カレンのせりだしてきた腹は——いまは妊娠六ヵ月だ——現地の者たちに、彼らが相手にしているのが本物の人間であるという認識を固めさせつつあった。
ラニアーはまだ、地球の生存者たちに、自分たちの物語を話してはいない。人々は、いまはなによりも、生き延びること、子供たちの健康のこと、羊のこと、街の人々の消息などしか考えられない状態なのだ。そんな彼らに荒唐無稽で複雑な話をしたところで、だれに消化できるだろ

う？

ラニアーはオーバーオールのポケットに両手をつっこみ、カレンが静かに牧夫たちと話すところを見つめた。地球にもどってきて以来、ラニアーはカレンといっしょに住むようになり、二年前に結婚した。ふたりの生活は忙しく、おたがいによき伴侶といえた。しかし……。

ラニアーはまだ、この十年のあいだにかかった種々の神経症から、完全には治りきっていなかった。少なくとも、心の傷が小さくなり、癒され、明るいところに出てきつつあり、快方に向かっているという感触はある。

だが、タルシット処置については、頑として肉体的な浄化しか受けようとしない。大気中の放射能による悪影響を除去するためには、少なくとも半年に一回はタルシット処置を受ける必要があるので、それは受ける。しかし、オルミイの勧めにもかかわらず、心のタルシット浄化を、彼はどうしても受けようとしなかった。つまるところ、ラニアーは徹底した個人主義者であって、それらの傷は、自分の力で治したかったのである。

あと二、三ヵ月もしたら、もしここから離れる余裕ができればだが、彼は妻とともに、ホフマンやオルミイ、そして可能ならばラリーやラノアとも合流する予定になっていた。いまの一時的な補助脳に新たなノウハウとデータを補充し、地球代表の有体下院議員となったローゼン・ガードナー、地球の上院議員代表となったプレシアント・オイユとともに、大気の浄化と生存者たちの再組織という、おおがかりな仕事に着手するのだ。

逆説的だが、ネイダー教徒たちはもうじき、いまだ救助の手の伸びていない地域で声をあげるはずの、彼らの教義の産声に手を貸すことになる。

ラニアーはもう、〈道〉のことも、過去のできごとのことも、めったに考えなくなっていた。彼の心は、より急を要する関心事でいっぱいだった。
そんな彼も、ときおり、しばし目を閉じることがある。だが、ふたたび目をあけた彼の前にはカレンがいる。その晴れやかな笑顔に迎えられて、ラニアーは彼女の黄色の髪に手を走らせる。死者の魂より遠くへいってしまった人を思い悩む余裕は、彼にはなかった。

2

航行歴一一八一年

オルミイは、アクシス・ユークリッドの公共観測室に立ち、両手をうしろに組んで、コジェノフスキーを待っていた。これからふたりで、地球の代理士長を務めるラーム・キクラに会いにいくのだ——地球の生存者たちの法的権利は、新ヘクサモンの最終的に強制してでも地球人にタルシット浄化を受けさせる義務に勝るものではない、と説得するために。頭のなかには、すでに議論の筋立ても用意してある。
生存者たちを、肉体面ではなく、精神面からも浄化しなければ、彼らの思考様式はいずれ内紛を引き起こし、数世紀のうちには、ふたたび地球を破滅させてしまうだろう。新ヘクサモンがすでに建築中の未来で生きていくためには、精神的に健全でなくてはならない。そもそも、〈大破滅〉につながったような、過去の病んだ思考を許しておく余地はない。

しかしオルミイは、ラーム・キクラを説得できるとは思っていなかった。彼女は、アメリカ憲法を解説した論文集、『フェデラリスト』に目を通して、古代の法に基づく判例を学んでいたからである。

いつものように遅れて、コジェノフスキーがやってきた。ふたりはそろって、しばらくのあいだ、眼下を動いていく大陸や海や雲を見つめていた。地平線は、成層圏に蓄積された塵と灰とで、いまなおオレンジと灰色に縁どられている。雲が割れて見える大地は、ほとんどの場所が雪に覆われている。

「きょうは、きみの彼女に悩まされそうかな?」〈技師〉がきいた。

「まちがいなく」とオルミイ。

コジェノフスキーはほほえんだ。「ひとつ告白しておこう。じつは近ごろ、もうひとりの女性のことでもずっと悩んでいるんだよ。もちろん、われわれが地球の再建に全力を傾けるべきであることは承知している……だが、きみにならわかるだろう、なぜわたしが悩んでいるかが」

オルミイはうなずいた。

「彼女はたぶん、成功しなかっただろう」とコジェノフスキーはいった。

「故郷には帰れなかったと?」

「まずむりだ。わたしはずっと、〈道〉理論を考えつづけていてね。わたしの一部は、いまもその問題を追いかけている。われわれは幾何学的スタックのことを、あまりにも理解していなかった。パトリシアが彼女の理論を語ったとき、あのときは正しいように思えたし……事実、かなりいい線をいっていたのだ。だが、彼女が故郷にもどれるほどには、正確ではなかった」

「すると、パトリシアはいまどこに？」
「それはわからない」コジェノフスキーは片手で自分の頭を指し、「だがこいつが、執拗に……この問題にとりくむようにといいはってね。わたしには、いやとはいえない。〈道〉理論はそれほどに魅力的なのだよ。この理論を考えることは、わたしにできるもっともすばらしい楽しみのひとつだ。そしておそらく、いつの日か、われわれはふたたび〈道〉を開くだろう」
「地球から？」
「われわれにはまだ、第六空洞がある。前のときほど難しい仕事ではあるまい。それに、今度はもっとうまくやれるだろう」
　オルミイはしばらく黙っていたが、ようやくのことで、「避けられないことかもしれませんね」といった。「しかし、いますぐネクサスに話すのは控えてください」
「もちろんだとも。これだけのことを経てきたのだ、われわれは——わたしは、いくらでも辛抱できるさ」〈技師〉の、見るものを射すくめるように鋭い、獲物にとびかかろうとする猫のような視線は、オルミイの首筋の毛をさかだたせた。
　これほど先祖がえり的な反応をしたのは、ここ何年来のことだろう。
「では、きみの代理士と一戦交えにいくとするか」コジェノフスキーがうながした。ふたりは地球の眺めに背を向け、エレベーターに乗り、シュリー・ラーム・キクラが待つ、ネクサスの控えの間に向かった。

3

パーヴェル・ミルスキー：その個人記録

わたしの記憶が正しければ――そして、われわれの旅による歪曲効果がそれほど複雑なものでなければ――きょうはわたしの、三十二歳の誕生日だ。

わたしは中央シティに居を定め、ゲッシェルの生活様式を受けいれた。人格のコピーは毎週行なっているし、日々何十人という市民たちとも知己になっている。その多くは、わたしと親交を持ちたいという者ばかりだ。

それに、わたしは働いている。歴史を研究しているのだ。ゲッシェルの歴史研究者たちは、わたしのものの見方と能力が、過去を解釈するための、独特のレンズになってくれるのではないかと期待しているようだ。ロドジェンスキーも役にたっていた。彼はわたしよりずっと完璧に適応していて、つぎに生まれ変わるときには、自分用にあつらえた新形態のボディにはいろうと計画しているくらいだ。

ジョーゼフ・リムスカヤにはよく会うが、彼はいまだにむっつりして、あまり元気がない。きっとホームシックなのだろう。彼はいっしょにくるべきではなかったのだ。じきにタルシット治療を受けるとはいっているが、前にもそういっていたので、あてにはなるまい。もうひとりのアメリカ人、ベリル・ウォリスとは、めったに会う機会がない。彼女は観測班に配属されている。これはユニークで、重要な仕事だ。たぶん彼女は、なにかの役にたっているのではなくて、マスコットにでもなっているにちがいない。もっともこれは、わたしの思いこみかもしれないが。

補助脳はすばらしい驚異を味わわせてくれる。わたしはけっして、インテリという人種ではなかった。哲学など、退屈でしかたがなかった。疑問、絶対的な意味、現実などは、無意味なものと思っていた。想像力の羽を大きくはばたかせるような能力など、これっぱかりもなかった。だが、補助脳のおかげで、それはすっかり変わってしまった。わたしは一気に十歩を踏みだして、べつの人間に生まれ変わったのだ。

亜光速に到達して以来、われわれはとほうもない距離を旅してきた。いまなにが起こっているのかわかる者は、ゲッシェルにさえひとりもいまい。〈道〉はひどく複雑だ。〈道〉を創造した者たちでさえ、その可能性のすべてを予測することはできなかっただろう。

われわれはいま、異様な〈道〉のなかを通過している。その局部的な性質が、亜光速によるアクシス・シティの通過の衝撃波で変わってしまったのだ。ここには直径がなく、境界もない。質量を持った物体は、われわれのコースから半径二万キロ以上の空域外では存在できないのだ。フロー、もしくは特異線は、三カ月前に消滅してしまった。新たに創造された数々の粒子群の脈動となって、消え失せたのだ。その粒子の一部については、ゲッシェルにさえいまだに正体がわかっていない。

われわれはすでに、さまざまな世界線を包含する無数の外部宇宙の領域からはずれてしまった。たとえここで停止し、〝外へ〟ゲートを開いたとしても、それがどんなものであれ、そこにあるのは物質のない、おそらくは形も秩序もない領域だろう。おなじみのものが少しでも見られるとは、まったく考えられない。

〈道〉には、平行して存在する無数の〈道〉があり、そのひとつひとつがひとつの平行世界線の

はじまりであって、さらにその世界線の外へも通じている。最近になるまで、〈道〉の研究者たちには、平行して存在する無数の〈道〉が、積み重なっているのか並列になっているのか、それどころか実在すると考えていいかどうかさえ曖昧だった。しかしわれわれの〈道〉が、相当数の平行世界線を——おそらくはすべてを——包含している以上、ほかにもまだ〈道〉があるかもしれないではないか？

〈道〉内を亜光速で旅することによって、われわれはこれらの疑問に答えを出すと同時に、新たなる疑問を呼び起こしてしまった。われわれは、四次元を超えたレベルで〈道〉の幾何学を歪めてしまったのだ。つまり、〈道〉を五次元的に圧縮することで、平行する無数の〈道〉をたばねてしまったのである。〈道〉と〈道〉との境界は広範な周波数にわたって透明になったため、いまは他の〈道〉の形状を観測することができる。また、ゲートを解放する〈鎖骨〉に似た装置を用いて、どの〈道〉を調査すべきか選ぶこともできる。ベリル・ウォリスがいま従事しているのは、この平行する〈道〉を観測する仕事だ。

われわれにはまた、ほかの〈道〉の知性たちを見ることも（瞬間的にだが、ときおり連絡をとることも）できる。

かくして、人類の創ったこの〈道〉により、その無限に存在する世界線は、無限の組みあわせでたがいに連絡がとりあえるようになった。ゲッシェルの研究者たちは、ほかの〈道〉の——ほかの世界線の——無限の集合体に、調査隊を派遣する計画も立てているが、補助脳の助けを借りてさえ、わたしには彼らの論じていることが、さっぱり理解できない。

ともかく、わたしにわかるのはこれだけだ。すでに他の〈道〉のなかでは、何千という、まっ

たく異なる宇宙の生物たちが交易関係を樹立し、ときには情報だけを、ときには性質の異なる時空を取り引きしているにちがいない。ふたつの性質の異なる宇宙において、そのどちらでも存在できるようなものはありうるだろうか？　そのなにかこそは、エネルギーと呼ばれるものなのか？

リムスカヤは、あいかわらずふさぎこんで研究をつづけるうちに、この種の研究に重大な貢献をするにいたった。彼は情報の定義を発見したと信じこんでいる。時間型次元（時間そのものをべつにすれば、たとえば世界線を分割する第五次元がそうだ）、および空間型次元のすべてにおいて存在するなにものか、というのがその定義だ。時空が相互に作用するところ、必ず情報があり、情報が知識として整理され、その知識が応用されるところ、必ず知性が存在するというわけである。

この古代人の日誌を読んだ者に、われわれが抽象的なことばかりにかまけていると思われてもこまるので、このことも書いておこう。わたしはいま、みずからの主要な性格を進んで変えようとする者が得ることのできる、豊かな感情の宝庫を発見しつつある。再構成された人間の心が獲得することのできる、古代人の思考には存在しえなかったさまざまな感情が、ここにはあるのだ……。

たとえば、―*―という感情は、性的交接と知的喜びの中間にあるなにか、としか表現できないものである。思考とセックスするとでもいえばいいのだろうか。また、&&という感情は、苦しみの真の裏返しの感情で、〝喜び〟ではなく、心の傷が治癒され、心が成長し、変化することの〝予告〟をさす。〈＋〉は、いままで見つかったもっとも複雑な感情で、意識的にゲシュタ

ルトの変化に耐え、考え、生きていく上で、広大な範囲におよぶ可能性を体験した者のみが感じられる感情だ。
わたしはまだ、人間の愛のさまざまな種類を味わいはじめたにすぎない。人格は、ここでは孤独におちいることがない。わたしは独自性を保ちながら、巨大な人格集合体に属することができる……わたしはなにひとつ失うことなく、数かぎりない人間の愛情を味わうことができるのだ。
われわれが旅してきた距離を測ろうとすることに、なんの意味があるだろう？　かつてのパーヴェル・ミルスキーの人格がそれを知ったところで、なんの役にたとう？　まもなくわたしは、ありったけの勇気をかき集めて、シティ・メモリーの拡張人格群に加わろうと思う。
しかし、こういったことをすべて把握したいまも、わたしは嘆く。失われたわたしの一部を懐かしみ、帰れない故郷を、いまや二重の意味でもどることのできなくなった故郷を想って泣く。だがその涙は、心の奥底に、タルシットの治療でさえおいそれとは捜しだせない心の深部に……〝神秘性〟として知られる、手を加えることの許されてない領域にでも埋めてしまおう。このような形で、いまなお自分がロシア人であることを感じるとは、なんという皮肉だろうか。そして、わたしの一部が存在するかぎり、その一部はロシア人でありつづけるのだ！
かつてのパーヴェル・ミルスキーと同じ〝神秘性〟を共有するがゆえに、わたしはそこに連続性を感じる。そう、連続性を……。
星々への憧憬はもとより、それ以上のものを。
キエフにいた子供のころ（これはわたしの記憶のなかのはっきりしない部分なので、断言はできないが）、わたしは義理の父にたずねたことがある。労働者の天国が実現したら、みんなはい

くつまで生きるの、と。コンピューター技術者で、想像力の豊かだった父は、こう答えたものだ。
「たぶん、その人が望むだけ生きるだろう。十億年くらいかな」
「十億年って、どれくらい?」
「かなり長い時間だよ。ひとつの時代、永遠とでもいうのかな。最初の生命が誕生して、すべての生命が滅びてしまうのに充分な時間だ。なかにはそれを、エオン、と呼ぶ者もいる」
のちにわたしは知った。地質学用語で、一エオンとは、まさしく十億年のことであることを。しかしギリシア人は、このことばにそれほど厳密な意味を与えたわけではない。彼らはそれを、永遠——十億年よりはるかに長い、宇宙の寿命を指すことばとして用いたのだ。それはまた、神の時間周期を擬人化したことばでもあった。
わたしはすでに、労働者の天国分の年月を越えて生きている。わたしの属した宇宙は、すでに終焉を迎えた。これからも、数えきれない宇宙の終焉を超えて生きつづけるだろう。
愛するとうさん。どうやらぼくは、神々自身よりも長く生きつづけそうです……。
真の永劫(エオン)を。
学ぶべきことはたくさんある。迎えるべき変化はたくさんある。日々、わたしは深呼吸をしながら、わたしの選択を数え、いかに自分が幸運であったかを悟るだろう(リムスカヤを納得させることさえできるなら!　かわいそうな男だ)。
わたしはまさに、自由なのだ。

4

アレクサンドロス暦二三二三年／エイジプトス

若き女王、クレオパトラ二十一世は、たったいま、長く退屈な謁見をおえたところだった。オクシリンコス州議会（ノモスズ・ブーリー）から陶片追放されてきた五人の議員たちに、四時間にわたってえんえんと窮状を訴えられたのだ。結局、女王のもっとも信頼する顧問の判断により、彼らの訴えを聞きいれても益なしとして、彼女は冷厳な笑みを浮かべ、五人を放逐した。そのさい、釘を刺すこともわすれなかった。エイジプトスの外では、いかなる政府にもいっさい不満を漏らしてはならぬ。もし漏らせば、おまえたちはアレクサンドリア帝国（オイクメーニ）から追放し、東西の蛮国へ、最悪の場合にはラティウムへ流してしまうぞ、と。

週に三度、何千という陳情者のなかから顧問たちによって選ばれた者に、クレオパトラは謁見する。これがおおむねショーであり、あらかじめ裁定が決められているのは周知の事実だ。父王の時代、オイクメーニ議会に課せられた王権の制限が、どうにも女王にはおもしろくないが、それを飲まなければ追放されてしまうのだからしかたがない。追放された十八歳の女王には、オイクメーニのほかにいくところとてない。この五百年のうちに、世の中はなんと変わってしまったことだろう！

しかしクレオパトラは、つぎの訪問者を楽しみにしていた。ロドス島の神殿の、女司祭にして学者の話は、何度も耳にしている。そのオイクメーニへの出現のしかた、またここ半世紀にあげた数々の業績、いずれも伝説に包まれた女性だ。だが、女王はいまだ、女司祭と会ったことがな

い。

学者・パトリキアは、二日前にロドス島を出発し、アレクサンドリアのすぐ西にあるラコティス空港に到着したのち、謁見の手配が整うまで、ムーサ神殿の特別室に待機していたという。その二日のあいだに、学者は事実上強制的に、アレクサンドロスやその後継者のピラミドンに連れていかれ、アレクサンドリア・オイクメーニ草創期の諸王の、黄金に包まれたミイラたちを見学し（さぞかし退屈だったことだろう、とクレオパトラは思った）、ついで周囲をとりまくその後継者たちのピラミッドや墓石を見せられたという。報告では、学者は見学をおおいに楽しみ、そのようすは記録されて、オイクメーニ全土八十五州に放送されるということだった。

伝令が到着し、パトリキアさまはただいまロケイアの丘にさしかかられました、まもなく宮殿にまいられますと告げた。顧問たちは王の間から退出し、クレオパトラは彼女が〝蠅〟と呼ぶ者たちにとりかこまれた。蠅、すなわち彼女の額の汗をぬぐい、頬や鼻に化粧をし、黄金の玉座のまわりに彼女のローブをかけならべる、式部官や侍女たちのことである。玉座の向かい側の壁近くには、半分は影のなか、半分は陽光に照らされて、近衛の重装歩兵たちが立ちならんでいる。近衛兵たちが、入口をはさんで二列に分かれたときが、女王らしい態度をとり、学者を出迎える心がまえをするべきときだ。

ほどなく、近衛兵たちが二列に分かれ、式部官たちが仰々しい儀式をはじめた。

時は旧暦で狼星月四日、新暦でアルキメデス月二十七日。

クレオパトラは辛抱強く、杉の——この杉は、イオウデイア、ときにネア・フェニキアと呼ばれる土地の、こうるさい僧侶団から献上されたものだ——玉座にすわって待った。手にしたメタ

スキト製のカップには、ガリア産の発泡水が満たされている。女王はこのようにして、領内の諸州はもとより、周囲の朝貢諸国や友邦諸国から献上された品々を、なるべく日常的に使うようにしているのである。そうすれば、献上する者たちも名誉に思うし、臣民たちも、伝統ある諸帝国のなかでも最古の帝国に仕えることを、誇りに思ってくれるからだ。学者もまた、クレオパトラが務めをはたしているところを見て、好感を持つだろう。じつをいうと、若い女王には、ほかにほとんどすることがないだけだった。いままでは、ほんとうに重要な決定を行なっているのは、アテナイ方式にしたがって、議会と代議員の評議会なのだから。

テオトコポロスが彫刻を施した巨大なブロンズの扉が、大きく左右に開き、謁見式ははじまった。クレオパトラは、どんどん流れこんでくる廷臣や式部官やこざかしい政治家どもには目もくれなかった。女王の目は、学者・パトリキアがはいってくるなり、たちどころにその姿を認めた。パトリキアは、すでに中年に達したふたりの息子たちに、両脇からかかえられるようにして歩いてきた。

女司祭がまとっているのは、シンプルでエレガントな、チンチンの黒いシルクのガウンだった。片方の胸の上には星が、もう片方の上には月があしらわれている。髪は長く、いまなおふさふさとして、黒い。七十四歳という高齢にもかかわらず、顔だちは若々しく、黒い目はしっかりとして、見る者を射ぬくような光をたたえている。クレオパトラはなかなかその目をまともに覗きこむことができなかった。その目は危険で、刺激的なように見えた。

「ようこそ」すべてのセレモニーをわざと省いて、女王はいった。「そこへおすわりなさい。話しあうことがあると聞いていています」

「おお、そうでございます、たしかにございますとも、お美しい女王陛下」学者はそういうと、息子たちの腕を離れ、片手で長いガウンの縁をたくしあげながら、しっかりした足どりで玉座に近づいてきた。じっさい彼女は、矍鑠（かくしゃく）としていた。息子たちを神殿にとどめているのは、自分が手を借りるためではなく、息子たちのためにちがいない。当節、オイクメーニでは、職を見つけるのがなかなかたいへんなのだ。

パトリキアは、女王の向かいに体ひとつ分ほど離してすえられた、レースで覆われた椅子に腰をおろし、興奮に目を輝かせて、クレオパトラに顔をあげた。

「あなたのすばらしい道具の一部も、持参していらしたとか。わたくしにそれを見せてくださるばかりか、その用途も教えてくださるそうですね」

「陛下さえおよろしければ……？」

「ぜひに」

パトリキアが手で合図すると、ふたりの学生たちは、横幅のある、薄い木の箱を運んできた。クレオパトラには、その木材がすぐにわかった。はるばる大西洋の彼方から運ばれてきた、ネア・カルカヘドン産のハトノメカエデだ。彼（か）の地の革命は、その後どうなったのだろう、と女王は思った。沿岸地帯が封鎖されているため、ほとんどニュースが伝わってこないのだ。

女司祭は息子たちに、銀を象嵌した真鍮の大きな丸テーブルの上へ、その箱を置くように命じた。「女王陛下にあらせられましては、わたくしの身の上をごぞんじでございましょうか……？」

クレオパトラはうなずき、ほほえみを浮かべた。「あなたが猛々しき星に追われて空から落ち

てきたことと、このガイアに生を受けた方でないということは」
「それに、わたくしが持ってまいりましたものについても……?」まるでクレオパトラの教師のような口調で、パトリキアはうながした。女王は気にしなかった。教えを受け、ものを学ぶことは、女王の楽しみである。じっさいクレオパトラは、いままでの人生のほとんどを、知識を身につけ、自分の領土の内容と広さを学び、いろいろなことばを覚えることで過ごしてきたのだ。
「あなたは驚くべき道具を持っていらしたのでしたね。わたくしたちの世界には、対応するものがない道具とか。もちろん知っていますとも。あなたに関する物語は、つとに知られていますから」
「それでは、これより、わたくしだけが知ることをお話し申しあげましょう」とパトリキアはいった。それから王の間全体をちらりと見やり、例の鋭い目を、若き女王にもどした。クレオパトラはその意味を理解し、うなずいた。
「他聞をはばかる話があります。セレモニーはとりやめとし、わたくしたちはわたくしの部屋で話すことにします」
王の間はたちまち人がいなくなった。クレオパトラはくだけたしぐさで重いローブを脱ぎ捨てると、肩から軽い絹のマントをはおった。ふたりの近衛兵と学者のふたりの息子だけをともなって、女性たちはゆっくりと、女王の部屋に歩いていった。部屋には、数々の珍味と、コス産のワインを満たしたクリスタルのゴブレットが用意されていて、学者は女王とともに食事をとるという、破格の待遇を受けた。
食事がおわると、ふたりはパトリキアの息子たちに食事の席を譲って部屋の一画にいき、レー

スで飾りたてられた椅子でくつろいだ。話が外に聞こえないよう、式部官たちがふたりのまわりを御簾で囲う。

ここにいたって、パトリキアはようやく、木の箱のふたをあけた。そこには、ティリアン紫に染められたフエルトの上に——フエルトはプリドン産、染料はイオウデイア産だ——銀とガラスでできたもの、手のひらほどの大きさの平らなもの、それよりわずかに小さくて同じ形をしたもの、一対の把手がつきだしたサドル型のものが、ひとつずつならべられていた。

これらは、プトレマイオス・ソスター将軍の収集物と同じくらい有名な品々で、とりわけ学者や哲学者のあいだでは、渇望の的となっている。かつてこれを目にした者はひとりとしていない。父王や母妃でさえ見たことがないほどのしろものである。

クレオパトラは、好奇心もあらわに、しげしげとそれらを見つめた。「では、お話をうかがいましょう」

「これを用いれば」と、パトリキアは小さいほうの平らな道具を指さして、「わたくしは時間と空間の特性を測ることができます。何年も前、夫が他界して神殿に身を寄せたとき、あそこの技術官たちが新しいバッテリーを作ってくれましたので、ふたたびこれらの道具が使えるようになったのです」

「その者たちには、わたくしからたっぷりと褒美を与えましょう」とクレオパトラ。パトリキアはにっこりとほほえみ、そんなことはどうでもいいといわんばかりに、手をふった。「陛下の世界の哲学と技術は、分野にもよりますが、わたくしの世界のものほど進んではおりません——かなり近いところまできてはおりますけれど。しかしここには、すばらしい数学者たちと、すばら

しい天文学者たちがいます。おかげでわたくしの研究は、おおいにはかどりました」
「それはよかった」
「それから……」パトリキアはつぎに、把手のついたものを箱からとりあげ、「この道具は、よその世界の者が、この世界に――このガイアに通じる道を開こうとしたとき、それと教えてくれるものでございます。向こうの活動を探知し、わたくしに教えてくれるのです」
「それには、ほかの機能はないのですか?」すでに自分がすっかり話に魅せられていることに気づきながら、クレオパトラはたずねた。
「ございません。この時代では――そしてここでは」
女王の驚いたことに、老いた女司祭の目には、涙が浮かんでいた。「わたくしはいちども、わたくしの夢を捨てたことがありませんでした」とパトリキアはつづけた。「それに、希望を捨てたことも。ですが、女王陛下、わたくしももはや年老い、感覚もかつての鋭さを失ってしまいました……」彼女はいったん立ちあがり、深々と吐息をついてから、ふたたびすわって、「それでも、いまは確信がございます。この装置によって、わたくしはたしかな手応えを感じたのです」
「なんの手応えを?」
「その目的は、またその場所はわかりませんが、この世界には、通路が開かれています。この装置がその存在を感じておりますし、わたくしもやはり感じております。このガイアのどこかに、女王陛下、それはあるのです。死ぬ前に、わたくしはなんとかしてその通路を見つけだし、わたくしの夢を実現させる可能性が少しでもあるかどうか、たしかめたい……」
「通路?　どんなものです?」

しょう」

「わたくしがやってきたところへ通じる門です。彼らがふたたび、わたくしの門を開いたのかもしれません。さもなければ——だれかがまったく独自に、星々へいたる新たな道を創造したのでしょう」

クレオパトラはふと、引っかかるものを感じた。百二十世代にわたって連綿とつづいてきたマケドニア王朝の血は、彼女のなかでも眠っているわけではない。「あなたの世界の人々は、平和的で友好的なのでしょうか？」

女司祭の目が、つかのま遠いところを見る目つきになり、かすみがかかったようになった。

「わかりません。たぶん、そうでしょう。たとえどうあれ、それでもわたくしはお願いいたします。陛下の持てるあらゆる手段をつくして、その道を、その門を、どうかお捜しいただけますまいか……」

クレオパトラは眉をひそめ、女司祭の顔がもっとよく見えるようにと、前に身を乗りだした。それから、女司祭の皺の寄った片手を、両手で包みこんだ。

「その道——門とやらから、わたくしたちの世界は利益を得られるでしょうか？」

「それはもう」とパトリキア。「わたくしのごときは、その門の向こうに広がる驚異の、ごくごくささやかな一例にすぎません」

クレオパトラはふたたび青蛾をひそめ、しばらく考えこんだ。オイクメーニはたくさんの問題をかかえているが、顧問たちが指摘するところによれば、その一部は、衰微の縁に瀕した古い文明がかかえる、自力では打ち勝ちがたい問題だという。クレオパトラにはそんなことは——心からは——信じられなかったが、その考えは彼女に不安をいだかせてもいた。航空機と無線の現代

にあってさえ、どこかにまだ、この窮状から帝国を救ってくれる、新たなる知識、新たなる驚異があるにちがいない。
「それは遠くの領土――わたくしたちが交易を行ない、新たな知識が得られる世界への近道なのですね？」
パトリキアはほほえんだ。「さすがに女王陛下、飲みこみがお早くていらっしゃる」
「では、捜索させましょう。すべての同盟国、友邦諸国にも、それを捜しだすように通知を出しましょう」
「それは非常に小さくて、すぐには見つからないかもしれません。おそらくそれは試験的ゲートでしょうし、だとすれば、幅は人の腕の長さほどしかないかもしれません」
「徹底的に捜索させます」とクレオパトラは請け負った。「あなたの案内があれば、捜索隊は必ずやその門を見つけだせるはず」
パトリキアは目をすがめ、傲慢ともいえるほどの疑いのまなざしを女王に向けた。「わたくしは長いあいだ、気のふれた老女と見られてまいりました――これらの驚異を持っていてさえも」と、箱の上に片手を置いて、「陛下はわたくしを、お信じになりますか？」
「もちろんです――アレクサンドロス・エジプトの女王、およびマケドニア王朝の名にかけて」
クレオパトラは言下に答えた。彼女はこの女司祭を信じたかった。宮廷での暮らしは、ここ数年、退屈で退屈でしかたがなくなっている。それに女王にも、まだまだ権力をふるえる余地は残っていた。とくに、政治的体裁と国家的目標に関することはそうだ。門とやらの捜索は、ぴったりその範疇に収まってくれる。

「ありがとうぞんじます」とパトリキアはいった。「わたくしの夫でさえ——夫は、それはすばらしい漁師でしたけれど——わたくしを心から信じてはくれませんでした……。でもあの人は、わたくしのことを気づかってくれましたし、この人生だけを生きろ、他生の夢など見てはならぬと……」

「制約はきらいです」と、語気を強めてクレオパトラ。「それで、その通路を見つけたら、どうするのです？」

パトリキアは大きく目を見開き、

「故郷に帰るのですよ」といった。「それがいくらむだな行為であろうとも、わたくしはやっと、家にもどれるのです」

「むろんそれは、わたくしたちのための仕事が完了してからのことでしょうね」

「もちろんでございますとも。それはなににも増して優先いたします」

「けっこう。では、そのようにとりはからいましょう」

クレオパトラは顧問たちを呼び、これが帝国の命令であって、いなやは許されぬ旨、きつく念を押した上で、捜索開始の勅令を伝えた。

「ありがとうございます、女王陛下」王の間にゆっくりと歩いてもどりながら、女司祭はいった。王の間にもどると、クレオパトラは、テオトコポロスの扉のあいだから、パトリキアが退出していくのを見送った。捜索が開始されるまで、女司祭はしばし、神殿にもどっているのだ。ついで女王は、目を閉じて、想像してみようとした……。

老女の故郷。あれほどの女性がきたのは、どんなところなのだろう？　きらめく塔が林立し、

強大な城砦が偉容を誇る場所。そこの人々は、わたしの知っている男女たちよりも、ずっと神々や悪魔に近いのだろう。あの小柄で、力強い意志をひめた学者のような女性を生みだせるのは、そんな場所でしかありえない。

「なんて奇妙なのかしら」玉座にもどりながら、クレオパトラはつぶやいた。重いローブが、ふたたび肩にかけられる。が、彼女はそれにもかまわず、身がうち震えるほどの興奮を覚えていた。

「でも、なんとすてきな……」

「自分がどこにいるのかを承知していないかぎり、自分が何者かはわからない」

——ウェンデル・ベアリー

おわりに

本書のように複雑な本は、とうていひとりの力だけで書くことはできない。だが、ありがたいことに、わたしにはみずから進んで、それも熱心に、助力してくださる方々がいた。この場をお借りして、それらの方方に、心からの感謝を捧げたい。リック・スターンバック、ラルフ・クーパー、ジョン・S・ルイス、ルイス・A・ダマリオ、デイヴィッド・ブリン、アンソニー&ティナ・チョン、クレイグ・カストン、合衆国海軍少佐パトリック・ギャレット、もと合衆国海軍少佐デイル・F・ベア、アメリカの宇宙政策に関する市民顧問評議会、そしてもちろん、アストリッド(順不同)。

もちろん、あやまちや誤解は残っているだろうが、それはわたしの責任である。

解　説

山岸　真

　あるＳＦ大会のパネルに出席したグレッグ・ベアが、聴衆にこう問いかけた。
「この中で、いまから五十年後の人間の外見が、現在のわれわれとそこそこ同じだと思っている人はどれくらいいる？」
　いっせいに手をあげるＳＦファンにむかって、ベアは言った。
「きみたちは、みんな間違っている」
　こんなエピソードがあるかと思うと、ベアは自分の短篇集のまえがきで、おおよそ次のような意味のことを書いてもいる。
「ぼくは未来について書くが、予言者じゃないし、その時代を生きることもないだろう。しかし、書いているあいだは、ぼくは不死なのだ」
　最初のエピソードが、〝変化の文学〟とも言われるＳＦの本質をベアがシリアスかつラディカルにとらえていることを語っているとするなら、後者はそれと同一人物のものとは思えないような能天気な発言ではある。なにか、高い知能を誇りながら、ことＳＦの話となると無邪気な啓蒙

者に変じてしまうアジモフを連想させなくもない。この正反対ともみえるSFへのアプローチのしかたは、しかしかえって、ベアがSFの魅力を知りつくした作家であることをうかがわせてくれる。

さて、本書は*Eon*（Bluejay Books, 1985）の全訳である。『ブラッド・ミュージック』につづいて発表されたこの作品は、そうしたSFの魅力をよく知る作家が、絶好調の波にのって書いたものらしく、SFの楽しさがぎっしり詰まった作品となっている。

たとえば、本書のメインの舞台となる〈石（ストーン）〉。冒頭で、地球に接近する謎の巨大物体として登場したこの小惑星は、ほどなく、案の定、回転する巨大な人工世界であることが明らかにされる。以前どなたかが書いていたが、この〝回転する巨大な人工世界〟というのはSFファンを魅了してやまない設定なのだそうだ。それだけにさまざまなヴァリエーションが書かれているが、本書の設定からまっさきに連想されるのは、なんといってもクラークの『宇宙のランデヴー』である。ベア自身それを意識していることは、クラークの作品の大きなポイントであった加速度への言及のしかた（上巻九六ページ）などに見てとることができる。ともあれ、〝回転する巨大な人工世界〟という設定は、それ自体のイメージの壮大さだけではなく、回転の動的（映像的）なイメージや、それを造った超文明への畏怖の念のようなものが一体となって、つねにSFファンを魅了するのだろう。本書がその魅力をいかにうまくとらえているかは、読めばわかるとおりである。

物語の後半に登場し、もうひとつのメイン舞台となるアクシス・シティの設定もまた、SFファンの泣きどころをついてくる。とくに大きいのが、シティ・メモリーに何千万もの人のパーソナリティが眠っているという部分だ。人間存在の記号化・無機質化あるいは人間と機械の融合、

また逆に言えば肉体を伴わない生。こうした設定は、そのアモラルさと、そのヴィジョンがはらむ可能性のゆえに、現代のサイバーパンクにいたるまで、SF的想像力をもっとも刺激するもののひとつでありつづけてきた。ここでまた連想される作品をあげるなら、やはりクラークの『都市と星』だろうか。

はじめに、ベアのSFへの接しかたがアジモフを思わせるなどと言ったが、こと作品についてはクラークを連想させることが多いようだ。『ブラッド・ミュージック』が『幼年期の終り』としばしば比較されるのはまえにも書いたことがある。さしずめ本書は『宇宙のランデヴー』の巨大異星船ラーマに乗って、『都市と星』の超未来都市ダイアスパーが近未来の地球へやってくる、みたいな設定で幕をあける話ということだろう。もっとも、その後の物語はまったく異なった展開をみせるが、その分いっそう、本書はベアがこの偉大な先輩作家に捧げたオマージュだという気もしてくる（アジモフにクラークときて、しかもベアの義父っていうのはアンダースンなんだよね。……どうでもいいことだけど）。

これだけでも、ベアが従来のSFのパターンを熟知していることがわかる。しかもこれはまだ、文字どおりの序の口（イントロ）でしかない。つづく壮大な展開は、SFファンをさらに泣かせてくれるはずだ。作品のタイトルに、壮大ももうこの上はないくらいの言葉――〝永劫（エオン）〟を持ってきたのは、決してこけおどしではないのである。

ところで、ベアがSFの魅力を知りつくしているというのは、なにもSF的な大道具や小道具にかぎった話ではない。たとえば次の描写。

「なにしろ、雲の蔽いの裂け目から見える反対側の床の眺めは、距離からいって、大気圏に再突

入するシャトルの窓からの眺めと変わらないのだ」（上巻一一四ページ）

これは〈ストーン〉内部の円筒世界の描写で、その直径に言及したくだりだが、それを一種のスペース・コロニーである〈ストーン〉の内壁に立った人間の視野で、つまり高さとして描いているわけだ。ぼくなど原書で読んだときも、今回翻訳で読みなおしたときも、それまで巨大な世界と頭で理解していたものが、このくだりにきて感覚的に、それこそ圧倒的なスケールで迫ってくるのを感じて、はっとさせられた。軌道を周回するシャトルを上から（えーと、つまり、カメラと地球のあいだにシャトルをおくかたち）とらえた映像、とりわけそこに鳥瞰される地球の姿は、メディアをとおしておなじみになっている。それをこんな風にSFの（フィクションとしての）感動に結びつけたベアの現代的なSF感覚には、感心するほかない。ほかにも、とくに〈ストーン〉内部の描写にはみごとな部分が多いが、これ以上説明するのは蛇足だろう。

いま現代的なSFという言葉を使ったけれど、そうなるとやっぱり触れずにはおけないのがサイバーパンクである。本書では、ハイテクやポップ・カルチャーなどのサイバーパンクっぽい要素は、少なくとも前面には出てこない。では本書が、SFらしさにあふれたといっても、これまでのSFで見慣れた光景ばかりの、おとなしいSFかというと、これもそうではない。幾何学的シュールとでも呼びたいような〈道(ウェイ)〉なるものが、本書後半のキイとなってくるが、それに関する記述には、ルーディ・ラッカーばりにスゴイとしかいいようのないものがいろいろある——だって、超空間の床に文字どおり鍵をさしこんで、異次元への文字どおりの入口を開いたりするんだよ（ちなみに〈道〉は、基本的にはきわめてハードなアイデアである、と思う）。

また、例のシティ・メモリーに関しても、人間にはいくら記号化しようとしてもしきれない

〝神秘性〟が残ってしまうという設定が出てくる。この〝冗長度〟をもって人間の定義としたり、そうしたあいまいさを許すあたりにまた、ベアのすぐれて現代的なSF性を感じるのはぼくのひいきめではあるまい。このへんは、先の〝幾何学的シュール〟とあわせて、(ベアがサイバーパンクのかわりに好んで使う)ニューロマンティックスという言葉であらわすにふさわしい。『ブラッド・ミュージック』で、ベアは、ギブスンやスターリングとはまた違った現代的なSFの書き手として高い評価を得た。本書は、SFの楽しさを満喫させてくれるとともに、そうしたベアの評価をいっそう確かなものにすることだろう。

ベアは一九五一年、カリフォルニアの生まれ。現在までに十冊の著書があり、本書は八冊目の長篇にあたる。詳しい経歴は『ブラッド・ミュージック』の解説を参照していただきたい。イラストレーターとしてもプロ級の腕前で、本書のあちこちですばらしくヴィジュアルな描写が見られるのは、そのためだろう。

この作品にも『ブラッド・ミュージック』と同じく、作者自身への関心をそそる部分がいろいろある。たとえば、ネイダー教徒とか、例のバックミンスター・フラーの影響だろう〈ストーン〉内部やアクシス・シティの景観とかは、カリフォルニア的な、あるいは七〇年代的なものに根ざした感性が背後にあることを感じさせずにはおかない。また、アメリカSF界でも活発な議論がたたかわされている宇宙軍備(スター・ウォーズ)に、ベアも深い関心を持っていることが、本書の随所にみられる言及からうかがえる。あと、SFファンらしいお遊びというのもいろいろあって、歴史の本の著者名として出てくるアブラム・デーモン・ファーマー。何ですか、あれは。こういう遊びを見

るにつけ、SFファンどうしの親しみを感じてしまうとともに、ベアがどんなSF歴の持主なのか、ちょっと聞いてみたいと思ったりするのだ。
それから、より野心作と呼ぶにふさわしい『ブラッド・ミュージック』と同年の発表だったためか、本書は賞の候補にはあがらなかったが、『ブラッド・ミュージック』のほうはフランスのアポロ賞を受賞し、キャンベル記念賞の三席に入っている。また、『ブラッド・ミュージック』の原型となったノヴェレットでネビュラ、ヒューゴー両賞を受賞し、傑作「激戦」"Hardfought"でネビュラ賞ノヴェラ部門を制した実績に加え、今年のネビュラ賞ではショート・ストーリー部門で受賞し、ヒューゴー賞でも有力候補になっている。じつはこれで、あと長篇部門で受賞すれば、ベアはネビュラ賞史上初の全部門制覇を遂げることになるのだが、そう遠くはないだろうその日が楽しみなことである。
なお、賞は取れなかったが、本書も昨年秋のSFベストセラーでペーパーバック部門の一位になるなど、大変な人気を博したことに違いはない。じっさい、本書はブロックバスター狙いの小説としての一面を持っている。そうした作品であるにもかかわらず、SFの魅力が犠牲になっていないところに、また感心してしまう。ハードSFからファンタジイまで、さまざまな傾向の作品を書きわけるベアならではの力業なのである。

さて、ここまで、SFの楽しさとかSF的なセンスとかから本書について語ってきたけれど、それらを本書を織りなす横糸とするなら、この大作をまとめあげている縦糸は、また別にある。いや、縦糸も充分にSFファンの泣きどころをついているのだが……。

その糸の起点は、〝四つのはじまり〟と題された軽快なプロローグにある。主人公パトリシアが初登場するパートの、〝帰るべき場所〟というフレーズが出てくるくだりがそれである。ア・プレイス・トゥ・リターン・トゥ。この言葉に暗示される運命的なストーリー。この言葉に呼びおこされる漠とした感慨。

そう、この大作を貫く縦糸とは、帰るべきところを願い求める人々の想いなのである。物語の途中で喪われてしまう、父や母や恋人がいる水の星を取りもどそうとするパトリシア。〈ストーン〉の内部で生きのびる道をさぐりながらも、いつか地球へ帰る日を夢みる二十一世紀の人々。はるかな過去におきざりにした地球へ戻ろうと画策するアクシスの一派。また、帰るべき場所とは、ただ故郷だけを意味するのではない。ミルスキーや、時空が果てるまで〈道〉を突き進んでいこうとするアクシス・シティの別の一派にとっては、未知へのあこがれが、すなわち帰るべきところへの想いとなっている。故郷と、そして未知なるものと、相反するふたつの方向を、人はみな帰るべきところとして心のなかに持っている。下巻の終わりのほうで、〈道〉に異次元への入口を開く大ゲート開放師が、〝純白の雲で包まれた青と緑と茶色の地球と、それをとりかこむDNAの輪〟をピクトするシーンには、そんな意味がこめられているのではないだろうか。

けれど、これだけでは本書は、望郷の念とSFお得意のフロンティア・スピリットの物語——時代錯誤なガチガチの（?）ヒューマニズムの物語にしかならない。本書が感動的なのは、そうした想いを永劫の時のながれと対比して描いているからなのだ。

人間的な想いを、巨大で絶対的なものとの対比というかたちで描くことは、ベアの作品の重要なパターンになっている。『ブラッド・ミュージック』しかり。本書ではほかにも、畏怖さえ感

じさせる超文明と、その力でも記号化できない人間の〝神秘性〟などがその例だろう。未訳の「激戦」にも、悲劇的なかたちでだが、このパターンがみられる。

巨大で絶対的な力とは、『ブラッド・ミュージック』の解説にも書いたが、非ヒューマニズム(ナル)の象徴である。それは、社会や風俗が急激に変化している現代をシリアスにうけとめるベアのような作家にとっては、SF的思考から導かれた現実認識そのものなのだろう。にもかかわらず、ベアは人間的な想いについて語ることをやめない。それどころか、人々の想いは、戻るべきところが永劫の時のなかのささやかな一点にすぎないと示されることで、いっそう切なく迫ってくる。それはまさに、ニューロマンティックな感動と呼ぶべきものなのである。

きっと、ベアは、人間が好きなのだと思う。「五十年後の人間の姿さえ想像はできない」という言葉には、一方で、五十年や百年で人間の本質まではそうそう変わるものではないという思いがこめられているような気がするのだ。

エピローグのパトリシアの姿には、そんなベアの気持ちと、本書の登場人物の想いのすべてとが象徴されていて、哀しく、そして気高い。けれども、パトリシアたちの物語は、これで終わったわけではない。ベアには現在、執筆中のものを含めて、出版予定の新作長篇が三冊あり、そのうちの一冊が本書の続篇なのだ。タイトルは、『久遠』*Eternity* という。

久遠の時(とき)間と無窮の宇宙(そら)を翔けて、かれらの想いはどこへいきつくのだろうか。

プレイヤー・ピアノ　K・ヴォネガットJr　浅倉久志訳
すべての生産手段が自動化された世界を舞台に、現代文明の行方をつづった傑作処女長篇

タイタンの妖女　K・ヴォネガットJr　浅倉久志訳
富を失い、記憶を奪われ、太陽系を流浪する破目になったコンスタントの運命は……!?

スローターハウス5　K・ヴォネガットJr　伊藤典夫訳
主人公ビリーが経験する、けいれん的時間旅行を軸に、明らかにされる歴史のアイロニー

猫のゆりかご　K・ヴォネガットJr　伊藤典夫訳
シニカルなユーモアにみちた文章で描かれる奇妙な登場人物たちが綾なす世界の終末劇。

ローズウォーターさん、あなたに神のお恵みを　K・ヴォネガットJr　浅倉久志訳
隣人愛にとり憑かれた一人の大富豪があなたに贈る、暖かくもほろ苦い愛のメッセージ！

母なる夜　K・ヴォネガットJr　飛田茂雄訳
鬼才が自伝の名を借りて描く第二次大戦中ヒトラーを擁護した一人の知識人の内なる肖像

スラップスティック　K・ヴォネガット　浅倉久志訳
マンハッタンの廃墟で史上最後の大統領が書きつづる、人間たちのドタバタ喜劇の顛末。

ジェイルバード　K・ヴォネガット　浅倉久志訳
ウォーターゲート事件で囚人となったスターバックが回想する、愛と怒りの八十年の物語

天の向こう側　A・C・クラーク／山高　昭訳
宇宙ステーション勤務者の哀歓を謳いあげたオムニバスほか、SFの真髄を伝える傑作集

地球帝国　A・C・クラーク／山高　昭訳
タイタンに華麗な王朝を築くマケンジー一族の一人ダンカンが見た二三世紀の地球の姿！

前哨　A・C・クラーク／小隅黎・他訳
月面に発見された謎の石碑の正体は？　名作『2001年』の原型「前哨」他十篇を収録

10の世界の物語　A・C・クラーク／中桐雅夫・他訳
通信衛星の怖るべき悪用を描く「思いおこすバビロン」など科学的思索に富む傑作短篇集

明日にとどく　A・C・クラーク／山高昭・他訳
異星人による人類救出をスリリングに描く不朽の名作「太陽系最後の日」など傑作十二篇

カエアンの聖衣　B・J・ベイリー／冬川　亘訳
銀河を席巻するカエアン製の衣裳は、新手の文化侵略ではないか？　英SFの俊英登場！

禅〈ゼン・ガン〉銃　B・J・ベイリー／酒井昭伸訳
黄昏を迎えた銀河帝国に出現した神秘の拳銃は、人類の歴史に大いなる転機をもたらす！

シティ5からの脱出　B・J・ベイリー／浅倉久志・他訳
収縮する宇宙に囚われたシティの命運は？　表題作ほか全九篇の奔放華麗な奇想の饗宴！

ハヤカワ文庫SF

デューン 砂丘の子供たち 3
F・ハーバート 矢野 徹訳
多量のメランジを注射されたレト・アトレイデは、全人類救済の道を見いだすのだが……

デューン 砂漠の神皇帝 1
F・ハーバート 矢野 徹訳
三千五百年にわたって帝国を支配してきた神皇帝レト二世に、今、反乱の火の手があがる

デューン 砂漠の神皇帝 2
F・ハーバート 矢野 徹訳
予定どおり行なわれた十年祭祝典だったが、祭りの蔭で、陰謀がその全貌を現わしてゆく

デューン 砂漠の神皇帝 3
F・ハーバート 矢野 徹訳
神皇帝とイックス大使フウイ・ノレエとの婚約は、帝国全土に驚愕の波を走らせた……!

デューン 砂漠の異端者 1
F・ハーバート 矢野 徹訳
神皇帝崩御後千五百年、恒星間帝国は大離散と大飢饉の時代を過ぎ、収斂の途上にあった

デューン 砂漠の異端者 2
F・ハーバート 矢野 徹訳
帝国の覇権を得るべく、ベネ・ゲセリット、ベネ・トライラックスなどの勢力がぶつかる

デューン 砂漠の異端者 3
F・ハーバート 矢野 徹訳
二つの惑星を舞台に、千五百年の時を越え、神皇帝の壮大な意志がついに明かされる!?

デューン 砂丘の大聖堂 1
F・ハーバート 矢野 徹訳
大離散からの帰還者〝誇りある女たち〟に、次々と惑星を奪われるベネ・ゲセリット……

訳者略歴　昭和31年生，昭和55年早稲田大学政治経済学部卒，英米文学翻訳家　主訳書「プロテウスの啓示」シェフィールド「禅銃」ベイリー「スタータイド・ライジング」「サンダイバー」ブリン（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior
FT=Fantasy
YR=Young Romance
GB=Game Book

永　劫
〔下〕

〈SF727〉

一九八七年七月三十一日　発行
一九九〇年四月　三十日　六刷

（定価はカバーに表示してあります）

著者　グレッグ・ベア
訳者　酒井昭伸
発行者　早川浩
発行所　株式会社早川書房

郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二ノ二
電話東京（二五二）三一一一（大代表）
振替口座番号　東京六－四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・信毎書籍印刷株式会社　製本・大口製本印刷株式会社
Printed and bound in Japan
ISBN4-15-010727-0 C0197

SF
727

永劫 下

グレッグ・ベア

SF
へ
2
3

ハヤカワ文庫

定価
560

〈ストーン〉をめぐって、国際情勢はいよいよ緊迫してきた。情報の公開をもとめるソビエトが、宇宙軍をくりだして〈ストーン〉に迫ったのだ。それと前後して、アメリカの天才美人物理学者パトリシアが、調査隊によって〈ストーン〉に招かれた。彼女がそこで見たのは、内部の空洞から無限の彼方へと一直線にのびる超空間通廊だった！　パトリシアは調査隊と協力して精力的に研究をつづけたが、一方ソビエトは、〈ストーン〉、地球相方でついに大規模な軍事作戦に踏みきったのだ！　期待の新鋭グレッグ・ベアが、無窮の時の流れを背景に、雄大に描きあげたＳＦスペクタクル！

ISBN4-15-010727-0 C0197 P560E 定価560円
(本体544円)

グレッグ・ベアの作品

—既刊—

ブラッド・ミュージック
永劫